

高井田横穴群 IV

—史跡高井田横穴公園整備事業に伴う発掘調査報告—

1992年11月

柏原市教育委員会



第2支群3~5号墳

は　し　が　き

高井田横穴群、およびその周辺で区画整理事業が計画され、柏原市教育委員会がその試掘調査に着手して以来、10年が経過しました。その間、区画整理事業によって急峻な地が住宅地として生まれ変わり、高井田横穴群を取り巻く環境は一変しました。その中で、柏原市では、区画整理事業が進められる過程において保存された高井田横穴群を史跡公園として整備する計画を立て、平成元年度より自治省のふるさとづくり特別対策事業として、高井田横穴群の史跡公園整備事業を進めることになりました。

本書では、史跡公園整備事業に伴う発掘調査について報告していますが、これまで高井田横穴群の中心部では発掘調査がほとんどなされておらず、本格的な調査としては今回の調査が初めてのものであります。今回の調査では、公開予定の横穴の調査と部分的な試掘調査を実施し、新たに7基の横穴が発見されるなどの数々の成果がありました。これらの調査成果を基に、史跡公園整備事業を実施し、平成3年度末に一応の完成をみました。また、平成2年3月には、整備対象地全域が国史跡の追加指定を受けることになりました。

発掘調査の成果については、史跡隣接地に建設された歴史資料館で出土品を展示、公開すると共に、横穴を実際に見学することによって理解を深めていただければ幸いです。また、文化庁、大阪府教育委員会を始めとして発掘調査、整備事業に御協力を賜った方々に厚く御礼を申し上げます。

平成4年11月

柏原市教育委員会

教育長 勃刀和秀

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、平成元～3年度に市教育委員会の事業として実施した史跡高井田横穴群の発掘調査報告である。
2. 調査は、高井田横穴群1990～3次調査として平成2年8月6日から3年4月26日まで実施し、1991～1次調査として平成3年7月15日から平成1年2月12日まで実施した。
3. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課、安村俊史、桑野一幸が担当した。
4. 本書の編集・執筆は安村が担当し、「第3支群30号墳の石棺材について」の項は、奥田尚氏の執筆によるものである。
5. 本書で使用した方位は、断わりのない限り磁北、座標系は三級基準点測量に基づいて第VI系を使用、標高はT.P.である。
6. 調査に際して、文化庁記念物課 田中哲雄・増沢 敬、大阪府教育委員会 井藤 徹・石神 怡・芝野圭之助、高井田横穴史跡公園整備検討委員会 堅田 直・田中 琢・水野正好・井藤 徹・島津法樹各氏より指導・助言をいただいた。また、石材については奥田尚氏に鑑定していただきたい。記して感謝したい。
7. 調査・整理の参加者・協力者は下記のとおりである。

松井 隆彦	藤田 昌宏	空山 茂	竹下 賢	山田 寛顯	北野 重
石田 成年	寺川 欽	生駒美洋子	大崎 信久	岡田 嗣生	北林 隆広
小柴 敬正	児玉 章子	小西千賀恵	頃安 敏雄	佐藤 航	筒井 隆史
西島 伸彦	早川 恵子	平尾 茂	松尾 洋平	椋本 徹夫	山口 刚
奥野 清	谷口 鉄治	南木 正一	阪口 文子	津田美智子	尾野知永子
有江マスミ	乃一 敏恵	村口ゆき子			

柏原市都市計画課

株式会社景観設計研究所

村本建設株式会社

株式会社島田組

目 次

第1章 調査の経過と方法	1
第2章 位置と環境	2
1. 自然環境	2
2. 歴史環境	4
3. 高井田横穴群の現状	8
第3章 高井田横穴群調査・研究史	11
第4章 試掘調査	18
第5章 横穴の調査	40
第2支群2号墳	41
第2支群3号墳	44
第2支群4号墳	46
第2支群5号墳	51
第2支群6号墳	54
第2支群10号墳	57
第2支群11号墳	60
第2支群12号墳	71
第2支群13号墳	76
第2支群14号墳	81
第2支群17号墳	87
第2支群58号墳	90
第2支群59号墳	97
第3支群8号墳	101
第3支群10号墳	105
第3支群11号墳	107
第3支群12号墳	110
第3支群13号墳	114
第3支群15号墳	117
第3支群29号墳	120
第3支群30号墳	128
第3支群30号墳の石棺材について	132

第3支群31号墳	133
第3支群32号墳	134
第4支群39号墳	134
第4支群40号墳	142
第4支群48号墳	143
第6章 高井田横穴群の検討	144
1.はじめに	144
2.横穴の構造	144
3.横穴の編年	154
4.横穴の系譜	157
5.出土遺物の構成	160
6.線刻画	167
7.被葬者集團をめぐって	169
8.おわりに	170

表 目 次

表－1 玄室平面形態支群別一覧表	145
表－2 玄室規模平均値支群別一覧表	147
表－3 横穴の年代と玄室形態	154
表－4 小支群別横穴の玄室規模・形態と年代	155
表－5 高井田横穴群出土遺物一覧表	163
表－6 安福寺横穴群出土遺物一覧表	165
表－7 玉手山東横穴群出土遺物一覧表	165
表－8 高井田横穴群線刻画一覧表	168
表－9 高井田横穴群一覧表	173

挿 図 目 次

図-1 高井田横穴群位置図	1	図-31 2-3号墳	45
図-2 二上山周辺の二上層群地質図	3	図-32 2-4号墳	47
図-3 周辺の遺跡分布図	5	図-33 2-4号墳誤門推定復元図	49
図-4 柏原市内横穴群位置図	7	図-34 2-4号墳出土遺物	50
図-5 高井田横穴群横穴分布図	9	図-35 2-5号墳	52
図-6 梅原報告第17号横穴	12	図-36 2-5号墳出土遺物	53
図-7 調査地全体図	19	図-37 2-6号墳	55
図-8 1~13トレンチ土層図	21	図-38 2-6号墳出土遺物	57
図-9 5トレンチ遺構図	22	図-39 第2支群10~17号墳	58
図-10 6トレンチ遺構図	23	図-40 2-10号墳	59
図-11 7トレンチ遺構図	24	図-41 2-11号墳	61
図-12 7トレンチ出土遺物	24	図-42 2-11号墳墓道上層遺物出土状況	
図-13 14トレンチ平面図・土層図	27		64
図-14 火葬墓	28	図-43 2-11号墳墓道床面遺物出土状況	
図-15 14トレンチ出土遺物	28		65
図-16 出土地輪	28	図-44 2-11号墳出土遺物①	66
図-17 15~17トレンチ土層図	29	図-45 2-11号墳出土遺物②	68
図-18 19~22トレンチ平面図・土層図	31	図-46 2-11号墳出土遺物③	69
図-19 23~25トレンチ土層図	33	図-47 2-11号墳出土遺物④	70
図-20 26~28トレンチ平面図・土層図	34	図-48 2-12号墳	72
図-21 27トレンチ出土遺物	35	図-49 2-12号墳遺物出土状況	74
図-22 29~32トレンチ土層図	36	図-50 2-12号墳出土遺物①	75
図-23 31・32トレンチ周辺	37	図-51 2-12号墳出土遺物②	76
図-24 墓道状遺構-1	38	図-52 2-12号墳出土遺物③	76
図-25 墓道状遺構-2	39	図-53 2-13号墳	77
図-26 墓道状遺構-2出土遺物	39	図-54 2-13号墳墓道遺物出土状況	78
図-27 33トレンチ平面図・土層図	39	図-55 2-13号墳出土遺物①	79
図-28 第2支群横穴分布図	40	図-56 2-13号墳出土遺物②	80
図-29 第2支群2~6号墳	41	図-57 2-14号墳	82
図-30 2-2号墳	42	図-58 2-14号墳誤門線刻画拓影	83

図-59	2-14号填蓮華線刻画拓影	81	図-85	3-13号填	114
図-60	2-14号填出土遺物	84	図-86	3-13号填遺物出土状況	115
図-61	2-17号填	85	図-87	3-13号填出土遺物	116
図-62	2-17号填出土遺物	88	図-88	3-15号填	117
図-63	レーダー探査信号地点位置図	89	図-89	レーダー探査信号地点位置図	119
図-64	第2支群58・59号填	90	図-90	第3支群29・30号填	120
図-65	2-58号填	91	図-91	3-29号填	121
図-66	2-58号填墓道上層遺物出土状況	92	図-92	3-29号填遺物出土状況	123
			図-93	3-29号填出土遺物①	125
図-67	2-58号填出土遺物①	93	図-94	3-29号填出土遺物②	126
図-68	2-58号填出土遺物②	94	図-95	3-29号填出土遺物③	127
図-69	2-59号填	95	図-96	3-29号填出土遺物④	127
図-70	2-59号填玄室床面遺物出土状況	98	図-97	3-30号填	129
			図-98	3-30号填遺物出土状況	130
図-71	2-59号填墓道床面遺物出土状況	99	図-99	3-30号填出土遺物	131
			図-100	3-31号填	133
図-72	2-59号填出土遺物①	100	図-101	3-32号填	134
図-73	2-59号填出土遺物②	101	図-102	第4支群39・40・48号填	135
図-74	第3支群5~15号填	102	図-103	4-39号填	137
図-75	3-8号填	103	図-104	4-39号填自然石検出状況	139
図-76	3-9号填	105	図-105	4-39号填出土遺物①	140
図-77	3-10号填	106	図-106	4-39号填出土遺物②	141
図-78	3-11号填	108	図-107	4-48号填	143
図-79	3-11号填遺物出土状況	108	図-108	4-48号填墓道	143
図-80	3-11号填出土遺物	109	図-109	玄室平面形態支群別比率	145
図-81	3-12号填	111	図-110	玄室規模支群別グラフ	147
図-82	3-12号填墓道閉塞石検出状況	112	図-111	棺配置	159
			図-112	横穴群別須恵器・土師器比率	161
図-83	3-12号填出土遺物①	112	図-113	横穴群別須恵器種構成	161
図-84	3-12号填出土遺物②	113			

図 版 目 次

図版1	横穴状遺構-1・3	図版31	2-6号墳
図版2	横穴状遺構-2	図版32	2-10~17号墳
図版3	8~10・13トレンチ	図版33	2-10号墳
図版4	14トレンチ	図版34	2-10号墳
図版5	14トレンチ	図版35	2-10号墳
図版6	15~17・19トレンチ	図版36	2-11号墳
図版7	20~22トレンチ	図版37	2-11号墳
図版8	21・22トレンチ	図版38	2-11号墳
図版9	23~26トレンチ	図版39	2-11号墳
図版10	26~28トレンチ	図版40	2-11号墳
図版11	29~31トレンチ	図版41	2-11号墳
図版12	32トレンチ	図版42	2-11号墳
図版13	33トレンチ	図版43	2-12号墳
図版14	2-2号墳	図版44	2-12号墳
図版15	2-2号墳	図版45	2-12号墳
図版16	2-2号墳	図版46	2-12号墳
図版17	2-3~5号墳	図版47	2-13号墳
図版18	2-3号墳	図版48	2-13号墳
図版19	2-3号墳	図版49	2-13号墳
図版20	2-3号墳	図版50	2-13号墳
図版21	2-4号墳	図版51	2-13号墳
図版22	2-4号墳	図版52	2-14号墳
図版23	2-4号墳	図版53	2-14号墳
図版24	2-4号墳	図版54	2-14号墳
図版25	2-5号墳	図版55	2-14号墳
図版26	2-5号墳	図版56	2-17号墳
図版27	2-5号墳	図版57	2-17号墳
図版28	2-6号墳	図版58	2-17号墳
図版29	2-6号墳	図版59	2-58号墳
図版30	2-6号墳	図版60	2-58号墳

図版61	2-58号墳	図版86	3-15号墳
図版62	2-59号墳	図版87	3-15号墳
図版63	2-59号墳	図版88	3-29号墳
図版64	2-59号墳	図版89	3-29号墳
図版65	2-59号墳	図版90	3-29号墳
図版66	2-59号墳	図版91	3-29号墳
図版67	3-8号墳	図版92	3-29号墳
図版68	3-8号墳	図版93	3-29号墳
図版69	3-9号墳	図版94	3-29号墳
図版70	3-9号墳	図版95	3-30号墳
図版71	3-9号墳	図版96	3-30号墳
図版72	3-10号墳	図版97	3-30号墳
図版73	3-10号墳	図版98	3-31号墳
図版74	3-10号墳	図版99	3-32号墳
図版75	3-11号墳	図版100	3-32号墳
図版76	3-11号墳	図版101	4-39号墳
図版77	3-11号墳	図版102	4-39号墳
図版78	3-11号墳	図版103	4-39号墳
図版79	3-12号墳	図版104	4-40号墳
図版80	3-12号墳	図版105	4-40号墳
図版81	3-12号墳	図版106	4-48号墳
図版82	3-13号墳	図版107	4-48号墳
図版83	3-13号墳	図版108	4-48号墳
図版84	3-13号墳	図版109	レーダー探査成果
図版85	3-13号墳	図版110	レーダー探査成果

第1章 調査の経過と方法

今回の調査は、平成元年度から3年度にかけて、3年間にわたる史跡高井田横穴公園整備事業に伴って実施したものである。整備事業によって広場・園路が建設される部分を中心に試掘調査を実施し、新たに公開することになった横穴を中心に横穴内部の調査を実施した。試掘調査は、基本的には幅1mの試掘トレチを設定し、横穴等が検出された場合は必要に応じて拡張した。横穴は、公開横穴15基と、試掘調査によって確認された横穴や埋没保存の横穴など10基である。試掘調査によって横穴が発見された場合には、その保存が危ぶまれる際には設計変更を計り、数十cmの盛土下に保存される際には設計どおりに工事を実施した。そのため、試掘調査では横穴の上面のみを確認し、床面まで調査を実施していないものも多い。公開横穴は、基本的には玄室から墓道の床面まで完掘し、調査後、再び土を入れて床面の保護を計っている。

調査は平成2・3年度の2年間にわたって、平成2年8月6日から平成3年4月26日、そして平成3年7月15日から平成4年2月12日にかけて実施した。本報告では2年度にわたる調査を一括し、試掘調査による成果、横穴の調査による成果の順に報告することにしたい。なお、平成2年度の試掘調査によって確認され、その後、石室内の調査を実施した高井田山古墳（第2支群56号墳）については、別報告を予定している。高井田山古墳は古式の横穴式石室を内部主体とし、火駄斗、画像鏡、甲冑など多数の副葬品が検出され、朝鮮半島との関係が推測される古墳である。

以上のような方法で、文化庁、大阪府教育委員会、および高井田横穴史跡公園整備検討委員会の指導のもとに調査を実施し、

一部設計変更の後、史跡高井田横穴公園の整備事業が完了した。整備事業についても、別報告に譲ることにする。また、調査に至る経過、およびその後の措置についても、同報告に記述しているので、ここでは繰り返さないことにする。



図-1 高井田横穴群位置図

第2章 位置と環境

1. 自然環境

柏原市は大阪の南東部に位置し、東は奈良県に接している。市域の中央部を大和川が西流し、石川と合して堺方面へ流れる。東から南にかけては金剛生駒山系の山なみが屹立し、北西部には平野が開けている。

高井田横穴群は、大和川が平野部に流れ出ようとするその右岸に位置する。東から西へと延びる丘陵状の地形を呈し、丘陵内には数本の小支谷が南に向かって開いている。南側は大和川に望み、二上山や玉手山丘陵、河内平野を眺望することができる。西側も、高井田の現集落を挟んで大和川に接する。北側は下田池を源とする非常に深い谷川（高井田川）によって画されていたが、現在は区画整理事業によって約500戸の住宅が建設されてニュータウンとなっており、昔日の面影は述べない。東側は円墳が群集する平尾山古墳群平尾山支群の位置する生駒山地の一支脈に連なっている。

丘陵は、長年にわたって人の手が入れられておらず、江戸時代には小祠が存在したことが絵図から窺える。そして大正時代以後、墓地建設、社宅建設によって丘陵の一部が切り開かれ、それと同時に数基の横穴も破壊されたことと思われるが、それでも周囲には豊かな自然が残されてきた。あまり手を加えられずに残った自然なので、できるだけ現状のまま後世に残していくたいと考えている。

横穴は凝灰岩層を掘削して築かれているが、この凝灰岩層は二上層群に含まれる玉手山凝灰岩層とよばれる地層に相当する。二上層群は新第3紀の火山岩類よりなり、その分布の北端に柏原市は位置する。下位からドンヅルボーエリ層、原川累層、定ヶ城累層に区分されており、玉手山凝灰岩層は定ヶ城累層の一部を構成し、高井田付近と玉手山丘陵の安福寺周辺、および弛ヶ丘周辺にみられる。黒雲母デイサイト質の火山灰流堆積物によるもので、寺山火山岩の活動に伴って堆積したものと考えられている。⁽¹⁾一部で大阪層群に不整合に覆われており、この点は発掘調査によっても確認されている。

丘陵の中央やや西寄りで実施したボーリング調査の結果では、地表下21m (T. P. 41m) 以下まで凝灰岩層が続いていることが判明している。凝灰岩層は上層から強風化帯、弱風化帯、風化帯に区分され、厚さはそれぞれ5.7m、3.15m、11.25m以上である。しかし、このボーリング地点から西へ20mの地点のボーリング結果では、それぞれの厚さが0.8m、1.5m、6.35m以上と大きく異なっており、前者ほど風化が進んでいないことがわかる。凝灰岩の性質上、その厚さや風化の程度は、地点によって大きく異なっていると推定される。

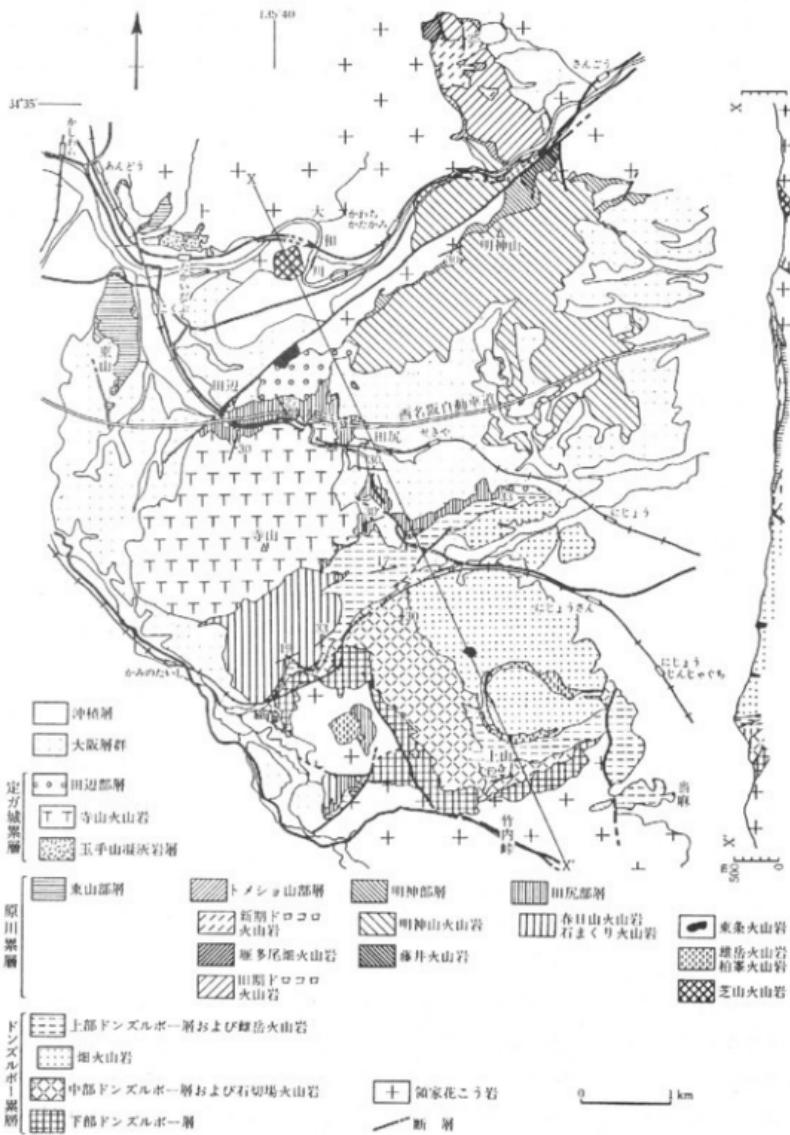


図-2 二上山周辺の二上層群地質図（註(1)文献による）

2. 歴史環境

現在は市域中央部から西流している大和川であるが、宝永年間の付け替え以前には、石川と合した後に北流し、淀川に合流していた。柏原市域では、この大和川の旧流路と氾濫原、および石川・原川の氾濫原以外は、市域のはば全域が埋蔵文化財の包蔵地とされている。その中で高井田横穴群は大和川の右岸、生駒山地西麓南端に位置するので、この地域を中心に歴史環境について触れることにする。

旧石器時代では、安堂遺跡でナイフ形石器などの出土を見る。また、有茎尖頭器が大県南遺跡、安堂遺跡、高井田遺跡で出土している^⑨。このように、生駒山地西麓に点々と石器が出土しているのが現状であり、良好な資料は未発見である。

縄文時代になると、早期の押形文土器が大県遺跡から出土しているのを始めとし、大県遺跡周辺では波があるとはいえ、ほぼ全期間にわたって土器の出土が認められ、弥生時代へと続く。

弥生時代では、集落の規模等が正確には把握できないが、山ノ井遺跡・平野遺跡・大県遺跡・安堂遺跡などで遺物の出土を見ることができ、遺跡の拡散が推定される。その中では大県遺跡が中心であったと推定され、大県遺跡東方の高尾山（標高280m）に位置する高尾山遺跡は高地性集落として著名である。高尾山遺跡近くからは、多鈕細文鏡も出土している。

古墳時代になると、大県遺跡・大県南遺跡を中心に構造や遺物量が増大し、特に6世紀代にはかなり大規模な集落が存在したと推定される。しかも、輪羽口や鉄滓といった鍛冶関係の遺物が大量に出土しており、鍛冶専業集団の存在が推定され、当時としては全国最大規模の鍛冶集団が存在したのではないかと考えられる^⑩。

古墳としては、前期後半墳と推定される古墳が、市内唯一の前方後方墳である安堂山古墳、前方後円墳の鳥坂宮古墳を始め、その周辺に数基存在したと推定される。また、高井田横穴群からも壺形埴輪や円筒埴輪が出土しており、前期末から中期初頭にかけての古墳が横穴群内に存在したと推定されるが、既に削平されてしまったようである。大和川対岸には、著名な玉手山古墳群や松岳山古墳群が存在するが、それと同時期に高井田周辺に古墳が築かれていたことを示しており、今後これらの古墳の評価が問題となってこよう。

古墳時代中期中葉前後の古墳は見当たらず、前期から続いた古墳が断絶していることを示している。そして、中期末葉から後期にかけては、前期からの古墳の分布と一部オーバーラップする形で、太平寺から安堂にかけて木棺直葬を主体とする古墳がかなり分布する。円墳を中心とするが、前方後円墳も数基含まれているようである。墳丘が削平され、埴輪の出土のみによってその存在が確認される場合が多いため、正確な古墳数は確認できないが、40基は下らないであろう。高井田横穴群からも、この時期の特徴を示す円筒埴輪が出土しており、木棺直葬墳が存在した可能性が考えられるが、これらの埴輪が横穴に伴っている可能性も残されており、今後の課題である。

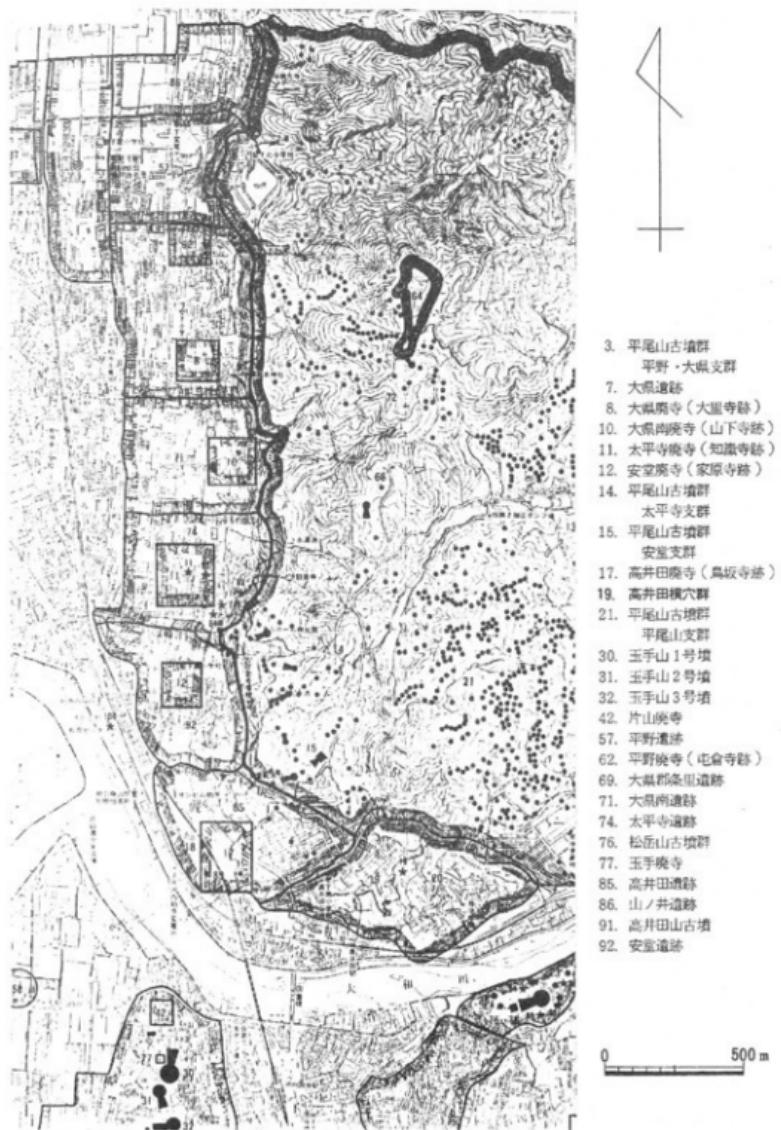


図-3 周辺の遺跡分布図

その後、横穴式石室が導入されるにおよんで、爆発的に古墳が築かれるようになる。全国最大規模と推定される平尾山古墳群がそれであり、その数は1,500基とも2,000基とも言われている。最も古い横穴式石室は、高井田横穴群内に位置する高井田山古墳（第2支群56号墳）であり、出土した須恵器等から5世紀末葉頃の年代が与えられる。直径約22mの円墳と推定され、安山岩の扁平な自然石、もしくは割石によって壁体を垂直に積み上げた後、四壁を持ち送ってドーム状の天井を構築していたようであるが、天井部は調査時には既に破壊されていた。周辺には同時期に木棺直葬墳が築造されていただけに、その存在意義が注目される。6世紀後葉になると、横穴式石室墳が次々と築造される。平尾山古墳群内では、山地西麓部の古墳は6世紀代にその中心があり、山間部の古墳は7世紀代にその中心があるという特徴がみられる。

高井田横穴群も平尾山古墳群と関連付けて検討する必要があるが、横穴という特異な墓制であることを十分考慮にいれなければならない。周辺では太平寺支群内で6基の横穴が確認されている。しかし、これらの横穴は長方形、もしくは羽子板形の平面形を呈する小規模なものであり、花崗岩層に掘削されたものである。その年代も7世紀代を中心とするものであり、高井田横穴群の影響のもとに築かれた可能性は考えられるものの、直接の系譜下には存しないであろう。

大和川対岸の玉手山丘陵には、その北西部と南東部に安福寺横穴群・玉手山東横穴群が存在する。高井田横穴群を含めた三つの横穴群は、いずれも玉手山凝灰岩層に営まれたものであり、市内に露頭する3箇所の玉手山凝灰岩層の分布に見事に一致することから、意図的に凝灰岩層を選定して墓域を設定していることは疑いない。これら3箇所の横穴群の被葬者集団が如何なる関係を有していたかは不明であるが、時期が一致すること、平面形態等の内部構造が酷似することから、造墓過程における技術交流等、何らかの関係を有していたと推定される。

7世紀前葉から中葉にかけて、生駒山地西麓に次々と古代寺院が建立される。北から平野庵寺・大槻庵寺・大槻南庵寺・太平寺庵寺・安堂庵寺・高井田庵寺がそれであり、それぞれ『続日本紀』に記載された屯倉寺・大里寺・山下寺・知識寺・家原寺・鳥坂寺に『柏原市史』等で比定されており、墨書き土器や小字名等から、この比定はほぼ間違いないであろう。

また、寺院の建立に先立って、集落の移動がみられる。例えば6世紀代に最大の集落であった大槻遺跡は7世紀代になると小規模になり、集落中心部に大槻庵寺が占地する。同様な現象は柏原市域の生駒山地西麓部各所でみられ、6世紀末葉以後、集落が高所に移動する傾向がみられる。6世紀末葉以後に山地斜面に成立した集落の典型として高井田遺跡があげられる。高井田遺跡では、170棟の建物が確認されており、その大半が7世紀代の掘立柱建物である。

しかし、これら7世紀代の集落も、8世紀代になると急激に規模が縮小し、平安時代以後は部分的に生活の痕跡を留めているにすぎない。

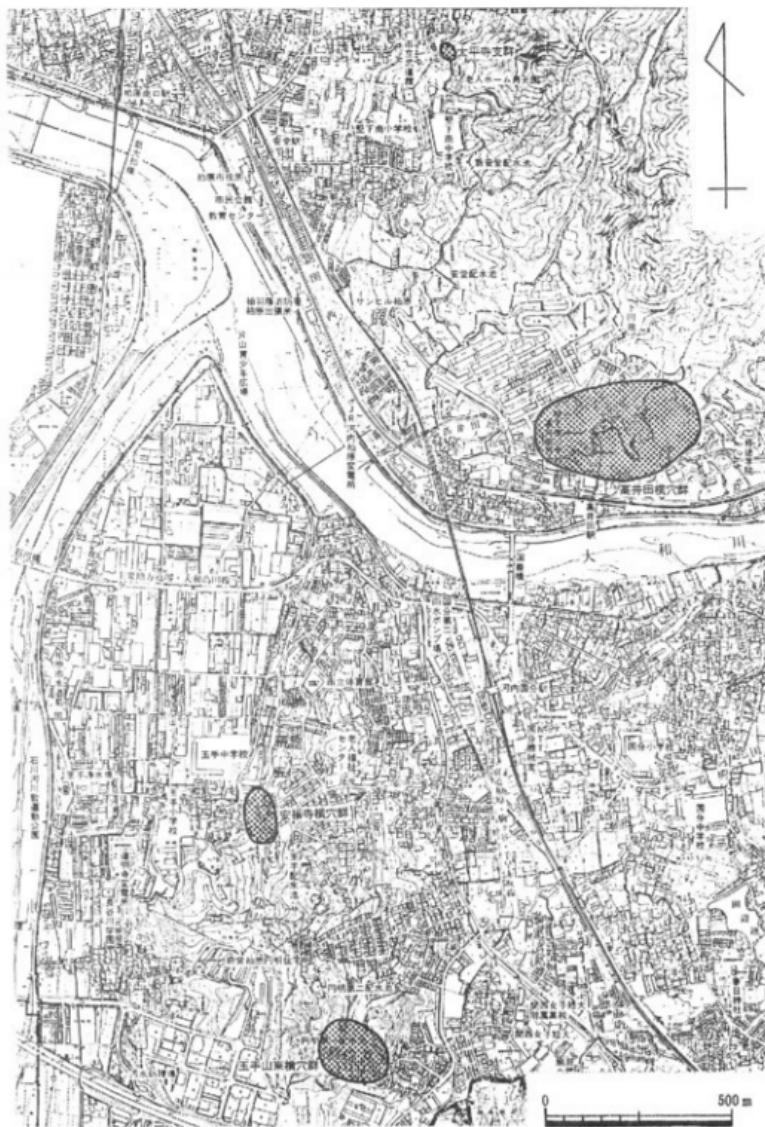


図-4 柏原市内横穴群位置図

3. 高井田横穴群の現状

『高井田横穴群Ⅲ』において、横穴の総数が155基であると報告したが、1991年度の調査によつて新たに7基の横穴が確認され、総数は162基となった。高井田横穴群は、大きく4支群にグループ化されているが、調査の結果、第1支群25基、第2支群51基、第3支群32基、第4支群50基という内訳になる。この中で、第2支群33号墳は分布調査時のミスによって33aと33b号墳の2基に分けられており、51～55号墳は本報告で述べるように横穴とは考えられないものであるため欠番とする。また、56号墳は円墳（高井田山古墳）である。1986年度の調査時にE号墳として報告した横穴を57号墳とし、1985年度の分布調査によって確認し、本書で報告する2基の横穴をそれぞれ58・59号墳とする。第3支群については、1985年度の調査によってA号墳・B号墳と報告した横穴をそれぞれ第3支群26・27号墳とし、同年度の分布調査によって確認された1基を28号墳とし、1991年度に新たに発見された横穴を29～32号墳としている。第4支群については、1990年度の調査によって発見された横穴を第4支群44～47号墳とし、1991年度に新たに発見された横穴を48～50号墳とした。これら以外に、高井田横穴群北側の谷川を挟んだ対岸に横穴1基が確認されており、平尾山古墳群安堂支群第7支群1号墳とされている。これを広義の高井田横穴群中に含めると、前述のように総数162基となるが、実数が200基を超えることは確実であろう。

これらの中で、市道建設および区画整理事業によって全壊した横穴が6基、半壊した横穴が2基を数え、第1支群20号墳と安堂支群第7支群1号墳も全壊されている。安堂支群第7支群1号墳については、その位置を1986年度に調査したのであるが、全く確認できなかつたものであり、一部で凝灰岩層がみられるものの、大半が花崗岩であり、横穴の存在に疑問も生じるものである。これら以外にも人為的破壊、あるいは自然的崩壊によって半壊状態にある横穴がかなり認められる。半壊状態のものも含めて、現存する横穴は154基である。

1922年に第3支群の一部が史跡指定を受け、1990年に史跡の追加指定を受けることによって、第2～4支群の大半が史跡指定地に含まれることになった。内訳は第2支群で53基、第3支群で30基、第4支群で43基、総数126基となる。第1支群は、大阪府立修徳学院敷地内に位置している。

これまでの調査結果に基づいて、以上のように高井田横穴群の現状をまとめることにし、これまでの報告については上記のように訂正しておきたい。なお、各横穴の詳細については、表一9を参照していただきたい。



図-5 高井田櫛穴群分布図 (太線内は史跡指定地)

註

- (1) 二上山地学研究会「二上層群の原川累層・定ヶ城累層の層序とサヌキトイドの活動時期」
『地球科学』第40巻2号 1986
石田志郎・佐藤隆春「新第三系および第四系・2中新統・(2)瀬戸内区」『日本の地質6・近畿地方』 1987
- (2) 大塚淳子・桑野一幸「柏原市出土のナイフ形石器・有茎尖頭器」『柏原市歴史資料館報』創刊号 1990
- (3) 北野重「韓鐵卓素はどこに移住していたのか」『韓式系土器研究Ⅱ』 1989
花田勝広「倭政権と鉄冶工房——畿内の鉄冶専業集落を中心に——」『考古学研究』143号 1989

参考文献

- 柏原市役所『柏原市史』第2巻 1973
柏原市役所『柏原市史』第4巻 1975
大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』 1975
柏原市教育委員会『高井田横穴群I——河川改修工事・市道建設工事に伴う—』 1986
柏原市教育委員会『高井田横穴群II——高井田土地区画整理事業に伴う—』 1987
柏原市教育委員会『高井田横穴群III』 1991
柏原市教育委員会『高井田山古墳』 1992
河内考古刊行会『河内太平寺古墳群』 1979
大阪府教育委員会『太平寺古墳群』 1980
柏原市教育委員会『太平寺古墳群——安堂配水池に伴う発掘調査—』 1983
柏原市教育委員会『大県・大県南遺跡——下水道管渠埋設工事に伴う—』 1984
柏原市教育委員会『大県・大県南遺跡——下水道管渠埋設工事に伴う—』 1985
柏原市教育委員会『大県・大県南遺跡——下水道管渠埋設工事に伴う—』 1986
柏原市教育委員会『大県遺跡——堅下小学校屋内運動場に伴う—』 1988
柏原市教育委員会『高井田遺跡I——区画整理事業・河川改修工事に伴う—』 1986
柏原市教育委員会『高井田遺跡II——高井田土地区画整理事業に伴う—』 1987
柏原市教育委員会『高井田遺跡III——国民年金健康保養センター建設に伴う—』 1989
柏原市教育委員会『大県南遺跡——山下寺跡寺域の調査—』 1985
柏原市教育委員会『鳥坂寺——寺域の調査—』 1986
ほか

第3章 高井田横穴群調査・研究史

高井田横穴群は、その一部が古くから開口していたために、著名な研究者がしばしば訪れて簡単な報告をしている。以下に、その主たるものと記述し、調査、および研究史について整理しておく。これら以外にも、壁画についての報告なども多数見られるが、ここでは割愛しておく。

1. 喜田貞吉氏の報告⁽¹⁾

喜田貞吉氏は、「横穴に安置せられたる石棺と陶棺」と題して、河内の道明寺山に30~40の横穴が開口しており、更に多数にのぼるであろうと報告している。これは、高井田横穴群を指したものと考えられ、この小論の中で喜田氏は、奥に石棺を造り付けてある横穴が4基あることを確認し、造り付け石棺の多い点が高井田横穴群の特徴であるとしている。また、石棺に蓋の存するものがないことから、当初から蓋ではなく、石棺と言うよりも石床と言うべきものであり、一個人の遺体を収めるものではなく、「数多の人骨を、後へ後へと収めたものであろうと思はれる」と記述している。造り付け石棺を追葬、あるいは改葬の場と考えるものであり、注目に値する。

2. 梅原末治氏の報告⁽²⁾

梅原末治氏は、明治末年から大正初年にかけて高井田横穴群の分布調査を実施し、55基の横穴を確認しており、これは、高井田横穴群第2~4支群におよぶものである。梅原氏は、「本群通有の形式の横穴」として第13号と第38号横穴を実測図と共に紹介している。第13号横穴は、玄室長359cm、玄室幅265cm、羨道長194cm、羨道幅105cmを測り、壁面四周に小棚状の段を有するタイプである。第3支群内に位置するようであるが、現在開口している横穴で、この数値に一致するものは確認できない。第38号横穴は、奥壁に接して石櫛を造り付けたもの（造り付け石棺）として紹介されており、第3支群12号墳に対応すると考えられる。同様に造り付け石棺を有する例としてあげられている第41号横穴は、第3支群10号墳に対応する。

次に、「本群中に於ける特種の穴」其の一として、壁画に段がみられず、玄門部が約15cmの幅でアーチ状に玄室側へ突出している例として第27号横穴をあげている。玄門部の構造を指したものであろう。第27号横穴は、玄室長288cm、玄室幅270cm、玄室高152cm、羨道長106cm、羨道幅78cmを測るが、現在開口している横穴で、この数値に一致するものは確認できない。其の二として、橢円形平面を呈し、奥壁に棺床のある例として第40号の東横穴をあげている。これは第3支群13号墳に対応する。ただし、梅原氏が棺床としたものは、未完成の造り付け石棺である可能性が高い。其の三として、製作が非常に簡単で粗雑なものとして第17号横穴をあげている。第17号横穴は、4基の横穴が連結したものであるが、現在では確認できない。

次に、「複雑なる横穴」其の一として、第17号横穴をあげている。第17号横穴は、前述のとおり現在では確認できないが、4基の横穴が連結した興味深いものである。その第一壙は南々西に開口し、玄室長321cm、玄室幅282cm、羨道長136cm、羨道高133cmを測る。第二壙は南西に開口し、奥壁に造り付け石棺を有する。玄室長267cm、玄室幅221cmを測る。第三壙は第一壙の墓道右側壁に開口し、玄室長279cm、玄室幅206cm、羨道長70cmを測る。

第四壙は第三壙玄室左側壁に開口し、玄室長245cm、玄室幅188cm、羨道長44cmを測る。第一壙床面より第二壙床面のほうが55cm高い。また、第一壙の壁面四周には段がみられるが、第二～四壙にはみられず、第三・四壙の平面形は南北円形を呈する。これらより、梅原氏は第一～四壙の順に造られたものとし、第一壙が最も精巧に造られているとしている。横穴の編年観を示したものであり、注目に値する。ただし、第三・四壙が横穴築造時のものなのか、また当時のものとしても、墳墓としての機能を果たしたかどうかは、今後の調査を待たねばならない。其の二として、第40号横穴があげられている。第40号横穴は、第3支群13～15号壙に対応する。第3支群14号壙は、13・15号壙の間に位置する横穴であるが、13号壙の羨道右側壁と15号壙の玄室左側壁に連結している。13号壙との連結坑は非常に小さく、15号壙との連結坑は大きいが、全体に損壊が激しく原形を留めない。羨道が埋没している可能性が考えられる。梅原氏は、この第3支群14号壙をとりあげて、追葬時の必要性から造られたものと考えている。

梅原氏は、地元の人が所有していた横穴から出土したという須恵器の壺を知り、横穴群は通常の横穴式石室と同時期と考えている。これはその後の調査によって裏付けられている。また、氏は学術調査を重ね、ぜひ保存していかなければならない横穴群であるとまとめている。この態度には敬意を払いたい。また、分布調査によって確認されている横穴で、現在は確認できないものが多く、第3支群だけでも約10基となる。その大半は、道路や家屋建設時に埋没、あるいは破壊されたものと考えられるが、現状で確認するには大規模な発掘調査が必要となり、困難である。しかし、この事実からだけでも、高井田横穴群の横穴总数が170基を上回ることが確実であることを示している。

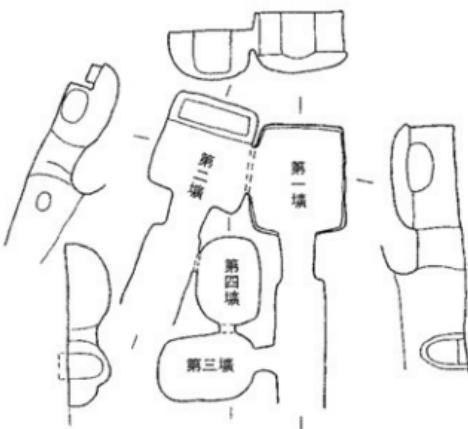


図-6 梅原報告第17号横穴（註2文献より）

3. 高橋健自氏の報告⁽³⁾

1918（大正6）年10月、高井田横穴群北側に墓地が築かれることになり、その墓地へ通ずる道を切り開いた際に数基の横穴が発見され、線刻壁画を有するものが存することによって注目された。その後、1919年に高橋健自氏が、これらの横穴の調査を実施し、報告している。

まず、「人物の窟」と名付けられた横穴は、ゴンドラに乗る人物の線刻がみられるものであり、現在でも最も有名な横穴である。第3支群5号墳に対応する。高橋氏は、人物を中心とする線刻および漢字について、詳細な分析を加えている。また、人骨片と鉄釘片が出土したらしいと報告されている。

「唐草の窟」は、第3支群2号墳に対応する。羨門・玄門に唐草の線刻、その他にも人物や壺の線刻がみられるというが、現状ではほとんど確認できない。この横穴からは、発見時に遺物が出土している。遺物は、須恵器器台・子持器台・聰・高杯・壺・蓋杯・土師器高杯・壺・鉄刀・鉄刀子・鉄鎌・鉄製馬具（杏葉または鏡板）、鉄釘・鍔・藤手形鉄片などである。玄室奥壁に沿って釘・鍔が出土したことから奥壁に沿って木棺が置かれ、両側壁に沿って鉄刀類・玄門近くに土器類が置かれていたようである。また、土器類は扁平な石の上に置かれており、玄室中央には小石敷きがあったようである。須恵器器台は、6世紀中葉頃のものであろう。また、当横穴からは、ミニチュアの壺と釜のセットが出土したようである。⁽⁴⁾

「桃の窟」は、第3支群4号墳に対応する。天井には棟を表わす溝がみられ、四注式建築の内部に擬したものであると観察している。

「花の窟」は、第3支群7号墳に対応する。羨門上部に蓮華文の線刻が2個見られる点に注目している。

「大家の窟」は、第3支群6号墳に対応する。羨門上部に『大家乃ツカ』の線刻がみられるが、後世の所為と判断している。これについては、藤沢一大氏が『大家部ツカ』と訓むべきものであり、横穴の築造時まで遡らなくとも、その被葬者達が判明していた古い時代に線刻されたものであり、「大家臣」に所属した「大家部」と呼ばれる部民の墳墓が高井田横穴群であったとしている。船橋遺跡からは「大家」と墨書きされた須恵器杯蓋などが出土しており、これと結びつけようとする考えである。⁽⁵⁾

高橋氏は、線刻画の中で「花の窟」の円花文様には宗教的意義が認められ、「人物の窟」の線刻画は被葬者の事績に関係あるものと考察している。更に、線刻画は自然力によって遠からず毀損してしまうであろう。そのため、今すぐに保存措置を講ぜられるべきであると主張している点は注目に値する。その後、70年余りを経た現在でも、適切な保存方法が見当たらず、保存措置は講じられぬままであり、氏の危惧したように、徐々に風化・破損が進んでいることは、痛恨の極みである。

4. 大阪文化財センターの分布調査・試掘調査⁽⁹⁾

財団法人大阪文化財センターでは、高井田横穴群およびその周辺の宅地開発を計画した村本建設株式会社の依頼を受け、当該地周辺の分布調査と試掘調査を1973～74年に実施している。

分布調査は第2～4支群全域にわたって行なわれ、95基の横穴を確認している。

試掘調査は第4支群を対象に、11本のトレーナーを設定して行なわれている。この調査によって、第4支群1～3、8～12、14、16～28、35、38号墳の墓道、13・30号墳の玄室、29・31・32号墳の墓道および玄室が調査されている。一部のみであるが、調査を実施した横穴は29基にのぼり、須恵器・土師器・金環・鉄鏃・鉄釘・埴輪・サヌカイトなどが出土しているが、残念ながら詳しい報告はなされていない。

調査結果から、「凝灰岩層の存在する所には必ず横穴が存在する」とまとめられており、凝灰岩層は北側で標高約35m、南側で標高約30mより高い部分には全域に存在し、全体では100基以上の横穴が埋没しているであろうと結論づけられている。

5. 大阪府教育委員会の分布調査⁽¹⁰⁾

大阪府教育委員会が、1974年から1975年にかけて実施した平尾山古墳群分布調査の一環として、高井田横穴群の分布調査を実施している。大阪文化財センターと河内古代史研究会の分布調査を基に、146基の横穴と1基の円墳を報告している。この調査によって、高井田横穴群は、初めて4支群に支群分けされた。支群分けの方法には問題点も多いが、本書では、一応この横穴番号を採用している。調査概要には数値の公表されていないものや、誤記の多いのが残念である。

6. 和光大学古墳壁画研究会による線刻画の調査⁽¹¹⁾

1977年、北原一也氏を中心とする和光大学古墳壁画研究会によって、現在確認できるすべての横穴の線刻画の調査がなされ、その報告が公にされている。横穴にみられる線刻画に原始（プリミチーブ）絵画としての芸術的意義を認め、更に、靈魂不滅と太陽信仰に根ざす線刻画として位置づけている。また、大陸・半島のシャーマニズム的因素が認められることから、半島から渡来した造形精神の豊かな伝統を持った人々によって描かれたものと考えられている。アルタイ・シベリアなどの岩壁画との比較・考察も行なわれ、線刻画の意義づけを行なった点において、非常に貴重な報告である。

7. 山田良三氏の線刻画研究⁽¹²⁾

山田良三氏は、線刻画の意義を生前の物語を表わしたものと死後の安住のために描いたものとの2者に分け、更に後者は供獻を目的としたものと呪術的なものに分けられるとした。高井田横穴群の人物像については、渡来系の人々（おそらく船氏）の被葬者に対する生前の物語を描いたものと考えている。また、鳥の線刻画については、鳥取氏に掌握されていた鳥取部、捕鳥部に關係あるものと考えている。

8. 吉岡哲氏らの保存運動⁽¹⁰⁾

その後、高井田横穴群は隣接する平尾山古墳群と共に、開発による破壊の危機にさらされるるおよび、その保存を訴えた報告が数回にわたってなされている。その中で、高井田横穴群を学史的に意義づけ、線刻画に再評価を与えるなどの成果もまとめられている。そして、高井田横穴群全域の史跡指定による保存をアピールしたものであり、傾聴すべき意見も多々見受けられる。

9. 区画整理事業関連の調査⁽¹¹⁾

高井田横穴群およびその周辺で実施された高井田土地区画整理事業に関連する調査面積は、約18,500m²にのぼる。まず、1985年1・3月に高井田川改修工事に伴う調査を実施し、6～9月に横穴群の南から西へ抜ける市道白坂神社・高井田線建設工事に伴う調査を実施した。そして1986年4～11月には、土地区画整理事業に伴う調査を実施した。

これらの調査に伴って、調査を実施した横穴は16基を数える。横穴からは、須恵器、土師器、金環、銀環、碧玉製管玉、琥珀製繭玉・丸玉、ガラス製小玉、土製丸玉、滑石製紡錘車、鉄劍、鉄矛、鉄鎌、鉄刀子、鉄斧、鉄釘、鍔、砥石、埴輪、瓦器などが出土している。築造は6世紀中葉～末葉と考えられ、7世紀代に一部追葬が認められ、中世に再利用されているものもある。調査を実施した横穴の中で、8基は保存できたが、2基は半壊、6基は全壊された。

横穴以外では、古墳は確認できていないが、古墳時代前期の円筒埴輪・壺形埴輪・家形埴輪、中～後期の円筒埴輪などが出土しており、後者は横穴に伴う可能性も残されている。また、8～10世紀の土塙墓2基、古墓29基が検出されており、これも貴重な資料である。

高井田横穴群での最初の本格的な発掘調査が、開発に伴うものであったことは残念な限りである。保存をめぐってさまざまな問題が生じ、本市教育委員会も苦慮した。8基の横穴が破壊される残念な結果に終わったが、この教訓を今後に生かしていくためにも、保存された横穴群の史跡公園化を果たさねばならないと肝に命じた。

10. 花田勝広氏の研究

花田勝広氏は、未完成横穴の観察を中心に、造墓技術についての研究を発表している。⁽¹²⁾それによると、造墓に使用された工具は、手斧を一次掘削、U字形鎌を二次掘削に使用し、平ノミによって細部調整がなされたと考えている。また、横穴は墓道掘削、羨道掘削、玄室掘削、壁画線刻・赤色顔料塗布の1工程によって造墓が行なわれたとしている。更に、横穴の型式編年も発表されているが、これについては、後に発展的に修正されている。そして、高井田横穴群は6世紀中葉頃、豊前北部の影響のもとに造墓が開始されたものとする見解を示している。

その後、花田氏は河内の横穴墓を中心に、畿内の横穴墓について考察している。⁽¹³⁾横穴墓の構造とその時期の検討、九州や山陰地方の横穴との比較から、河内の横穴墓は6世紀前葉に豊前北部の影響のもとに成立し、玄室形態が家形を模倣したものとドーム天井の2系統が直接河内

に伝えられたと考えられている。また、河内の横穴墓は玄室平面が横長方形のものから正方形へ、そして縦長方形へと変化し、次第に小型化すると考えている。これらの点については、前述の論旨から若干の変化が認められる。そして新たに、畿内の横穴群を高井田型、龍王山型、堀切型、狐谷型と分類し、高井田横穴群は安福寺・玉手山東横穴群と共に「大型横穴式石室墳群（平尾山古墳群）に付属して、明確な小墓域を有する」高井田型とし、被葬者集団については、「物部氏と擬制的同族関係を紐帯とした有力家父長層の下位の集団」と想定している。

更に花田氏は、「河内の横穴墓」によって、開口している横穴の実測図と共に各横穴の詳細な観察結果をまとめ、数基からなる小支群のグルーピングなども試みている。⁽¹⁰⁾ 各横穴の実測は氏の独力によるものであり、それらをまとめあげ、系譜や編年、そして被葬者集団にまで迫る氏の一連の論考には頭の下がる思いである。

これら一連の成果を要約するかたちで「近畿横穴墓の諸問題」にまとめられている。⁽¹¹⁾

11. 松村隆文氏の研究

副葬品の検討などを通じて「大阪府下の横穴墓」をまとめた松村氏は、横穴という墓制におけるマウンドの欠落、畿内の横穴が政治的中核たる大和にその分布の中心をもつ点を重視した。

その後、「畿内の横穴墓」において、畿内における横穴墓の出現は、ヤマト政権が創出した「古墳秩序」のなかに、自らの支配形態に応じた墓制のバリエーションのひとつとして横穴墓が選択された結果によると結論づけている。横穴を墓制のひとつとして重視し、その採用が社会的要因によるものと考えた論考であり、横穴の評価について考えさせられるものである。

12. 史跡整備事業関連の調査

高井田横穴群の史跡整備事業は、平成元年度（1989年度）より、ふるさとづくり事業として実施されることになった。この事業に関連し、史跡指定地の隣接地にあたる市有地に公園関連施設の建設が計画され、1990年1月より試掘調査を実施し、7月よりほぼ全域の発掘調査を実施した。調査の結果、横穴4基、未完成の横穴2基が検出され、天井の崩落は激しいものの、墓道等が良好な状態で遺存していることが確認された。⁽¹²⁾ その後、当該地の利用形態を検討し、西側半分を遊具等を設置した児童公園とし、東側半分には庭園を配した文化教室を建設することになった。文化教室は遺構検出箇所を避けて建設し、すべての遺構は盛土下に保存されている。

史跡整備事業に伴う発掘調査は、上述の調査と一部平行して1990年8月より実施した。その調査結果は本書で報告しているので、ここでは省略したい。また、この調査に伴って発見された高井田山古墳については概報が刊行されており、報告書は改めて作製することにしている。⁽¹³⁾ なお、本書では発掘調査についてのみ記述しており、史跡整備事業については別報告で紹介することにしている。

以上、高井田横穴群に対する調査・研究についての概略をまとめた。

註

- (1) 喜田貞吉「古墳墓雑記三則」『歴史地理』第19巻4号 1912
- (2) 梅原末治「河内高井田に於ける横穴群について」『人類学雑誌』第31巻12号 1917
なお、報告では尺・寸で表記されているが、cmに改めた。
- (3) 高橋健自「河内高井田なる藤田家墓地構内の横穴」『考古学雑誌』第9巻9号 1920
- (4) 烏田貞彦「本邦古墳発見の竈形土器」『歴史と地理』第22巻5号 1928
- (5) 藤沢一夫「船橋遺跡と大家・玉井家と大家部塚」『柏原市史』第四巻史料編(I)
柏原市役所 1975
- (6) 大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』 1974
- (7) 大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』 1975
- (8) 和光大学古墳壁画研究会『高井田横穴群線刻画』 1978
- (9) 山田良三「河内横穴墓の線刻画について」『末永先生米寿記念献呈論文集』 1985
- (10) 吉岡 哲「河内平尾山千塚、高井田横穴群の危機」『考古学研究』第25巻3号 1978
吉岡 哲「横穴線刻画雜感 — 北原一也先生と高井田横穴群線刻画」『攝河原文化資料』
第24号 1981 ほか
- (11) 柏原市教育委員会『高井田横穴群Ⅰ』 1986
柏原市教育委員会『高井田横穴群Ⅱ』 1987
- (12) 花田勝広「横穴墓の造墓技術 — 河内の横穴を中心に —」『ヒストリア』第120号
1988
- (13) 花田勝広「畿内横穴墓の特質」『古文化談叢』第22集 1990
なお、本論文によって横穴の成立時期を6世紀前葉と修正しているが、須恵器TK10型式
とする考えに変化はなく、TK10型式の年代観が6世紀中葉から前葉に修正されたもので
ある。
- (14) 花田勝広「河内の横穴墓 — 高井田横穴群の基礎的調査 —」『考古学論集』第3集
1990
- (15) 花田勝広「近畿横穴墓の諸問題」『おおいた考古』第4集 1991
- (16) 松村隆文「大阪府下の横穴墓」『文化財を守るために』29 1987
- (17) 松村隆文「畿内の横穴墓」『研究紀要』I (財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
- (18) 柏原市教育委員会『高井田横穴群Ⅲ』 1991
- (19) 柏原市教育委員会『高井田山古墳』 1992
- (20) 柏原市教育委員会『史跡高井田横穴公園整備事業報告』 1993刊行予定

第4章 試掘調査

試掘調査は、史跡公園整備工事によって、広場や道に予定されている部分を中心に、基本的には幅1mのトレンチを設定し、必要に応じて拡張することにした。トレンチは、整備対象地全域で33箇所となる。

1 トレンチ（図-8）

竹林広場予定地の西側、竹林の中に設定した $1 \times 3.5\text{m}$ のトレンチである。地表下1.2mまで掘削したが、表土下にみられる褐色粘質土が更に続いている。湧水が激しく、遺物・遺構は認められなかった。

2 トレンチ（図-8）

竹林広場予定地の東側に設定した $1 \times 6\text{m}$ のトレンチで、第1トレンチの東10m、竹林の中に設定した。各土層は緩やかに西から東へと下がっている。トレンチの西端、地表下40cmで花崗岩の地山に至り、東側へ傾斜している。遺物・遺構は認められなかった。

3 トレンチ（図-8）

竹林広場から北東へ上る古代の道予定地に、等高線と平行に設定した $1 \times 5\text{m}$ のトレンチである。地表下1.2mまで掘削したが、地山には至らず、遺物・遺構は認められなかった。

1～3トレンチ周辺は、現状では谷地形を呈する竹林となっている。調査結果から、1トレンチ付近に南へのびるかなり大きな谷があり、2トレンチから3トレンチにかけての位置に、やや規模の小さい谷が存在するようである。1トレンチの西方10mには第3支群9～15号墳の横穴が開口しており、凝灰岩層が露出しているが、この凝灰岩層は、あまり低い位置にまで至っていないようである。

4 トレンチ（図-8）

4～7トレンチは、竹林の東側の道に沿って、第2支群51～55号墳が存在するとされている位置に設定した。4トレンチは、第2支群54・55号墳の位置に、幅1m、長さ9mの範囲で設定し、後に南東部を $1 \times 3\text{m}$ 拡張した。調査の結果、地表下40cm以内で花崗岩岩盤から成る地山に至り、土層は表土のみであった。そして、55号墳とされていた部分は、最近の土取り跡であることが判明した。もう一方の54号墳は、半円状の落ち込みを呈しており、一部を拡張して全形を確認したが、やはり埋土は表土のみであり、表土内から多量のコーカス溝と思われる溶解物が出土した。したがって、数十年前にコーカス溝を挖るために、人為的に掘られた跡であると判断した。このように、54・55号墳は、共に横穴でないことが確認された。また、コーカス溝以外は、遺物・遺構共に全く出土していない。地山も花崗岩層であり、凝灰岩層はみられなかった。

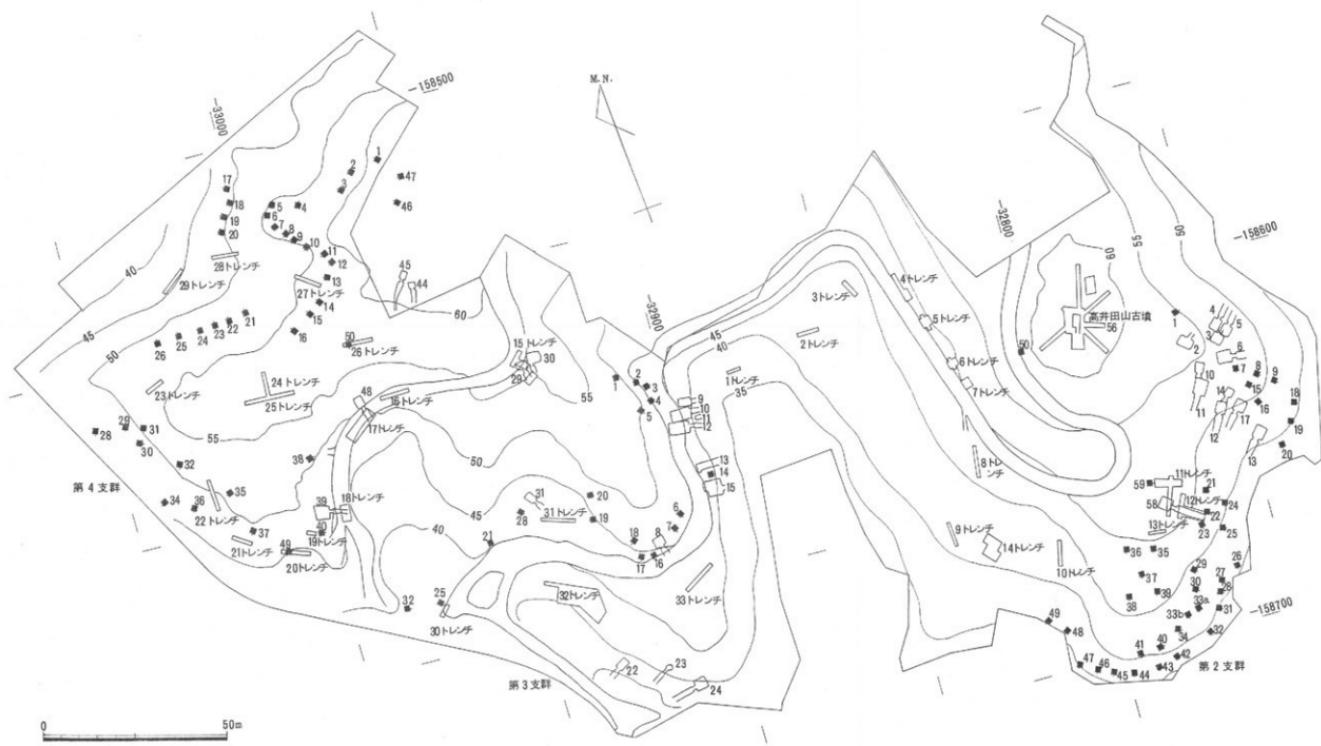
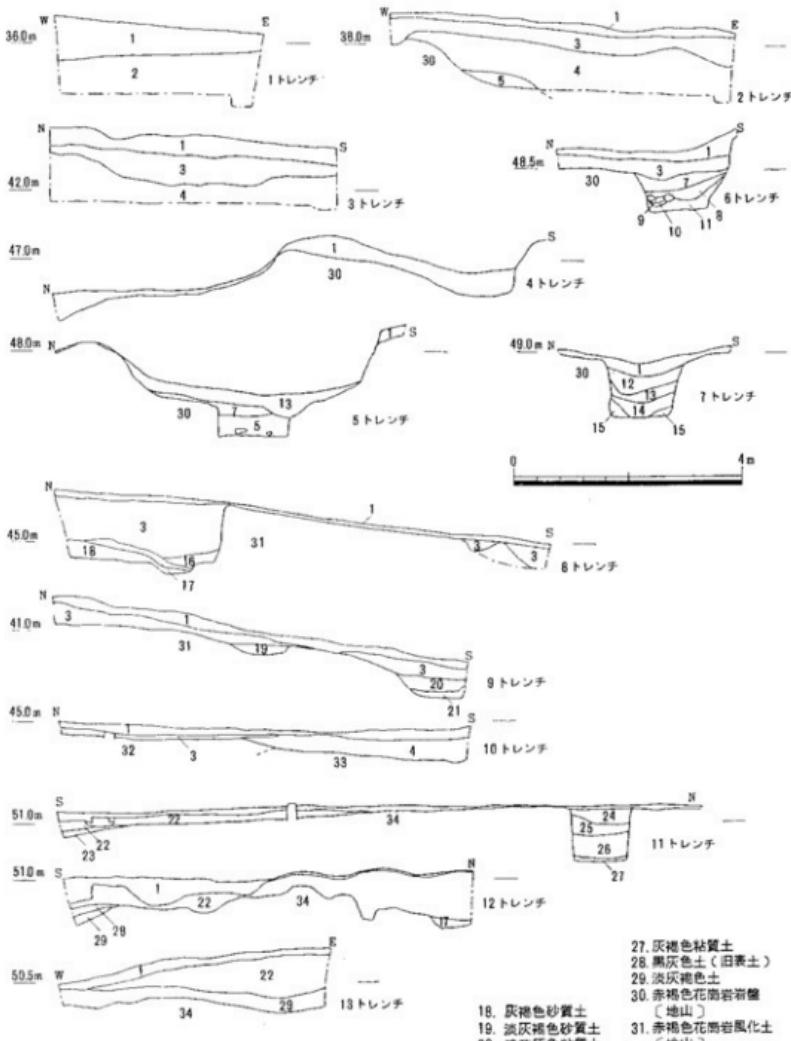


図-7 調査地全体図



- | | | | | |
|------------|----------------------|-------------|--------------|-----------------------|
| 1. 淤土 | 7. 茶褐色粘質土 | 12. 黑褐色粘質土 | 18. 黑褐色砂質土 | 27. 灰褐色粘質土 |
| 2. 褐色粘質土 | 8. 褐色砂質土 | 13. 雪褐色粘質土 | 19. 浅灰褐色砂質土 | 28. 黑灰色土(旧表土) |
| 3. 褐色土 | 9. 花崗岩砕石土 | 14. 淡赤褐色粘質土 | 20. 雪青灰褐色粘質土 | 29. 淡灰褐色土 |
| 4. 淡褐色粘質土 | 10. 黑灰色砂質土 | 15. 青灰色粘質土 | 21. 雪灰色粘土 | 30. 赤褐色花崗岩風化土
〔地山〕 |
| 5. 淡赤褐色砂質土 | 11. 黑灰色砂質土
(炭・灰泥) | 16. 浅灰褐色土 | 22. 雪灰白色砂質土 | 31. 赤褐色花崗岩風化土
〔地山〕 |
| 6. 雪褐色粘質土 | 17. 茶白色砂質土 | 17. 灰白色砂質土 | 23. 雪灰褐色土 | 32. 雪黃褐色粘質土
〔地山〕 |

図-8 1~13トレンチ上層図

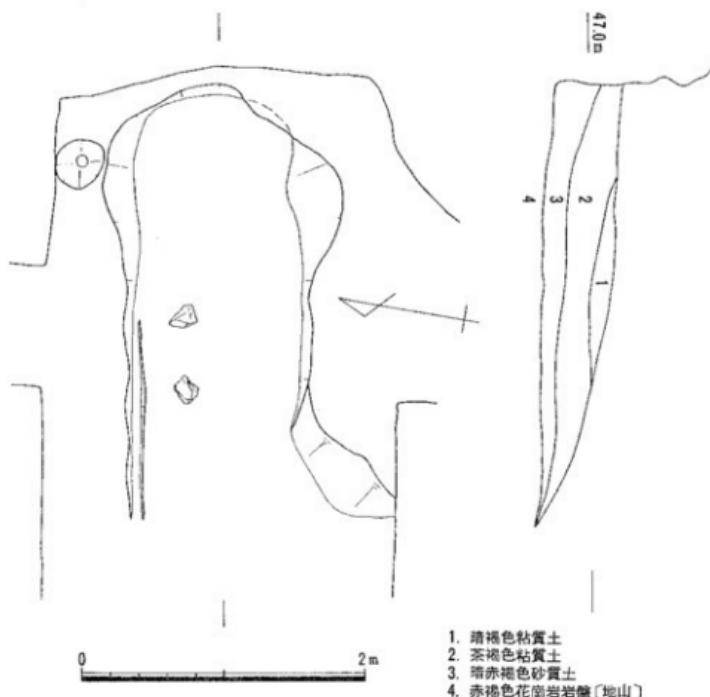


図-9-5 トレンチ遺構図

5 トレンチ (図-8・9、図版1)

第2支群53号墳とされている位置に、幅1m、長さ5mで設定したトレンチである。調査前から半球状に落ち込んでおり、表土、暗褐色粘質土を除くと、垂直に立ち上がる壁面を有した遺構が検出された。そのため、遺構の全形を確認できる範囲までトレンチを拡張し、この遺構の調査を実施した。その結果、S-80°-Wに開口する横穴状の遺構であることを確認した。両側壁は高さ50cm前後を測り、直立し、1~1.2mの幅で平行している。奥壁もほぼ垂直に立ち上がるが、一部でオーバーハングしており、本来は天井部を有していた可能性を考えられる。長さは7.2mを測り、床面は平坦、東から西へと緩やかに下がっており、東端と西端の北高差は15cmを測る。また、北壁に沿って、幅10cm、深さ3cm程度の溝が認められ、床面には3個の角礫が存在した。埋土は、茶褐色粘質土・暗赤褐色砂質土であるが、土師器の小片が出土したのみであり、時期は不明。通有の横穴とは形態が大きく異なり、花崗岩層に営まれていることから考えても、横穴とは区別して考えたいと思う。この遺構を横穴状遺構-1とする。

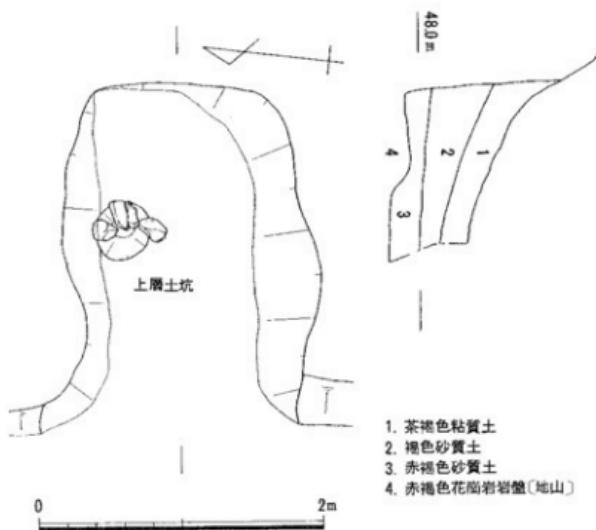


図-10-6 トレンチ遺構図

6 トレンチ（図-8・10、図版2）

第2支群52号墳の位置に、幅1m、長さ3mで設定し、5トレンチと同様に、遺構確認のために後に拡張した。表土・褐色土を除くと花崗岩層に掘り込まれた遺構が検出された。更に、遺構の埋土である茶褐色粘質土・褐色砂質土を除くと赤褐色砂質土が検出されたが、この層を掘り込んでいる小規模な土坑が確認された。直径約40cmを測る円形平面を呈し、深さは約15cmを測る。埋土は、上層が花崗岩破碎土、下層が木炭・灰を含む黒灰色砂質土であり、土坑上面に花崗岩礫4個が置かれていた。遺物が全く出土しておらず、時期・性格は不明であるが、火葬墓の可能性も考えられる。赤褐色砂質土を除くと、横穴状遺構-2が全形を現わした。N-83°-Wに開口し、長さ2.4m、幅1mの長方形平面を呈するが、南東隅部の形がやや崩れている。床面は奥から約50cmが段状に一段高くなっている、そこから西側は緩やかに傾斜している。側壁は5トレンチの横穴状遺構-1と比べるとやや傾斜が緩くなっている。奥壁は垂直に立ち上がっているが、これも5トレンチと同様に、一部で天井が存在した可能性が考えられる。やはり遺物が出土しておらず、遺構の時期・性格は不明であるが、この遺構が約20cmの厚さまで埋まつた後に上層の土坑が掘られており、この土坑が火葬墓であるならば、横穴状遺構の時期は中世以前と考えられる。更に、周辺から検出されている火葬墓が奈良・平安時代に限られていることを考えると、横穴状遺構の年代が奈良時代前後になるのではないかと推定される。

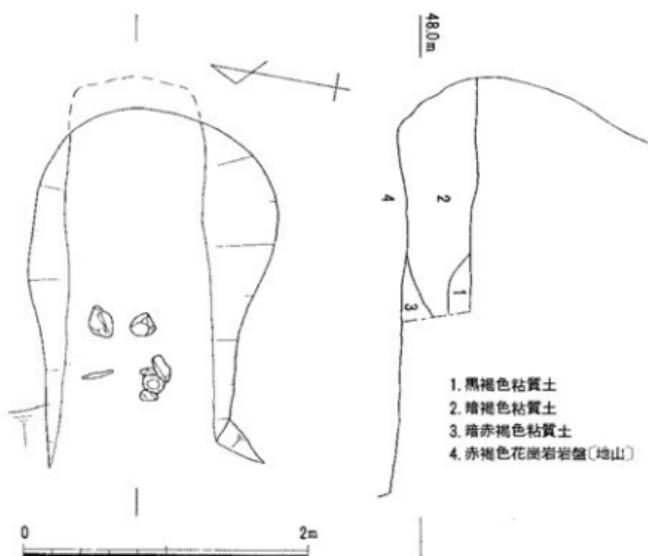


図-11 7トレンチ遺構図

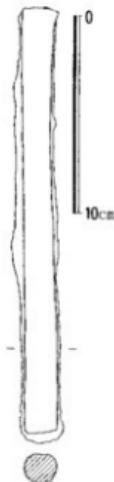


図-12 7トレンチ出土遺物

7トレンチ（図-8・11・12、図版1）

第2支群51号墳の位置に設定した幅1m、長さ3mのトレンチ。5・6トレンチと同様な横穴状遺構が検出されたため、後に拡張した。横穴状遺構-3の床面は、幅1m、長さ2.4mの長方形平面を呈し、側壁は比較的強い傾斜で立ち上がる。奥壁は、床面から高さ60cm前後までは外傾して立ち上がり、それ以上では内傾して天井部をなす。埋土は上層から黒褐色粘質土・暗褐色粘質土・暗赤褐色粘質土・青灰色粘質土と続く。床面の西寄りの部分から花崗岩の角礫が5個出土し、これらの間に囲まれて、ほぼ主軸上に直径15cmの円形ピットが検出された。このピットの北側、側壁近くから、主軸と直交する状態で棒状鉄製品が出土した。これ以外に遺物は出土しておらず、横穴状遺構-3の時期・性格は不明である。

棒状鉄製品は、直径1.6cm前後の円形断面を呈し、長さは21.4cmを測る。両端を切り落としたような円柱状となり、用途は不明である。

5～7トレンチで検出された横穴状遺構は、奈良時代頃かとも思えるが、時期・性格共に不明であり、埋葬施設の可能性も考えられるが、横穴とは言い難い。したがって、第2支群51～55号墳を横穴から削除したいと思う。

8 トレンチ（図-8、図版3）

出会いの広場予定地へ至る古代の道予定地に設定した $1 \times 8.6\text{m}$ のトレンチである。厚さ30cm前後の表土を除くと赤褐色花崗岩風化土の地山に至る。トレンチ北端では、この地山を1.1m前後掘り込んだ遺構が検出された。壁面は傾斜が強く、底面はほぼ平坦であるが、一部で落ち込んでいる。遺物は認められないが、埋土は褐色土を主体とすることから、最近の掘り込みと思われる。また、トレンチ南端でも不規則に落ち込むピット状の遺構が検出されたが、これも褐色土を埋土とするものである。

9 トレンチ（図-8、図版3）

出会いの広場予定地の西方に設定した $1 \times 7.3\text{m}$ のトレンチである。表土・褐色土を除くと、2基の土坑が検出された。トレンチ中央の上坑は直径1m前後の円形平面を呈すると考えられ、深さは約20cmを測る。遺物は認められなかった。トレンチ南端で検出された土坑は、その一部を確認したのみであり、全形を知り得ない。埋土は黄灰色系の粘土であり、遺物は認められなかった。この2基の土坑は時期・性格共に不明であるが、遺構として認識できるものである。褐色土から土師器・円筒埴輪の小片が出土している。

10 トレンチ（図-8、図版3）

出会いの広場予定地の東端近くに設定した $1 \times 7\text{m}$ の南北方向のトレンチである。出会いの広場予定地は、過去に家屋が建てられていたために、調査前は平坦面となっていた。地形から考えると、傾斜地の高い側をカットし、低い側に盛土して造られた平坦面と考えられ、レーダー探査結果でも、地山の落ち込んでいる位置が確認されていた。そのため、地山の落ち込み部のやや東側にトレンチを設定したものである。トレンチ南半で確認されている淡褐色粘質土は、家屋建設時の造成上であろう。地山は、北半が灰褐色粘質土、南半が灰褐色粘質土であり、いずれも凝灰岩の風化土と考えられる。遺物・遺構は認められなかった。

11 トレンチ（図-8・64）

歴史の広場予定地に設定した $1 \times 7.2\text{m}$ のトレンチ。やはり過去に家屋が建っていたために、調査前は平坦地となっていた。この家屋解体時に澳門部を露出した第2支群58号墳と玄室天井の一部が崩落したものと考えられる第2支群59号墳を確認し、レーダー探査結果もこれを裏付けるものであった。11トレンチは、この58号墳の墓道と59号墳の玄室を横断する形で設定したものである。表土・黄灰白色砂質土を除くとすぐに淡灰白色凝灰岩の地山に至り、トレンチ北端近くで、この地山を掘り込んだ幅1m、深さ1mの58号墳の墓道を検出した。その後、トレンチを拡張する形で58号墳の墓道を完掘したが、これについては第2支群58号墳の項に記述する。一方、59号墳の玄室推定位置では凝灰岩の地山が確認されたのみであり、横穴玄室の天井の大半が残存していると考えられた。そのため、11トレンチと平行する形で東側に12トレンチを設定し、59号墳を確認することにした。

12トレンチ（図-8・64）

第2支群59号墳の羨門から墓道の位置を確認するために設定した $1 \times 7\text{m}$ のトレンチである。表土・黄灰白色砂質土下に、凹凸の激しい淡灰白色凝灰岩の地山が検出され、地山は東側へと傾斜している。そして、トレンチ中央部の東端で59号墳の羨門部が確認された。その結果、59号墳の玄室は、流入土はあるものの、空洞状態で存在していることが判明し、上面を歴史の広場に予定していることから、59号墳の調査を実施することにし、トレンチを拡張した。調査結果については、第2支群59号墳の項を参照していただきたい。それ以外では、地山が南北両側に緩やかに傾斜していることが確認されたのみであり、遺物・遺構は認められなかった。

13トレンチ（図-8・64、図版3）

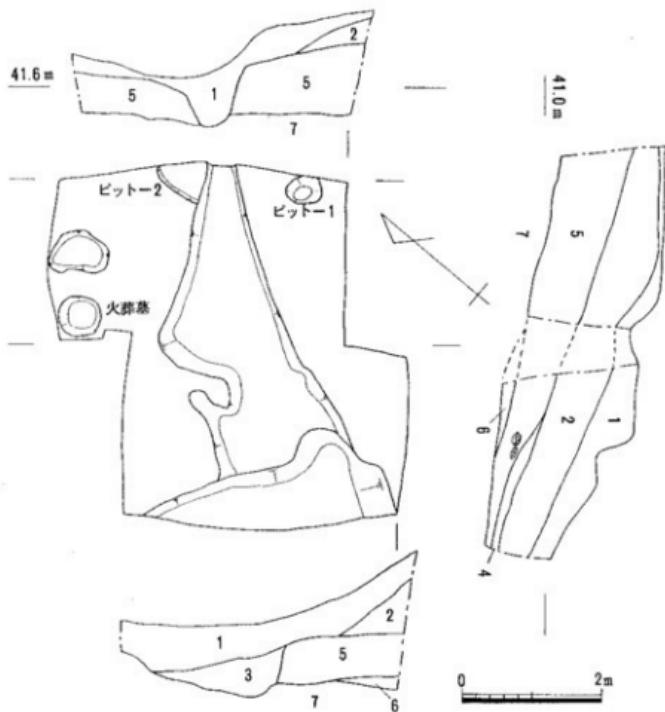
歴史の広場予定地の南側に設定した $1 \times 4.7\text{m}$ のトレンチである。レーダー探査によって、遺構の存在する可能性がある地点とされていたので設定したものである。しかし、表土・黄灰白色砂質土・淡灰褐色土下で淡灰白色凝灰岩の地山に至り、地山はかなり凹凸がみられるものの、遺物・遺構は認められなかった。

14トレンチ（図-13～15、図版4・5）

出会いの広場西側のトイレ建設予定地に設定したトレンチである。当初 $2.5\text{m} \times 4\text{m}$ の範囲に設定し、その後、同規模で西側へ拡張した。トレンチの中央に、北東から南西方向の溝状のものが確認されるが、一部で表土を埋土にしていることから、現代の排水を目的とした溝と考えられる。トレンチ東壁に沿って2個のピットが検出されたが、いずれも上層の灰褐色粘質土を埋土としており、遺物も出土しておらず、遺構と断定できるものではない。トレンチ中央の北端で火葬墓が検出されている。明黄褐色砂礫上の地山に掘り込まれており、直径約60cmの円形平面を呈する。深さは最大で25cmを測るが、上面はかなり削平されているようである。埋土の主体をなす黒灰色粘質土からは、木炭・火葬骨の細片などが出土している。土層から判断すると、地山を掘り下げた後、この掘削土を一部流し込んだか、もしくは自然に流れ込んだ後に、他所で火葬した火葬骨を木炭・灰などと共に納めたものと考えられる。黒灰色粘質土からは、土師器の小片が出土しているが、時期は不明である。

また、灰褐色粘質土から土師器・須恵器・埴輪が出土している。特に南壁から須恵器の短頸壺（2）と土師器の小形甕（3）が接するように出土しており、前者はほぼ完形である。火葬墓が検出されていることから、火葬墓に伴う遺物である可能性が高いと思われる。しかし、壁面を精査するも掘形は認められず、2次的に移動したものであると考えられる。これ以外に、ほぼ完形の須恵器杯蓋（1）と盾形と思われる埴輪片（図16-12）などが出土している。

9トレンチの遺構と共に、14トレンチ周辺には遺構がある程度存在するようである。しかもこれらの遺構は火葬墓など横穴より新しい時期の遺構と考えられ、5～7トレンチの横穴状遺構もこれらと一緒に遺構であるのかもしれない。



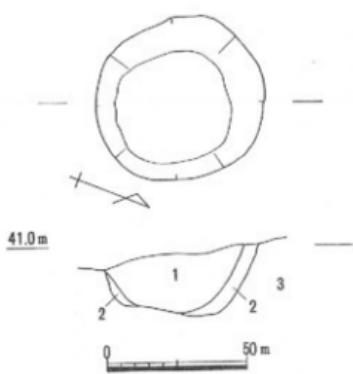
1. 表土
 2. 暗灰褐色粘質土
 3. 黒灰色土
 4. 黄褐色粘質土
 5. 灰褐色粘質土
 6. 明黄褐色砂質土
 7. 明黄褐色砂礫土〔地山〕

図-13 11トレンチ平面図・土層図

須恵器杯蓋（1）は、口径9.7cm、内外面ともに回転ナデ、天井部は回転ヘラ切りの後、難なナデによって調整する。須恵器短頸壺（2）は、肩部が張り、直立する口縁部が非常に短いものである。台部は斜下方へ開き、断面長方形をなすしっかりしたものである。内外面ともに回転ナデ調整で仕上げる。口径10.5cm、器高15.3cmを測り、短頸壺としては小ぶりである。

3は小形の甕である。扁平な球形の体部を呈し、頭部は滑らかな弧を描いてやや外反する口縁部へ続く。器壁が厚く、口縁端部もやや肥厚する。体部外面はナデ、内面は板ナデからナデ、口縁部はヨコナデ調整である。

盾と考えられる形象埴輪片（図16-12）は、円筒部前側面に粘土板を貼り付けたものであり、板状部表面をタテハケ調整、タテにのびる3本の平行線の線刻がみられる。



1. 黒灰色粘質土(炭・火葬骨混)
2. 暗灰褐色粘質土
3. 明黄褐色砂礫土(土山)

図-14 火葬墓

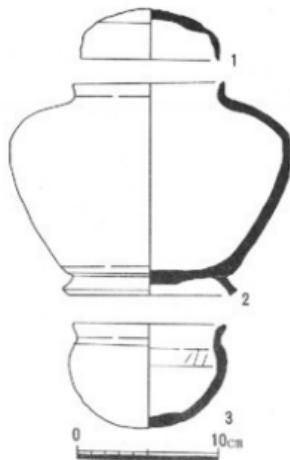


図-15 14トレンチ出土遺物

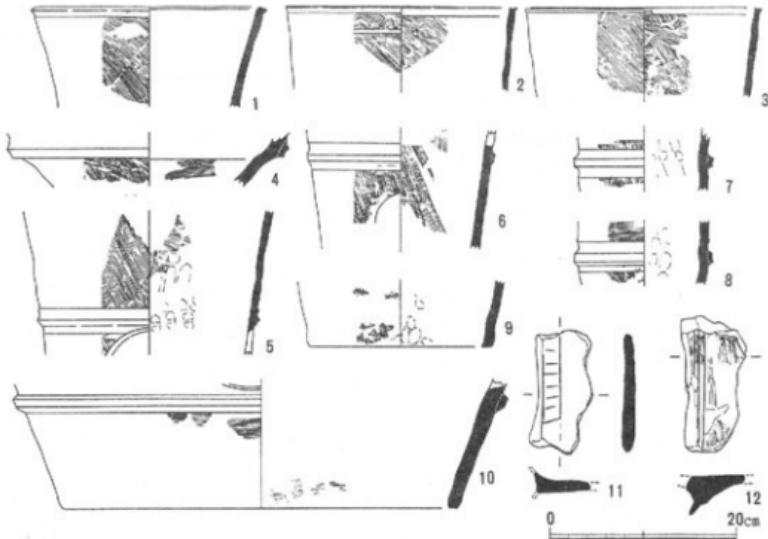


図-16 出土埴輪

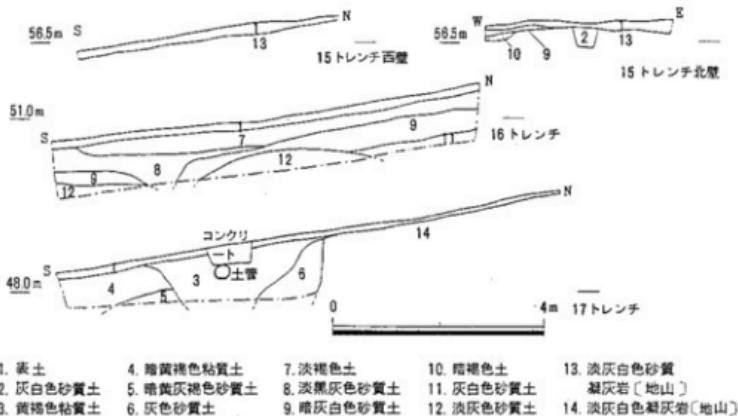


図-17 15~17トレーニチ土層図

15トレーニチ（図-17・89、図版6・110）

西側出会いの広場予定地からふるさと広場予定地へ至る歴史の道に、15~18トレーニチの4本のトレーニチを設定した。この4箇所はいずれもレーダー探査で横穴が存在する可能性が高いとされた地点である。

15トレーニチの位置は、南東へのびる尾根筋にあたり、現存の道は大きく弧を描いている。レーダー探査の結果、地表下1m以上に、幅2m前後の空洞部が存在するとされた地点に当たる。そのため、1×5mのトレーニチを設定し、その後、道を横断する1×3.5mのトレーニチをT字状に設定した。その結果、10~20cmの厚さの表土直下で淡灰白色砂質凝灰岩の地山が検出され、部分的に攪乱が認められるのみであり、遺物・遺構は認められなかった。レーダー探査結果のように地下に横穴が存在しているならば、その直上を調査しても確認するすべがなく、南東側斜面にも横穴の漠道や墓道を示す痕跡が認められないためにそれ以上の調査を実施しなかった。

ところが、後日この道を重機によって整地していた際に路面が陥没し、横穴の玄室天井部が崩落したものであることが判明した。そのため、緊急に南東側斜面にトレーニチを設定し、羨門を確認、横穴の調査を実施することになった。これが後述する第3支群29号墳に当たる。これまでの調査例から、レーダー探査結果が100%信用できるものでないことがわかっており、尾根筋に平行に存在しているとされたことに疑問をもち、地層の変化点を見誤ったものではないかと考えていたのだが、この場合は深さや規模の誤差はあれどもレーダー探査結果が正しかったことが裏付けられた。試掘調査の難しさを痛感すると共に、事故に至らずに良かったと思っている。29号墳については、文化庁に毀損届を提出し、調査後に埋め戻し、緊急用車両の迂回路が確保できないため、予定どおり歴史の道とすることになった。

16トレンチ（図-17・89、図版6）

レーダー探査の結果、横穴の可能性は少ないが、落ち込んだ地山が深さ1m以上で凸部を形成しているとされた地点に設定した。トレンチは $1 \times 8\text{ m}$ の規模で、深さ1m前後まで掘り下げたが、地山には至っていない。土層は下層で凝灰岩質の砂質土がみられ、これを切り込んで淡黒灰色砂質土が溝状をなしている。いつの時期かの排水に伴うものであろう。上層から土師器片が出土しているが、時期は不明。凝灰岩層は更に深く、16トレンチ周辺は谷状の地形を呈していると考えられる。この谷は南へ続いており、第3支群と第4支群を分けている。

17トレンチ（図-17・89、図版6）

レーダー探査によって、深さ約1.6mの位置にアーチ状の信号が認められるが、地山の凸部か横穴か判断し難いとされた位置に設定したトレンチである。トレンチは、この位置を中心に設定し、レーダー探査の反応地点で落ち込み状の遺構が確認されると共に、その南側で別の落ち込みが確認された。そのため、 $1 \times 5\text{ m}$ で設定したトレンチを $3 \times 9.5\text{ m}$ に拡張した。10~20cmの厚さの表土直下で淡灰白色凝灰岩の地山に至り、地山は南東へ緩やかに下がっている。レーダー探査反応地点はU字状の落ち込みを呈しており、掘り下げた結果、横穴の墓道であることが確認された。これは新発見の横穴であり、第4支群48号墳とした。48号墳は墓道の一部を床面まで調査したが、玄室・羨道は多量の土砂に埋没しているうえ、今回の整備工事範囲外であるため、平面図を作製したのみで調査を行なっていない。これについては、後述する。なお、レーダー探査によってアーチ状とされた信号は、墓道に転落していた巨石による信号と考えられる。

一方、トレンチ南側の落ち込みは、壁面をほぼ垂直とし、幅5m以上、深さ1.2m以上におよぶ大規模なものであることが判明した。人為的な掘削によるものであることは間違いないが、灰色砂質土から土師器の細片が1点出土しているのみであり、時期・性格ともに不明である。また、この落ち込みの埋没後、改めて後世に土管が埋設され、更にその上にコンクリートの集水槽が造られている。整備工事では路面を整地し、舗装するだけであるので、これ以上の調査は行なっていない。

18トレンチ（図-89、図版110）

レーダー探査の結果、約1.1mの深さに空洞の横穴が存在すると推定されていた位置に、 $1 \times 5\text{ m}$ のトレンチを設定し、後に幅を2mに拡張した。レーダー探査反応地点の山側斜面には、過去の分布調査で第4支群39号墳とされる横穴が確認されており、その墓道がのびているはずであった。したがって、レーダー探査結果に疑問を持って調査に着手したところ、予想どおり墓道が検出され、他の横穴が空洞で存在することは考えられなくなった。レーダー探査では、墓道内の自然石の集石を天井の信号と見誤ったものと思われる。第4支群39号墳については後述するが、第4支群48号墳と同様に墓道のみを調査し、玄室から羨道にかけては未調査である。

19トレンチ(図-18・89、図版6)

過去の分布調査によって、玄室天井部が崩落していた第4支群40号墳の後背部に設定したトレンチである。トレンチは、この崩落部分の規模を確認するために $1 \times 3\text{ m}$ の範囲で設定した。厚さ数cmの表土を剥ぐとすぐに淡灰白色凝灰岩の地山が現われ、天井崩落部の土砂を除き、40号墳の状況を確認した。玄室内の崩壊は激しく、澳門部は完全に埋没している。やはり工事による影響が考えられないため玄室内の調査は行なわず、崩落部に土のうを積んで閉塞することにした。

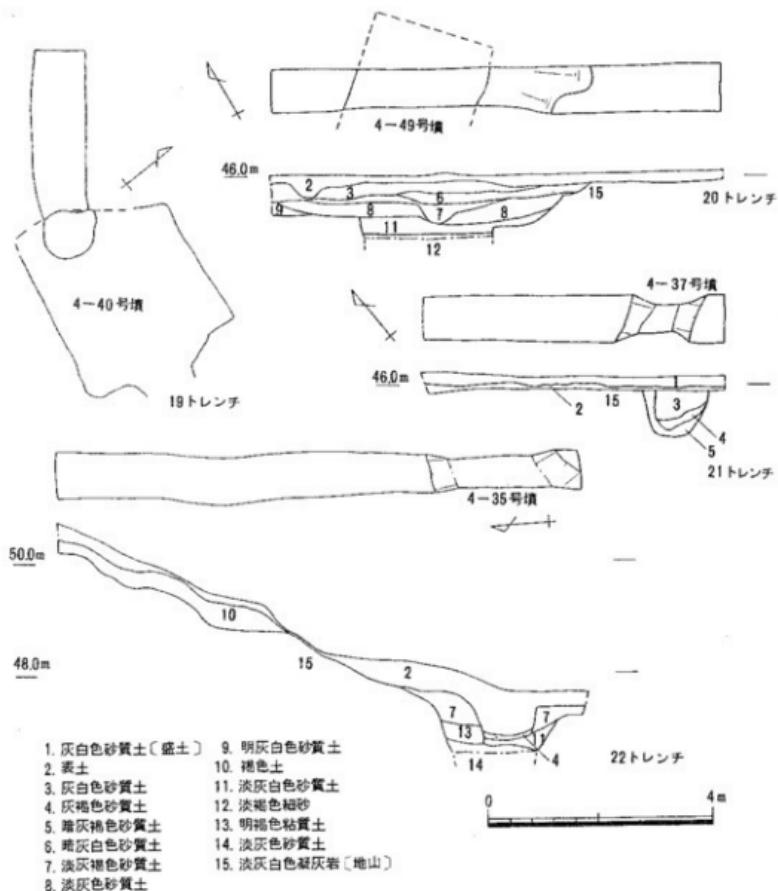


図-18 19~22トレンチ平面図・土層図

20トレンチ（図-18・89、図版7・110）

19トレンチと共に、展望所建設予定地に設定したトレンチである。レーダー探査では19トレンチの範囲内に2箇所で信号が確認されている。1箇所はトレンチ西寄りにあたり、約60cmの深さに岩石もしくは木の根のように水分を強く含むと推定される強い信号（I）であり、もう1箇所はトレンチ東寄りにあたり、約1mの深さに不完全なアーチ状の信号（H）を確認するが、この信号は横断方向に続いているものであった。トレンチは1×8mの規模で設定し、表土直下で淡灰白色凝灰岩の地山が一部で検出された。更に掘り下げるに従って、レーダー探査の信号地点（I）、地表下80cmに幅2.2mでのびる溝状の遺構が検出された。遺構の形態は平行してのびる2本の直線となっており、ボーリング棒によるとトレンチの北側に壁面が存するようであり、横穴の玄室と判断した。しかも壁面が垂直になっていることから、天井部が完全に削平された側壁部と考えられる。この横穴も、整備工事による影響が考えられないため、トレンチの拡張や玄室の調査は行なっていない。この横穴は、第4支群49号墳とした。

一方、もう1箇所のレーダー信号地点（H）では、地表下20cmで地山が検出されたため、地下の状況は把握できない。トレンチの南側は市道の法面となっており、またレーダー探査結果も明確なものではなかったため、こちらもトレンチの拡張は行なっていない。

21トレンチ（図-18・89、図版7・8・110）

古代の道予定地に設定した1×5.5mのトレンチである。レーダー探査では、2箇所で信号が確認されている。信号（K）はトレンチ西寄りに位置し、1.6m以上の深さにアーチ状の天井を有する幅4m前後の横穴と推定されており、信号（J）はトレンチ東寄りに位置し、現状でもその存在が確認できる横穴（第4支群37号墳）の約1.5m幅の墓道と推定されている。調査の結果、信号（K）地点では、何ら遺構は確認できなかったが、その位置から考えると第4支群36号墳の玄室が直下に存在するものと思える。これについては、天井までの深さが1.6m以上あるとされること、古代の道は歩行者専用であることから影響ないと判断し、調査は行なっていない。もう1箇所の信号（J）地点では予想どおり第4支群37号墳の墓道が検出された。トレンチ内の墓道部分は完掘したが、やはり整備工事による影響はない判断されるため、トレンチの拡張は行なっていない。

22トレンチ（図-18、図版7・8）

史跡公園内西端に予定されている古代の道の中で、最も傾斜が強く、そのために階段の設置が必要とされる箇所に設定した1×10mのトレンチである。トレンチ西端の比高差は3.2mを測る。表土・褐色土を除くと淡灰白色凝灰岩の地山が検出され、トレンチ南端では、第4支群35号墳の墓道が確認できた。35号墳は現状でもその存在が確認されていたものであるが、墓道は良好な状態で残っている。墓道は地表下1.2mまで掘り下げ、床面には至らないが、整備工事による影響が考えられないため、それ以上の調査は行なっていない。

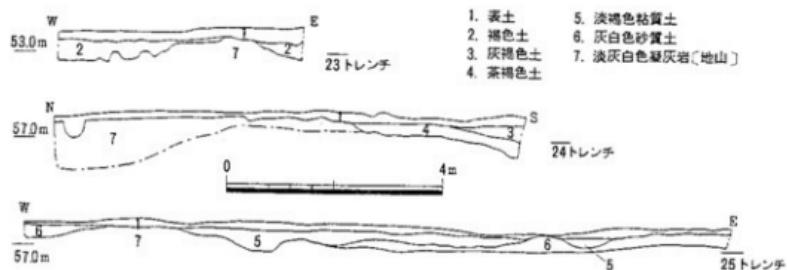


図-19 23~25トレンチ土層図

23トレンチ（図-19、図版9）

ふるさと広場に取り付く古代の道予定地に設定した $1 \times 4.5\text{m}$ のトレンチである。表土・褐色土の下で淡灰白色凝灰岩の地山に至る。地山は凹凸が激しいが、人為的なものとは考えられず、風化等によるものと考えられる。遺物・遺構は全く認められなかった。

24トレンチ（図-19、図版9）

ふるさと広場予定地に位置し、西側へ舌状にのびる尾根の頂部に当たる。過去に家屋が建っており、かなり広い平坦地となっている。トレンチは、この尾根を横断する形で、 $1 \times 9\text{ m}$ の規模で設定した。 $10\sim20\text{cm}$ の厚さの表土下で、淡灰白色凝灰岩の地山に至り、地山は南側へ緩やかに傾斜している。凝灰岩層の風化が著しく、砂質土状となっている。そのため、トレンチ北半で更に掘り下げてみたが、地山で間違いないことが確認された。尾根頂部に位置するため、凝灰岩層上部の風化が激しいものと考えられる。遺物・遺構は全く認められなかった。

25トレンチ（図-19、図版9）

24トレンチの南端から、直交する方向に設定した $1 \times 13\text{m}$ のトレンチである。表土・淡褐色粘質土・灰白色砂質土下で淡灰白色凝灰岩の地山に至る。地山の深さは、表土下 $20\sim60\text{cm}$ であり、表面には緩やかな起伏がみられる。遺物・遺構は認められなかった。

25トレンチの南側には、過去の家屋建築に伴う石垣がみられ、家屋建築時にかなりの造成が行なわれているようである。

26トレンチ（図-20・89、図版-9・10）

ふるさと広場東側の古代の道予定地に設定した $1 \times 8\text{ m}$ のトレンチである。トレンチ西半では地表下 60cm 前後で淡灰白色凝灰岩の地山が検出され、不整形の遺構も検出された。トレンチ東半では地山は緩やかに傾斜しており、 1.2m まで掘り下げたが、地山は確認されていない。不整形の遺構は、 2m まで掘り下げた結果、壁面がオーバーハングしていることが確認され、横穴玄室の天井部が陥没したものと推定される。横穴であるならば新発見の横穴であり、第4支群50号墳としたが、それ以上の調査は行なっていない。須恵器・土師器・埴輪が出土している。

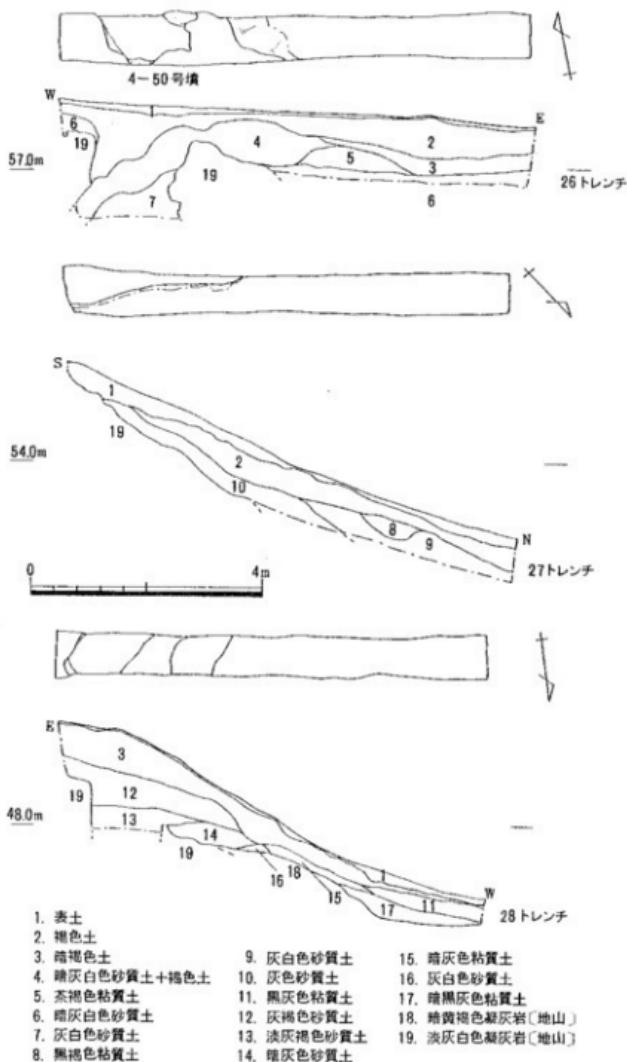


図-20 26~28トレンチ平面図・上層図

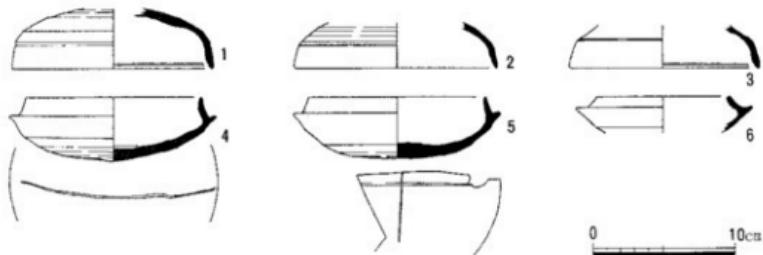


図-21 27トレンチ出土遺物

27トレンチ（図-20・21、図版10）

ふるさと広場の北側斜面、古代の道予定地に設定した $1 \times 8\text{m}$ のトレンチである。トレンチ南端では表土直下で凝灰岩層の地山に至るが、地山は垂直な壁面をなして落ち込んでおり、南東から北西へのびている。その他の部分では、地表下 $0.8\sim 1\text{m}$ まで掘り下げているにもかかわらず、地山は検出されていない。土層は、褐色土、灰白色砂質土、灰色砂質土と続く。この垂直に近い地山の落ち込みは、横穴の墓道に伴うものではないかと想定される。この落ち込みの南東延長上には、第4支群13号墳が存在しており、この横穴か、もしくは未知の横穴の墓道と考えられる。第10層灰色砂質土は墓道の埋土と考えられ、それを裏付けるように須恵器（図-21）が数点出土している。

須恵器杯蓋（1～3）は、天井部と口縁部の境に浅い凹線がめぐり、稜の痕跡を留めている。須恵器杯身（4～6）は、立ち上がりが比較的直立する大形のもの（4・5）と、立ち上がりが短く内傾する小形のもの（6）がみられる。1～5は6世紀後葉の時期を示しており、6は7世紀前葉の追葬に伴う遺物であろう。

28トレンチ（図-20、図版10）

27トレンチの北側斜面下に設定した東西方向のトレンチである。 $1 \times 8\text{m}$ を測り、東端で検出された地山は西側へと下がっている。トレンチ東端近くで、幅 92cm 、長さ 152cm 以上の遺構が検出された。壁面がほぼ垂直をなしており、横穴の墓道である可能性が考えられるのだが、北東部でも壁面の一部が確認されているため、墓道掘削途中で放棄された未完成横穴ではないかと考えられる。この遺構は地表下 170cm まで掘り下げ、更に深く続いているが、それ以上の掘り下げは行なっていない。その西に接して、暗灰色砂質土を埋土とする溝状の遺構があり、やはり横穴の墓道の可能性が考えられるが、調査範囲が狭いために確認するには至っていない。28トレンチの北東方向には、第4支群7・8号墳などの横穴が開口しており、これらの横穴に関連する遺構であろう。しかし、遺物は全く出土していない。

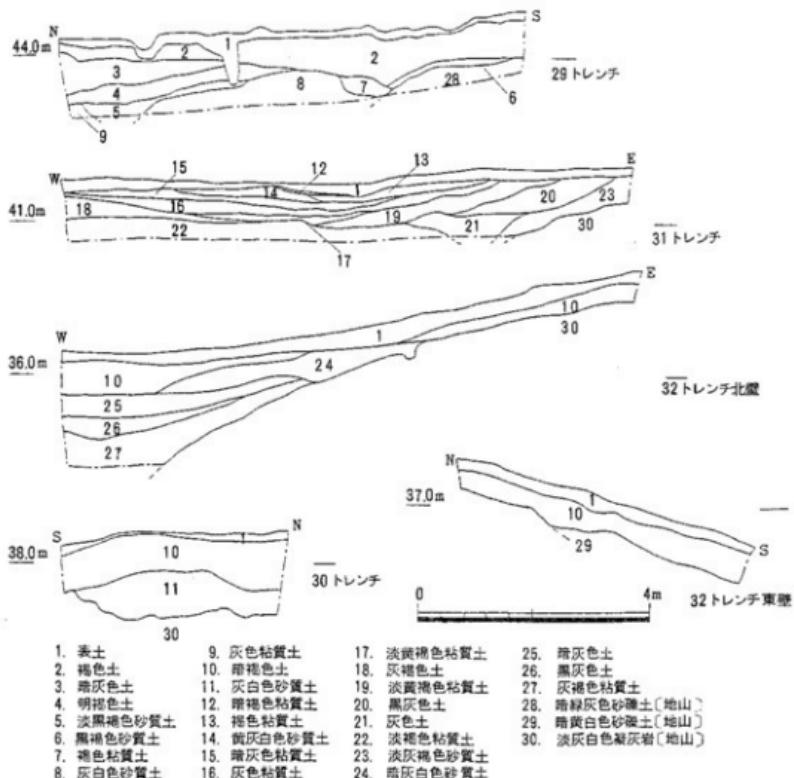


図-22 29~32トレンチ土層図

29トレンチ（図-22、図版11）

古代への入口広場予定地に設定した1×8mのトレンチ。南端で検出された暗緑灰色砂礫土の地山は、北側へ下がっている。土層は複雑な層序を示すが、遺構に伴うものではないだろう。29トレンチ周辺では、TP44m付近になると凝灰岩層は確認できない。遺物も全く出土していない。

30トレンチ（図-22、図版11）

過去の分布調査で、第3支群25号墳が存在するとされている部分に1×4mの30トレンチを設定した。地表下0.8~1.4mで凝灰岩層の地山に至るが、横穴は認められなかった。凝灰岩層表面は、風化のためか、凹凸が激しくなっている。遺構・遺物は全く認められず、第3支群25号墳の位置は確認できなかった。

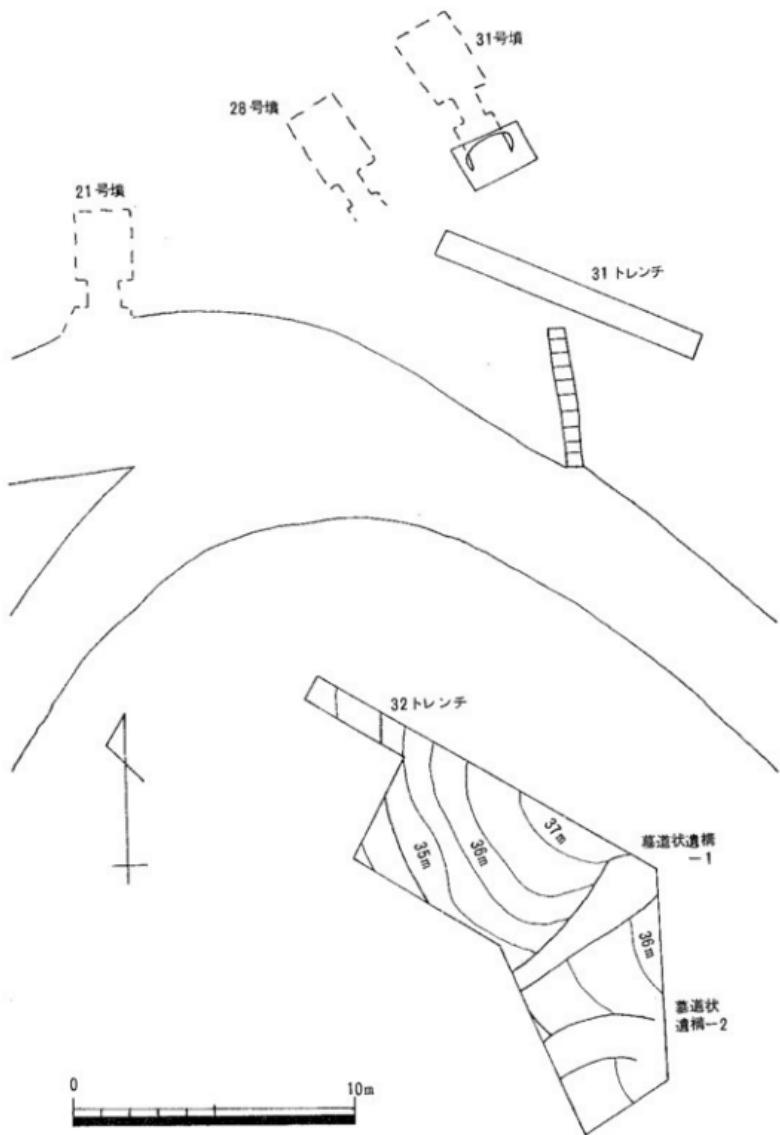


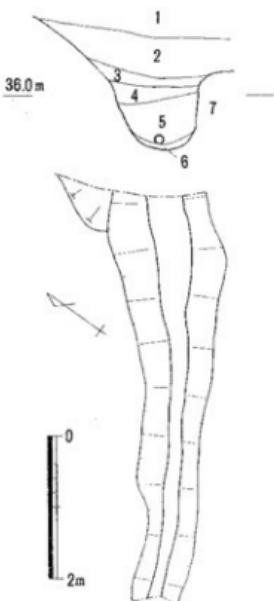
図-23 31・32トレンチ周辺

31トレンチ（図-22・23、図版11）

瞑想広場予定地に設定した1×10mのトレンチ。北西向に開口する第3支群19・20号墳と、南東向に開口する第3支群28号墳の中間に位置する。土層は薄層が重なるが、これは過去にこの地に建っていた家屋建築に伴って造成された土層である。トレンチ東端で確認された凝灰岩層は、19・20号墳の位置する凝灰岩層に続くものであり、西側へ落ち込んでいる。周辺の地形とトレンチ内の土層から、谷の両側に横穴が築かれており、周辺の土砂を削り、谷を埋めることによって家屋建築に伴う造成がなされたと判断できる。遺物は全く出土していない。トレンチ北側から、整備工事中に開口した第3支群31号墳が発見されている。

32トレンチ（図-22～26、図版12）

芝生休憩園地予定地に、当初、北西から南東方向へのびる幅1m、長さ10mのトレンチを設定した。その結果、最も浅い部分では地表下50cmで凝灰岩層の地山に達するが、西側へ凝灰岩層



1. 灰色砂質土
2. 黒褐色砂質土
3. 噴出褐色砂質土
4. 灰色土
5. 赤褐色粘質土
6. 淡灰色砂質土
7. 淡灰白色凝灰岩〔地山〕

図-24 墓道状遺構-1

は下がって谷状の地形を呈していることが判明した。31トレンチ付近から南西へのびている谷の一部であると考えられる。芝生休憩園地では、若干の切土・盛土によって整地した後、法面に緑化ブロックウォールを施行する予定であったため、トレンチを拡張する形で影響範囲を全面調査した。その結果、横穴の墓道ではないかと考えられる溝状の遺構が2基検出され、北側の遺構を墓道状遺構-1、南側の遺構を墓道状遺構-2とした。

墓道状遺構-1は、上面での幅が60～160cm、底面での幅が20～50cmを測り、深さは30～100cmを残す。南西から北東へとのびており、緩やかに北側へ弧を描いている。ところが、この遺構を再利用する形で土管が埋設されている。土管は数十年前のものと考えられ、その当時埋没していたであろうこの遺構を掘り出し、土管を埋設している。凝灰岩層の掘削が困難であったために、このような方法をとったのであろう。そのため、本来の埋土である黒褐色粘質土が部分的に残っているだけで、大部分は土管埋設時の埋土である。遺物は、黒褐色粘質土から須恵器片が出土しているが、時期を決定できるほどのものではない。墓道状遺構-1の延長上には、第3支群18号墳が開口しており、18号墳の墓道である可能性も考えられるが、比高差が5mもあるので、他の横穴に伴うものであるかもしれない。

墓道状遺構-2は、上面での幅が130cm前後、底面での幅が30cm前後、深さが40~110cmを測る。長さは3.8mまで確認しており、西から東へと緩やかな弧を描いていたりしている。埋土は、上層から暗灰色粘質土、黒褐色粘質土、灰色砂質土の順で層をなす。黒褐色粘質土から須恵器が数点出土している。1・2は、いずれも短頸壺であり、1は外方へ張り出した肩部から直立する短い口縁部にいたる破片。2は純重な体部から底部の破片であり、体部外面はカキメ、底部は回転ヘラケズリ調整である。この遺構は東へのびているため、どの付近の横穴に伴うものか定かではない。

33トレンチ（図-27、図版13）

屋外展示広場予定地に設定した1×10mのトレンチである。過去の家屋建築に伴う擾乱が激しく、1~3層はいずれも現代の擾乱土である。トレンチ南端で墓道かと考えられる遺構の一部を検出した。墓道であるならば延長上に位置する第3支群8号墳の墓道である可能性が高いと考えられる。埋土は完掘しておらず、遺物も出土していない。地山は南から北へかなりの傾斜で下がっているようであるが、これが、自然地形であるのか、家屋建築時の大規模な地形変更に伴うものであるのかは判断し難い。

試掘調査は以上で全てであり、工事による影響が認められない部分では、トレンチの拡張、遺構の完掘は、できるだけ避け、地下の状況把握だけに留めるように配慮した。

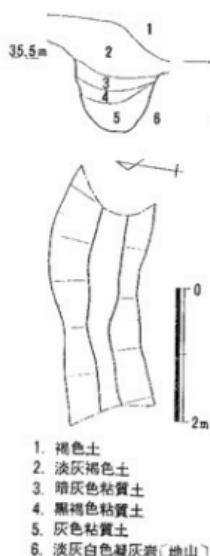


図-25 墓道状遺構-2

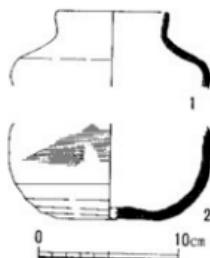


図-26 墓道状遺構-2 出土遺物

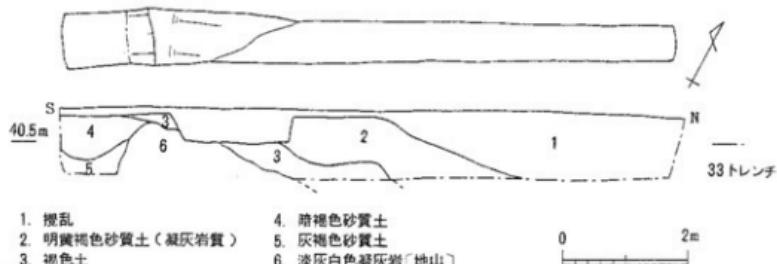


図-27 33トレンチ平面図・土層図

第5章 横穴の調査

横穴は、公開予定の15基を中心に調査を実施し、その他、埋没保存をする横穴、整備工事によって何らかの影響が生じる可能性のある横穴なども一部で調査を実施した。調査を実施した横穴は以下の通りである。

公開予定の横穴—第2支群2・6・10～14・17号墳、第3支群10～13号墳

埋没保存の横穴—第2支群59号墳、第3支群8・9・29号墳

墓道など一部の調査を実施した横穴—第2支群58号墳、第3支群30号墳、第4支群39・48号墳
位置の確認や略測等を実施した横穴—第3支群31・32号墳、第4支群35・37・40・49・50号墳

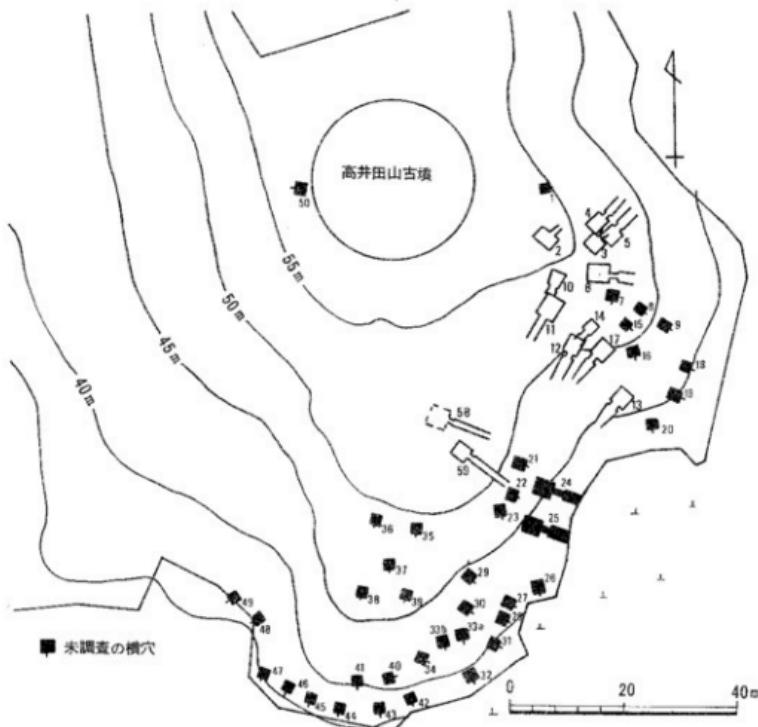


図-28 第2支群横穴分布図

第2支群2号墳(図-29・30、図版14~16)

第2支群北東部に位置し、約7m北に位置する1号墳と共に第2支群最高所を占める。玄室は隅丸方形平面を呈し、主軸はN-35°-Eとなるが、羨道はやや右へ振っており、N-46°-Eに開口する。羨道は、玄室側へ「八」の字形に開く平面形となり、墓道はまっすぐのびて前面の自然地形で断ち切られている。

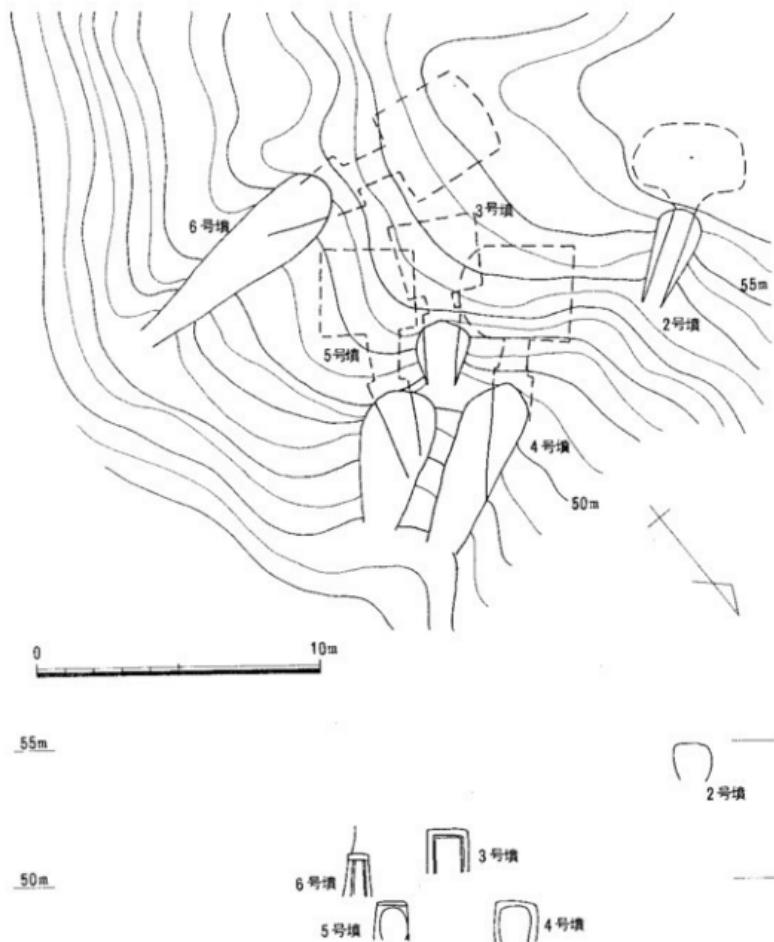


図-29 第2支群2~6号墳

玄室には、奥壁と左側壁に沿って造り付け石棺が存在し、右側壁に沿って棺台状施設が存在する。玄室長は245cm、玄室幅は402cm、玄室高は154cmを測る。天井は平天井に近いドーム状を呈し、右側壁は垂直に立ち上がるが、左側壁は石棺上面から内傾している。奥壁には、石棺を区画するような形で幅5cm以下の段がみられるが、ほかには側壁と天井の境を示す加工は施されていない。

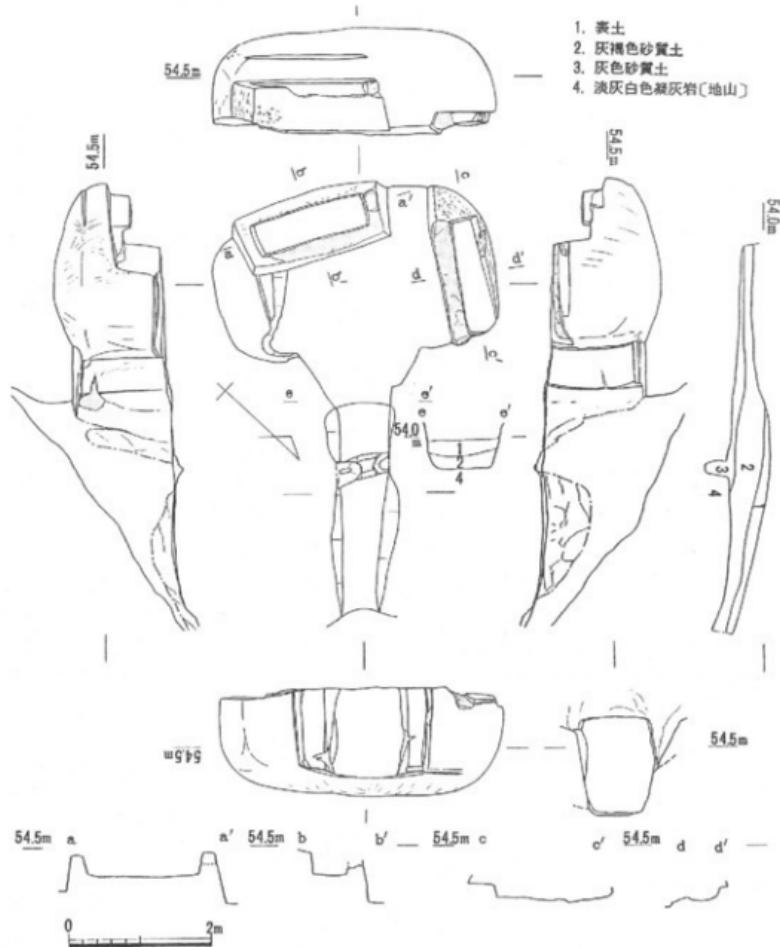


図-30 2-2号墳

奥壁の造り付け石棺は、内法長156cm、幅43cm、深さ30cm、外法長202cm、幅88cm、高さ60cmを測る。石棺の北辺と西辺の上部が破壊されているが、他は比較的良好に残存している。上面や側面の一部には工具痕も残っている。

左側壁の造り付け石棺は、通常の石棺に比して、かなり低いものである。石棺上面での平面形は、東辺、すなわち玄室中央側では直線をなしているものの、西辺から南辺にかけては弧を描いた不整形なものとなっている。石棺内部は細長い長方形を呈するが、北辺では上面の平坦面がみられず、玄室前壁を石棺北壁としている。内法長166cm、幅44cm、深さ17cm、外法長230cm、幅74cm、高さ30cmを測る。西辺の破損が著しく、石棺内底面まで完全に破壊されている。上面には工具痕が多数残されており、石棺内面も凹凸がみられ、全体に粗雑に造られている。

右側壁には棺台状の施設がみられる。玄室床面から2段の段をなして高く造られており、その床面が左側壁石棺内底面より高いので、棺台と考えて間違いないであろう。長さ194cm、幅63cm、高さ12cmを測り、南側で奥壁石棺に接している。左側壁石棺と同様に、玄室中央側の西辺は直線をなすが、北から東、南にかけては弧を描いた平面形態となる。

玄門の幅は176cm、高さは131cmを測る。玄門の両側には幅8cm前後、高さ110cmで、約3cm突出した柱状の加工がみられる。この柱状加工の上端に接して、左前壁には幅3cmの段が約60cm水平にのびている。

羨道は、玄門から羨道にかけてその幅を減じているが、羨道と墓道の境が不明瞭である。後述するが、羨道には柱穴・溝状の遺構がみられるので、この位置を羨道と墓道の境とすると、羨道長160cm、羨門部での幅69cmとなる。天井はアーチ状をなす。前述のように羨道は玄門部から「八」の字形に狭くなっており、左側壁では、玄門から60cmの位置で内側へ12cm屈曲し、右側壁でも玄門から92cmの位置で屈曲している。右側壁の場合は、左側壁のように内側への突出はみられず、両壁ともこの屈曲点から墓道側は、ほぼ平行にのびている。左側壁上端には、幅7cmで1.5cm突出した部分が水平にのびている。これは、玄門部の柱状加工と接しており、玄門から60cmの位置の段をなしている部分で途切れている。右側壁には、このような加工はみられない。

墓道は、長さ217cm、幅は47~66cmを測る。前述のように、羨道と墓道の境には2個の柱穴とそれをつなぐ溝状の遺構がみられる。柱穴は60cmの間隔をおいて側壁を一部断ち切るように掘られている。直径40cm前後と推定される円形平面を呈し、西側の柱穴は24cm、東側の柱穴は48cmの深さを測る。両柱穴をつなぐ溝状遺構は、幅33cm、深さ12cmを測り、断面はV字状をなしている。これらの遺構が、横穴掘削時まで通るものであるかどうかは確認できていない。しかし、埋上から最近のものでないことは確かであり、横穴掘削時まで通るものではないかと推定される。横穴に伴う遺構であると考えるならば、閉塞施設の可能性が考えられる。遺構の位置、形状から判断すると、直径20cm前後の2本の柱を立て、その柱側面に切り込みを入れて、幅40cm

強の板材を嵌め込んだのではないかと推定される。しかし、羨道天井部との間が90cmも離れることになり、閉塞施設であるとしても、どの程度の機能を果たしたか疑問である。むしろ、外見を意識したものであったのかもしれない。

玄室から羨道にかけて、床面は緩やかに下がっており、比高差33cm、傾斜角は4°である。また、横穴が穿たれている斜面の傾斜角は35°を測る。

調査前は、玄室で20cm前後、柱穴付近で60cmの厚さの流入土があったが、内部はすでに荒らされており、最下層の灰色砂質土は、比較的古い時期の流入土と考えられる。灰色砂質土から須恵器や6世紀代の埴輪片が出土しているが、良好な遺物はみられず、時期も特定できない。

2-2号墳の掘削状況をみると、その平面形態や工具痕から、やや粗雑な印象を受ける。しかし、その一方で、玄門や羨道左側壁の柱状加工など、繊かい細工がみられる。これら柱状加工は家屋の表現を意識したものかと考えられるが、玄室の平面形態を考慮すると疑問も残る。平入りの豎穴住居を模したものであろうか。それとも、実際の住居とは無関係に、意識のうえだけの問題なのであろうか。また、羨道左側壁に比して、右側壁の加工において手抜きがみられる点も興味ある事実である。

第2支群3号墳（図-29・31、図版17~20）

第2支群3~5号墳は、下段に4・5号墳、その中間上段に3号墳の3基の横穴が規則的に並んでおり、見事な景観を呈している。一見して、非常に密接な関係を有する横穴であることがわかる。

玄室は、やや横長の方形平面を呈し、これにやや右へ寄った短い羨道部が取り付く。開口方向は、N-29°-Eである。

玄室の長さは274cm、幅305cm、高さ167cmを測る。奥壁と両側壁の3面に、側壁と天井の境の切り込み段がみられる。段の幅は5~10cmと狭い。奥壁の破損状態がひどいが、他は良好な状態で残っている。奥壁の床面から高さ70cmの位置には、横方向へのびる溝状の部分が、かろうじて残されている。同様に、床面の奥壁から65cm前後の位置にも溝状の部分がみられる。これは、造り付け石棺の痕跡と考えられ、後世に石棺が破壊されたものと考えられる。玄室床面の南東隅が一段高くなっていることや、奥壁の破損が激しいことも、この事実を物語っているのであろう。造り付け石棺は、外法で長さ280cm前後、幅約60cm、高さ約70cmと復元される。

天井は扁平なドーム形をなすが、玄門上部では幅25cmの垂直面をなしている。玄門左側には幅27cm、右側には幅20cmの、共に2cm前後の深さに彫り込まれた長方形の加工がみられる。この長方形加工の上端は、羨道天井の高さに一致している。

羨道は、長さ66cm、幅95cm、高さ136cmで、横長の平面形を呈している。羨門の周囲にも、玄門と同様に2cm前後の深さに彫り込まれた加工が認められるが、異なる点は幅が5cm前後と狭いことと、羨門上部にも加工が認められ、羨門を「コ」字形に囲んでいる点である。

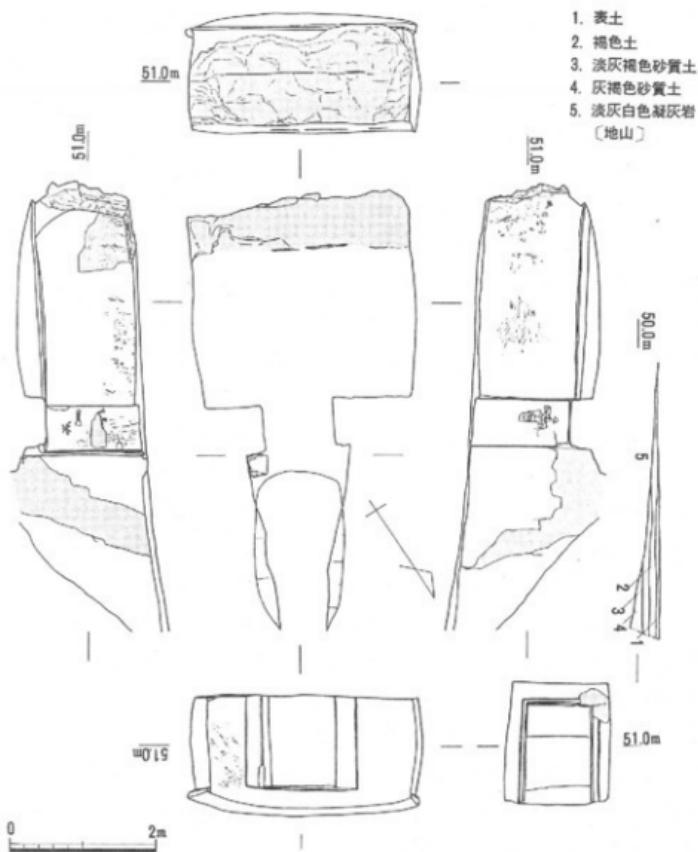


図-31 2-3号墳

これらの玄門や羨門の加工部分、また玄室の切り込み段の角の部分には、いずれも幅2cm前後の面取りがなされている。そして、羨門の周囲には、ベンガラと思える赤色顔料の痕跡が認められる。

墓道は、長さ250cmまで確認でき、端部は自然地形によって断ち切られている。幅は、羨門部で141cm、端部で62cmを測る。天井は床面から170cmの高さで、30cm以上の長さで、平坦面をなしていたと推定される。墓道の南西隅には、1辺30cm前後、深さ約8cmの方形ピットがみられる。閉塞施設に伴う遺構かと考えられるが、確認できない。玄室奥壁部と墓道端部の床面比高差は54cmを測り、平均勾配は5°であるが、墓道部分での傾斜が強くなっている。

調査前は、玄室の床面がほとんど露出しており、墓道で最大40cm埋没していた。そのため、出土した遺物もごく僅かであるが、玄室から墓道にかけての床面から、7世紀初頭頃の非常に短い立ち上がりを有する須恵器の杯身・杯蓋と長頸壺の小片が出土している。

墓道の両壁面には線刻画がみられる。左側壁にみられる騎馬人物像は、やや抽象的ではあるが、鞍や誇張された障泥の表現がみられる。右側壁上部の騎馬人物像は、より一層抽象的な表現となり、馬上の人物は、両手をあげている。その下の線刻画は、琴ではないかとされているものであり、左端が広がった長方形状の線刻の内部に、細い2本の平行線がみられる。更にその下にも馬の脚部・尾を描いた線刻画がみられるが、大半が剥離のために失われている。しかし、前2者の騎馬人物像と比較して、非常に精巧に写実的に描かれており、安福寺横穴群北群10号墳の騎馬人物像との類似性が指摘されている。他の壁面が良好な状態で残っているにもかかわらず、この線刻画部分のみが剥離していることを考えると、意識的に打ち欠いて持ち去られたものかもしれない。これらの線刻画は、そのモチーフ等から横穴掘削時のものであろう。

これら以外にも玄室壁面や天井的一面に、鳥・人物・幾何学文などの線刻が描かれている。これらの線刻画は捕鳥を描いたものであり、鳥取氏と関係があるのでないかとの指摘がなされているが、墓道部の線刻画に比して風化の程度が浅く、画題としての統一性を欠いていることなどから、横穴掘削時まで残る線刻画であるかどうかの確証が得られない。

2-3号墳には、羨門・玄門に家庭としての表現を意識したものかと考えられる加工がみられ、その他の部分も非常に丁寧に造られている。特に、羨門部の外見は素晴らしい仕上がりとなっている。赤色顔料の塗布も、これを一層美しく見せるためのものであろう。

第2支群4号墳（図-29・32~34、図版17・21~24）

方形平面を呈する玄室の右側壁を抉るように造り付け石棺が造られており、墓道はやや右寄りに取り付く。玄室主軸はN-40°-Eであるが、墓道は、右へ少し振ってN-47°-Eに開口する。そして、墓道の主軸はN-40°-Eと、再び左へ若干振っている。

玄室は、長さ353cm、幅324cm、高さ185cmを測る。前壁の両側と左側壁の約3分の2には、側壁と天井の境に切り込み段が設けられている。床面から110~120cmの高さの位置に、最大13cmの幅を有するが、奥壁では側壁と天井の境が明瞭であるにもかかわらず、切り込み段はみられない。

天井は、非常に扁平なドーム状となり、通常の横穴では、天井の最も高い位置は玄室中央にみられるのであるが、2-4号墳の場合は、中央よりも墓道に寄った位置に最高所が位置する。また、玄室中軸線上の天井には、160cmの間隔をおいて2箇所に円形の凹部がみられる。奥側は直径40cm、深さ8cm、墓道側は直径29cm、深さ6cmを測る。横穴掘削時のものと考えられ、柱を表現したものであろうか。奥壁と天井の境にも、2箇所の円形凹部がみられ、天井の凹部と関係あるものかもしれない。

1. 黑土
2. 深色砂質土
3. 黑褐色砂質土
4. 黑白色砂質土
5. 黑色砂質土
6. 淡灰色凝灰岩
〔地山〕

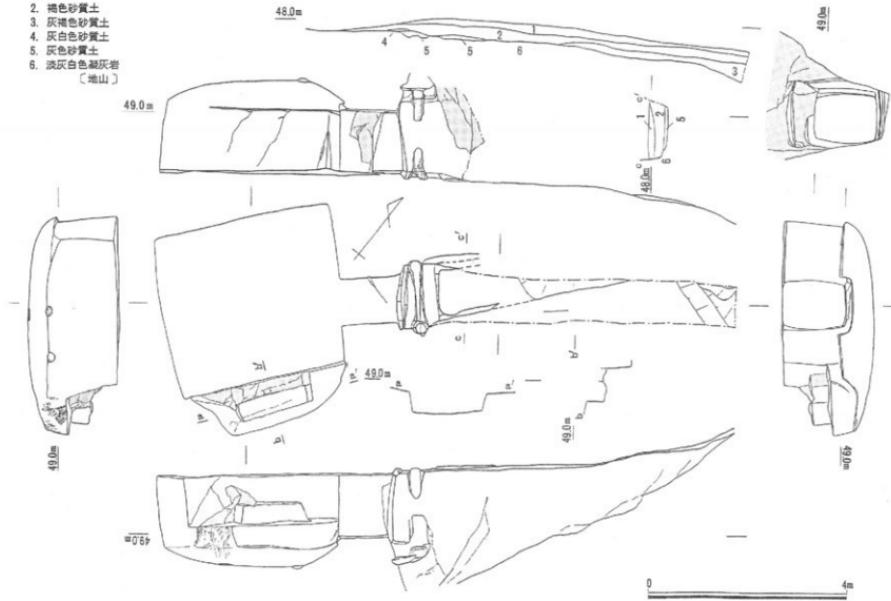


図-32 2-4号填

玄室右側壁にみられる造り付け石棺は、西辺、すなわち玄室中央側の辺が直線をなしているものの、他の3辺は直線をなさず、不整形平面を呈している。石棺内部は狭長な長方形平面を呈し、西辺がほぼ完全に破壊されている。石棺の内法は、上面での長さ157cm、底面での長さ140cm、幅は底面で40cm、深さ40cmを測る。高さは、90~100cmを測る。造り付け石棺は、玄室内において不自然な形態を呈し、南東隅部には工具痕が顕著に残されていることから、玄室完成後に改めて掘られている可能性が高い。

玄門上部には、左右の前壁の切り込み段につながる切り込み段が、「コ」字状にみられる。切り込み段の幅は約10cmであり、玄門の装飾としての樋状構造を意識したものかと考えられる。

羨道は、長さ115cm、幅93cm、高さ130cmを測る。側壁と天井の境は明瞭で、平天井となる。壁面、天井は平滑に仕上げられている。

墓道は、羨門部で幅127cmを測る。現状では、羨道からまっすぐにのびているように見えるのだが、発掘調査の結果、現状の墓道状にみえる部分は後世に掘られたものであり、本来の墓道は、もう少し西側に位置していたことがわかった。墓道床面は、2段の段をなして調査範囲外へ続いている。

羨門部床面には、幅23cm以下、深さ10cmの溝状遺構が横断している。また、この遺構から30cm北側には、2-2号墳でみられたと同様な2個の柱穴とそれを結ぶ溝がみられる。柱穴は、直径30cm弱の円形平面を呈し、深さ20cmを測る。これを結ぶ溝は、幅約20cm、深さ約10cmである。この2箇所の遺構は、2-2号墳で検討したように、閉塞施設の可能性が考えられるのであるが、2個の柱穴と溝からなる遺構は、更に複雑な施設に伴うものであるかもしれない。柱穴に対応する位置の側壁上部には、柱を立てるために削られた痕跡があり、その上部には、両側壁ともに1辺20cm前後、深さ10cm前後の方形の凹部がみられる。更に羨門上部を通って両側壁の方形凹部上面につながる断面V字状の堀り込みがみられる。これらの柱穴、柱の快り込み、方形凹部、羨門上部の掘り込みを一連のものと考えると、図-33に示したような羨門が復元される。直径約20cm、高さ約160cmの円柱上に、厚さ15cm程度の扁平な石をのせ、底面の平らな巨石をその上にのせたのではないかと考えられるのである。これらの加工は、壁面が平滑に仕上げられた後になされているため、横穴掘削に伴うものであるか否かは疑問も残る。しかし、他の崩落面に先行することは確かであり、この施設が崩壊した時に、周辺も同時に崩落したものと考えられる。

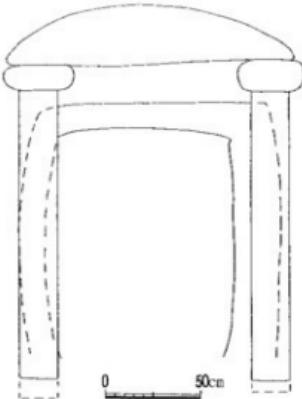


図-33 2-4号墳羨門推定復元図

後述するように、羨門上部に巨石をのせた横穴は多数みられること、また、埋土も最下層に位置づけられることから横穴掘削に伴う施設である可能性が高いと考えている。

調査前から、玄室床面はほぼ露出しており、墓道では40cm前後の埋没土があった。墓道床面近くから、須恵器壺・甕・土師器壺の小片が出土しており、須恵器台付壺台部の破片は、突出する凸線を伴うものであり、6世紀後半代かと考えられる。第2層褐色砂質土からは、須恵質の甕片が出土している。

須恵質の甕は、付け庇を伴うものである。前面はナデを施したあとに庇を貼り付けてヨコナデしており、庇下部の端面は平行叩きで仕上げている。体部外面は5本/cmのタテハケ、内面は同心円の叩き目を部分的にナデ消している。また、体部の一部には、円孔が穿たれている。全形を知り得るだけの破片がみられないが、すべて同一個体と考えられる。

2-4号墳では、羨門部に特別な施設を伴っていた可能性が考えられ、注目すべき点である。また、造り付け石棺が後に付加されていると考えられるものもあり、この点も注意される。ごく少量の遺物と横穴の構造から、6世紀後葉前後の横穴ではないかと推定される。



図-34 2-4号墳出土遺物

第2支群5号墳（図-29・35・36、図版17・25～27）

2-4号墳の約4m東側に並んで開口している横穴である。玄室右側壁に造り付け石棺がみられ、玄室主軸はN-38°-E、羨道主軸はN-33.5°-E、墓道はN-26°-Eへとのびている。墓道からみると、羨道・玄室は少しずつ西へ振っている。これは、横穴をできるだけ斜面に垂直に造ろうとした結果であると考えられる。

玄室は造り付け石棺を含めると、やや横長の方形平面となり、玄室長303cm、幅353cm、高さ180cmを測る。側壁と天井の境の切り込み段は、右前壁にのみ認められ、この段は玄門近くで垂直に立ち上がって途切れている。垂直に立ち上がっている下の部分も、一段高く削り出されている。おそらく玄門上部の構造を意識したものであろう。他の壁面では、側壁と天井の境は比較的明瞭であるものの、切り込み段等はみられない。天井は、やや扁平なドーム状を呈している。

造り付け石棺は、右側壁に造られており、東辺の隅は成形が困難であったためか、弧を描いている。また、南北の小口外面は、一部だけ掘り込んで石棺の外形を整えている。西辺が完全に破壊されており、南北の小口、床面の一部も破壊されているため、正確な規模を知り得ないが、内法上面の長さは205cm、底面の長さは192cm、幅は約60cm、深さは46cmを測る。外法の長さは270cm、幅120cm、高さ80cmを測る。造り付け石棺としては、規模の大きいものである。

羨道は、造り付け石棺を除いた玄室の中央に取り付き、玄室側が広く、墓道側が狭い台形平面を呈している。長さは180cm、玄門部での幅124cm、羨門部での幅92cm、天井は現在140cm前後の高さを測るが、後世に削られていることから、本来の高さは120cm前後であったと考えられる。

墓道は、羨門部での幅が135cm、端部へ向かうにつれて、少しずつ狭くなる。長さは540cm以上を測り、調査区外へのびている。2-5号墳でも2-4号墳と同様に、現在墓道のように見えている部分は後世に開かれたものであり、本来の墓道はこれよりも西、すなわち2-4号墳の側へ振っていたことがわかった。

床面は、非常に緩やかな勾配を有しており、むしろ平坦と表現すべきものである。

玄室は、調査前から床面がほぼ露出していたが、墓道は40cm前後の土砂に覆われていた。遺物は羨道から墓道にかけて出土しており、須恵器杯身・高杯・壺蓋・脚付長頸壺・肆、土師器壺、円筒埴輪などが出土しているが、小片が多く、唯一須恵器の蓋(1)が完形品である。

須恵器の蓋(1)は、壺の蓋と考えられ、長く下方へのびたかえりは、口縁端より下方に位置する形態のものである。つまみは、上部が浅くくぼんだ扁平なものであり、天井部は丸味を有する。外面は口縁近くまで回転ヘラケズリ調整。羨門に近い位置の墓道床面から出土。

須恵器杯身(2)は、立ち上がりがやや内傾し、受部は薄く、小さい。羨門付近、床面よりやや上層から出土。

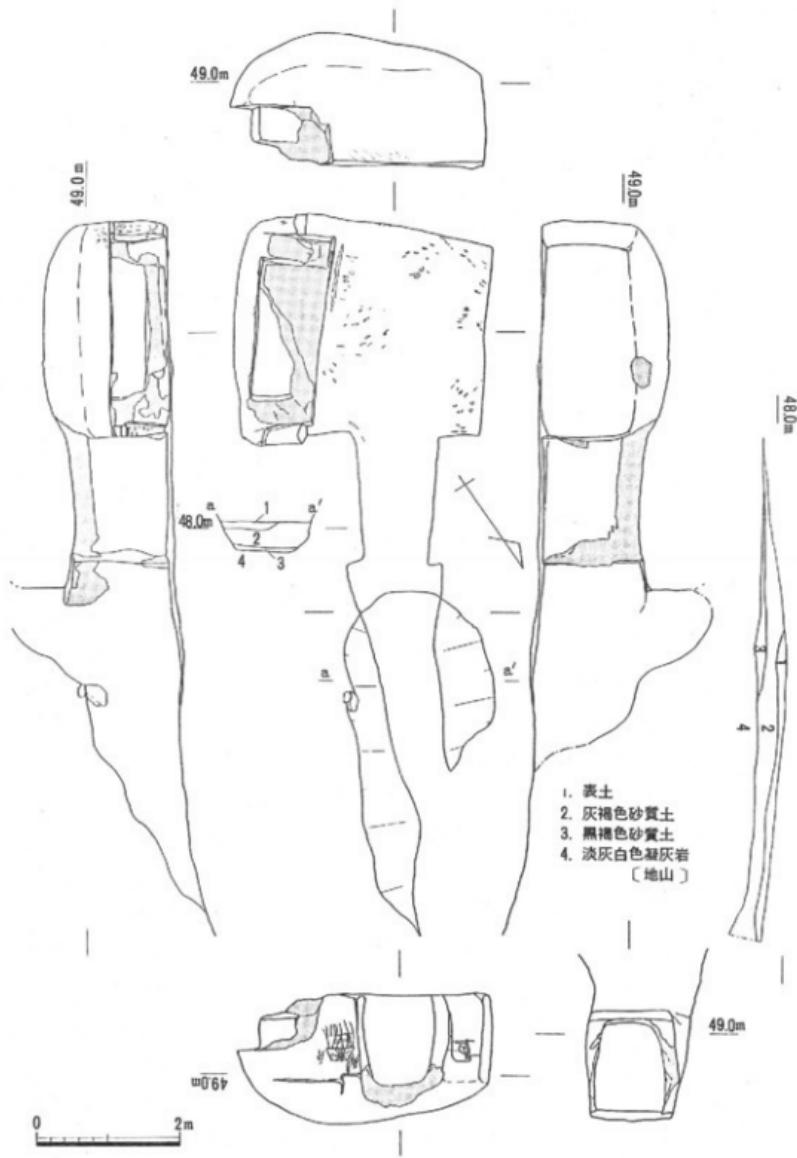


图-35 2-5号墳

脚付長頸壺の脚部(3)は、外方へ広がる脚がやや内側へ屈曲して裾部となる。脚端部は平坦面をなし、屈曲部外面には1条の凹線がある。透し窓は長方形で、三方、二段に穿たれていると考えられるが、その形を確認できる破片が見当たらない。この脚に伴うと考えられる長頸壺の口縁部片が出土しているので、器種を脚付長頸壺としておく。墓道埋土から出土している。

これらの遺物から、2-5号墳の年代は6世紀後葉頃と考えられる。内部が荒らされており、出土遺物は少量ではあるが、7世紀代に下る遺物が全くみられない点は、2-5号墳には7世紀代の追葬がなされていなかった可能性を示している。

玄室の奥壁・左側壁・前壁には、建物を中心とした線刻画がみられる。寄棟の握立柱建物や高床倉庫、また棲闇状の建物もみられる。建物内に人物の表現がみられる線刻もあり、建物を囲む柵列のような線刻もみられる。集落を描いた線刻画かと考えられるが、風化の程度が弱く、後世のものであるかもしれない。

2-5号墳は、2-3・4号墳と共に、後世に何らかの目的で使用されていたようである。その一つが墓道のように見える通路の設置であり、墓道天井部の拡張、造り付け石棺の破壊と内部のスペースを広くするための破壊がなされている。2-3号墳では、造り付け石棺が完全に破壊されていた。また、2-5号墳の墓門部床面と天井には、ボルトが打ち込まれており、門扉が取り付けられていたのではないかと考えられる。

2-2~5号墳の墓道を推定延長すると、4基の墓道がほぼ1点に集中する。この事実から、4基の横穴が強い関係を有しており、小支群としてグルーピングできると考えられる。それならば、どのような順序で4基の横穴が造られたのであろうか。

まず、並列していることから相前後して造られたと考えられる2-4号墳と5号墳に注目したい。両者共に造り付け石棺を有し、規模や形態もよく似ているが、2-4号墳が墓道・墓道・玄室と無理なく統一しているのに対して、2-5号墳では、墓道・墓道・玄室の軸がかなり振っている。これは、2-4号墳を避けて横穴を掘削したためと考えられ、2-4号墳が先行するものと考えられる。造り付け石棺も、2-5号墳が当初から計画されているのに対して、2-4号墳では後に付け加えられており、2-4号墳が先行する可能性を示している。このように、2-4号墳→2-5号墳という順であるとすると、その間には、玄室規模の縮小、壁面の切り込み段や玄門構造の簡略化、墓門構造の簡略化などをうかがうことができる。

次に、2-2号墳と3号墳を比較してみると、両者は奥壁に造り付け石棺を有する点で共通し

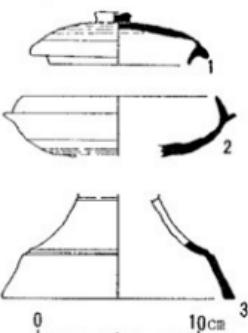


図-36 2-5号墳出土遺物

ており、玄門部に柱状の加工を施す点でも共通している。しかし、平面形態や断面は大きく異なっている。整美な平面形態を呈する2-3号墳のほうが先行する可能性は高いと考えられる。

それでは2-3号墳と2-4・5号墳の前後関係はどうであろうか。2-3号墳の玄門や渓門の精巧な加工から、2-3号墳を最も古く位置づける考え方もあるが、2-5号墳の次に2-3号墳を位置づけるほうが、渓道の形態から考えても自然である。2-4号墳、2-5号墳が造られ、その中間上段に2-3号墳、そして斜上方に2-2号墳の順で造られたと考えたい。玄室壁面の切り込み段が2-3号墳で最も丁寧になされているが、段の幅は2-4・5号墳のほうが広く、これを編年の基準とはなし難いであろう。それよりも、玄室規模の縮小化、天井の低平・扁平化、玄門構造の省略、造り付け石棺の位置の移動などから2-4号墳→2-5号墳→2-3号墳→2-2号墳と考えるべきであろう。このように変化していく中で、玄門・渓門の柱状加工が加えられるようになったのであろう。

ごく少量ではあるが、出土遺物もこの順を裏付けるものである。遺物を参考にすると、6世紀中葉～後葉に2-4号墳が造られ、6世紀後葉に2-5号墳、6世紀末葉～7世紀初頭に2-3号墳、2-2号墳は7世紀初頭以後に造られたと考えられる。

第2支群6号墳（図-29・37・38、図版28～31）

東斜面に開口する横穴であり、現状では幅の広く、長い墓道が取り付くように見えるが、これも後世のものであることが調査で確認されている。玄室は、S-79°-Eに開口する。

玄室は方形平面を呈し、規模の大きいものである。玄室長380cm、幅396cm、高さ180cm。床面の左側壁寄りに、70cmの間隔をおいて平行する長さ220cm、幅20cmの浅い2条の溝がみられる。棺床として掘られたものかもしれない。前壁・左側壁・奥壁の左半分には、側壁と天井の境に切り込み段がみられる。床面から110cm前後の高さの位置にめぐり、幅は15cm前後である。右側壁と奥壁右半分には切り込み段がみられないが、これは、2-6号墳が未完成であることによるものと思われる。玄室内は、全面にわたって掘削時の工具痕が残されている。その中でも、奥壁から右側壁にかけては顕著に残っており、上から下へ振りおろされた平刃の工具痕が明瞭に残っている。奥壁・右側壁にも切り込み段を造る予定であったものが、何らかの理由によって、未完成で放棄されたのであろう。また、床面も奥壁と玄門部で28cm、右側壁と中央部で14cmの比高差があり、奥・右側が高くなっている。床面も、もう少し振り下げる予定であったと考えられる。

渓道は、玄室中央よりやや左寄りに取り付く。長さ156cm、幅は120cmであるが、玄門から120cmの位置で、約5cmの段がついており、同じ位置で幅が134cmに広がっている。高さは136cmを測り、天井は平天井である。壁面には、わずかに工具痕が残されているが、平滑に仕上げられている。

1. 黄土
2. 褐色土
3. 淡灰褐色砂质土
4. 灰褐色砂质土
5. 黑褐色粘质土
6. 淡灰白色凝灰岩
〔地山〕

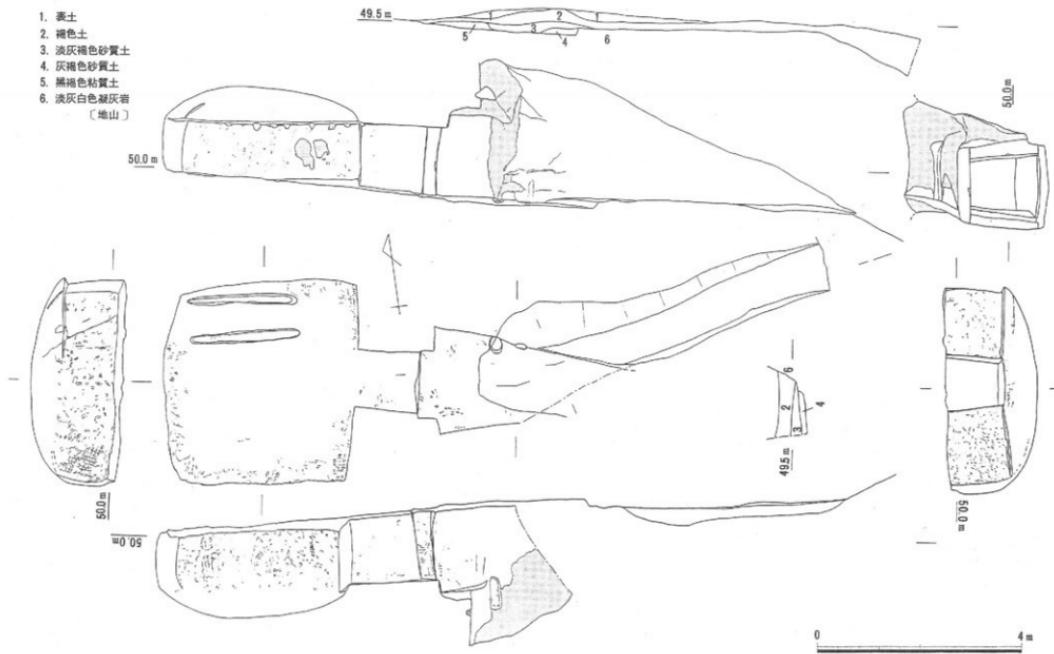


图-37 2—6号填

羨門上部には、楕状に突出する長さ170cm、幅25cm、高さ10cmの凸部がみられる。その位置から60cmの間は、平天井の天井を伴い、天井前面は、裾広がりの平坦面をなしている。この天井前面には、床から高さ20cmの位置に、2-4号墳でみられたと同様な溝状の加工がみられる。やはり、巨石をのせていたのではないかと思われる。この巨石を支える石を置いていたと思われる長方形の凹部が墓道右側壁にみられ、支柱を立てていたかと思われるピットが、墓道床面の左側壁に接する位置に存在している。2-4号墳で復元したと同様な羨門が想定される。

墓道は、羨門部での幅が212cmを測る広いものである。前述のように、現在墓道のように見える通路は、凝灰岩層を削って後世に造られたものである。本来の墓道は、これよりも約13cm低い面を床面とし、調査範囲外へのびている。長さは270cm以上である。玄室から墓道にかけては、調査前から床面がほぼ露出していた。第4層灰褐色砂質土は、本来の墓道の埋没土であり、第1~3層は、後後に新しく通路を切り開いた後の埋没土である。遺物は、須恵器杯蓋・杯身・高杯・壺と円筒埴輪の小片が出土している。

須恵器杯蓋(1)は、墓道床面から出土している。内面のかえりは短く、口縁端部よりかなり上に位置する。つまみは欠失している。

須恵器高杯(2)は、脚部下半の破片であり、裾広がりから端部で上方へ屈曲して面をなす。脚部外面には2条の凹線がめぐり、その間に長方形の透し窓が、おそらく2方に穿たれている。長脚二段透し高杯である。

以上の遺物から考えると、6世紀末葉頃に造られ、7世紀中葉頃まで追葬されていた可能性が高い。ごく僅かな遺物からの判断であり、横穴の構造から考えると遅くとも6世紀後葉、6世紀中葉まで遡る可能性も考えられるものである。

第2支群10号墳（図-39・40、図版32~35）

南に開口する谷の東側、西向き斜面に第2支群10~14・17号墳が開口する。開口部は、いずれも谷下方、南西方向に開口する。2-10号墳は、この6基の中で、最も北寄りの最高所に位置する。開口方向は、S-25°-Wである。

玄室は、奥で広がる縱長の台形平面を呈する。玄室の長さは282cm、幅は奥壁部で260cm、玄門部で191cm、中央で241cmを測る。高さは147cmと低く、天井はドーム状をなす。側壁と天井の境は、浅い溝状の縁によって明瞭に区別される。天井の一部が円錐状に大きく崩れており、側壁も部分的に崩れている。壁面には、部分的に工具痕が残されている。床面は、平滑に仕上げられている。

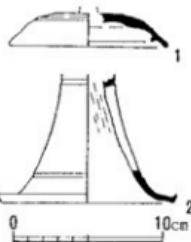


図-38 2-6号墳
出土遺物

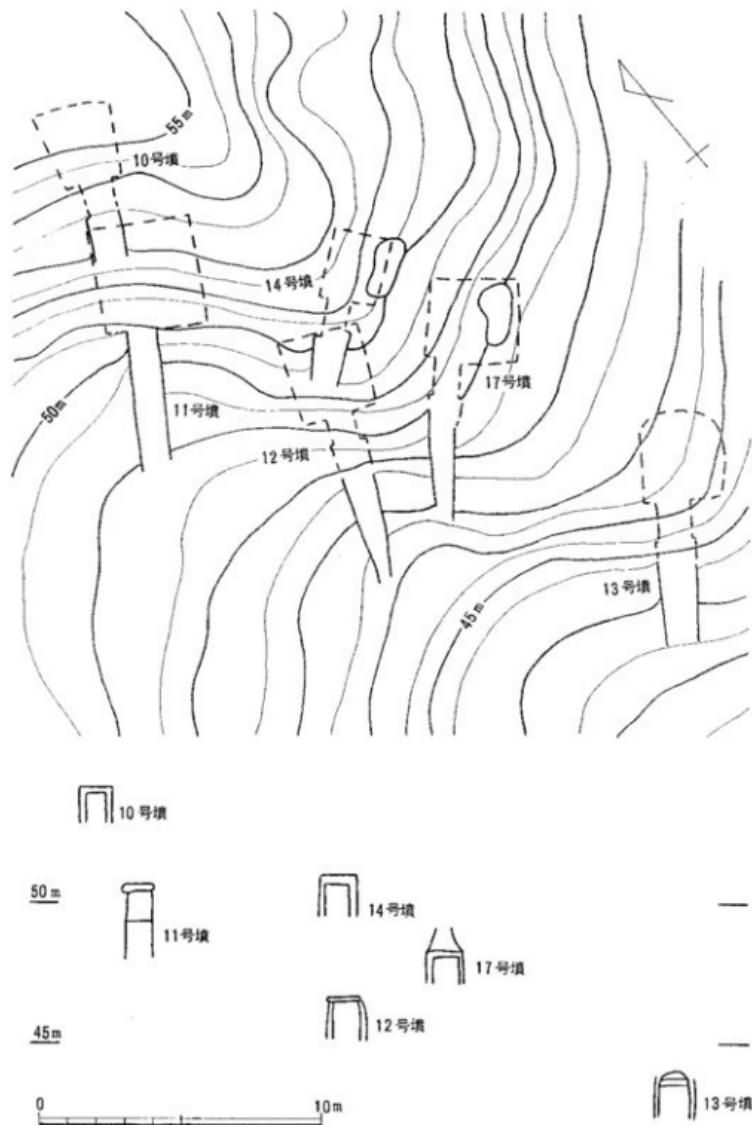


图-39 第2支群10~17号填

玄門上部には、幅13cmで舌状に突出した棚状の施設がみられ、角は面取りがなされている。

狹道は、玄室へ少し入り込むような形で取り付き、玄室平面と同様に、奥で広い台形状平面を呈する。長さ130cm、幅は玄門部で125cm、狹門部で100cm、高さ118cmを測る。床面は、玄門から20cmの位置で高さ3cmの段がついている。

羨門は、周囲に幅20cm前後の平坦面をめぐらせ、羨門から墓道側へ50~60cmの位置までは、140cm前後の平坦な天井があったと推定される。おそらく、天井部前面は平坦に加工されていたのであろう。

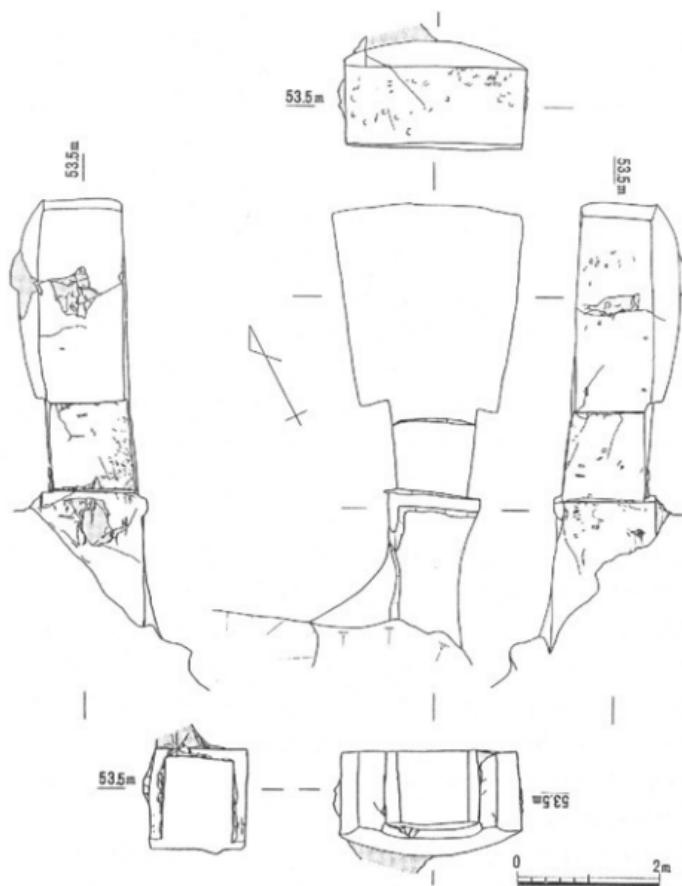


図-40 2-10号墳

墓道は、長さ220cmまで確認できるが、その前面は2-11号墳澳門部へと続く急斜面となっており、確認できない。澳門部の床面には、L字に折れる溝状遺構がみられる。幅30cm、深さ12cmを測り、木製の板を建てた閉塞施設に伴う遺構の可能性がある。なお、墓道前面の北側に、垂直に近い傾斜で落ち込む部分があり、横穴の澳門上部にあたる可能性がある。横穴であるならば、2-11号墳に並列し、2-11号墳よりもやや高い位置に存在するものと考えられる。

玄室・墓道の壁面には、胴や手足を1本の線で表現した人物が描かれている。手足の指まで表現するものや首のないもの、槍や大刀、轔などの線刻もみられる。

調査前から、玄室・墓道の床面は露出しており、墓道には若干の土砂が堆積していた。墓道の埋土から、須恵器の無蓋高杯口縁部・台付壺台部・壺の口縁と体部・土師器の壺などが出土地しているが、いずれも小片である。7世紀代に下るものと思われる。また、形象埴輪の台部かと考えられる埴輪片（図16-10）が出土地している。復元底径41.6cmを測る大きなものであるが、小片であるため、梢円形になる可能性も考えられる。また、底面を接地させるとかなり外傾して立ち上がるが、もう少し直立するかもしれない。外面はヨコハケ、外面底部から内面はナヂを施す。凸帯は低い台形断面を呈し、凸帯直上に、透孔がみられる。円形として復元すると、直径16cmになる大きな透孔である。この埴輪は、墓道前面の落ち込みから出土している。

第2支群11号墳（図-39・41~47、図版32・36~42）

2-10号墳の下方に位置し、床面の比高差は約5mである。墓道は玄室の右寄りに取り付き、平面においては墓道と墓道の区別がみられない珍しい形態をとる。開口方向はS-31°-W。

玄室は、中央部分での長さ396cm、幅368cmを測る方形平面を呈する。しかし、左側壁では400cm、右側壁では388cm、また奥壁では383cm、前壁では344cmの長さを測り、やや奥に広がったいびつな平面である。前壁・側壁は、垂直に立ち上がり、天井との境は明瞭である。しかし、奥壁は緩やかな弧を描いて立ち上がり、そのままドーム状の天井につながるため、その境が不明瞭となっている。奥壁を中心に、側壁や床面に多数の工具痕が残されていることから、奥壁の最終的な仕上げがなされていないものと考えられる。天井までの高さは180cmを測る。

前壁にみられる壁面と天井の境を示す線は、玄門上部を通ってつながっており、この界線と墓道天井の間がわずかに突出していることから、楔状の加工を意識している可能性がある。

前述のように、墓道と墓道の区別は、平面的には認められないので、墓道天井部の存在する間を墓道としておく。墓道は、長さ108cm、玄門部での幅105cm、澳門部での幅92cmを測る。天井は平坦な平天井であるが、床面は墓道に向かってかなり下がっており、天井までの高さは、玄門部で133cm、澳門部で146cmを測る。

天井部前面、すなわち澳門上部は、幅約80cm、高さ約100cmの平坦面が造り出されている。その上部に、長さ100cm、厚さ28cmの扁平な花崗岩が架構されている。幅は70cm前後であろう。つまり、天井石状に架構されて澳門の装飾の一部となっている。

1. 黑土
2. 淡棕色砂質土
3. 淡黑褐色砂質土
4. 淡褐色土
5. 暗灰色砂質土
6. 黑褐色砂質土
7. 淡灰白色凝灰岩
〔地山〕

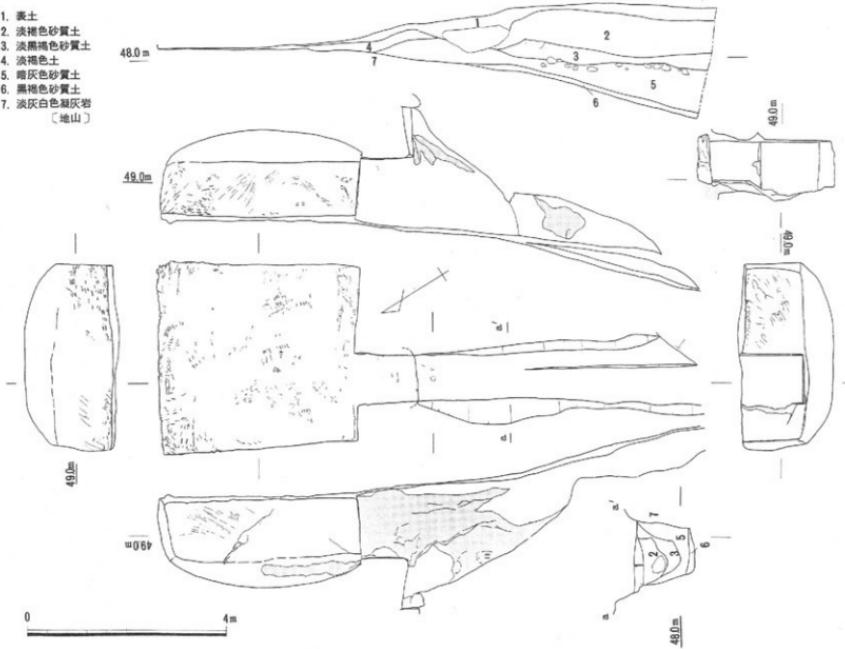


图-41 2-11号墳

また、墓道床面より約25cm上層からも、花崗岩の巨石が墓道の軸に沿った状態で出土している。長さ140cm、幅60cm、厚さ45cmを測り、出土位置から推定すると先述の花崗岩の前面に架構されていた可能性が考えられる。あるいは、2-10号墳に伴うものであるかもしれないが、2-11号墳の羨門上部に、2石の花崗岩が天井石状に架構されていた可能性が高いと思われる。

墓道は、長さ600cm以上を測り、調査区外へのびている。幅は、羨門部で92cm、端部で約140cmと端部のほうが広くなっている。しかし、これは、後に墓道が東側へ拡張されているためであり、本来の墓道は端部で約80cmの幅を測る。拡張された墓道は、本来の墓道床面から最大30cm高くなっている。遺物の出土状況から考えると、追葬時に拡張され、第6層黒褐色砂質土が硬く締まっていることから、黒褐色砂質土上面が追葬時の墓道床面であったと考えられる。

調査前には、玄室内で数cm、羨道で30~70cm、墓道では最大で220cm埋没していた。遺物は、多量に出土しており、上層から下層まで遺物を含んでいる。その中で、第5層暗灰色砂質土上面と第6層黒褐色砂質土および凝灰岩の地山上面の2面に良好な遺物が出土している。そこで前者を墓道上層、後者を墓道床面として遺物の出土状況を紹介しておく。

墓道上層からは、こぶし大から人頭大の自然石が、100個前後出土している。これらの自然石と共に須恵器の杯蓋(1・10・12)、杯身(17・20~23)、無蓋高杯(28)、台付壺(35・37・38)、提瓶(49)、平瓶(50)などが出土している。遺物は6世紀中葉から7世紀前葉のものである。これらの中で、杯蓋(10)と台付壺(35・37・38)は、更に上層の第3層淡黒褐色砂質土から出土した破片と接合でき、台付壺(38)と平瓶(50)は、羨道床面から出土した破片と接合できた。この事実から、本来は玄室、もしくは羨道にあった遺物がかき出されたものと考えられる。また、多量に出土した自然石も、その大きさから考えて羨道部にあった閉塞石をかき出したものと考えられる。

墓道床面から出土した遺物は、須恵器の無蓋高杯(24・29)、台付壺(34・39)、聴(42)、提瓶(48)、土師器の甕(57)、細頸壺(58)、鉄地金銅張りの辻金具(60)などである。床面と表現したが、墓道が拡張された後の第6層黒褐色砂質土上面から出土した遺物であり、確実に黒褐色砂質土内から出土した遺物は認められなかった。これらの中で、台付長頸壺(39)の破片が第3層淡黒褐色砂質土から出土しており、無蓋高杯(24)は杯部が図示した位置から、脚部が羨道床面から出土している。これらの遺物も、横穴内からかき出されたものと考えられる。6世紀末葉を中心とする年代が考えられ、墓道上層出土遺物より古い傾向がみられる。

これら以外にも、多数の須恵器、土師器、馬具、鉄鎌、鉄釘、鏡が出土している。以下、2-11号墳出土遺物について紹介しておく。

須恵器杯蓋(1~16)は、天井と口縁の境の稜が明瞭で13縁内面に段を有するもの(1・2)、稜があまいもの(3・4)、稜がわずかに痕跡を留めているもの(5・6)、稜が消失した小形のもの(7~10)、天井と口縁の境で屈曲するもの(11)、内面にかえりを伴い宝珠つまみを有

するもの(12~15)、かえりがみられず扁平なつまみを有するもの(16)がみられる。

須恵器杯身(17~23)は、立ち上がりが高い大形のもの(17・18)、立ち上がりの短いもの(19・20)、立ち上がりの非常に短いもの(21~23)がみられる。

高杯(24~32)は、無蓋のものに限られる。いずれも杯部外面に門線、もしくは弱い段がみられ、波状文を有するもの(24~26)、刺突文を有するもの(27)がある。脚部は長脚で二段三方の透し窓を有するもの(24・28・29)、二方の透し窓を有するもの(30)、透し窓のみられ

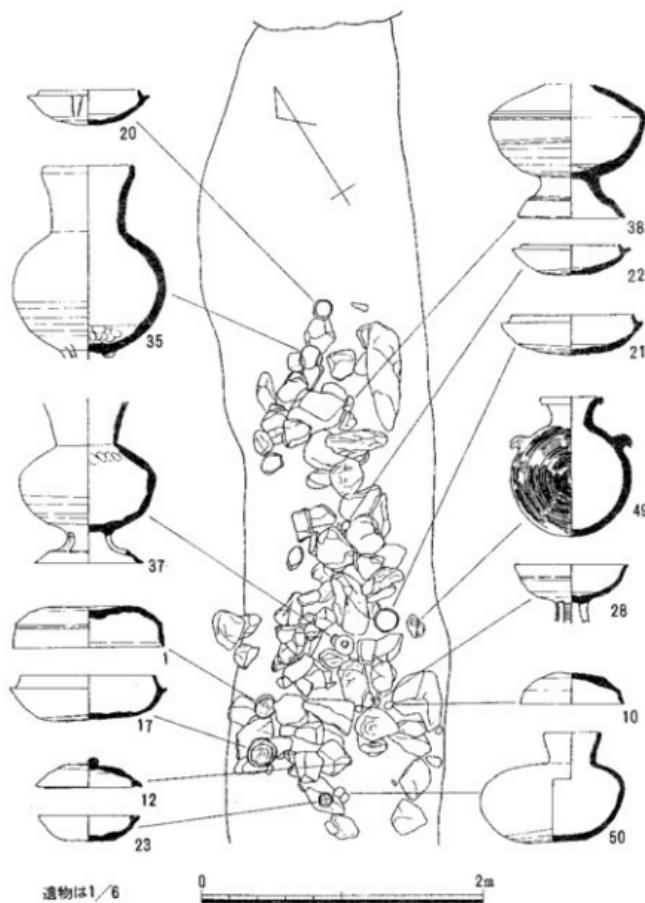


図-42 2-11号墳墓道上層遺物出土状況

ないもの（25）がある。

32は、短い脚部に二段四方の長方形透しを穿つものである。28の杯部内底面には、同心円の叩き痕がみられる。

須恵器の壺蓋（33）は、扁平なつまみを有し、下方へ長くのびるかえりを伴う。

須恵器の台付壺（34～41）は、さまざまな形態がみられる。34は、扁平な体部に広口の口縁を伴うものであり、高い脚部には透し窓はみられない。35は、球形の体部に端部でやや内弯気味に立ち上がる口縁を伴い、台部には長方形の三方透し窓がみられる。36は、35に比してやや肩の張った体部、口縁は短い。口縁外面にタテハケ、体部下半にカキメを施す。37は、扁平な体部に外方へ立ち上がる口縁を伴い、低く、外方へ広がる台部を有する。台部には、二方向の長方形透し窓がみられる。38は、肩部の張った扁平な体部を呈し、肩部と体部中央に計3条の凹線をめ

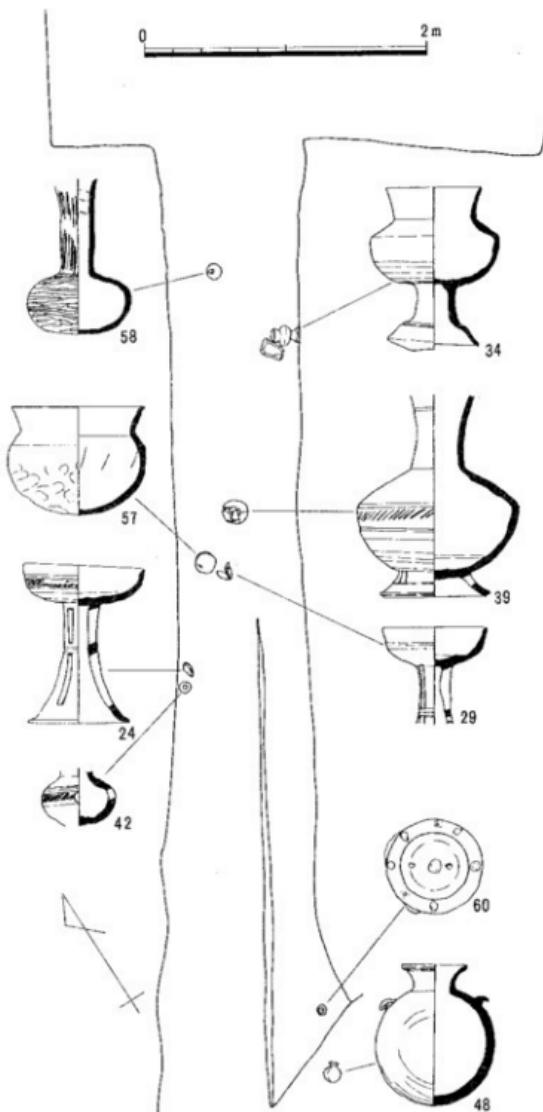


図-43 2-11号墳墓道床面遺物出土状況

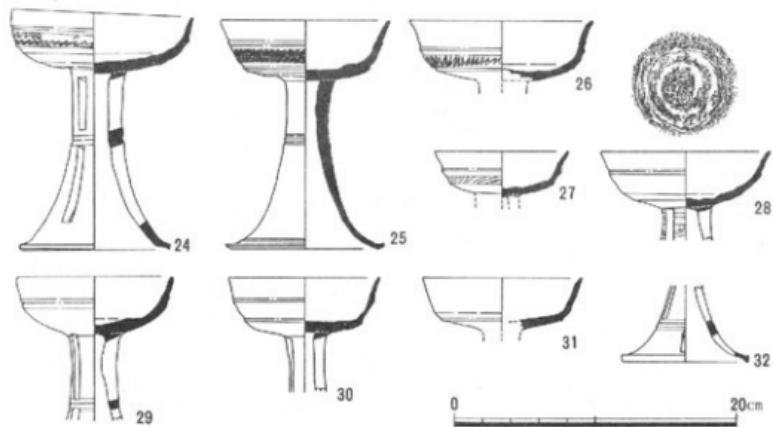
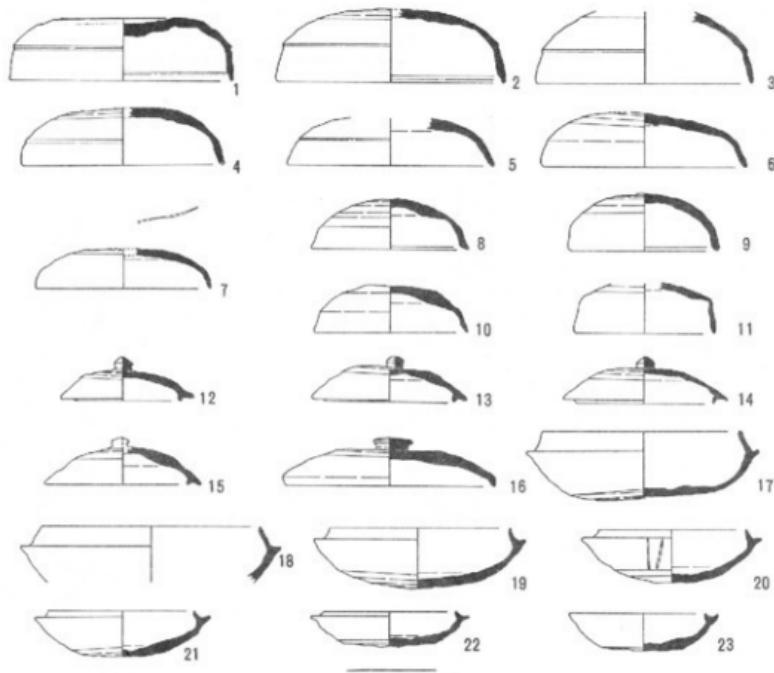


図-44 2-11号墳出土遺物①

ぐらせる。台部は低く、凹線を伴って屈曲している。39は、38と同様な体部に細長くラッパ状に広がる頸部を有する。頸部に1条の凹線、体部に2条の凹線がめぐり、凹線間には櫛齒状の刺突文が斜方向に施される。台部は斜下方に直線的にのび、屈曲はみられない。三方に、小さい台形状の透し窓が穿たれている。40は、台基部が太く、あまり外方へ広がらない純重な印象を与える台部である。屈曲部に2条の凹線がめぐり、端部内面にも凹線状のくぼみがみられる。透し窓は、三方、長方形である。41は、通常の台部であり、屈曲部に1条の凹線がめぐる。透し窓は、長方形で二方に穿たれる。

42~44は、須恵器の趣である。42は、台付趣であるが、台部と口縁部を欠失している。体部に2条の凹線がめぐり、その間を刺突文でうめる。台部には透し窓の痕跡があり、透し窓を有する台付趣という珍しい器種である。43は、やや肩の張った体部から頭部が直立する。文様はみられず、雑な整形である。44は、小さい体部から外上方へ頭部が立ち上がる。肩部に凹線、その直下に刺突文を施し、頭部にも凹線と刺突文がみられる。

須恵器の器台（45~47）は、全形を知り得るものがない。45は、脚部を欠失している。口縁端部は、外面に凸線を伴って肥厚する。台部外面には低い凸線がめぐり、その上方に非常に丁寧な波状文を施す。台部外面下半は、平行叩きの後にカキメ調整、内面は同心円の叩き目をナデ消している。46は、外方へ屈曲し、凸線状をなす口縁部の破片である。やはり、密な波状文を施す。47は、脚部。やや内側気味になり、端部で外方へひきのはしている。残存部上端に低い凸線と透し窓の痕跡が認められる。外面カキメ、内面回転ナデ調整。

48・49は、須恵器の提瓶。どちらも外反する口縁部を有するが、49の端部は外下方へ垂下する。把手はカギ状となり、48の把手は非常に小さい。

50・51は、須恵器の平瓶。50は、丸味をおびた体部にはば直立する口縁が付される。51は、肩の張った扁平な体部に、斜上方にのびる口縁が付される。底部は平底状となる。

52は、須恵器の横瓶。口縁は外反し、端部で凹面をなす。外面はカキメ調整。

53~59は、土師器。

土師器の高杯（53・54）は、杯部が大きく広がるもの（53）と、椀形を呈するもの（54）がある。53は、杯部内面に放射状の暗文が施されている。裾広がりの脚部は、ユビオサエ、ユビナデによって調整される。54の口縁部は内窪し、内外面はナデ調整。脚部を欠損する。

55・56は、小形の鉢。55は、尖り気味の底部となり、頸部のくびれは小さい。口縁端部を欠損する。口縁部ヨコナデ、内面ナデ調整。外面もナデ調整と思えるが、磨滅のため詳細は不明。56は、半球形の体部から斜上方へ口縁部が立ち上がる。口縁部ヨコナデ、体部は内外面ともに板ナデ後にナデ、外面底部は雑なナデで仕上げる。

57は、壺。やや扁平な体部を呈し、口縁は斜上方へ立ち上がり、端部で若干外反する。口縁部ヨコナデ、体部外面指頭調整、内面は板ナデ後のナデ調整。

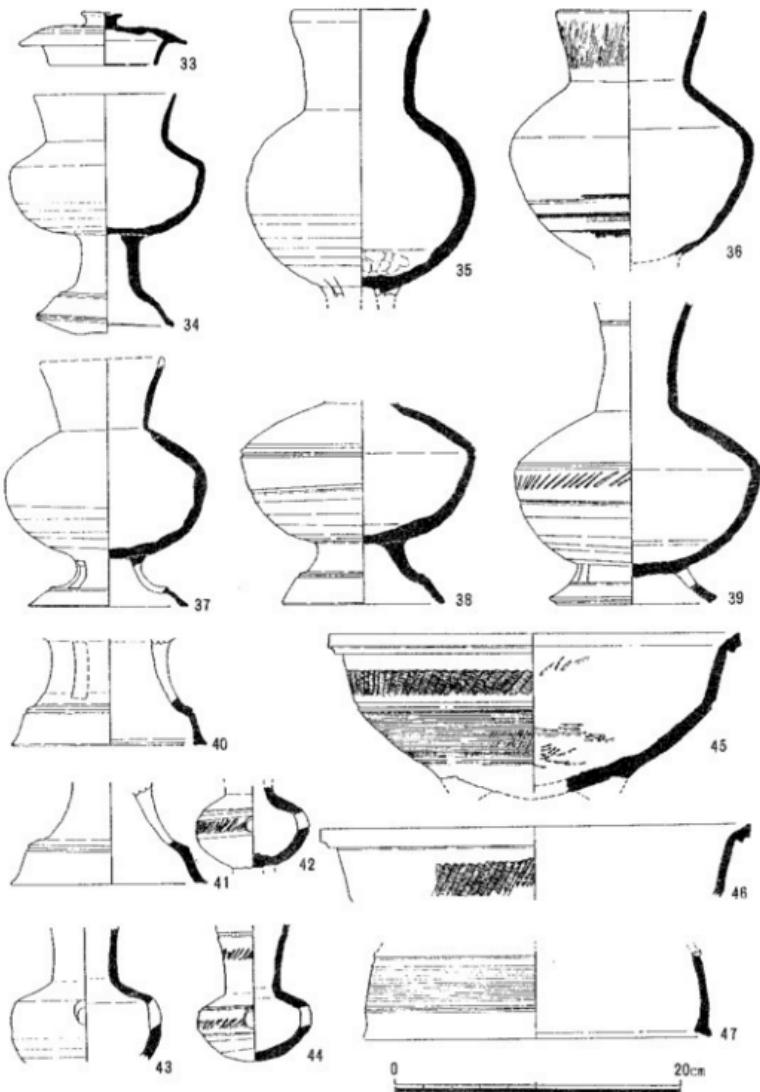


図-45 2-11号墳出土遺物②

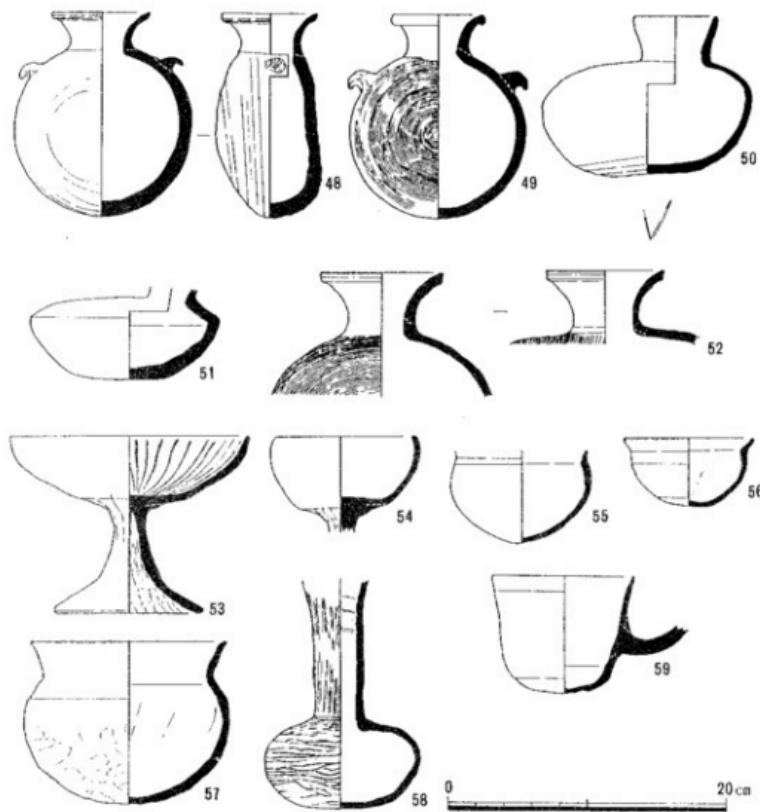


図-46 2-11号墳出土遺物③

58は、細頸壺。体部は扁平な球形を呈し、体部中央で最大径を測る。頸部は異様に細長く、口縁でやや外開きとなるようであるが、口縁端部を欠損しており、全形は不明。外面体部上半はナデ、下半はヘラケズリ後に、全面に横方向のヘラミガキを施す。外面頸部は、ナデの後にタテ方向のヘラミガキを施す。頸部が細いため、内面の調整は不明。頸部上半はナデ調整を施すが、粘土のツギメが残る。

59は、把手付の鉢。底部は丸底状を呈し、口縁は端部でやや内湾する。把手は挿入によって装着する。把手は細く、上方へ弯曲する。口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、底部は雑なナデ、体部内面はナデ、内底面はユビオサエ後にナデ調整。把手はナデ上げるように調整されている。

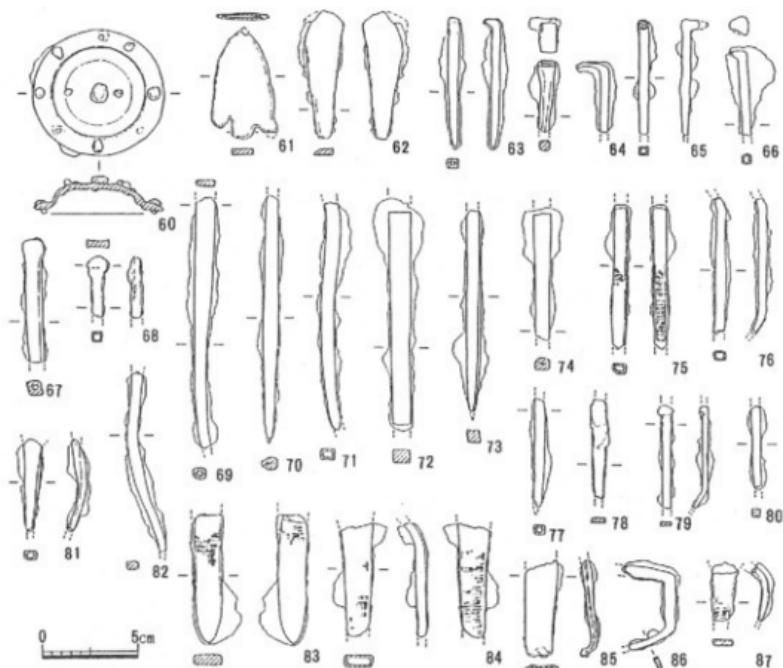


図-47 2-11号墳出土遺物④

60は、鉄地金銅張りの辻金具と考えられる。直径6.8cm、高さ2.0cmを測り、扁平な半球形の本体の周囲は外方へ屈曲して周縁状となる。頂部には直径1.0cm、厚さ0.4cmのボタン状の装飾を付し、その両側に直径0.4cm、高さ0.3cmの小突起を伴う。周縁部には、8箇所に鋸の痕跡がみられる。鋸の直径は0.25cm、鋸頭は歪んだ半球状を呈し、直径0.5~0.7cm、高さ0.2cm前後であるが、4箇所の鋸頭が剥落している。鋸の長さは、現存部で0.5cmである。8個の鋸は、2個1対となり、四方へのびる革帶を留めていたと考えられる。1対をなす鋸の間隔は、それぞれ1.5cm、2.2cm、2.2cm、2.4cmとなり、ややバラツキがみられる。全面に赤錆が吹き出しており、ごく僅かに金色の部分が残されている。

61・62は、鉄鎌。61は、有茎の三角形式鎌。現存長6.0cm、刃幅3.5cm。逆刺を有する大形の鉄鎌である。刃部先端・逆刺・茎を欠損する。62は、有茎の斧矢式鎌。刃部と茎の区別が不明瞭である。現存長7.0cm、刃幅2.1cm。刃部先端は、やや尖り気味となるが、半分を欠損している。茎部も欠損している。どちらも全面に赤錆が吹き出している。鉄鎌の出土は、この2本のみである。

63～82は、鉄釘。頭部を一方へ折り曲げたもの（63～66）と、扁平に外方へ広がるもの（67・68）がある。64は、前者の中でも折り曲げの大きいもので、弧を描くように折り曲げられている。大きさは、長さ7cm前後のものから、15cm以上のものまである。63は、小形の完形品であり、断面は一辺0.5cmの方形を呈し、長さは7.0cmを測る。69は、現存長13.4cmを測る大形品である。72は、0.7cm×0.9cmの長方形断面を呈する最も太い釘である。鉄釘は、残存状態が悪く、1点を除いてすべて破損している。また、木目を残しているものも1点（75）のみである。75には、横方向の木目がみられる。

83～87は、鉄製の鍔である。84・85は、体部から爪部にかけての部分であり、83・86・87は爪部の破片である。残存状態は非常に悪い。木目はすべて横方向。断面は扁平な長方形を呈する。

以上の遺物は、6世紀中葉から7世紀末葉に位置づけられ、7世紀後半代の遺物は少ないが、ほぼ全期間を通じての遺物が認められる。このことから、2-11号墳は6世紀中葉に造られ、4～5回にわたる追葬がなされていると考えられる。しかし、下層に位置づけた第5層略灰色砂質土から、8・9の須恵器杯蓋が出土することから、暗灰色砂質土上の堆積が7世紀以後であることがわかる。この暗灰色砂質土上面に、遺物や閉塞石が大量にかき出された時期も7世紀以後であり、出土遺物から考えると7世紀中葉～末葉と考えられる。その後、間もなく漢門部の天井石が1石転落しているようである。また、かなりの量の遺物が出土しているにもかかわらず、鉄地金銅張付金具の出土から、他の馬具は盗掘されているものと考えられる。

2-11号墳は、2-10号墳と共に小支群をなしていると考えられる。位置関係や横穴の構造・規模等から考えると、2-11号墳が2-10号墳に先行し、その時期は出土遺物から6世紀中葉、高井田横穴群内では最も古い横穴の1つと考えられる。

第2支群12号墳（図-39・48～52、図版32・43～46）

2-11号墳の約8m南、3m下方に2-12号墳が位置する。整正な平面形を呈し、S-26°-Wに開口する。

玄室中央での長さは310cm、幅は284cmを測るが、左側壁長294cm、右側壁長308cm、奥壁長283cm、前壁長264cmとなる。側壁と天井の境には、幅10cm強の切り込み段が、奥壁と左右壁の3壁にみられる。天井はドーム状を呈し、高さ188cmを測る。奥壁は破壊されているが、他は比較的良好に残っている。壁面には、仕上げ時の工具痕が浅く残されている。玄門の施設は、全くみられない。

漢道は、玄室のはば中央に取り付く。漢道長95cm、幅96cm、高さ148cm、平天井である。玄室から漢道にかけて、自然石が20数点出土している。大半が扁平な安山岩であり、おそらく、棺台石として使用されていた石材であろう。後世に、玄室内から漢道部に搔き出されたものと考えられる。

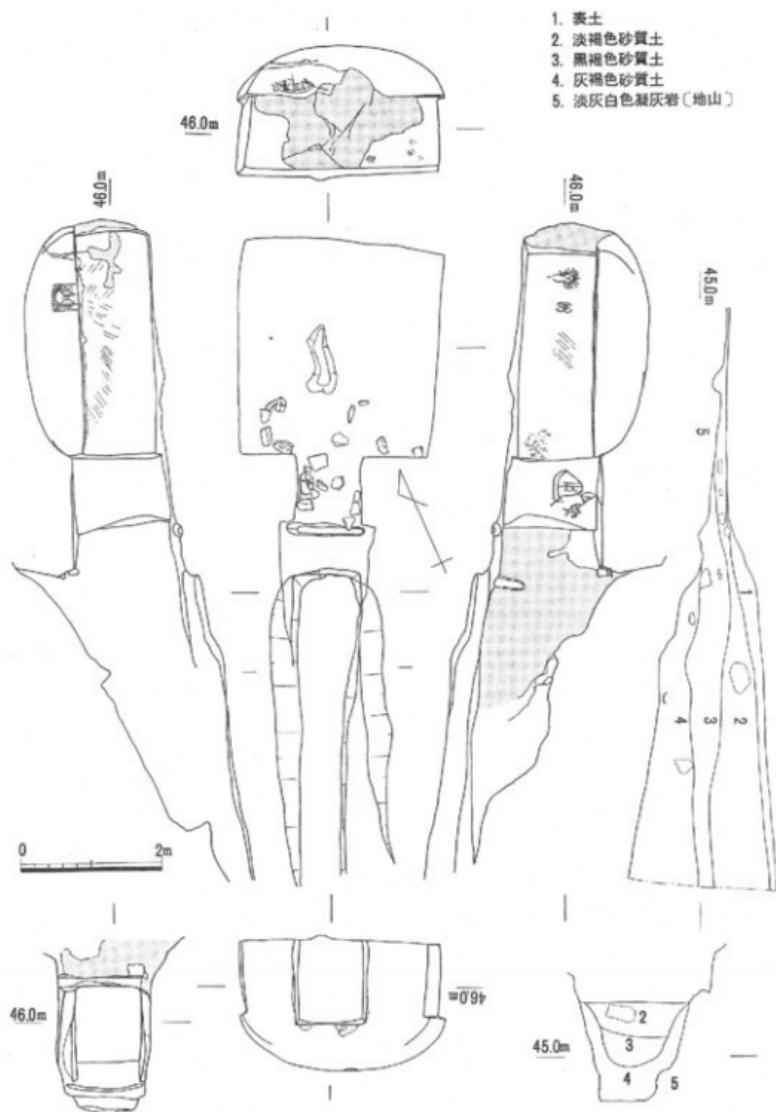


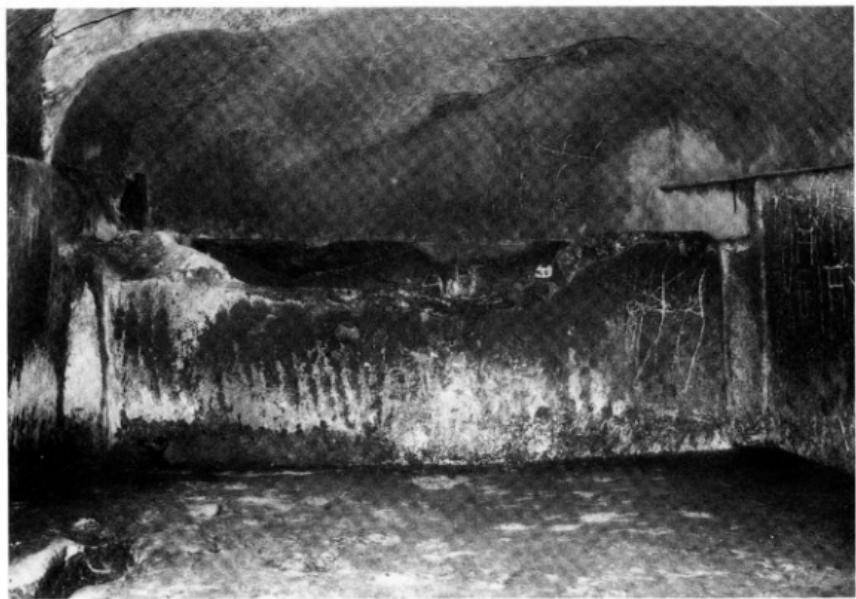
图-48 2-12号填



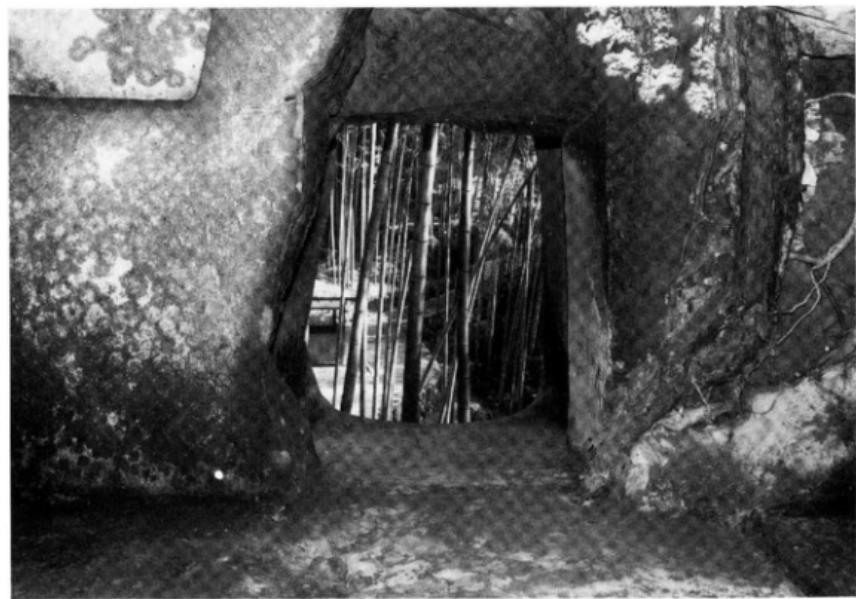
全 景



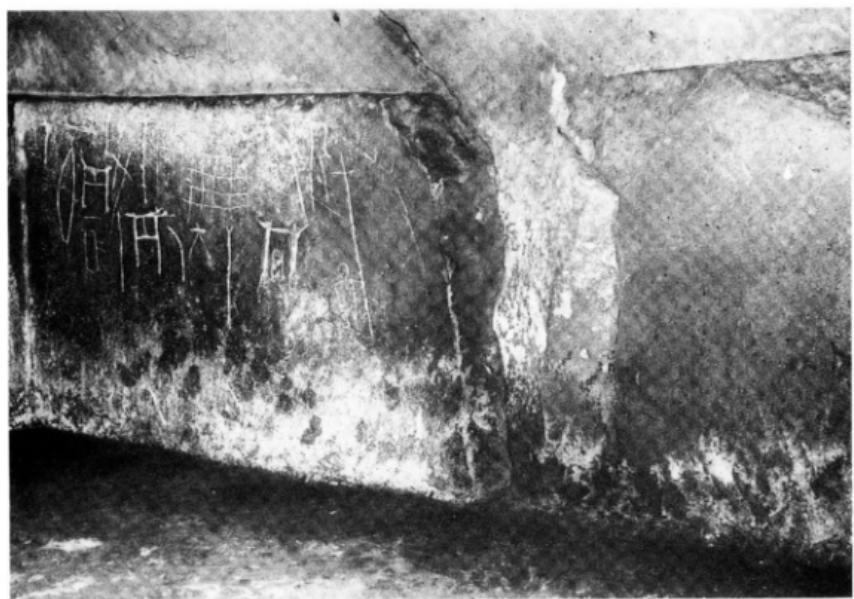
羨 門



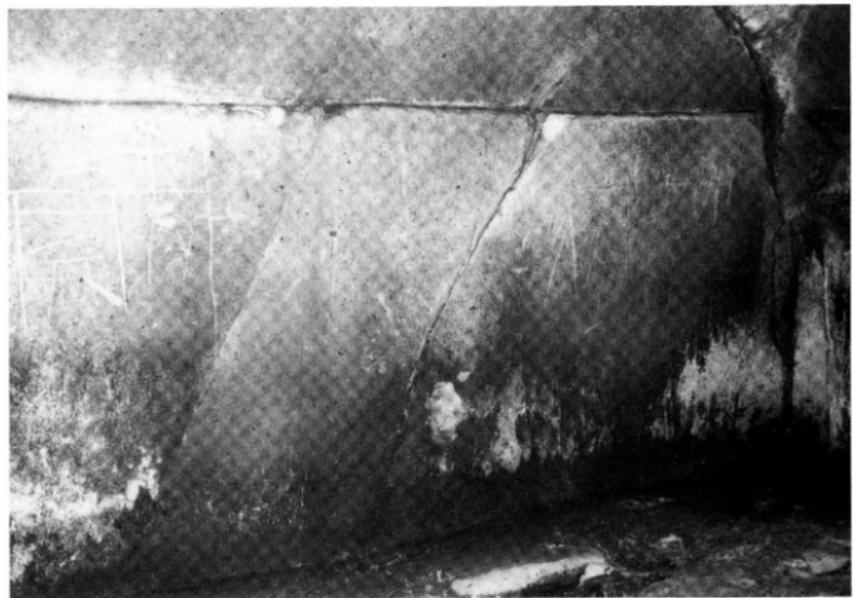
玄室奥壁造付石棺



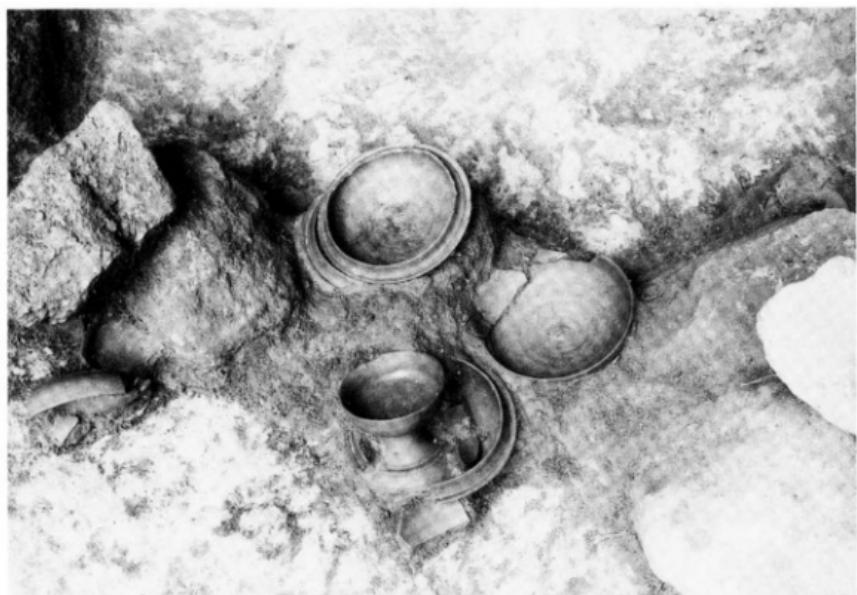
玄門



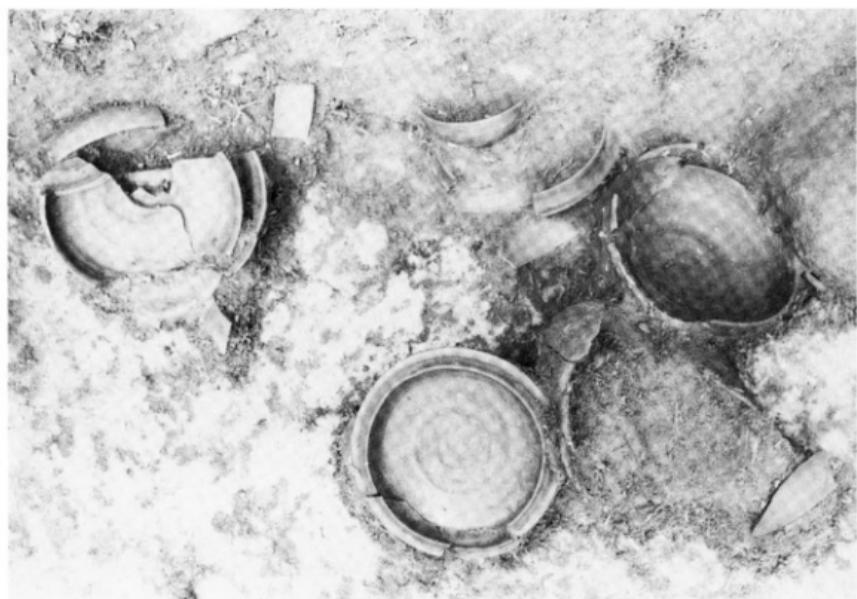
玄室左側壁



玄室右側壁



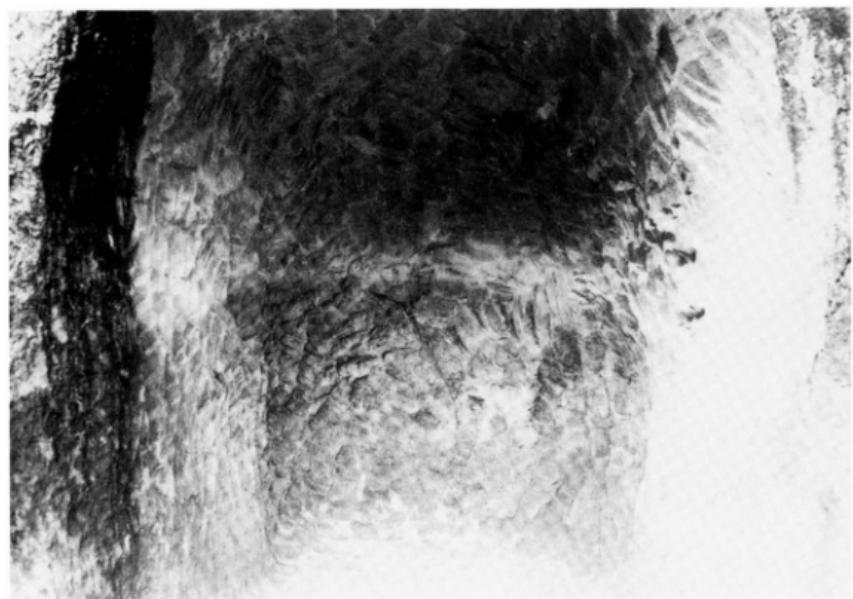
遺物出土狀況



遺物出土狀況



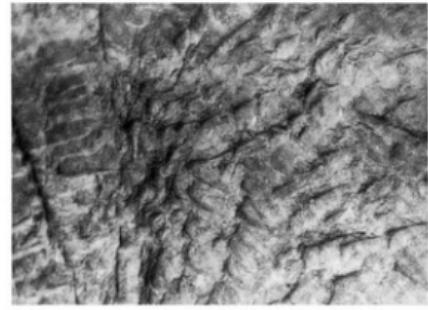
全 景



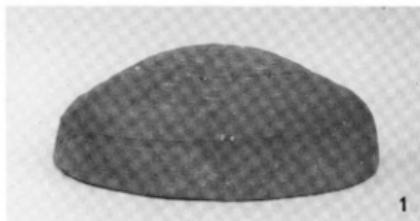
奧 部



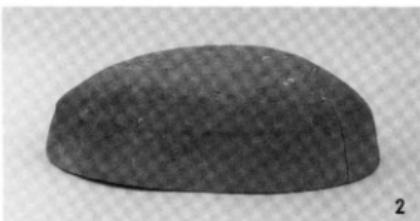
右側壁



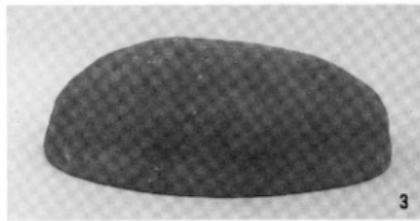
歎面工具痕



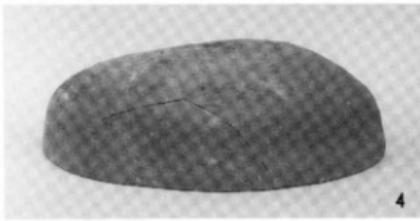
1



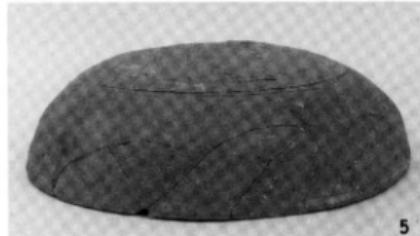
2



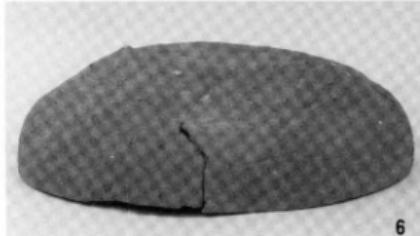
3



4



5



6



7



9



10

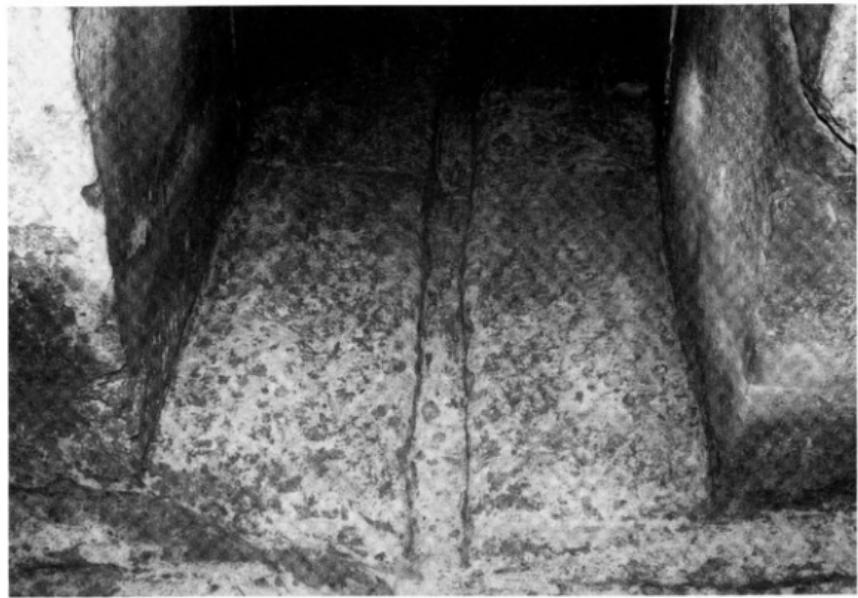


12

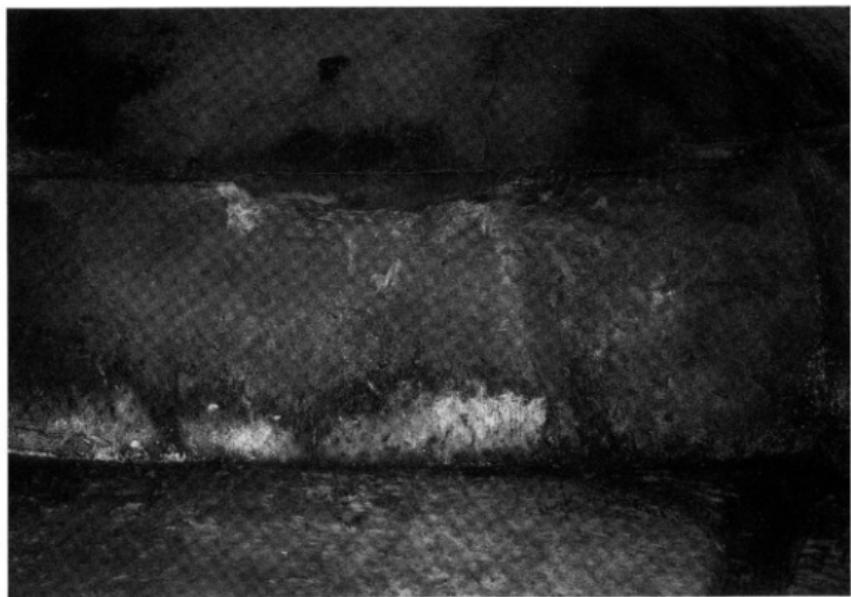
出土遺物



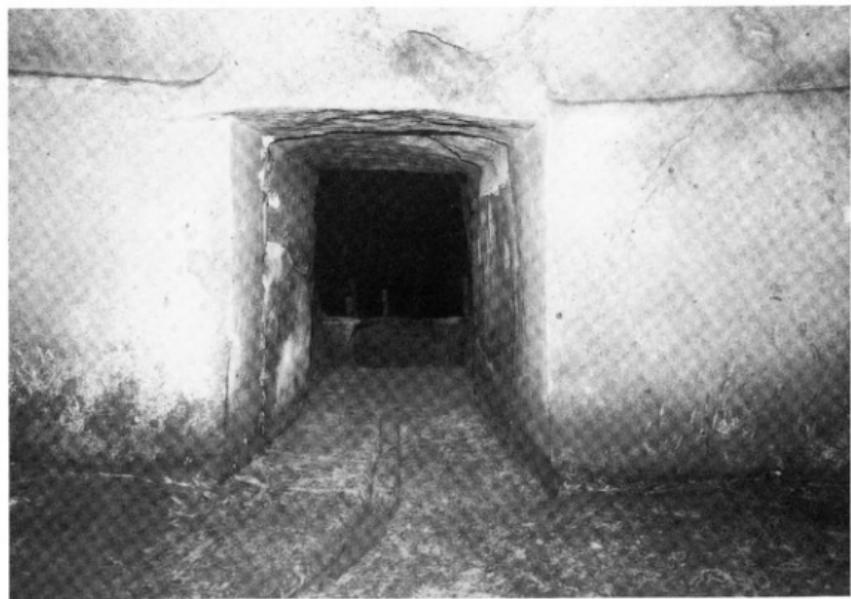
全 景



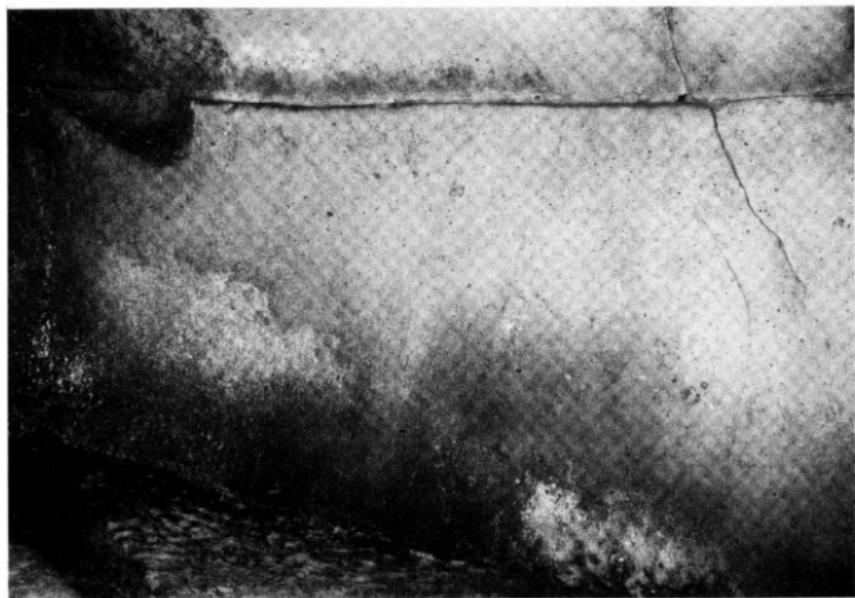
炭道床面



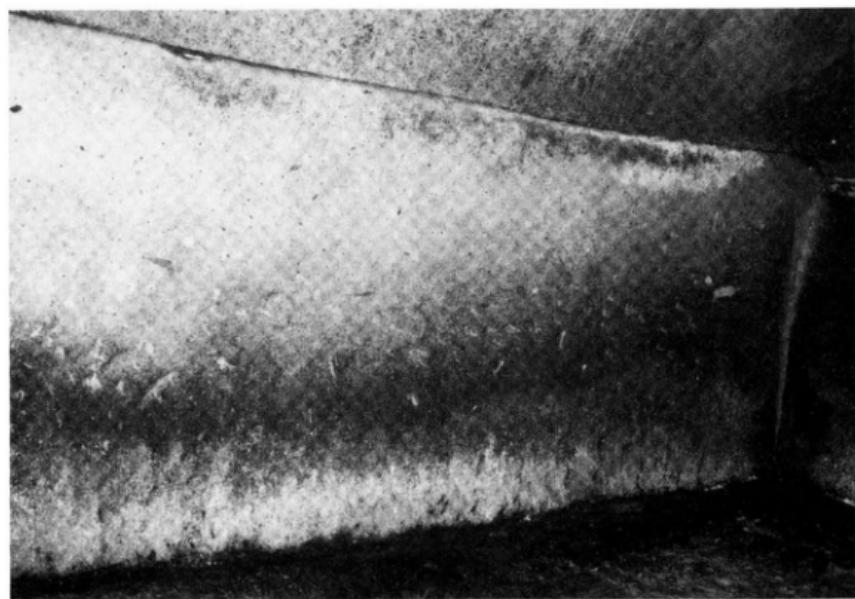
玄室奥壁



玄門



玄室左側壁



玄室右側壁

羨道側壁の羨門側の立ち上がりは、弧を描き、角が丸くなっている。羨門上部は、羨道の天井が、羨門の位置から墓道側へ64cmの長さまで、水平に続いている。天井前面は、高さ10cm、奥行き10cmの小さい段をなして、平坦な面が立ち上がっている。この段をなしている部分の両側壁には縦15cm、横10cm、奥行3cm前後の掘り込みがみられる。両側壁の掘り込みが、同じ高さに位置することから、木柱を横に架構していたのではないかと推定される。やはり、羨門の装飾を意識したものであろうか。また、羨門床面には、長さ110cm、幅15cm前後、深さ6cm前後の溝が、横方向にみられる。他の横穴でみられた溝と同様に、板による閉塞施設に伴うものであろう。

墓道は、羨道からほぼまっすぐに伸びている。羨門部での幅は135cm、長さは520cm以上を測り、調査範囲外へ続いている。床面は、羨門から65cmの位置で、1段下がっている。ところが、墓道左側壁に沿って、上段の面に続くと考えられる床面がみられる。上段と下段の床面の比高差は、南端で45cmを測る。この2面が、同一の埋土（灰褐色砂質土）で覆われていることから考えると、上段の面が横穴掘削時の墓道であり、下段の面は掘削後間もなくの追葬に伴って掘り下げられた墓道であると考えられる。現状の平面形態から考えると、上段の羨道は南へのびており、下段の墓道は少し西へ振った方向へのびているものと考えられる。

床面の傾斜は比較的強く、玄室内では4°であるが、羨道から墓道にかけては9°の傾斜がみられる。

2～12号墳には、多数の線刻画がみられる。羨道左側壁には帆船が描かれ、船首と船尾には帆綱がのび、舵と思われる表現もみられる。古墳時代における帆船の存否にも関わってくる線刻画であるが、線の風化程度、表現法、描かれている位置等から考えると、横穴に伴うものと考えてもいいのではないだろうか。同様な帆線の線刻は、奥壁右隅にもみられる。しかし、船の先端が奥壁崩壊部に続いていることから疑問の残るものである。それ以外にも、玄室各壁面には、尼垣かとされる縦横の線からなる線刻、人物などが描かれ、天井にも大きな鳥が描かれている。これらも、横穴掘削時まで遡るものかどうか疑問の残るものである。

調査前には、玄室で15cm以下、墓道では最大210cmの土砂が堆積していた。墓道床面からは、須恵器杯身(5)、台付長頸壺(12)、土師器甕(15～17)が、それぞれほぼ完形で出土している。これら以外にも、比較的多くの須恵器・土師器・鉄製品が出土している。

1～14は須恵器、15～17は土師器、18は瓦質土器、19～25は鉄製品である。

1は、須恵器杯蓋。天井と口縁の境の段が、僅かに認められ、口縁端部は段をなす。2も杯蓋であるが、天井と口縁の境の段は全くみられず、口縁端部の段もみられない。3も杯蓋であるが、短頸壺の蓋になるかもしれない。天井と口縁の境で緩やかに屈曲する。口径10.2cm、器高4.1cmを測り、口径に比して器高の高い形態となる。天井部にヘラ記号がみられるが、半分を欠損しているため、全形は不明。

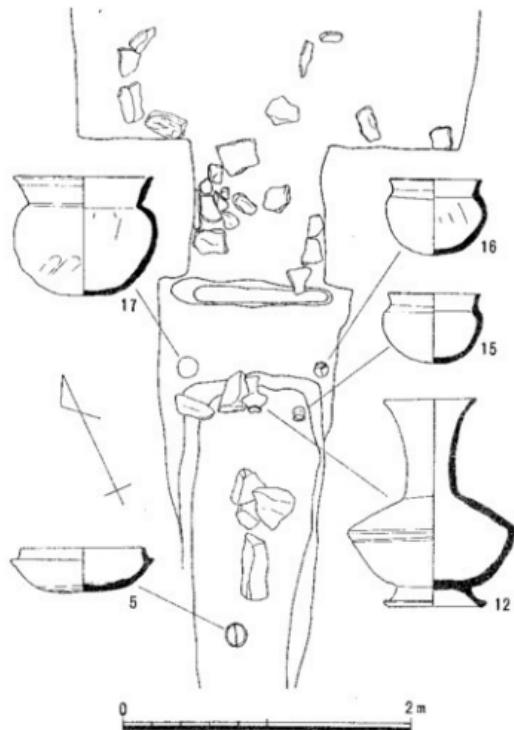


図-49 2-12号墳遺物出土状況

が立ち上がる。台部は低く、端部で外上方へ反り上がる。肩部に2条の凹線がみられる。

13は、台付壺の台部であろう。複開きの台部は、1条の凹線と段を介して、外下方へ屈曲する。端部は、やや外方へつまみ出した形態を呈する。

14は、短頸壺の蓋。口縁は、天井から内窯氣味にのび、端部で凹面をなしている。天井部外面に鋸歯状のヘラ記号がみられる。

15~17は、土師器の壺。口径10cm前後のもの(15・16)と、14.4cmの大形のもの(17)がみられる。いずれも球形の体部から、口縁が外上方へ立ち上がり、端部でやや外反する形態をなす。口縁部ヨコナデ、体部外面は雑なナデ、内面は板ナデ後に丁寧なナデを施している。

18は、瓦質の羽釜。口縁部は内傾し、3段の段をなす。端部上面は、平坦面をなす。鉗は短く、水平方向にのびる。体部内面には、浅いハケメが残る。体部外面は、ヘラケズリかと思えるが、詳細不明。

4~8は、杯身。比較的高い立ち上がりがみられ、端部で僅かに段をなすもの(4)、やや立ち上がりが低く、端部を丸くおさめるもの(5・6)、短い立ち上がりが、内傾した後に上方へ反るような形態のもの(7・8)がみられる。

9~11は、高杯。いずれも無蓋であろう。9は、杯部外面に2条の稜がみられ、その間を雑なヘラ描きの波状文でうめる。10は、長脚二段透し高杯の脚部。2条の凹線の上下に、それぞれ三方の長方形透し窓が穿たれる。11も長脚二段透してあるが、透し窓は二方である。杯部は、底部と口縁部の境で段をなしている。

12は、台付長頸壺。肩の張り出した算盤球状の体部から、細長くラッパ状に開く口縁部

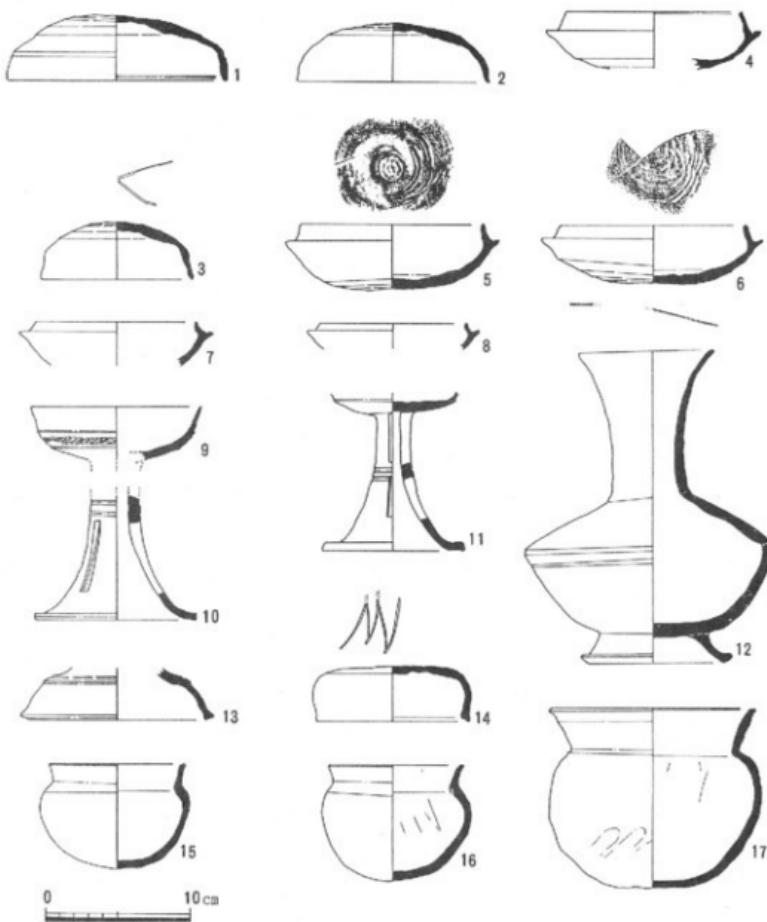


図-50 2-12号出土遺物①

19は、内反りの曲刃鎌。一部を残すのみである。厚さは0.4cm。

20・21は、刀子。同一個体の可能性が高い。同一個体であるならば、刃部の長さは13cm以上となる。

22-25は、釘。22と23は完形で、それぞれ7.1cm、6.5cmの長さを測る。いずれも錯が激しく、全体の形状もわかりにくいが、折曲頭で方形断面を呈するものと考えられる。木目の残っているものもみられない。

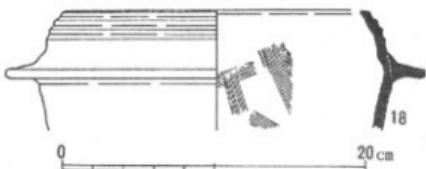


図-51 2-12号墳出土遺物②

ケで調整する。円筒埴輪は、凸帯径15cm前後を測り、凸帯断面は低い台形状を呈する。外面は1次調整のタテハケを基調とし、継続するヨコハケを施すものもみられる。内面はユビナデ調整を施す。

出土遺物は、6世紀中葉から7世紀前葉にかけての時期と考えられ、やはり数回の追葬が想定される。出土遺物と層位の関係をみると、墓道床面から出土した須恵器の台付長頸壺(12)は、7世紀代に下ると考えられ、埋土はすべて最終埋葬後のものと考えられる。また、玄室内から掻き出された棺台石の近くで、最も古いと考えられる須恵器の杯身(4)が出土しており、その近くから瓦質羽釜(18)も出土している。瓦質羽釜は14世紀代と考えられるが、この時期まで、玄室内には棺台石や一部の遺物が残されていたものと考えられる。これを掻き出して、中世に再利用されているようであるが、中世の遺物は瓦質羽釜1点のみで、その実態は明らかにできない。

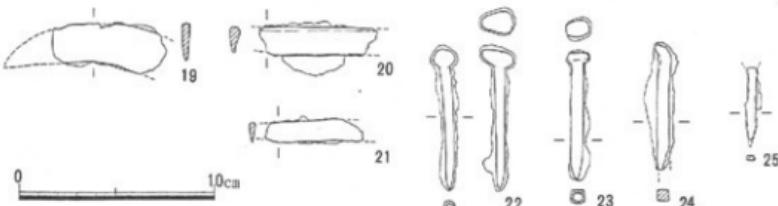


図-52 2-12号墳出土遺物③

第2支群13号墳（図-39・53~56、図版47~51）

未完成の横穴であり、玄室内には無数の工具痕が残されている。開口方向は、S-37°-W。玄室は、長方形平面を呈するが、奥の両隅が未完成のために弧を描いている。玄室長323cm、幅282cm、高さ158cm。両側壁と奥壁は、直立せず、内湾気味に立ち上がる。また、側壁と天井の境の切り込み段は、右前壁と右側壁にのみ認められ、他の壁面には認められない。天井は、扁平なドーム状を呈するが、奥で急に低くなっている。これらは、いずれも2-13号墳が未完成であることに起因するものと思われる。右側壁と前壁のなす角は直角に造られていること、

これらの遺物以外に、埴輪片が数点出土している。図化したものは、朝顔形埴輪頭部（図16-4）、円筒埴輪体部（図16-7・8）である。朝顔形埴輪は、頭部から大きく広がる口縁部に至る中間に凸帯をめぐらすものである。

外面左上がりのハケメ、内面はヨコハ

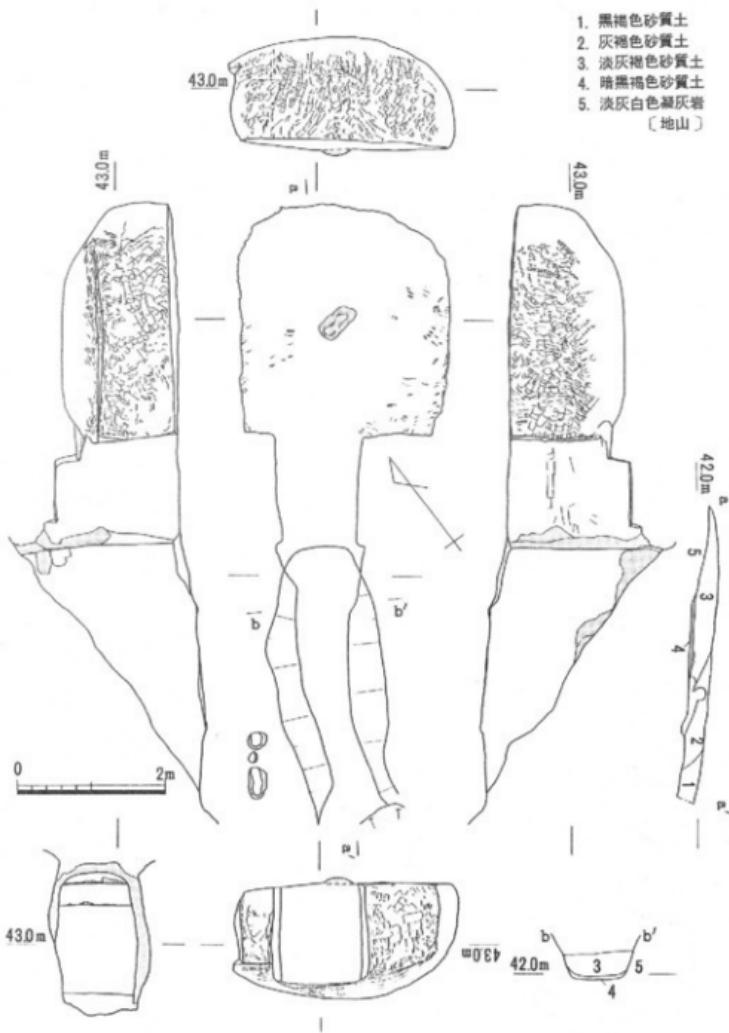


図-53 2-13号填

右側壁においては向かって左半分には仕上げの丸刃工具痕が残されているのに対して、右半分には荒掘り用の平刃工具痕が残されていることなども考慮すると、玄室奥半分は荒掘りの段階になり、右前壁から右側壁にかけては仕上げの段階に入っていたことを示している。

玄門部には、特別な加工はみられない。

羨道は、玄室の右寄りに取り付く。平面は奥で広がる台形状を呈し、長さ144cm、玄門での幅122cm、羨門での幅101cmを測る。天井は、3段の段をなしており、玄門側から羨門側へ、30cm、16cmの幅で高くなっている。天井の高さは、最も低い位置で135cm、高い位置で183cmを測る。

羨道天井の前面は、アーチ状となり、これが羨門上部にあたる。羨門部には、それ以外の加工はみられない。

墓道は、先端が東、すなわち谷下方へ弧を描いてのびている。長さは380cm以上を測り、前面は自然地形の落ち込みによって断たれている。幅は、羨門部で120cm、最も狭い部分で47cmとなる。床面は、未完成のためか凹凸が激しい。

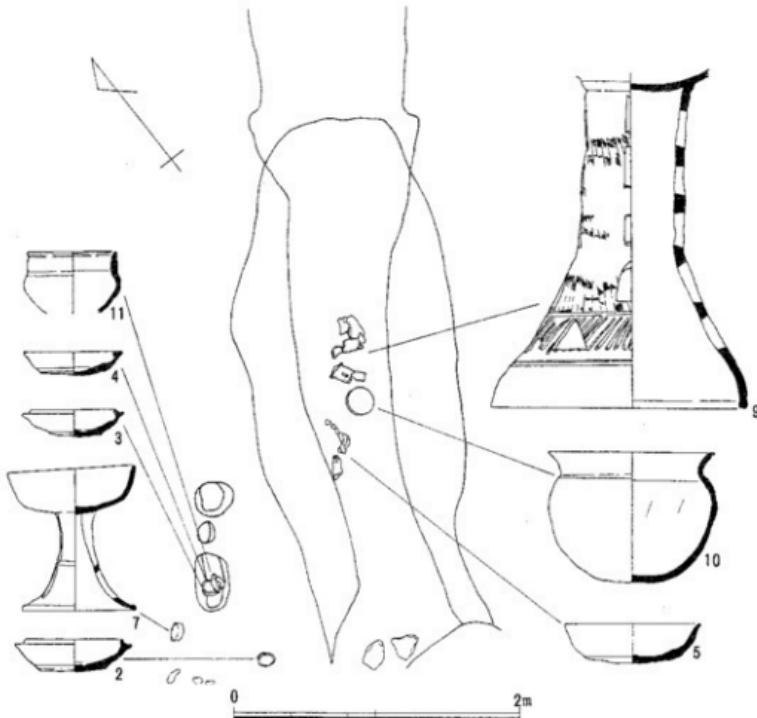


図-54 2-13号墳墓道遺物出土状況

調査前には、玄室から羨道部にかけては床面が露出しており、羨道は1m近い土砂に覆われていた。遺物は、須恵器・土師器・鉄製品が出土している。羨道下層からは、須恵器杯身(5)、器台(9)が小片に割れて出土している。器台(9)の破片は、杯身(5)の両側からも出土している。これらの遺物は、凝灰岩の地山上に薄く堆積した第4層暗黒褐色砂質土上面から出土している。土師器壺(10)は、第3層淡灰褐色砂質土上面から倒立状態で出土している。

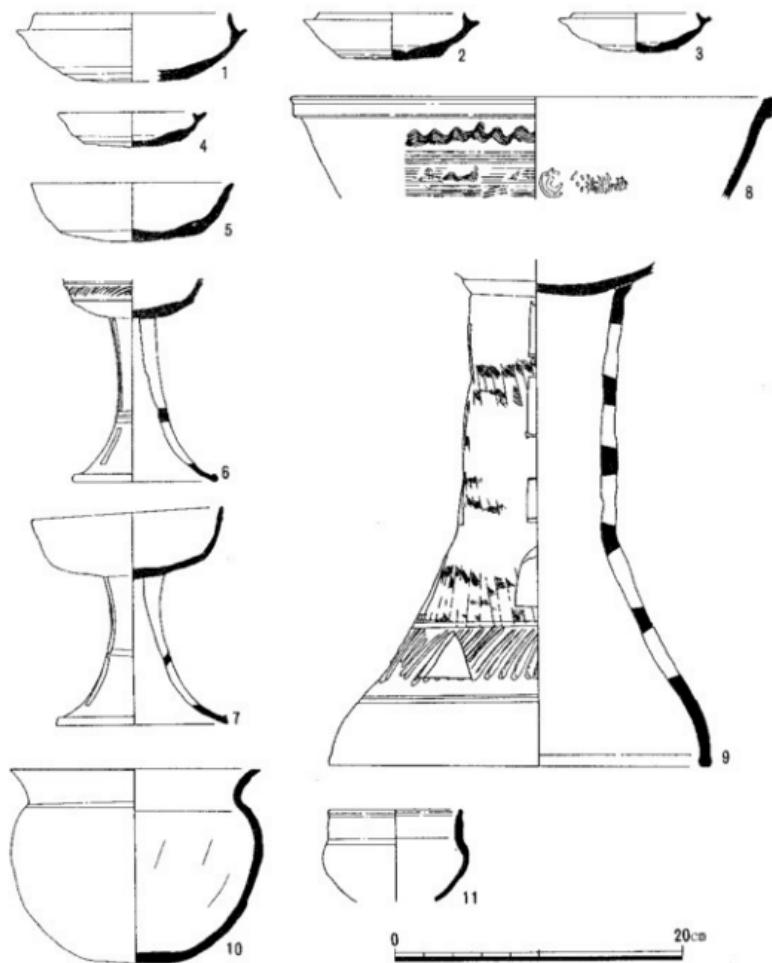


図-55 2-13号墳出土遺物①

墓道の西側肩部に、3個のピットが存在する。これらのピットが、横穴に伴うものであるかどうかは問題であるが、南側のピット上面から土師器の小形甕(11)、須恵器杯身(4・3)が重なって出土している。いずれも正位であった。その近くの地山上面からも、須恵器高杯(7)、杯身(2)が出土している。

1~9は須恵器、10・11は土師器、12~15は鉄製品。

1~5は、杯身。立ち上がりの比較的高いもの(1)、短いもの(2・3)、極端に短いもの(4)、みられないもの(5)がある。1・2は、底部外面回転ヘラケズリ調整、3~5は、回転ヘラ切り後にナデを施している。

6・7は長脚二段透しの無蓋高杯。6の杯部外面は2段の段をなし、その間を刺突文でうめる。脚部は、上段に比して下段が短く、安定性を欠く形態である。端部は丸く肥厚する。7の杯部には、何らの装飾も認められない。脚端部は面をなしている。いずれも、3方に長方形の透し窓を穿つものである。

8・9は、器台。いずれも墓道下層から出土しており、同一個体であろう。口径32.9cm、脚部径26.4cm、器高は50cm強であろう。口縁端部は、外面に折り返したように肥厚する。台部外面には、2条の波状文がめぐる。調整は、格子叩き後にカキメを施す。内面は、同心円叩き目を磨り消している。脚は円筒状にのび、裾で外反し、端部で内弯する。裾部に2条の凹線がめぐり、その間に左下がりのヘラ描き文を連続で施している。それより上部では、波状文が4段に施されている。原体幅は4cm以上であり、1cm弱の短い間隔で静止する雑な施文である。これらの文様帯を断ち切って、5段の透し窓が穿たれている。透し窓は、いずれも4方に開き、上の3段は長方形、4段目は上部が丸味をおびた三角形、最下段も三角形であるが、最下段のみ上4段の中間位置に穿たれている。

10は、土師器の甕。体部最大径は肩部にみられ、口縁は大きく外反している。体部外面はナデ、内面は板ナデ後のナデ調整。11は、小形の甕。口縁は直立し、端部の内外面には段がみられる。内外面ともにナデ調整。

12~14は、釘。12の頭部は、幅広で扁平なものである。断面も長方形である。13・14は、細い方形断面の釘で、13には横方向の木目が残っている。

15は、鎌。爪部の長さは8cmを測り、先端で折れ曲がっている。

これらの遺物は、6世紀後葉から7世紀後葉頃の年代が与えられ、2~13号墳が6世紀後葉に造られ、その後2~3回の追葬がなされたものと考えられる。

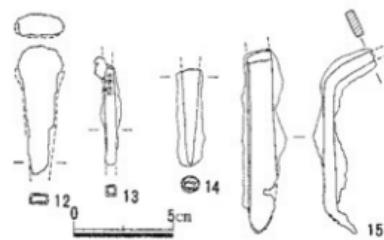


図-56 2~13号墳出土遺物②

以上のように、2-13号墳は未完成であるにもかかわらず、追葬を含んだ埋葬がなされていることが確認できた。玄室は未完成であるが、羨道までは完成している。これは、他の未完成横穴でも確認できる現象であり、埋葬空間として最も重要である玄室の掘削・仕上げよりも、墓道・羨道の仕上げが重視されている。その原因は、掘削手順上の問題だけではなく、外観を重視していたことによるものと思われる。また、未完成のまま埋葬がなされていることは、埋葬空間さえあれば細部の形状にこだわらなかったことが推測されると共に、埋葬せざるを得ない事情が生じたことを示している。憶測すると、横穴被葬者の生前から横穴が造られており、横穴の完成を待たずして被葬者の死、そして埋葬を迎えたと考えられる。つまり、寿墓であり、それ故、横穴の形態・構造、とくに玄室の加工などは、横穴の最初の被葬者の意志に基づいて造られているのではないかと考える。

羨道天井の段構造は、他の横穴では見られないものであるが、これも、羨門の外観を意識したものではないかと考えられる。

第2支群14号墳（図-39・57～60、図版32・52～55）

2-14号墳は、2-12号墳直上に位置する。現状では、玄室天井の左寄り部分で、長径220cm、短径110cmの大きさで陥没している。この陥没に伴って、玄室内部の損壊がみられる。開口方向は、S-53°-W。2-12号墳を避けるように開口している。

玄室は長方形平面を呈し、中央での長さ256cm、幅213cmを測るが、やや不整形となり、右側壁が緩やかな弧を描いているため、各壁面の長さは、奥壁202cm、左側壁245cm、右側壁261cm、前壁198cmとなる。側壁と天井の境の切り込み段が全局しており、玄門上部の帽状加工へとつながる。切り込み段の幅は10～15cm、角は面取りされている。天井は扁平なドーム状を呈し、高さは140cm前後と推定される。壁面や天井には、仕上げ時の工具痕が残っている。

玄門上部には、幅6cm前後の平坦面が造り出され、緩やかな弧を描いている。角は面取りされており、帽状構造を意識した加工と思われる。玄門部床面に段がみられ、羨道は玄室より約5cm低くなっている。

羨道は玄室の右寄りに取り付き、長さ116cmを測る。幅は玄門部で93cm、羨門部では80cmを測る。羨道床面でも5cm前後の段がみられ、羨門側が低くなっている。ただし、この部分には、後述するように巨石が存在し、この巨石を現位置に留めたため、この段が横穴掘削時まで遡るものかどうかの判断がつかない。天井は平天井で、高さ124cmを測る。

羨門の周囲には、幅20cm強の平坦面が造り出され、この面に線刻画がみられる。また、羨門上部には、幅30cm程の軒出し状の天井部が存在したようである。

墓道は長さ280cmまで確認できるが、前面は自然地形の落ち込みによって断たれている。幅は羨門部で128cm、端部で68cmを測る。左側壁の羨門に接した部分に、三叉状の線刻画がみられるが、破損部と重なって判別しにくい。

墓道から羨道にかけて、多数の石が積み重なるように検出された。羨門床面からは、扁平な巨石が出土しており、長さ110cm、幅56cm、厚さ16cmを測る。もう1個の巨石は、長さ102cm、幅60cm、厚さ22cmを測り、その前面から出土している。その上層、左側壁に沿って多数の石材が出土しており、その出土状況から考えると、左側壁上部に積まれた石材が、内側へ崩れたと考えられるものであった。それを裏付けるように、左側壁に方形状に抉られた部分がみられ、この部分を中心に、石材が積まれていたようである。2個の巨石は、その上にのせられ、墓道

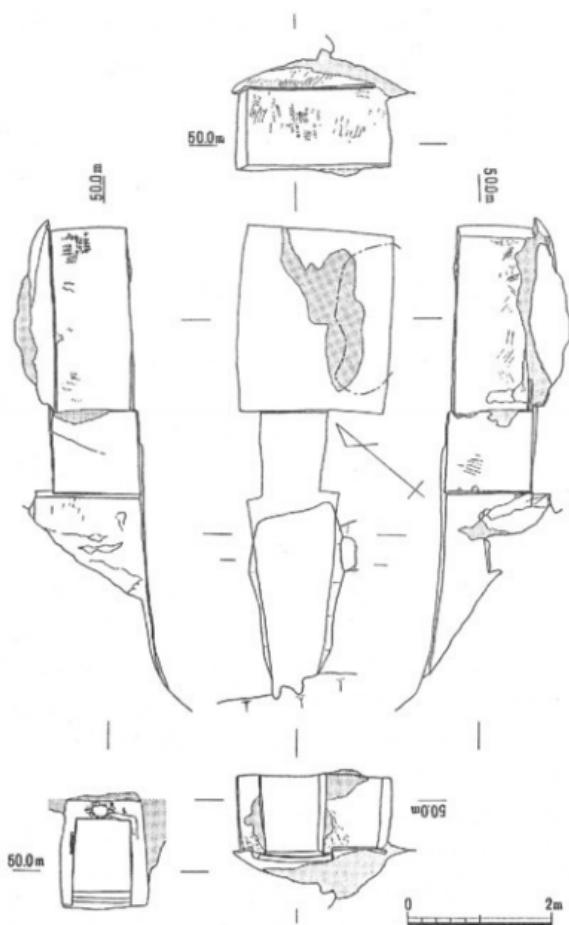


図-57 2-14号填

に架構されていたものと考えられる。2石が並んで架構されたとすると、誤門から150cmの位置まで天井が存在したことがある。

これらの石材は、一部の花崗岩を除いて、大半が安山岩である。その安山岩の中には、朱と考えられる赤色顔料の付着したものがみられる。この事実から、これらの石材は、高井田山古墳（第2支群56号墳）の横穴式石室石材を転用したものではないかと考えられる。2個の巨石についても、高井田山古墳の天井石の可能性が考えられる。他の横穴で安山岩が使用される例が少ないため、注目したい。

茨門周囲の平坦面には、線刻画がみられる。茨門上部中央には、蓮華の線刻がみられる。縦23cm、横41cmを測る。中心には長径21.5cm、短径14.5cmの横長の楕円形が描かれ、その内部には縦・横・斜に4本の直線が交差している。その周囲には、14枚の蓮弁が描かれている。稚拙な印象を受けるが、横長になっているのは、描く場所が限られていたためであると考えられ、蓮華を表現したものと考えてよいであろう。蓮華の右上には、文字とも記号ともとれる線刻があり、その右にも直線からなる線刻がみられる。また、茨門周囲を取り囲む直線がみられる。向

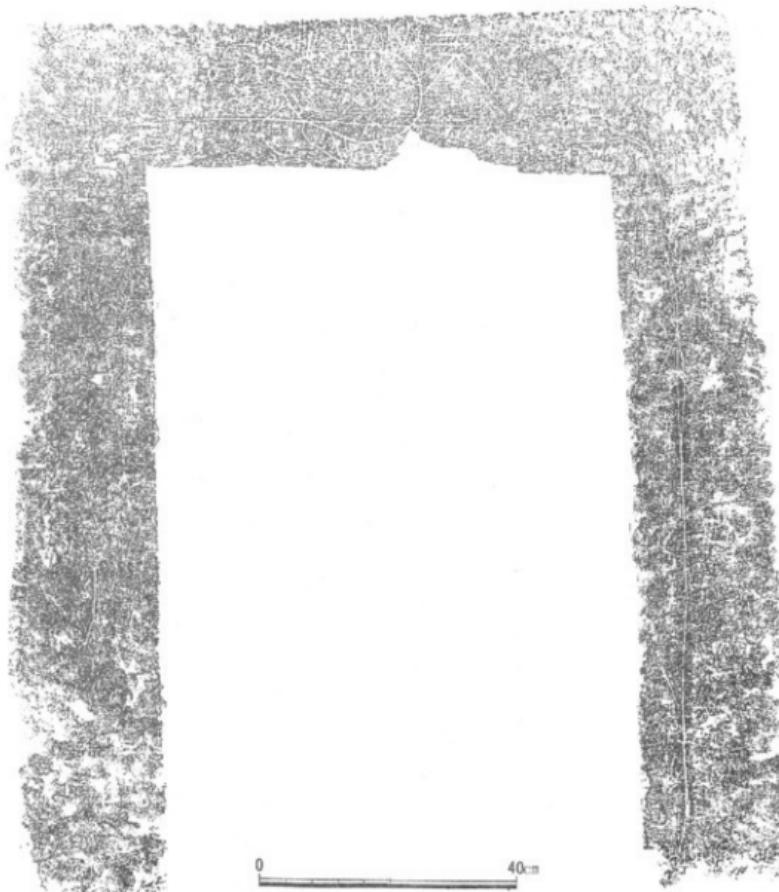


図-58 2-14号墳茨門線刻画拓影

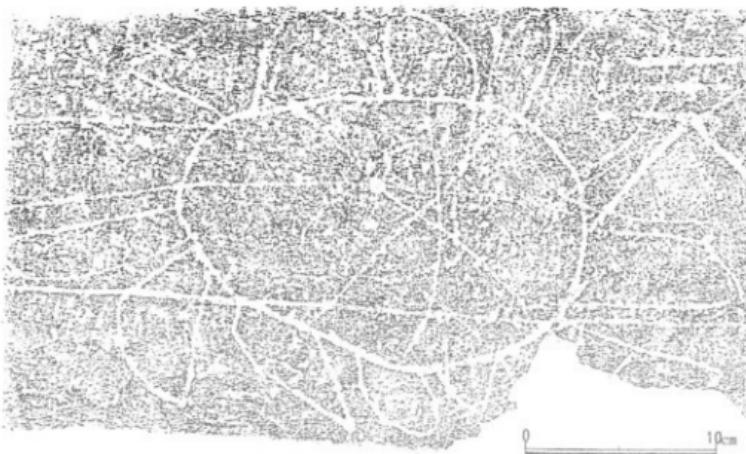


図-59 2-14号墳蓮華線刻画拓影

かって左側には、この直線から無数の直線がのびており、右側には、2個の三角形が上下に並んで描かれている。調査前は、談門部は完全に埋没していたため、これらの線刻画が最近の落書きであることは考えられない。しかし、談門部が風雨に晒されていたことは、線刻画の風化状態から間違いないと思われ、これらの線刻画がいつの時期まで遡るものかは問題の残るところである。しかし、発掘調査によって初めて発見された線刻画として注目しておきたい。

2-14号墳は、調査前には墓道から談門にかけて完全に埋没しており、その流入土によって、墓道・玄室も覆わされていた。出土遺物は、須恵器・土師器・埴輪がみられるが、量は少なく、良好な資料は2点のみである。



図-60 2-14号墳出土遺物

1は、玄室床面から出土した須恵器の無蓋高杯杯部。外面に2段の段がみられるが、文様はみられない。

2は、土師器の壺。墓道下層から倒立状態で出土した。ほぼ完形である。体部は凹凸が激しく、口縁部は外反する。外面はハケメ、内面は板ナデ後にナデ調整で仕上げる。

埴輪は、盾形かと思われる小片である。

遺物は、7世紀初頭頃のものと思われるが、少量であるため、2-14号墳の造られた時期が7世紀まで下るかどうかは疑問が残る。横穴の形態から考えると、2-14号墳が造られたのは、6世紀後葉頃と考えられ、遅くとも6世紀末葉であろう。

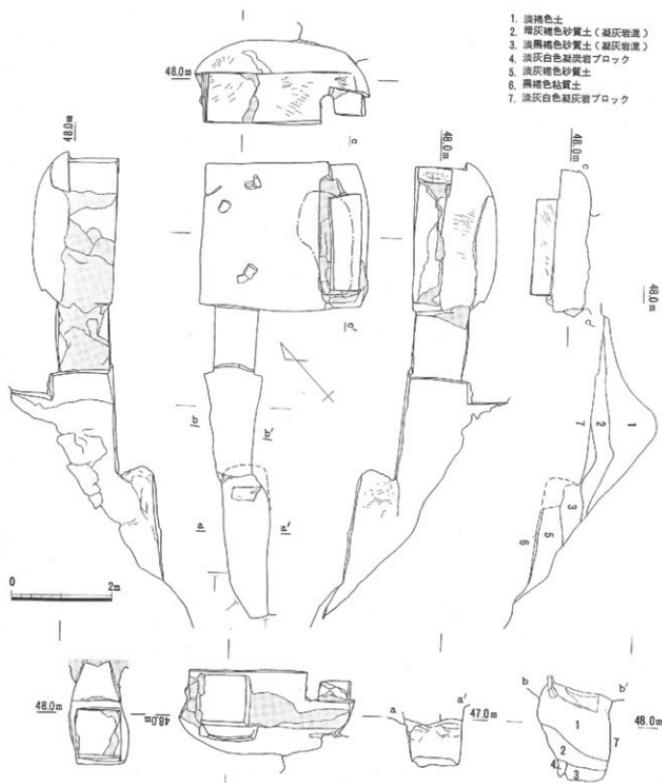


図-61 2-17号墳

第2支群17号墳（図-39・61・62、図版32・56～58）

2-12・14号墳の南側、高さは両横穴の中間に位置する。玄室左寄りの天井部が崩落している。S-44°-Wに開口する。玄室右側壁から羨道右側壁にかけては、損壊が激しい。

玄室左側壁には造り付け石棺がみられる。これを含めて考えると、玄室平面は横長の長方形となり、長さ299cm、幅334cm、高さ163cmを測る。側壁と天井の境の切り込み段は、奥壁と右側壁にみられ、前壁にも存在した可能性がある。切り込み段の幅は、最大で15cmを測り、奥壁左側では、その幅が徐々に狭くなり、消滅している。天井は、やや扁平なドーム状を呈する。

造り付け石棺は、左側壁にそって存在し、石棺上面に幅広い平坦面を造り出している。外法の長さ288cm、幅100cm、高さ60cm前後を測る。内部は不整形な長方形平面を呈し、長さは左壁で196cm、右壁で186cmを測り、幅は奥側で65cm、玄門側で57cm、深さは40～45cmである。

玄門上部には、6cm前後の高さに造り出された桶状の施設がみられる。角は面取りがなされている。

羨道は、著しく玄室の右側に片寄って取り付く。長さは133cm、幅は玄門部で88cm、羨門部で82cmを測る。高さは107cm、天井は玄門から羨門へ緩やかに下がっている。羨道床面は、玄室・墓道より6cm前後高くなっている。框を意識したものであろうか。

羨門上部には、羨道天井より17cm高く、45cm前後の平坦面を造り出した天井部分がみられる。その前面には、台形状の高さ80cmの平坦面が造り出されている。この位置の墓道上層に、長さ105cm、幅63cm、厚さ30cmの扁平な自然石が存在した。この自然石は、出土状況や大きさから考へると、羨門上部に架構されていたものと考えられる。また、この自然石の西端下に接して、40cm四方、厚さ10cmの扁平な自然石が出土している。出土状況から考へると、この石材は、羨道右側壁の肩部に置かれ、前述の自然石を支えていた石材であろう。両側壁は、内寄気味に立ち上がっており、その肩部に小さい石材を置き、長さ105cmの石材を架構していたのであろう。架構された位置は、羨門上部の台形平坦面上部と推定され、これらが一体となって、羨門の被築的効果を狙ったものと思われる。

墓道は、羨門部で幅116cmを測り、長さは207cmの位置で、オーバーハングしながら約70cm落ち込んでいる。下段の墓道は、長さ314cmを測り、前面は自然地形の落ち込みによって断たれている。土層から判断すると、下段の墓道は上段の墓道に先行するようであり、横穴の墓道振削中に放棄された未完成横穴ではないかと考えられる。この未完成横穴が放棄された後、第6層黒褐色粘質土、第5層淡灰褐色砂質土が堆積し、その後に2-17号墳が掘削されたものと考えられる。この第5層上面と墓道床面とは約30cmの比高差があり、ステップ状になっていたものと考えられ、その踏み込み部分には、長さ60cm、幅28cm、厚さ10cmの扁平な石を置いている。上段の墓道は、下段の墓道より20cm前後西へ振って取りついている。上段墓道床面の勾配は6°。下段墓道床面の勾配は7°である。

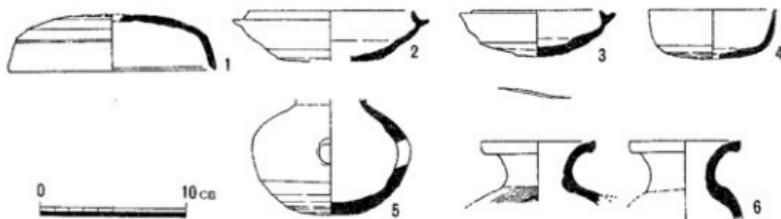


図-62 2-17号墳出土遺物

調査前には、羨道から玄室にかけては約10cmの土砂が流入しており、墓道では最大で180cmの堆積土があった。未完成横穴（下段墓道）の埋土である第5・6層からは、全く遺物が出土しておらず、遺物が出土したのは、第1層淡褐色土・第2層暗灰褐色砂質土に限られる。墓道上層からは、須恵器杯身（1）・翫（5）・提瓶（6）が出土しており、玄室床面から須恵器杯身（2）、羨道床面から須恵器杯身（4）、羨門床面から須恵器杯身（3）が出土している。図化した遺物以外には、土師器の高杯脚部片、円筒埴輪片が出土している。

1は、杯蓋。天井と口縁の境には、あまい稜がみられる。

2～4は、杯身。2・3は、短く内傾する立ち上がりを有し、底部外面は回転ヘラ切り、2はその後にナデを加えるが、3は未調整である。3の底部外面には、ヘラ記号がみられる。4は、底部から直立する口縁に至るもので、小形のものである。

5は、翫の体部。外面体部下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。

6は、提瓶の口縁部。口縁は外反し、端部で上下にやや張り出す。外面体部前面はカキメ、背面は回転ヘラケズリ調整。

出土遺物は、6世紀後葉から7世紀前葉のものであり、2～3回の追葬がなされているようである。

2-12・14・17号墳は、その位置関係から小支群を形成するものと考えられる。それぞれの横穴の位置関係・出土遺物から考えると、12号墳→17号墳→14号墳の順に、6世紀中葉、後葉、末葉墳に順次造られたものと考えられる。最初に12号墳が造られ、それを避けて東側上方に17号墳下層の未完成横穴が造られ、間もなく17号墳が造られ、次に12号墳の墓道西肩部付近に設定した墓道から14号墳を12号墳の上に造っている。このように、既設の横穴を避けて、上へ上へと横穴を造っていく造墓方法は、2-2～5号墳、2-10・11号墳でもみられた現象であり、高井田横穴群では、ごく一般的にみられる造墓方法である。したがって、小支群を摘出する際には、平面的な位置関係だけでなく、立面的な位置関係が重要となってくる。そして、墓道の共有、横穴の形状、地形等を考慮して小支群を把握することが必要となる。その中で、各横穴の前後関係・年代を検討していくなければならないと考える。

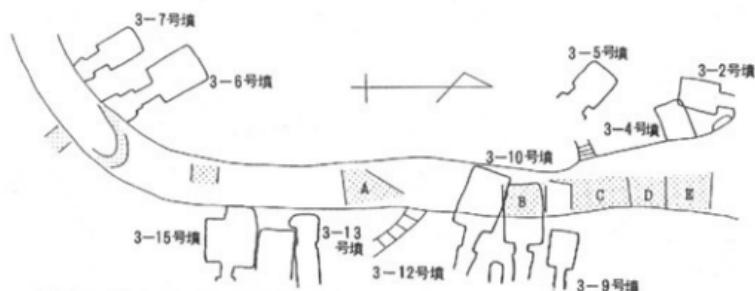
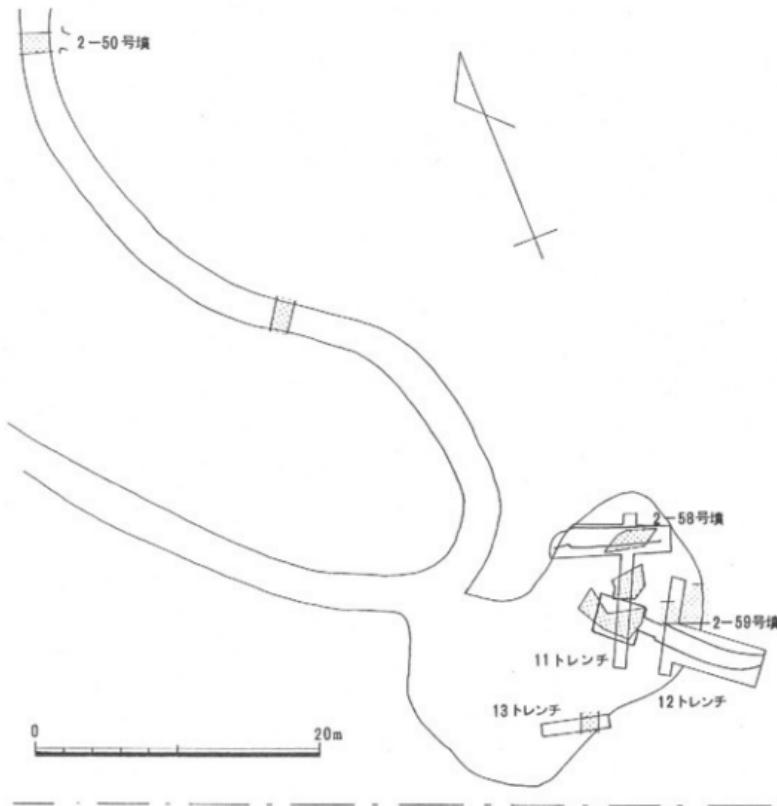


図-63 レーダー探査信号地点位置図（網目は信号地点）

第2支群58号墳（図-63～68、図版59～61）

2-58・59号墳は、1986年の既設家屋解体に伴って発見された横穴であり、公開予定ではなかったが、この位置に広場（歴史の広場）を計画していたため、現況の確認と保存策について検討するための調査を実施した。調査に先立って、周辺のレーダー探査を実施したところ、2-58号墳墓道と考えられる信号と共に、2-59号墳推定地周辺では3箇所で信号が認められたが、横穴の形状を把握するには至らなかった。結論から述べると、2-58号墳の墓道は、ほぼ信号地点で検出された。一方、2-59号墳の玄室は、奥壁左隅部の天井が崩落しているため、この部分のみ、内部に多量の土砂が流入していた。そのため、玄室平面を完全に把握できず、2箇所に分れた不整形な信号となって表れていたものであろう。なお、誤道・墓道は、レーダー探査では確認できていない。その東側で、もう1箇所確認された信号も明瞭ではないが、2-22号墳の玄室に伴う信号かもしれない。

2-58号墳は、調査前から崖面に誤門が露出しており、墓道のみ調査を実施した。玄室は、天井が落盤して埋没しているものと考えられる。墓道上面は、家屋建設時に相当な削平を受けているようである。墓道の軸は、S-67°-Eである。調査後は埋め戻し、一部をやむを得ず、通路として使用し、墓道の形状は、植栽によって復元している。

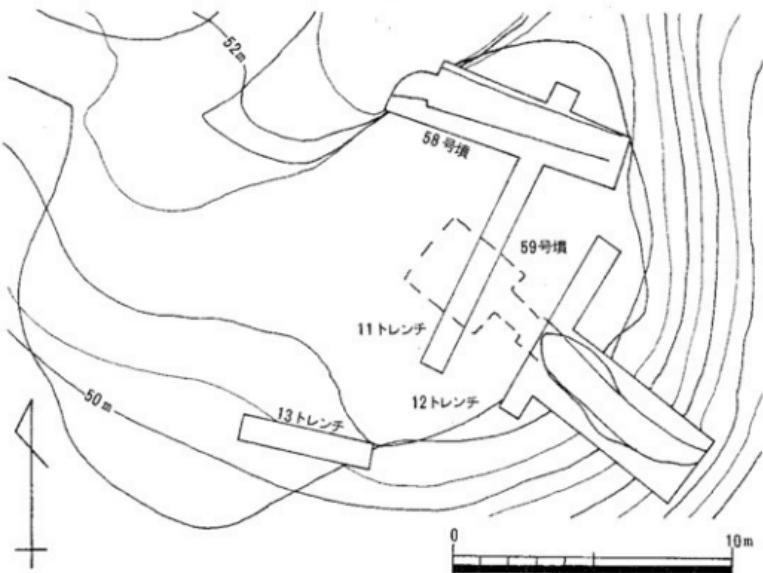


図-64 第2支群58・59号墳

淡道は、幅77cm、長さ90cm以上を測る。高さは2m強を測るが、天井はかなり崩壊している。淡道右側壁には、床面から高さ60cmの位置にテラス状の施設がみられる。テラスの幅は、淡門部で8cm、そこから奥へ徐々に広がり、30cm以上となる。このテラス面より下では、左右両側壁と淡門部に、多数の工具痕が残されている。工具痕は、かなり深いものである。

淡門は、両側に平坦面が造り出されているが、上部は完全に破壊されており、形態は不明である。平坦面は、左側では高さ213cmまで残存しているが、右側では60cmまでしか残存していない。

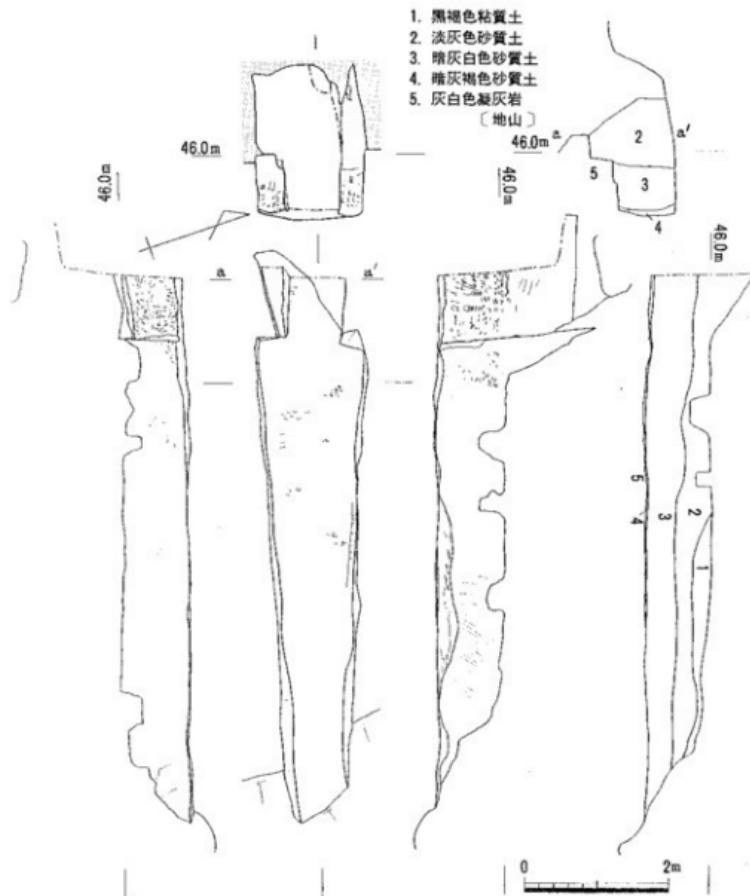


図-65 2-58号填

墓道は、長さ680cmを測り、その前面は自然地形の落ち込みによって断たれている。幅は、羨門部で145cm、端部で70cmを測る。側壁は削平のため、高さ90cmを残すにすぎない。

埋土は4層に分けられるが、遺物はすべて第1層黒褐色粘質土と第2層淡灰色砂質土から出土している。第3層暗灰白色砂質土上面から、土師器杯（3）の両側に、土師器高杯の杯部（4・5）2点が並んで出土している。高杯は、故意に脚部を取り去ったものと考えられ、何らかの祭祀に伴うものであろう。その地点から、180cm羨門に寄った位置からも、土師器の甕（13）が出土している。

出土遺物は、須恵器・土師器・埴輪である。黒褐色粘質土からは、須恵器提瓶（2）・甕、釣（16・17）、円筒埴輪（図16-6・9）、形象埴輪（図16-11）などが出土しており、他の遺物は、すべて淡灰色砂質土から出土している。淡灰色砂質土からは、須恵器杯蓋（1）、土師器杯（3）・高杯（4～7）・鉢（8～10）・甕（11）・壺（12）・甕（13）、釣（14・15・18）、円筒埴輪（図16-1）などが出土している。

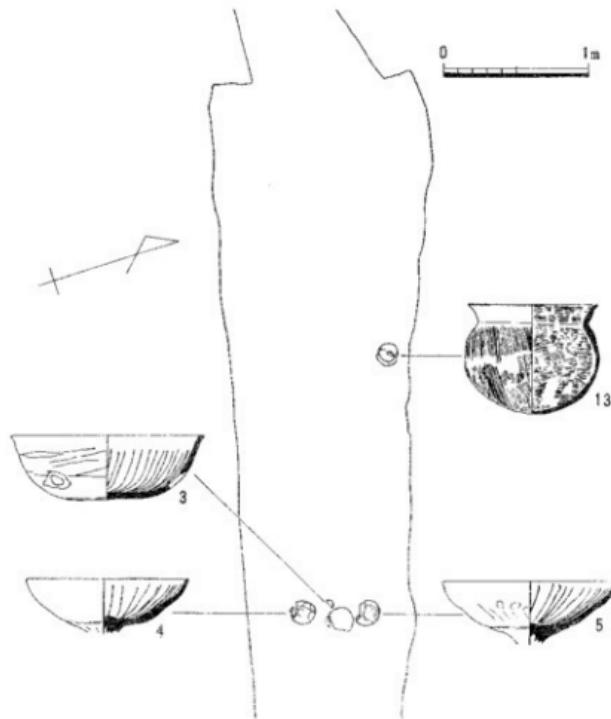


図-66 2-58号墳墓道上層遺物出土状況

1・2は須恵器、3～13は土師器である。

1は、杯蓋。丸味をおびた天井部から、滑らかに口縁部に至り、稜は全くみられない。外面天井部は回転ヘラケズリ調整、ヘラ記号がみられる。

2は、提瓶。口縁は外方へ立ち上がり、端部で直立する。把手は小さく、僅かに鉤状を呈する。外面体部前面はカメキ調整、背面は回転ヘラケズリ調整である。口縁部はヨコナデ調整で仕上げる。

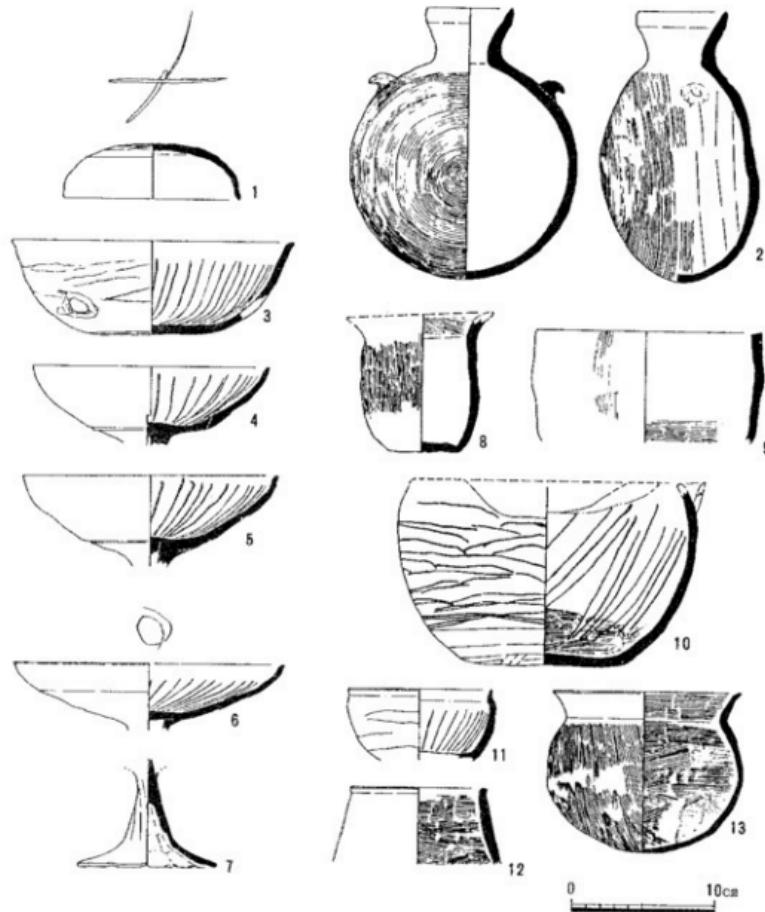


図-67 2-58号出土遺物①

3は、杯。口径19.7cm、器高6.8cmを測る。口縁は、端部で内傾する面をなす。内面には放射状の暗文、外面にはヨコ方向のヘラミガキがみられる。体部には、内側からの焼成後の穿孔がみられる。底部外面は、ヘラケズリ調整。

4～7は、高杯。杯部外面下方に段がみられる。内面に放射状の暗文を施し、外面はナデで仕上げる。脚部（7）は、裾広がりの形態となり、内外面ともにユビナデで仕上げる。

8は、小形の鉢。平底のコップ状を呈し、口縁は外反する。外面上半は細かいタテハケ、下半はナデ、内面はナデ調整。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケ調整。9も鉢であろう。口径15.8cm、器高8cm以上を測る。口縁は体部から直立し、端部は平坦な面をなす。外面はタテハケ、内面上半は粗いナデ、下半はヨコハケ調整。ミニチュアの甕かもしれない。10は、片口の鉢。口縁端部を欠損しているが、復元口径18.6cm、器高13.2cmである。底部は平底状となり、体部から口縁部にかけて内弯する。片口部の外反度は弱いようである。外面は上半がナデ、下半から底部にかけてヘラケズリ調整。内面はナデ、底部は細かいハケメで調整する。外面には横方向のヘラミガキ、内面には放射状の暗文が施されるが、どちらも稚なものである。

11は、椀。口径10.0cm。内弯気味の体部から、口縁部は直立する。外面は粗い横方向のヘラミガキ、内面は放射状暗文を施す。12は、無頸甕、もしくはミニチュア甕の口縁部。口縁は内傾し、端部でやや肥厚する。口縁部から外面にかけてヨコナデ、内面は横方向のハケメで仕上げる。甕であるならば、9がその底部になる可能性がある。13は、甕。球形の体部から外反する口縁は、端部で内傾する面をなす。外面体部はタテハケ、内面はヨコハケ調整である。

14～18は、鉄釘。14・15は大形品で、頭部は一方へ折り曲げている。16～18は小形品で、16・18は横方向の木目、17は縦方向の木目が残っている。

円筒埴輪（図16-1・6・9）は、口径23.5cmの小形品で、外面はタテハケ調整、凸帯は非常に低い。形象埴輪（図16-11）は、盾形かと思える板状の破片である。縦方向に平行する2本の直線間を横方向の直線でうめる線刻がみられる。

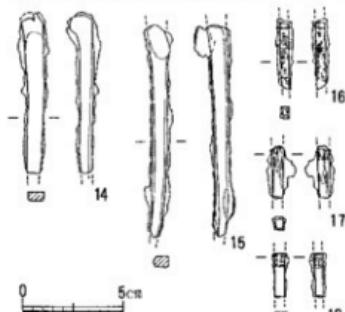


図-68 2-58号墳出土遺物②

須恵器・土師器は、6世紀末葉から7世紀中葉にかけての時期と考えられ、6世紀末葉頃に造られた横穴であるかと推定されるが、遺物の量が少なく、墓道上層からの出土であるために断定はできない。

暗灰白色砂質土上面から出土した土師器の杯と高杯は、7世紀前葉頃のものと考えられる。この面と誤道のテラス面とのレベルが一致することから、この時期に何らかの形で横穴の再利用が行われ、誤道のテラス面は、その際に誤道の一部を拡張したものであると考えられる。

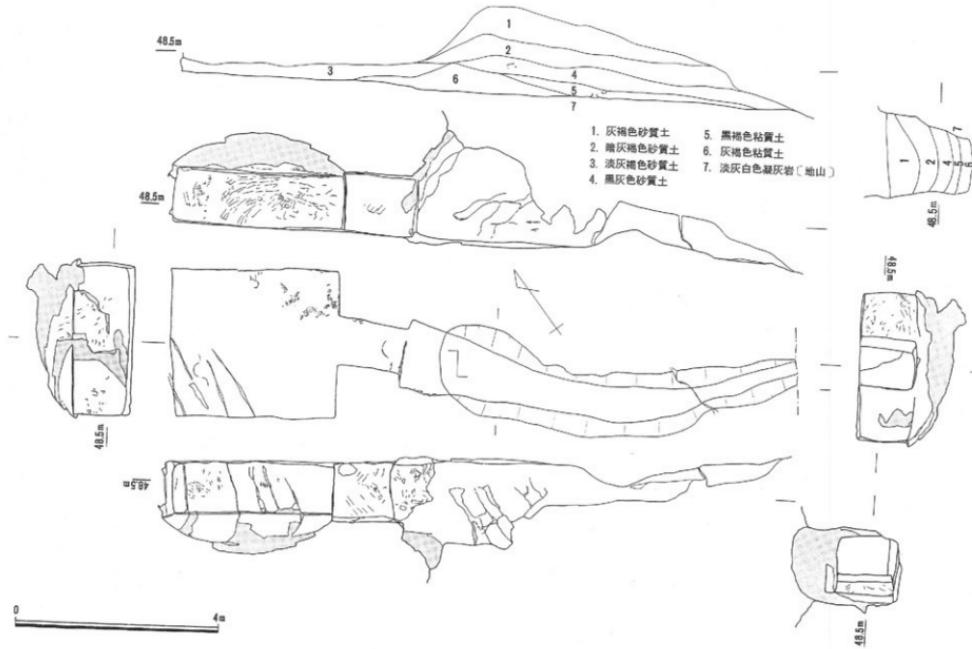


图-69 2 - 59 号 填

第2支群59号墳（図-63・64・69～73、図版62～66）

1986年度の家屋解体時に発見された横穴で、第2支群59号墳とした。家屋解体時に立ち会ったところ、家屋の建っていた位置に、直径30cm前後の穴が開いた。その穴から内部を見ると、横穴の玄室らしいと確認出来た。その後、穴を埋め戻し、整備事業に伴って、4年後に調査を実施することになったものである。

まず、レーダー探査によって玄室と推定された位置に、11トレンチを設定したが、表土直下で地山に至り、玄室天井は、ほぼ残存しているものと考えられた。そのため、羨門部を確認するべく12トレンチを設定し、羨門の位置を確認した後に墓道を検出し、墓道をほぼ全掘、その後、墓道・玄室も完掘することにした。

凝灰岩層がやや脆弱であり、天井は全面が崩落している。これに伴って、奥壁左隅部が大きく崩落、地表に穴を開けたものであることが確認された。羨門部の崩落も激しく、旧状をほとんど留めていない。また、奥壁付近と墓道端部近くの2箇所で、地割れが確認された。いずれも斜面下方、東側へ凝灰岩層が滑ったために生じたものである。

2-59号墳は、南東向きの斜面に開口し、玄室主軸はS-54°-E、墓道はS-44°-Eに開口する。

玄室は、長さ335cm、幅289cmの長方形平面を呈し、高さは165cm前後であろう。両側壁と奥壁の天井との境には、幅10cm前後の切り込み段がみられる。この段は、前壁ではみられず、1本の線となっている。天井は崩落が激しいが、扁平なドーム状を呈すると考えられる。壁面には、多数の工具痕が残されている。左側壁を観察すると、上半では向かって右から左へ、下半では左下がりの工具痕がみられ、左隅では下向きの工具痕がみられる。幅10cmの丸刃の仕上げ工具もみられるが、大半は幅5～6cmの平刃の工具痕である。床面にも明瞭な工具痕が、一部に残されている。

玄門は、角部が面取りされている以外は、何らの加工もみられない。

墓道は、玄室のはば中央に取り付くが、やや右側へ振って開口している。左側壁での長さは138cm、右側壁での長さは120cm、玄門での幅98cm、羨門での幅91cmを測る。高さは、120cmを測り、半天井である。

墓道は、周囲に20～30cm幅の平坦面を造り出している。床面には、約5cmの段がみられ、墓道側が低くなっている。

墓道は、左へ振りながらのびている。長さは8m以上を測り、調査範囲外へもう少し続いている。幅は、羨門部で135cm、端部で23cmを測る。

調査前は、玄室で約30cm、羨門付近では3m近くの土砂が堆積していた。第1層灰褐色砂質土と第2層暗灰褐色砂質土は、家屋建設時の造成に伴って流し込まれた土であり、それ以前は、2-59号墳は開口していたものと考えられる。第3層淡灰褐色砂質土は、天井の崩落に伴って堆積

した土であろう。第4～6層は、遺物を含んでおり、自然に堆積した土と考えられる。

玄室床面から須恵器皿（4・5）、高杯（6）、甌（11）が出土しており、その周辺から扁平な自然石が多数出土している。これらは棺台に使われていたものと考えられ、土器と共に、玄室奥左隅部に片付けられたものと考えられる。その周辺から土師器高杯脚部（17）、須恵器提瓶（9）も出土している。

墓道床面からは、須恵器杯身（2）、高杯（8）、提瓶（10）、壺（14）、器台（16）が出土しており、第4層黒灰色砂質土から須恵器杯蓋（1）、台付壺台部（12）、壺（13）が、第1・2層から須恵器杯身（3）、高杯（7）、甌（15）、土師器甌（18）が出土している。また、第2層からは、円筒埴輪（図16-3・5）も出土している。

出土遺物は、須恵器（1～16）、土師器（17・18）、円筒埴輪（図16-3・5）である。

杯蓋（1）は、外面に稜の痕跡を残し、回転ヘラケズリの範囲は広い。

杯身（2・3）は、内傾する比較的短い立ち上がりを有するものである。

4・5は、皿と考えられるが、珍しい器形である。底平な体部から口縁部は外方へ屈曲し、端部は丸くおさめる。4は、口径14.6cm、器高2.7cm。5は、口径14.8cm、器高2.3cm。外面は、口縁近くまで丁寧な回転ヘラケズリを施した後に、底部はハケメ、ナデを施す。内面は回転ナデ調整。壺の蓋であるかもしれない。

6～8は、無蓋高杯。6・7は長脚一段透し高杯、8は長脚二段透し高杯である。6・7は、

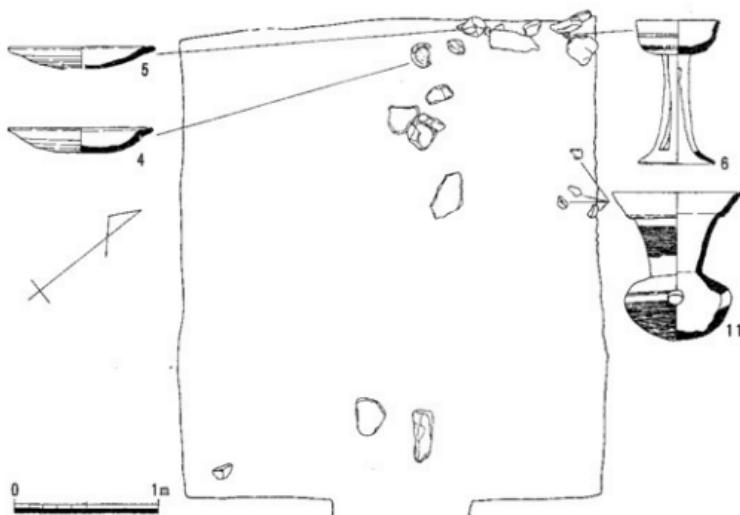


図-70 2-59号墳玄室床面遺物出土状況

細く長い脚を伴い、長方形の透し窓を三方に穿つ。脚端部直径は、口径よりも小さい。杯部口縁の外反は弱く、外面に1条の凹線と文様がみられる。文様は、6はヘラによる刺突文、7はヘラ描きの波状文である。また、7の脚部外面はカキメで仕上げている。8は、脚部中央に2条の凹線がめぐり、その上下に二段三方の長方形透し窓を穿つ。杯部外面には3条の凹線とヘラによる刺突文がめぐる。

9・10は、提瓶。9の体部は小さく、口縁は外反した後に直立すると考えられるが、端部を欠損している。把手はその痕跡から環状をなしてい

たことがわかる。一部に須恵器片が融着している。10は、大きく外方へのびる口縁を有し、把手は鉤状をなす。体部の前面から側面にかけてカキメ、背面は回転ヘラケズリ調整である。

11は、壺。体部は、やや肩の張った球形を呈し、肩部に1条の凹線がめぐる。体部下半は、カキメ調整。頸基部は太く、外反した後に段をなして再び外反する口縁に続く。頭部外面に、波状文を3回めぐらせていている。

12は、台付壺の台部。裾広がりの台部は、2条の稜線を経て下方へ屈曲し、端部はやや肥厚し、平坦な面をなす。

13・14は、広口壺。13の体部最大径は、体部中位に位置し、口縁部は直立した後に強く外反して端部に至る。外面体部下半は、手持ちヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整。14の体部は、やや肩の張った形態となり、口縁は外方へ直線的にのび、端部はつまみ上げたような凹面状をなす。外面底部回転ヘラケズリ、口縁から体部にかけてはカキメを施す。

15は、壺の口縁部。外反する口縁は端部で肥厚し、凹線がめぐる。外面には2条の凹線と、その上に2条の波状文がめぐる。内外面共に回転ナデ調整、内面の一部に同心円叩きの痕跡が残る。

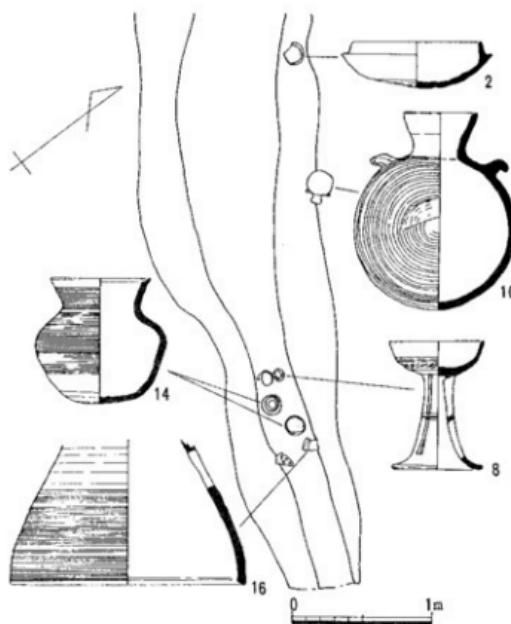


図-71 2-59号墳墓道床面遺物出土状況

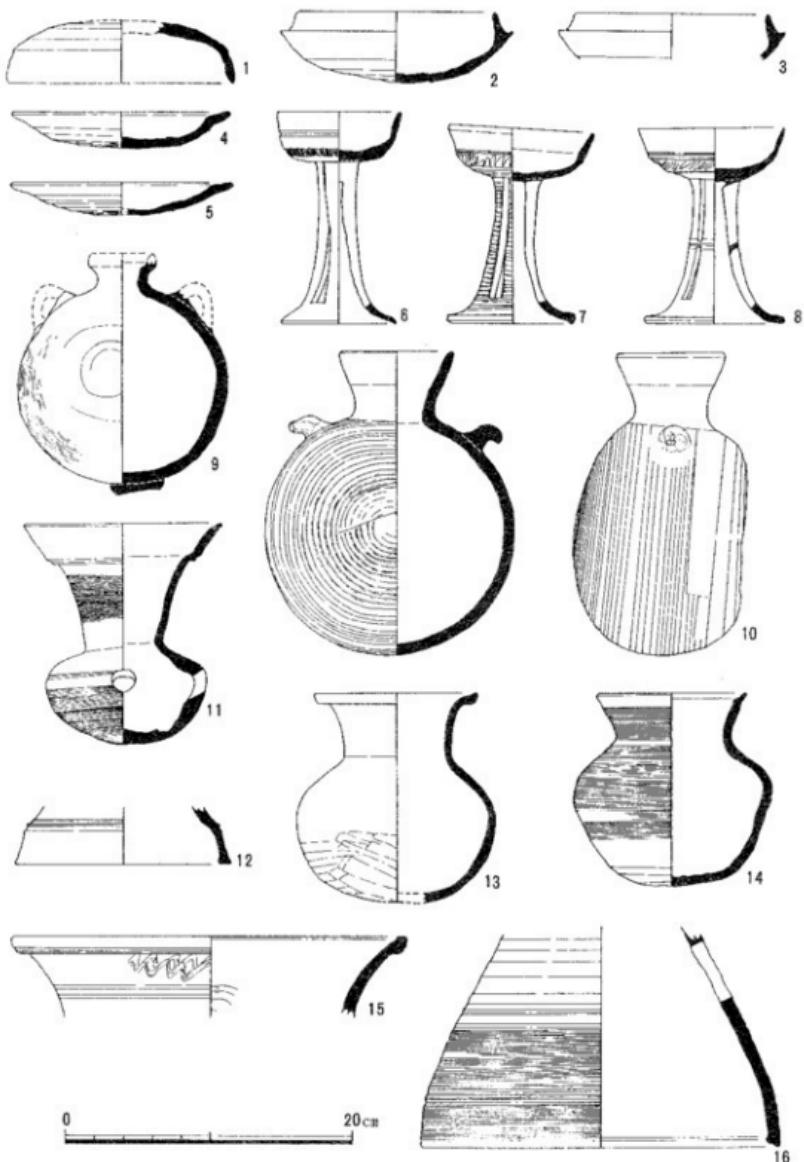


圖-72 2-59號填出土遺物①

16は、器台の脚部。脚部は内面気味に裾部へ至り、端部は内傾する面をなす。透し窓は、長方形のものを1箇所確認できるが、他は破片のため不明。外面には4条の凹線がめぐる。外面上半は回転ヘラケズリ、下半はカキメ調整。

17は、土師器の高杯脚部。裾は大きく開く。外面はナデ、裾部内面はユビオサエで調整、脚部内面にはシボリメがみられる。

18は、要。球形の体部から、口縁は外方へ直線的にのびる。口縁から体部上半は、内外面共にヨコナデ、体部外面はユビナデ、ハケメ、内面はヘラケズリで仕上げる。

円筒埴輪（図16-3・5）は、直径25cm前後を測る。口縁は、体部からまっすぐのび、端部で凹面状をなす。凸縁断面は低い台形、もしくは三角形状となる。透孔は円形。体部外面は1次調整の左上がりタテハケ、内面はハケメを基調とし、一部にユビナデ、ユビオサエがみられる。

2-59号墳の出土遺物は、6世紀中葉～後葉に位置付けられる。玄室床面から出土した遺物は6世紀中葉、墓道床面から出土した遺物は6世紀後葉と考えられ、それぞれ初葬、追葬に伴う遺物と考えたい。追葬は1～2回で、6世紀末葉以後の追葬は認められない。

第3支群8号墳（図-74・75、図版67・68・109）

第3・4支群は、1991年度に調査対象としたものである。3-2～21号墳前の道をレーダー探査したところ、約10箇所で信号が認められ、その中で横穴に関連すると考えられる信号が、5箇所で確認されている。（図63-A～E）これらの中で、信号Bが3-10号墳玄室に相当するものであることが確認できたが、他の4箇所に対応する横穴は現状では確認できていない。3-9号墳の北側に、2～3基の横穴が存在するのであろう。また、3-12号墳の玄室は、道の下まで続いているが、これに対応する信号は確認できていない。

3-8号墳は、南斜面に位置し、道に面して開口している。墓道は道をつける際に削平され、玄室内部も後世に著しく損壊を受けている。以前から、門扉を設置し、施錠して公開していたが、内部の風化が激しく、羨門上部に亀裂がはしり、落盤の危険性が生じたために、内部の実測を行なった後に、土嚢で羨門部を閉鎖したものである。開口方向は、S-22°-E。

玄室は、左側壁を除いて他は大きく破壊されている。玄室は、方形平面を呈していたと考えられ、左側壁での長さ295cm、前壁での幅は266cmを測る。高さは200cm以上と推定される。側壁の高さは130cm前後となり、側壁と天井の境には、四壁に切り込み段がみられる。切り込み段は他の例と異なり、幅10cm前後の段をなし、10cm前後垂直に立ち上がった上部からドーム状の天井へ移行する。段を明瞭にすることを意識したものであろう。

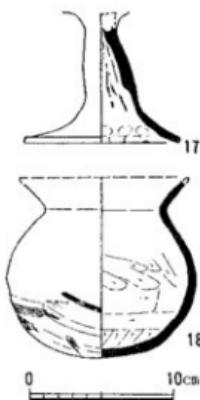


図-73 2-59号墳
出土遺物②

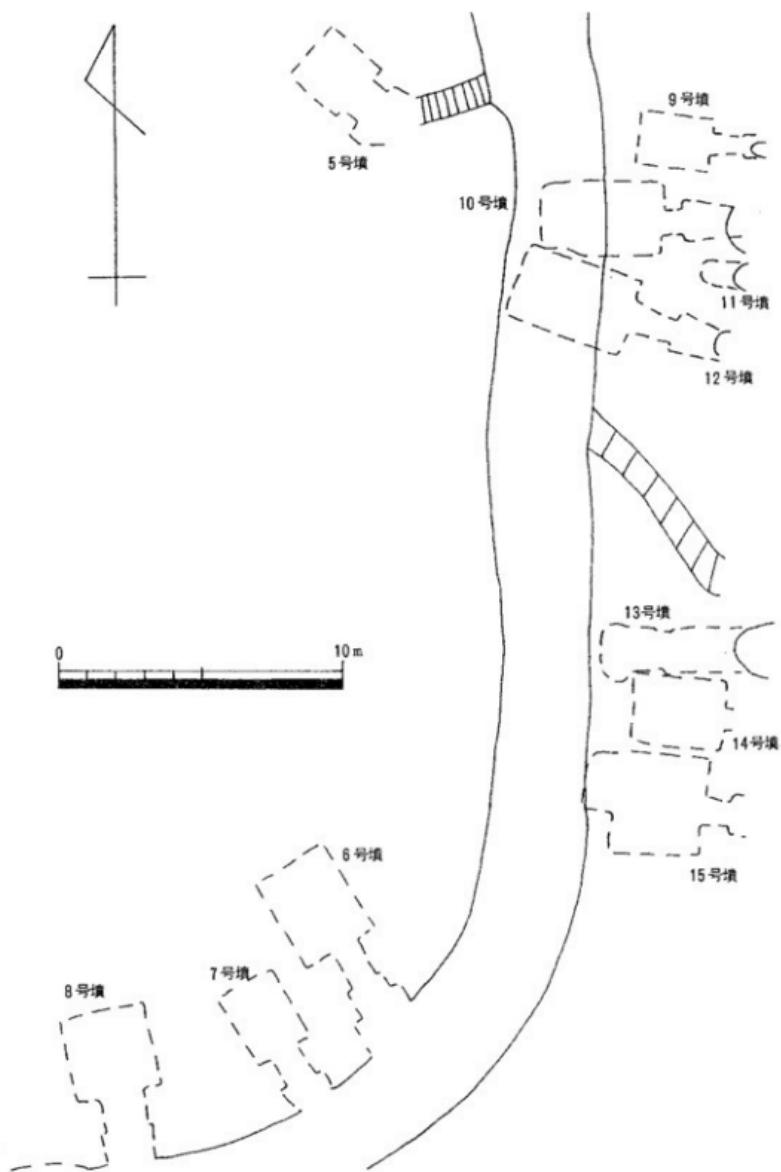


図-74 第3支群5~15号墳

玄門部も完全に破壊されており、壁面切り込み段がどのように回っていたのか、また幅状施設が存在したかどうかも確認できない。

談道部も破壊が激しく、長さは約130cm、幅は約100cmと推定される。左側壁の高さは、135cmを測る。談道は玄室の左側へやや片寄って取り付く。

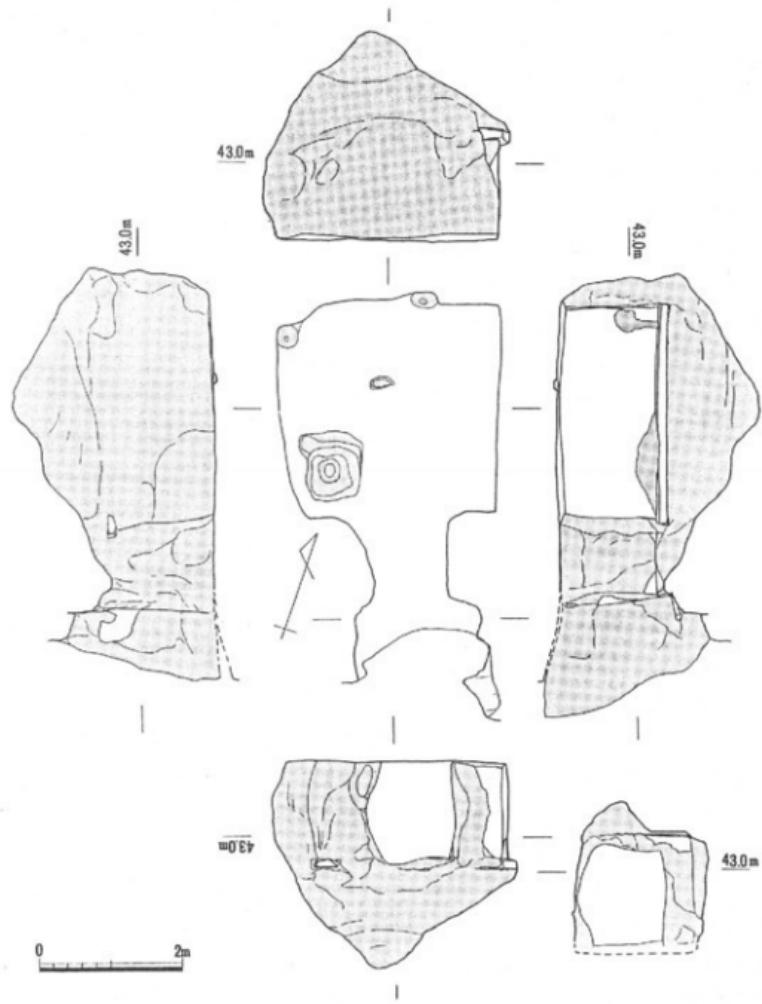


図-75 3-8号填

羨門は、周囲に幅20~40cmの平坦面を造り出している。羨門上部には平坦面が造りだされ、長さ80cm前後の天井となっていたものと推定される。

墓道は、羨門部での幅が167cmを測り、長さは160cmまで確認できるが、それ以上は不明である。

破壊された部分には工具の痕跡が残されており、人為的な破壊であったことを物語っている。玄室の壁面や天井部の破壊は、玄室内の空間を広くするためであったと考えられ、羨道部の破壊は、出入りを容易にするためのものであろう。また、床面にみられたピット状の落ち込み内に焼土がみられたことから、玄室内で火を使っていたこともうかがえる。この横穴は、大正時代になって確認されたものであり、これら一連の行為は、昭和になってからのものと思われる。調査前から床面が露出しており、埋土は認められず、遺物も全く出土していない。横穴の形態から考えると、比較的古いタイプの横穴と思われる。

第3支群9号墳（図-74・76、図版69~71）

東向きの斜面に開口する小形の横穴である。開口方向は、S-81°-E。残存状態は、比較的良好である。

玄室中央での長さ272cm、幅203cmを測り、長方形平面を呈するが、胴張り気味となり、左側壁での長さは260cm、右側壁での長さは267cm、奥壁での幅は190cm、前壁での幅は177cmを測る。天井は、平天井に近いドーム状となり、高さは140cmを測る。側壁と天井の境は、左側壁と前壁では比較的明瞭であるものの、他の2壁では、ほとんど区別できない。玄室の四隅は、明瞭に区別されるが、壁面は内傾して立ち上がり、垂直面をなさない。特に、奥壁ではこの傾向が顕著である。床面・壁面には、無数の工具痕が残されている。

玄門には、何ら特別な施設はみられない。

墓道は、玄室の中央に取り付くが、やや左へ振ってS-89°-Eに開口する。長さは100cm、幅は玄門部で75cm、羨門部で68cm、高さは120cmを測る。

羨門は、周囲に10cm前後の幅の平坦面を造り出している。羨門上部は、長さ40cm前後の平坦面が造り出され、天井を形成していたようである。また、床面には10cm前後の高さの段がみられ、墓道側が低くなっている。

墓道は、幅77cm、長さ86cmを測り、前面は自然地形の落ち込みによって断たれている。

玄室床面から墓道にかけてのびる排水溝がみられる。排水溝は、玄室中央よりやや左側に位置し、ほぼまっすぐにのびている。奥壁から63cm羨道側へ寄った位置から掘り始められており、幅は10~30cmを測る。断面は浅いU字状を呈し、深さは最大で10cmである。この排水溝内にも多数の工具痕が残されており、これらの工具痕が玄室床面の工具痕に一致することから、この排水溝が横穴掘削に伴って造られたものであることが確認できる。排水溝の床面は、緩やかに墓道に向かって下がっているが、勾配は0.5°を測るにすぎない。

一方、玄室から羨道にかけての床面では、奥壁部で最も低く、羨門部で最も高くなっている。比高差は7cmを測り、この排水溝が機能していたことがわかる。

調査前は、羨道から墓道にかけて数cm～十数cmの土が堆積していたのみであり、遺物は全く出土していない。そのため、3-9号墳の年代を決定することはできない。しかし、規模が小さく、縦長の玄室平面形を呈し、側壁と天井の区別がつかない等の特徴は、高井田横穴群内では新しい時期の横穴に多く見られるものであり、造られた時期は、古くとも6世紀末葉と考えられる。調査後、公開が困難なことから羨門部で閉鎖した。

第3支群10号墳（図-74・77、図版72～74）

3-9号墳のすぐ南に位置するが、比高差が約2mある。3-10号墳の南には、3-11・12号墳が並んで存在し、同一レベルにあることから、3-10～12号墳で小支群を形成するものと考えられる。3-9号墳もこの小支群に加えるべきかもしれないが、レーダー探査結果から、3-9号墳の北側にも2～3基の横穴が存在することが予想され、比高差の大きい3-9号墳は、これらの横穴と小支群を形成するものと考えたい。

3-10号墳は、造り付け石棺を有する横穴で、N-89°-Eに開口する。

玄室奥壁に造り付け石棺が存在し、石棺を含めた玄室の長さは424cmを測り、石棺を除くと、左側壁長332cm、右側壁長312cmを測る。玄室の幅は、石棺の前面で290cm、前壁部で270cmを測り、やや不整形な長方形平面となる。両側壁と前壁には、側壁と天井の境に幅12cm前後の切り込み段がみられる。天井はドーム状となり、高さ185cmを測る。奥壁においては、壁面に切り込み段が存在しないため、両側壁より約30cm低い位置からドーム状の天井に移行する。

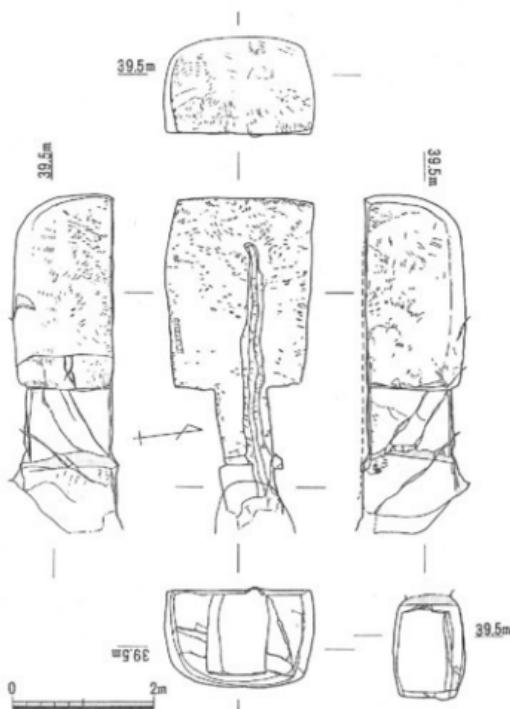


図-76 3-9号墳

造り付け石棺は、両側壁から17cm内側に、立体的に造られている。外法は長さ240cm、幅100cm、高さ90cm、内法は長さ200cm、幅60cm、深さ60cmを測る。石棺の両小口と奥壁の上面は、壁面と10cm前後の間隔をとり、5cm前後の高さに造り出すことによって、立体的な外観に造られている。玄室側壁にみられる切り込み段は、石棺部分のみ、幅を広くしている。上面が一部破壊されているが、比較的残存状態は良好で、立体的な外観を意識して丁寧に造られた造り付け石棺である。

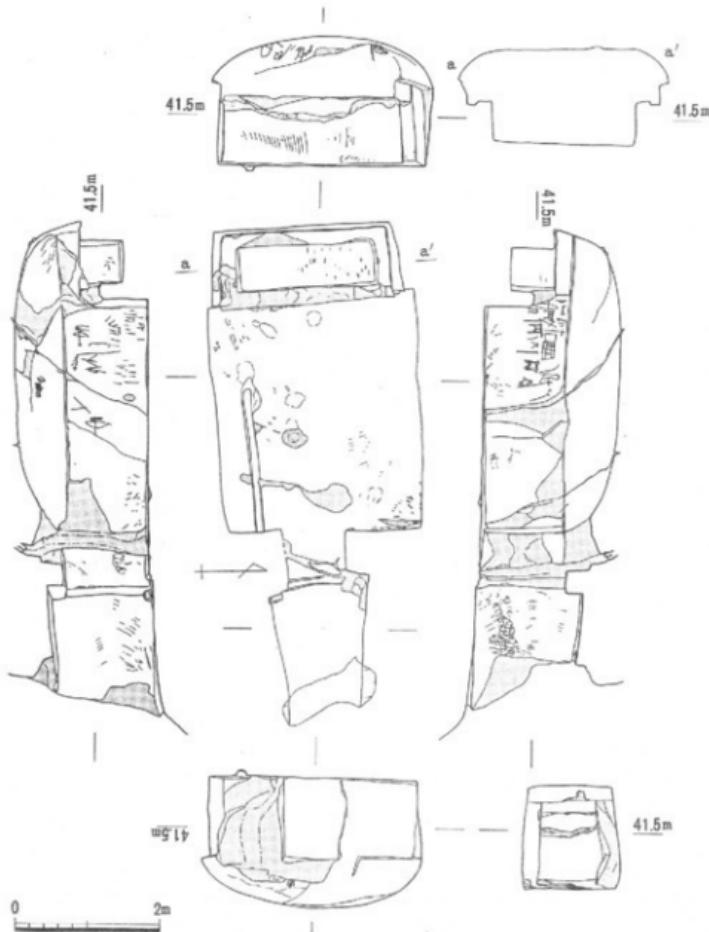


図-77 3-10号墳

右前壁から墓道にかけては、樹根の生長によって大きく損なわれている。そのため、玄門上部の構造が明瞭ではないが、左前壁においては、左側壁から続く壁面の切り込み段が、玄門から27cmの位置で右上がりに立ち上がり、高さ27cmの位置で消滅している。右前壁も同様な構造と考えられる。

墓道は、玄室の中央よりやや右寄りに取り付く。長さは77cmと短く、幅は玄門で90cm、墓門で80cmを測る。高さは120cm前後と推定される。

墓門の左右には、幅30cm前後の平坦面が造り出され、墓門上部にも幅25cmの平坦面が造り出されるが、上部の平坦面は、左右の平坦面より2～3cm高く造られており、棺蓋に立体感をもったものとなっている。床面は、墓門部とやや玄室に寄った位置で、それぞれ3cm前後の段をなしている。また、墓道南西隅に当たる床面には、幅17cm、奥行10cm、高さ10cmの柱状に造り出された部分がみられる。北西隅は破壊されているため不明であるが、やはり存在したものと考えられる。3-29号墳、4-27号墳にも同様な施設がみられる。

墓門上部から墓道にかけて、現存長100cmの平坦な天井部がみられる。天井は若干前方へ向かって下がっており、本来は130cm前後の長さであったと考えられ、墓道部にかかる天井としては長いものである。墓道は墓門部で幅140cm、端部で100cmを測る。長さは192cmを測り、その前面は自然地形の落ち込みによって断たれている。

玄室の床面には、溝状の遺構がみられる。右側壁から約40cm離れ、右側壁に平行にのびている。排水溝かと思えるが、右前壁部で終わっているため、排水溝としての機能は果たしていない。長さ216cm、幅は12cm前後、断面は台形状となり、深さ7cmを測る。

玄室内には、多数の線刻画がみられる。明瞭なもののみ図化したが、弓矢・大刀・槍などの武器が多く、また、これら武器を持つ人物が数体描かれている。それ以外にも、木の葉、樹木等の線刻画がみられる。

調査前から墓道・玄室の床面は露出しており、墓道に10cm程度の土砂が覆っていたのみであり、遺物は全く出土していない。そのため、3-10号墳の時期は不明であるが、細部の丁寧な加工等から考えると、比較的古い時期のものではないかと考えられる。

第3支群11号墳（図-74・78～80、図版75～78）

3-10・12号墳の中間に位置する未完成の横穴である。墓道掘削段階で放棄されたものと考えられる。主輪は、S-86°-Eである。

平面は長方形状となり、長さ165cm、幅92cmを測る。天井は入口部で最も高く、144cmを測り、奥へ向かって徐々に低くなっている。

各壁面には、無数の工具痕が残されている。工具は大半が幅5cm前後の平刃工具で、若干幅の広い工具もみられる。奥壁では上から下へ向かっての工具痕がみられ、奥へ掘り進めている状況がうかがえる。両側壁は、奥壁へ向かって斜め下がりの工具痕がみられ、幅を確保しつつ、

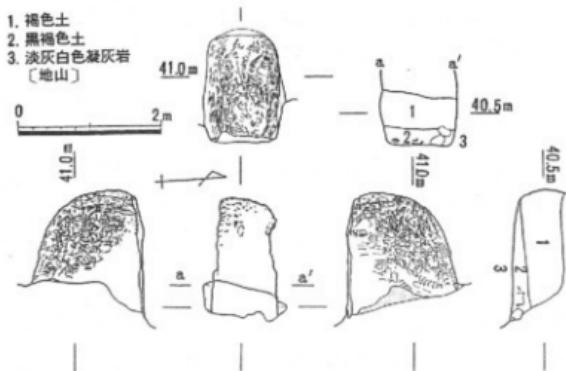


図-78 3-11号墳

奥へ向かって掘り広げ
ている状況がうかがえ
る。

調査前には、約70cm
の土が堆積していた。
上層の褐色土からは、
あまり遺物が出土して
いないが、下層の黒褐
色土からは、多量の自
然石と共に、多くの遺
物が出土している。土
器の残存状態は良好な

ものが多く、すべて自然石の下から出土している。自然石は花崗岩が多いが、凝灰岩もみられる。床面から出土した遺物は、須恵器杯蓋（1～6）、杯身（7～10）、高杯（12）、土師器高杯（13）、鉢（14）である。須恵器杯身（8）、杯身（9）、杯蓋（2）は、杯蓋のみ倒立させ、上からこの順で3個重ねた状態で出土している。須恵器杯蓋（5）と杯蓋（6）も、倒立状態で重なって出土し、須恵器杯身（7）と高杯（12）は、高杯が杯身の上に正立した状態で出土している。須恵器杯蓋（1）と杯蓋（4）も重なった状態で出土している。

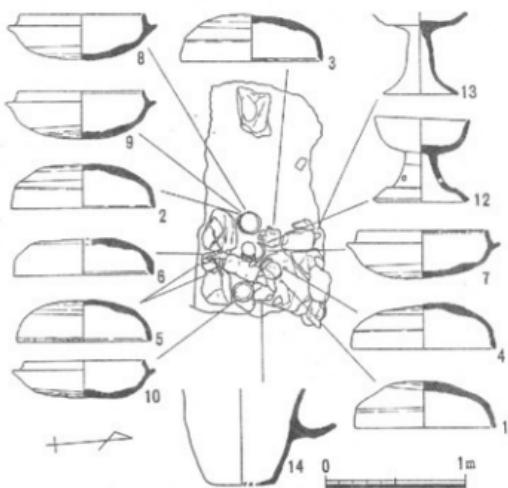


図-79 3-11号墳遺物出土状況

出土遺物は、須恵器・土師
器以外に円筒埴輪もみられる。

須恵器杯蓋（1～6）は、
外面に稜の痕跡が認められる
もの（1～4）と認められな
いもの（5・6）があり、端
部内面に沈線状の段が認めら
れるもの（2・3・5）もみ
られる。1の外面天井部には
ヘラ記号が、2～4の内面天
井部には同心円叩きの痕跡が
みられる。すべて外面天井部
は回転ヘラケズリ調整であり、
5の口縁端部外面には、工具
で押された跡がみられる。

杯身（7～10）は、内傾する比較的短い立ち上がりを有するもので、立ち上がりの端部内面に沈線を伴うもの（7・9）がみられる。内面底部に同心円の叩きがみられるもの（7～9）がみられ、これらは、2～4の蓋のいずれかとセットをなすと考えられる。

11・12は、高杯。11は長脚二段透しの脚部下半。三方の長方形透し窓がみられる。12は、短く外方へ大きく張り出す脚部を有するもので、3箇所に小円孔が穿たれる。杯部は深く、無文。

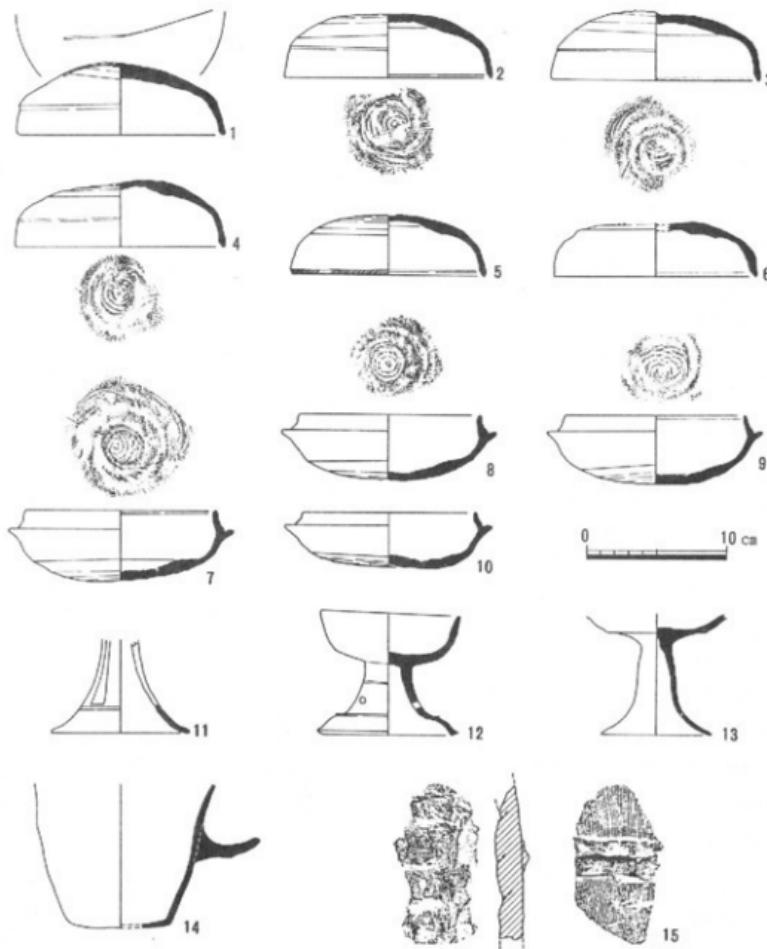


図-80 3-11号墳出土遺物

13は、土師器の高杯。杯部外面には段がみられ、脚部は裾広がりとなる。表面剥離のために調整は不明であるが、おそらくナデであろう。

14は、把手付きの鉢。底部は平底、体部は斜上方に立ち上がり、口縁端部を欠損している。把手は緩やかに内湾する。表面剥離が激しく、調整は不明である。

15は、円筒埴輪片。凸帯断面は、低い三角形状となる。粘土帯の幅は約3cmで、内面には積み上げ痕が明顯に残る。外面は1次調整のタテハケがみられるが、下部にはハケメに先行するナデがみられる。内面は縱方向のナデ調整。

須恵器は、6世紀中葉から後葉にかけての時期と考えられる。問題は、これらの遺物が2-11号墳に伴うものであるか否かである。2-11号墳は、前述のように未完成であり、土器や自然石の出土した部分を除くと、平面的には埋葬スペースはみられない。また、各土器が重ねられて出土している点、土器の周囲、あるいは上に多数の自然石が置かれている点などは、出土状況として不自然な印象を与え、ある時期に、他の横穴内にあった土器や閉塞石を2-11号墳に片付けたものではないかという疑問が浮かんでくる。あるいは、埋葬が行なわれなくとも、何らかの祭祀行為が行なわれた痕跡なのであろうか。問題の残る遺物である。

第3支群12号墳（図-74・81～84、図版79～81）

3-10・11号墳の南、同一レベルに位置する横穴である。玄室奥壁に造り付け石棺がみられ、開口方向は、S-70°-Eである。

玄室は、造り付け石棺を含めて考えると長方形平面、これを除くと正方形平面となる。長さは、造り付け石棺を含むと418cm、これを除くと283cmとなる。幅は288cm、高さは180cmを測る。奥壁を除いた3面には、側壁と天井の境に幅8cm前後の切り込み段がみられる。天井は扁平なドーム状を呈する。

造り付け石棺は、外法の長さ257cm、幅128cm、高さ96cm、内法の長さ214cm、幅74cm、深さ60cmを測る。底面は北端が南端より8cm高くなっている、幅も北端では南端より4cm広くなっている。北頭位を意識したものであろうか。石棺は、両側壁より約10cm内側に造られている。また、壁面の切り込み段は、石棺の位置で約5cm低くなっている。しかし、3-10号墳でみられたような上面を高く造り出して立体的にみせる加工は施されていない。

前壁では、側壁から続く切り込み段が、玄門の位置でやや上がり気味に終わっている。また、左前壁から玄門上部にかけて、わずかに舌状に突出させた加工がみられる。右前壁には、このような加工は認められないが、楕状の構造を意識したものであろう。

渡道は、玄室のほぼ中央に取り付き、長さは160cmを測る。幅は、玄門部で108cm、渡門部で87cmを測る。天井は、渡道中央で最も高く、渡門部で最も低くなるが、形状としては平天井である。高さは、最も高い部分で129cmを測る。玄門から56cm渡門に寄った位置に亀裂がみられ、天井から床面まで、一部は墓道まで続いているようである。

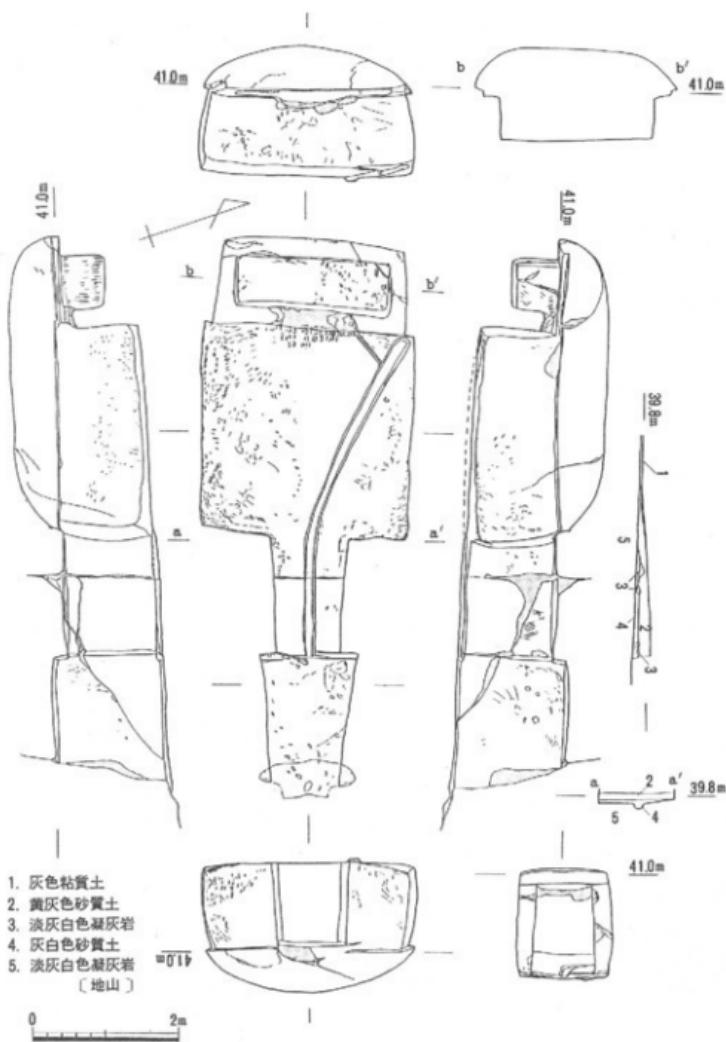


圖-81 3-12号墳

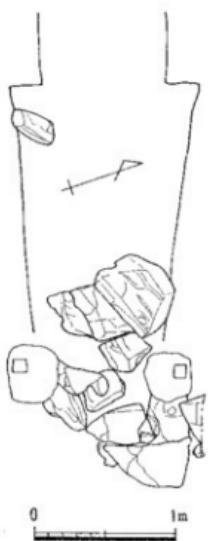


図-82 3-12号墳墓道
閉塞石検出状況

羨門部両側には、幅25cm前後の平坦面が造り出されている。また、羨門上部には、羨門左右よりも約3cm高く、18cm前後の幅の平坦面が造り出されている。床面には、羨門部と羨門部から10cm入口へ寄った位置の2箇所に段がみられる。それぞれ1cm、5cm程度の小さい段で、墓道側が低くなっている。

墓道は、羨門部で135cmの幅を測る。長さは200cmを測り、前面は自然地形の落ち込みによって断たれている。端部での幅は92cmを測る。羨門上部から続く天井は、羨道と同様に中央で最も高く、前面で最も低くなる。最も高い位置で、天井の高さは155cmを測り、長さは140cmを測る。

玄室北西隅から玄門中央を通り、羨門部へのびる排水溝がみられる。幅は15~20cm、台形断面を呈し、深さは5cmである。また、玄室北西隅近くで、この排水溝から直角にのびる幅5cm、長さ56cm、深さ3cm程度の小さい排水溝もみられる。排水溝の底面は、32cmの比高差で墓道側が低くなっている。玄室床面も、奥と羨門部では20cmの比高差がみられるため、排水溝がなくとも排水は可能であったと考えられるが、わざわざ造られており、どの程度機能したものかどうか疑問である。

墓道端部周辺から、十数個の自然石が出土している。石材は花崗岩を主としており、閉塞石に使用されていたものではないかと考えられる。

調査前は、玄室内で数cm、墓道で約30cmの土砂が堆積していた。埋土内からは、少量の遺物が出土しているが、いずれも小片である。須恵器高杯（1・2）は玄室内から、高杯（3）は玄室から羨道にかけて、短頸壺（4）は墓道から出土している。これらの遺物以外に、須恵器高杯・器台、土師器高杯・甕、円筒埴輪などの小片が出土している。

1は、無蓋高杯。外面に1条の凸線がめぐり、その上下にカキメが施される。2も無蓋高杯。外面には、幅の広い刺突文がみられる。3は、長脚二段透しの高杯脚部。脚部中央に2条の凹線

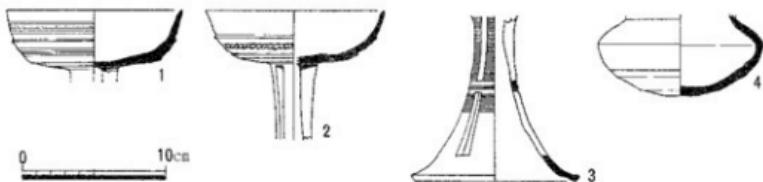


図-83 3-12号墳出土遺物①

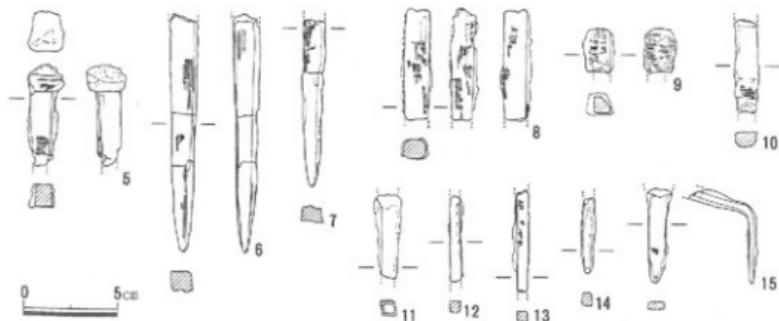


図-84 3-12号墳出土遺物②

がめぐり、その上下に二段三方の長方形透し窓が穿たれる。外面カキメ調整。1・2も、三方に長方形の透し窓を穿つものである。4は、小形の短頭壺である。肩部は強く張る。底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。

鉄製品は、大形の釘（5～11）、小形の釘（12～14）、鎌（15）がある。大形の釘は、1辺1cm前後の方形断面を呈し、頭部は一方を折り曲げ、上面が台形となる。6の現存長は12.5cmを測り、実長は15cm前後であろう。小形の釘は、1辺0.6cm前後の方形断面を呈する。鎌は爪部の長さが3.5cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmを測る。縦方向の木目が残るもの（6・7）、横方向の木目が残るもの（5・9・10・13・15）、横方向と縦方向の木目が残るもの（8）がみられる。

出土土器が少ないため、3-12号墳の時期は確定できないが、6世紀後葉にその1点があることは間違いない。3-10号墳と3-12号墳は、その形態が酷似しており、両横穴が強い関係を有していることがうかがえる。しかし、3-10号墳から遺物が出土していないため、両横穴の前後関係が確認できない。玄室平面は、3-10号墳では縦長の長方形であるが、3-12号墳では方形であり、玄室平面のみから考えると、3-12号墳のはうが先行するかと考えられる。しかし、玄室壁面の切り込み段は、3-10号墳のはうが幅広く造られており、造り付け石棺の加工も3-10号墳のはうが丁寧である。このように、全体に丁寧に造られている3-10号墳のはうが、3-12号墳に先行する可能性が高いように思われる。いずれにしても、両横穴の造られた時期は非常に近いと考えられ、6世紀中葉～後葉の短い期間に、おそらく3-10号墳、3-12号墳の順に造られたものと考えたい。その中に位置する未完成の3-11号墳は、そのまま掘り進めると3-10・12号墳の玄室に当るので、両横穴に先行する可能性が考えられる。いずれにしても、3-10～12号墳は小支群を形成するものであり、3-10号墳と3-12号墳にみられるように、小支群内での酷似する横穴の例として注目される。隣接する3-9号墳や3-13号墳とは全く異なっているため、小支群ごとの特色を重視する必要性が感じられる。

第3支群13号墳（図-74・85～87、図版82～85）

東向きの急斜面に位置し、後世に穿たれた穴によって、3-14・15号墳と通じている。非常に変則的な平面形を呈する未完成横穴で、S-89°-E、すなわち東向きに開口する。

まず、葬道と呼ぶべき部分が、左側壁と右側壁で大きく異なっている。左側壁では、長さ42cmの柱状の葬道部分がみられ、右側壁では、長さ128cmの葬道部分がみられる。天井は、左側壁の葬道に対応する部分のみ一段低く造られており、その位置から玄室にかけては、ドーム状の曲線を描く。この事実から、左側壁の柱状部分を葬道として意識していたものと考えたい。このように考えると、葬道の幅は146cm、高さは128cmとなり、非常に幅が広く、短い平面形を呈している。側壁と天井の境は不明瞭で、天井はアーチ状となる。

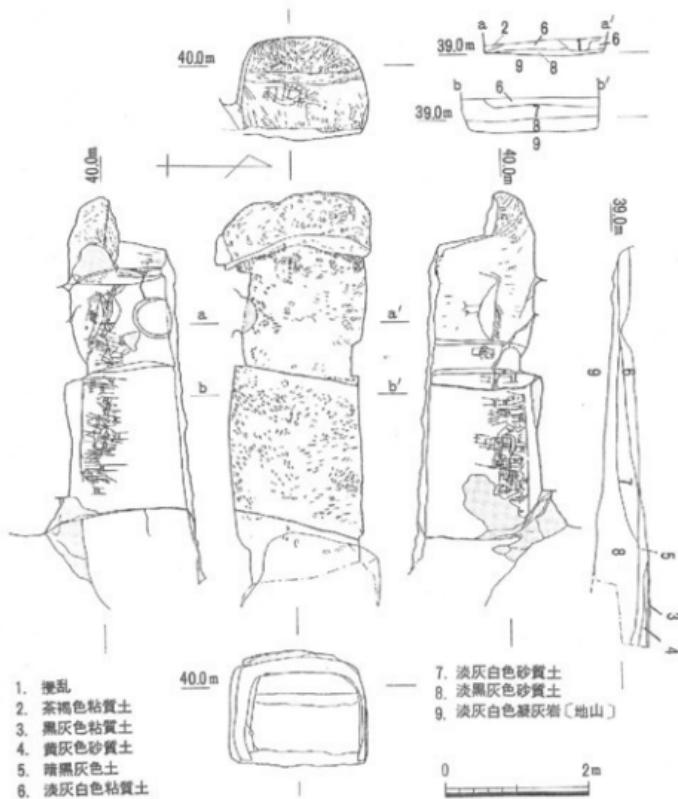


図-85 3-13号墳

羨道を以上のように考えると、玄室の長さは210cm、幅は最大で212cm、高さは147cmを測る。玄室の奥側には、高さ70cm、奥行60cmの段をなす部分がみられる。これは、玄室を数回の工程によって掘り進めたために生じたものか、あるいは造り付け石棺を造ることを意図していたのかのいずれかであろう。いずれにしても、未完成であるために、平面は不整形、壁面も凹凸が激しい。未完成であるためか、側壁と天井の境も不明瞭で、床面からドーム状に立ち上がっていいる。

羨門は、左側で3~10cm、右側で15~20cm、上部で20cmの幅の平坦面を造り出している。高さは128cm、アーチ状を描く。

羨道は、長さ308cm以上を測り、幅は羨門部で170cmを測る。側壁と天井の境は比較的明瞭であり、天井はアーチ状を呈する。高さは羨門部で152cm、前面で172cmを測る。前面は、かなり崩壊しているが、復元すると、天井の長さは230cm前後と推定される。

玄室壁面と床面全体には、無数の工具痕が残されている。非常に深い平刃の工具痕であり、床面の凹凸も激しい。床面は4°前後の勾配であるが、もう少し掘り下げて平滑にする予定だったと考えられる。羨道・羨道の壁面は平滑に仕上げられており、玄室掘削段階で放棄された横穴である。

右側壁の一部に、直径54cmの穴が開けられ、3-14号墳に通じている。壁の厚さは約25cm、3-13号墳の側から後世に開けられたものである。この穴は、3-14号墳の玄室左奥隅近くの側壁と天井の境付近に開いている。3-14号墳の玄室は、1m近く埋没しており、羨道も埋没しているが、この穴を通じて出入りが可能である。

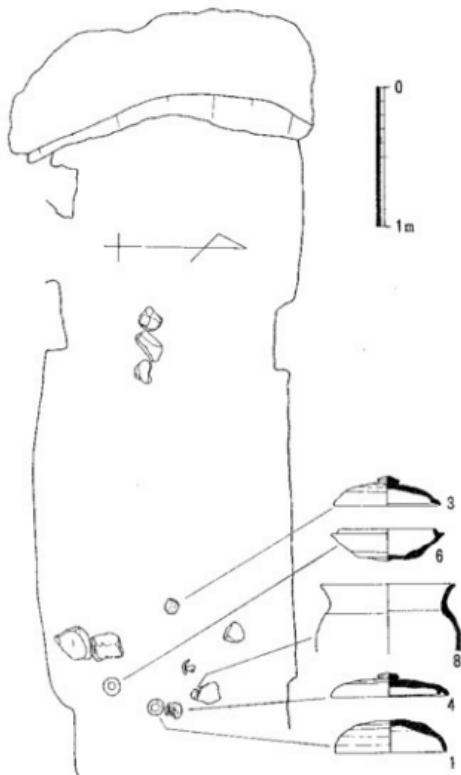


図-85 3-13号墳遺物出土状況

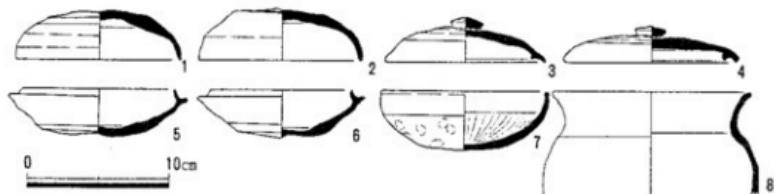


図-87 3-13号墳出土遺物

裏面には、多数の線刻画が描かれている。玄室左側壁・奥壁下部・狭道右側壁には、よく似た鳥が描かれている。特に、玄室左側壁の鳥は大きく、明瞭に描かれている。狭道左側壁には、駒が描かれ、墓道の両側壁には多数の鳥居状の線刻画がみられる。これらの線刻画が、いつの時期に描かれたものかは問題の残るところであるが、駒などは、単なる落書きとして描かれるようなものとは思えない。

調査前には、20~80cmの土に覆われていた。これらの埋土の中で、最下層にあたる第8層淡黒灰色砂質土から遺物が出土している。出土遺物は、須恵器・土師器であり、すべて墓道東寄りの部分から出土している。これらの遺物は、原位置を留めているとは考え難いが、いずれも残存状態の良好なものである。

1~4は、須恵器杯蓋。つまみを伴わないもの（1・2）とつまみを伴うもの（3・4）がみられる。1・2の外面天井部は、回転ヘラ切り後に雑なナデを加えたものである。3・4は、内面に短いかえりを伴う。

5・6は、須恵器杯身。どちらも内傾する短い立ち上がりを有し、底部外面は回転ヘラ切り後に雑なナデを加える。

7は、土師器の杯。口縁は、やや内湾氣味に端部で肥厚する。外面は指頭調整、内面はナデ、口縁部はヨコナデ調整。内面に放射状暗文を施す。

8は、土師器の甕。口縁部は外反する。体部は、内外面共にナデ調整、口縁部はヨコナデ調整。口径は13.8cmである。

出土遺物の時期は、7世紀初頭～後葉と考えられ、遺物のみから考えると、3-13号墳は、7世紀初頭頃に造られ、2回程度の追葬がなされていると考えられる。また、床面から自然石が数個出土しており、閉塞石の可能性も考えられる。

3-13号墳は、未完成ではあるが、遺物が出土しており、埋葬が行なわれた可能性が高いと考えられる。しかし、棺釘が全く出土しておらず、埋葬がなされたとすることに疑問も残る。いずれにしても、不整形な平面形態を呈することから、出土遺物にみられるように7世紀に下る横穴ではないかと考えられ、高井田横穴群内では、最も新しい時期の横穴の一つに数えることができる。

第3支群15号墳（図-74・88、図版86・87）

3-13・14号墳の南、東向きの急斜面に位置する。開口方向は、S-87°-Eで、ほぼ東向きに開口する。3-15号墳は、羨道が埋没しており、公開を予定していたものではないが、3-14号墳と接する部分が大きく破壊されていること、そのために3-13号墳から3-14号墳を経て3-15号墳玄室に入りできること、造り付け石棺を有する横穴であることなどの理由によって、現状のままで実測のみ実施することにした。3-14号墳と接する玄室左側壁は幅220cm、高さ80cmの穴が開けられており、その周囲の破損が著しい。他の部分は、比較的良好に遺存しているが、造り付け石棺の東壁は完全に破壊されている。

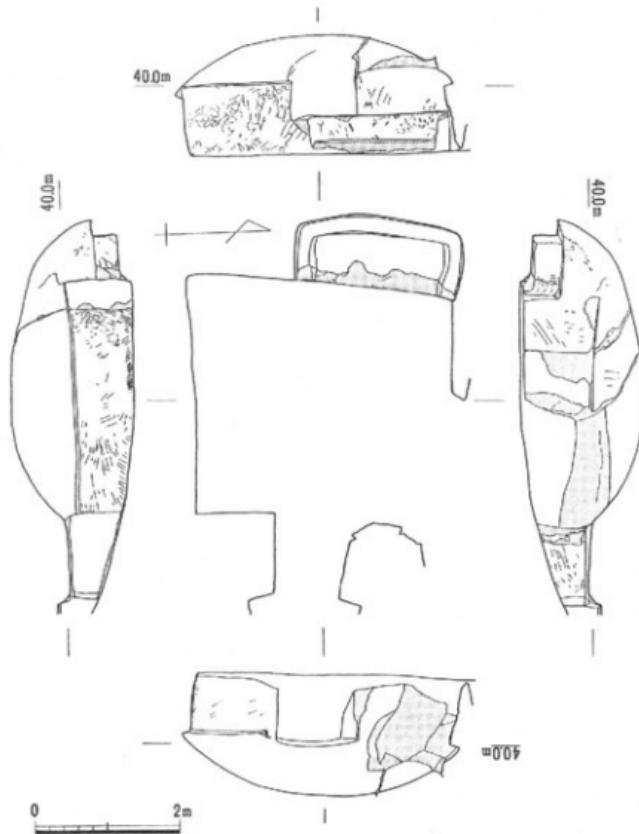


図-88 3-15号墳

玄室は、造り付け石棺を除いた長さが330cm、奥幅が368cmを測り、やや横長の長方形平面を呈する。壁面と天井の境の切り込み段は、左右両側壁と奥壁の石棺以外の部分、右前壁にみられる。左前壁は破壊のために不明である。段の幅は比較的広く、13cm前後を測る。玄室内には数cm～30cm程度の流入土がみられ、高さは現状で170cmを測るが、実際は180cm前後のようにある。天井はドーム状を呈し、石棺部分では傾斜が緩やかになる。

造り付け石棺は、奥壁左半分に認められ、壁面へ掘り込まれた形態をとる。石棺上面の3周は、浅い溝状に穿たれており、3-10号墳の造り付け石棺と同様に立体感を出すためのものと考えられる。外法の長さは224cm、幅は98cm、高さは50cm、内法の長さは180cm、幅は北側で約60cm、南側で約50cm、深さは35cmとなる。北側の幅が広いので、北頭位を意識して造られたものかもしれない。石棺上面は、壁面の切り込み段より約50cm低いが、石棺部分の天井は、石棺上面よりドーム状に傾斜している。

右前壁の切り込み段は、玄門から13cmの位置で上方へ約10cm立ち上がる。樋状の構造を意識したものであろうか。玄門には、これ以外には施設はみられない。

羨道は、玄室のほぼ中央に取り付く。長さ112cm、幅は玄門部で110cm前後と推定され、羨門部では90cmを測る。高さは、現状では80cm、実際には110cm前後であろう。

羨門の左右には、幅30cm前後の平坦面が造り出され、羨門上部は左右より3cm前後高く、幅20cm前後の平坦面が造り出されている。

羨門部での墓道の幅は155cmを測り、羨門上部から続く平坦な天井を作り。

3-15号墳は、未調査であるため、その時期を確定することはできない。しかし、壁面の切り込み段が広い幅を有することから、比較的古い時期の横穴ではないかと推定される。奥壁にみられる造り付け石棺は、その位置、天井の傾斜等から、横穴完成後に造られたものではないかと考えられる。天井や壁面に拡張を示す確たる痕跡は残されていないが、そのように考えるのが妥当と思われる。ただし、後に造られたものであっても、完成後、あまり時間を経ることなく造られたものと思われる。

3-15号墳に隣接する3-14号墳は、玄室の壁面と天井の境に切り込み段がみられない横穴のようであり、3-13～15号墳が小支群をなすと考えるならば、3-15号墳→3-14号墳→3-13号墳の順に造られた可能性が高いと考えられる。しかし、3-14・15号墳は未調査であり、周辺には埋没している横穴の存在が予想されることから、断定は控えたい。

また、3-9～15号墳には、墓道に天井を有するという共通の特徴がみられる。これは、横穴が急斜面に位置していることから、玄室を安定して造るために、墓道を斜面に深く掘り込まなければならなかったためと考えられるが、第2支群でみられたような羨門上部に高い平坦面を造り出すような例と対比して、この周辺の横穴の特徴の1つとして把握することができるであろう。

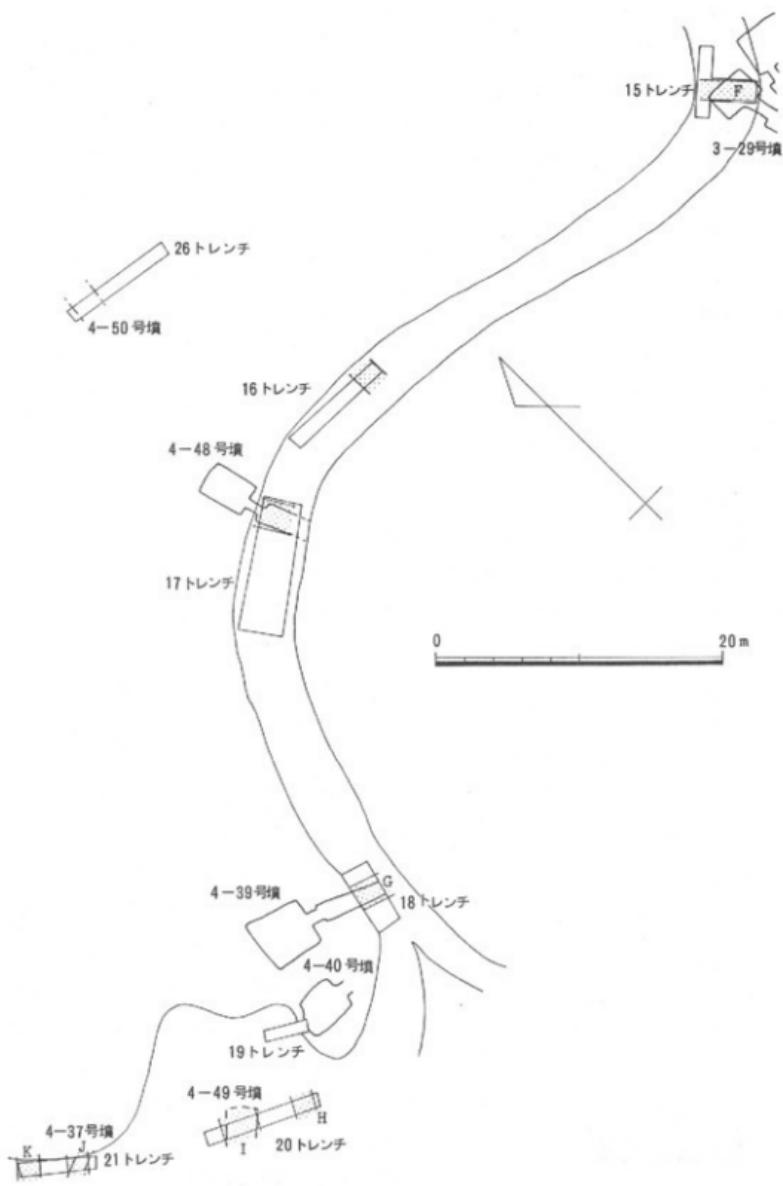


図-89 レーダー探査信号地点位置図

第3支群29号墳（図-89～96、図版88～94・110）

レーダー探査によって信号（F）が確認されたため、15トレンチを設定し、試掘調査を行なったが横穴を確認できなかったその地下に3-29号墳玄室が存在した。3-29号墳は、整備工事に伴って、道路面を重機によって整地中に直径120cmの穴が開いたことによって、発見されたものである。穴は玄室の天井部が陥没したことによって生じたものであることが確認され、現状の把握と保存方法について検討するため、羨門を確認し、墓道から調査を実施することにした。3-29号墳は南東へ張り出す尾根の先端部に位置し、開口方向はS-1°-E、南向きに開口する。玄室内は、以前からかなり崩落していたようであり、天井は全壊、左右両側壁の一部と奥壁の大半も損壊している。

玄室は、玄門側がやや広く、弧を描いた横長の長方形平面を呈する。玄室中央では、長さが256cm、幅が318cmを測るが、各壁面の長さは、左側壁220cm、右側壁240cm、奥壁303cm、前壁336cmとなる。側壁と天井の境には、四壁に切り込み段がみられる。天井は大きく損壊しているが、ドーム状を呈すると考えられ、高さは180cm前後と推定される。

玄室奥壁に沿って、幅12cm前後の溝が長方形にめぐらしている部分がみられる。これは、棺台と推定され、台状に造り出された部分の長さは175cm、幅は44cmを測り、木棺を安置するのに適した大きさである。溝は、断面が台形を呈し、深さは6cm前後であるが、排水機能をもっていないため、棺台を区画した溝と考えたい。なお、棺台部と玄室床面との比高差はみられない。

玄門部では、左右の前壁の切り込み段が、玄門から17cmの位置で立ち上がり、凸部をなしている。上部が損壊しているために詳細は不明であるが、楕円状の凸部が存在したものと考えられる。

羨道は、玄室のやや左寄りに取り付き、細長い平面形を呈する。長さは123cm、幅は玄門部で84cm、羨門部で71cm、高さは141cmを測る。

羨門の左右には、幅35cm前後の平坦面が造り出され、上部には、左右の平坦面よりやや高く、幅24cm前後の平坦面が造り出される。羨門部床面の両側壁に接する位置には、台状の施設が造り出されている。左側壁側は、長さ56cmの平坦面を有し、高さ15cmを測る台部で、傾斜は緩い。右側壁側は、36cm四方、高さも36cmの立方体状の台部で、垂直に近く立ち上がっており、左右で、その形態は若干異なる。どのような目的のために造り出された施設であるかは不明である。



図-90 第3支群29・30号墳

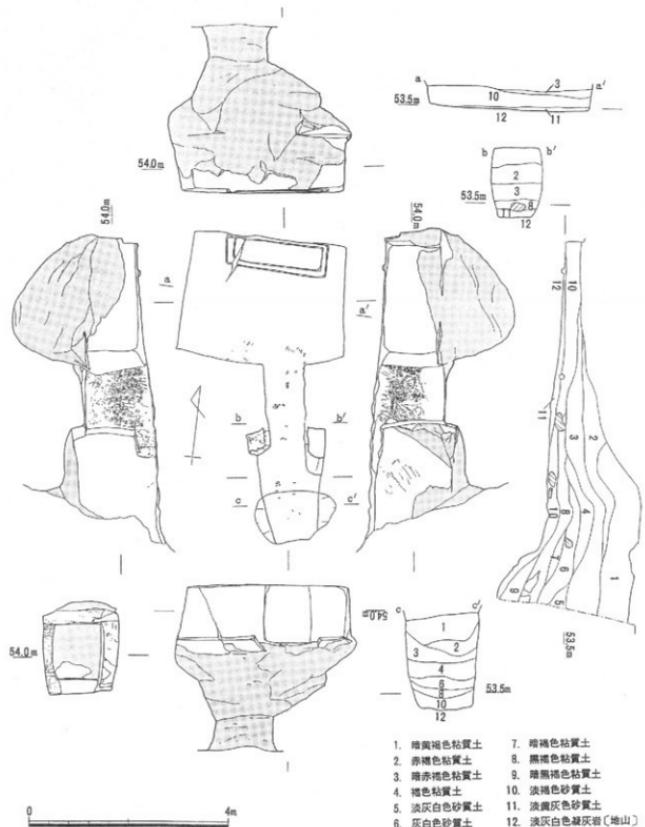


图-91 3-29号 墓

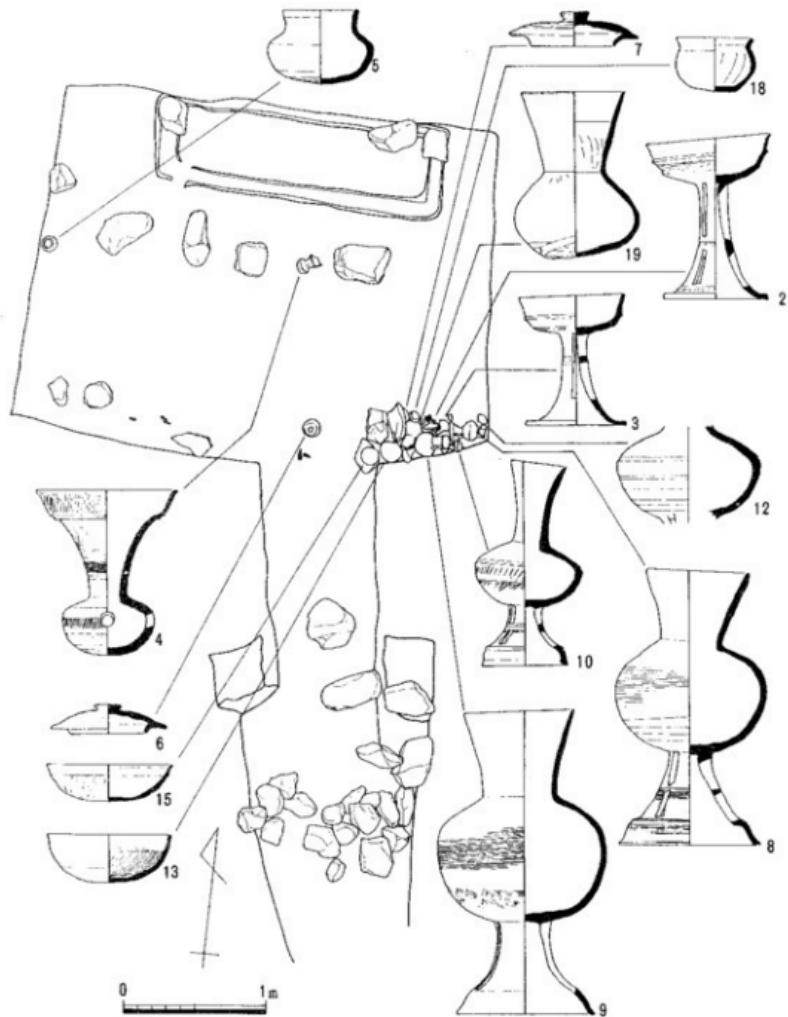


图-92 3-29号坑遗物出土状况

墓道は、長さ232cmを測り、その前面は3-30号墳の墓道壁面となって落ち込んでいる。この壁面には、ステップ状の施設が認められる。幅は羨門部で159cm、端部で84cmを測る。羨門上部から墓道にかけては平坦な天井が造り出されていたようであり、天井の長さは140cm前後を測る。墓道も天井を中心に損壊がみられる。

羨道から墓道にかけての床面には、かなり凹凸がみられる。また、羨道側壁には多数の工具痕が残されており、羨道部は仕上げ加工がなされていないことがわかる。通常の横穴掘削工程においては、羨道を仕上げた後に玄室の掘削、あるいは仕上げに着手しており、3-29号墳のように羨道の仕上げ工程を残すのは珍しい例である。

調査前には横穴は完全に埋没しており、墓道部分では約3mの土砂に埋没しており、玄室内も陥没に伴う土砂を搬出した後にも、約40cmの埋没土があった。

遺物は、須恵器・土師器・埴輪・瓦器・鉄製品が出土している。玄室床面からも多数の遺物が出土しており、遺物は左袖部に集中していた。おそらく、ある時期に袖部に片付けられたものであろう。岡化した須恵器・土師器・鉄製品は、いずれも床面、もしくは床面直上から出土したものであり、瓦器は第10層淡褐色砂質土から出土したものである。埴輪は、岡化した以外のものも含めると第3層暗赤褐色粘質土～第10層淡褐色砂質土から出土している。

1～12は須恵器、13～19は土師器、20は埴輪、21～25は瓦器、26は瓦質土器、27～38は鉄製品である。

1は、杯蓋。宝珠状のつまみを付し、内面にかえりを有する。

2・3は、長脚二段透しの無蓋高杯。どちらも杯部外面に2条の凸線がめぐり、2の凸線間には、雑な波状文を施す。脚部は、細い基部から外反し、端部で下方へ屈曲する。2の脚部には、2箇所に各2条の凹線がめぐり、透し窓は長方形、三方に穿たれる。3の脚部は、上段が極端に短く、2条の凹線を介して上下に長方形の透し窓が、二方向に穿たれている。

4は、碗。小さい体部から頸部は大きく外反して立ち上がり、1条の凸線と段を介して斜上方へ立ち上がる口縁に至る。口径は、体部径を大きく凌駕する。体部には2条の凹線がめぐり、凹線間を左下がりの刺突文でうめる。頸部にも、中程に2条、基部近くに1条の凹線がめぐり、凹線間を細かい櫛描き刺突文でうめる。凹線より上には、縱方向のヘラ描き文を施す。口縁部にも同様なヘラ描き文を施している。底部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。

5は、小形の短頭壺。やや肩の張った体部から、口縁は直立する。底部外面には回転ヘラケズリ調整を施すが、底部中央には回転ヘラ切り痕が残されたままである。

6・7は、壺の蓋。6は、扁平なつまみを付し、短く直線的にのびるかえりを有する。7は、6に比してやや高いつまみを作り、天井部は扁平な形態を呈する。かえりは弯曲しながら下方へのび、比較的長いものである。どちらも、天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整で仕上げる。

8～10は、脚付長頸壺。8・9は、球形の体部から直線的に斜上方へ立ち上がる口縁部を有する。脚部の長さは変わらないが、8は二段三方、9は一段三方の長方形透し窓を穿っている。8の底部外面は回転ヘラケズリ、9の底部外面は平行叩きで仕上げる。どちらも体部外面にカキメ、8の脚部外面にもカキメが施される。おそらく、蓋（6）と壺（8）、蓋（7）と壺（9）がセットをなすのであろう。

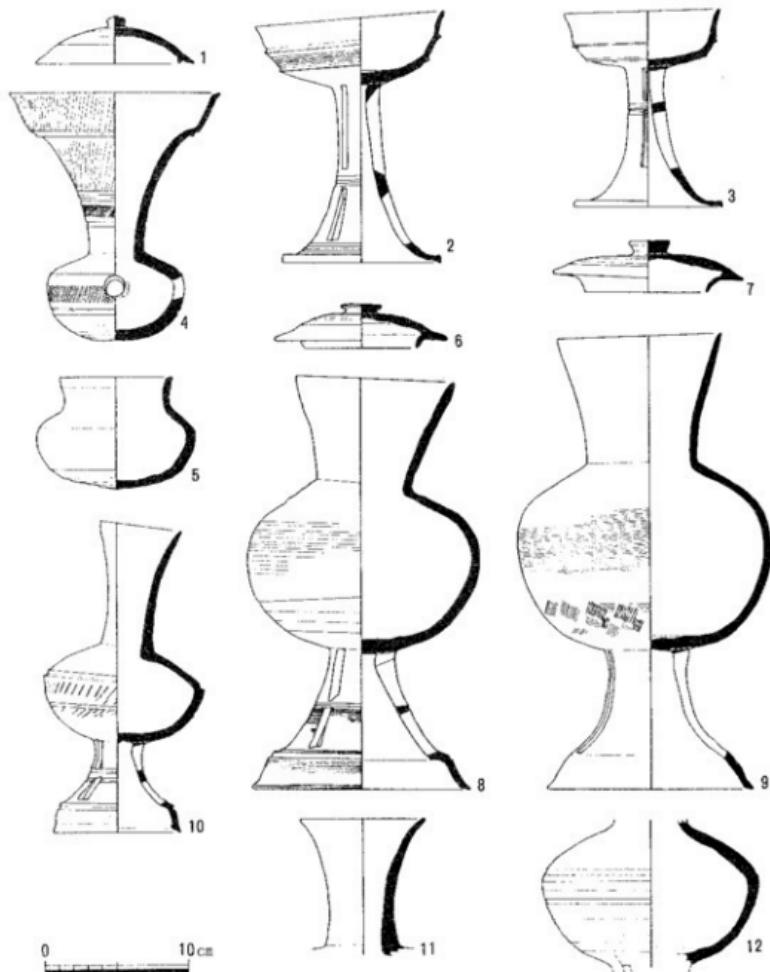


図-93 3-29号填出土遺物①

10は、小形の脚付長頸壺。体部は、やや肩の張ったものであり、肩部とその下方に2条の凹線がめぐる。凹線間は櫛歯工具による刺突文、凹線の下にはヘラ状工具による刻目文がみられる。頸部は細く長く、外反する口縁へ至る。脚部は短いが、二段三方の透し窓を伴う。裾広がりの裾部は段と凹線を介して下方へ屈曲し、端部は内傾する平坦面をなす。

11は大きく外反する長頸壺の口縁から頸部の破片である。12は、壺の体部であり、体部中央に2条の凹線がめぐる。底部には、三方の長方形透し窓の痕跡が認められる。

13~15は、土師器の杯。13・14は器高が高く、15は低い。13・14は内外面共にナデ調整、15は外面指頭調整である。13の内面には放射二段暗文がみられ、上段の暗文は著しく斜方射となる。14・15は磨滅のため暗文の有無が不明である。

16~18は、小形の甕。16・17は、ほぼ同形であり、やや扁平な球形の体部から短く外反する口縁部に至る。体部外面指頭調整、内面はナデ調整である。18は、やや小形となり、底部も平底気味となる。口縁は、より短くなる。体部外面はナデ、内面は板ナデ後のナデで仕上げる。

19は、長頸壺。下ぶくれの体部は、底部が平底気味となり、太い基部から直線的に斜上方へ立ち上がる頸部に至り、口縁は薄く仕上げる。体部内外面はナデ、底部外面はヘラケズリ、口縁部から頸部外面にかけてはヨコナデ、頸部内面は板ナデの後にナデで仕上げる。正立させるとき口縁は大きく傾く。

20は、形象埴輪。裾広がりの円柱状を呈し、直立する面と傾斜する面がみられる。傾斜面の下端から4.5cmの位置に弱い段がみられ、動物埴輪、おそらく馬形の脚部ではないかと思われる。段は、ひづめを表現したものであろう。粘土板を巻きつけて成形しており、内外面共に縱方向のナデで仕上げる。一緒に出土している円筒埴輪は、外面タテハケ調整のものである。

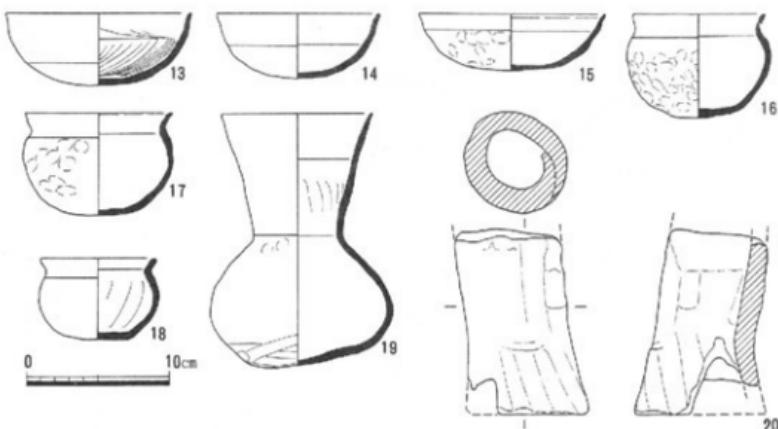


図-94 3-29号墳出土遺物②

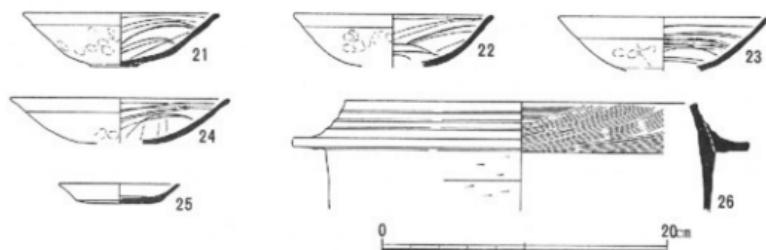


図-95 3-29号墳出土遺物③

21~24は、瓦器椀。椀は浅く、非常に低い高台を張り付ける。外面は指頭調整の後に、一部でナデを施し、ヘラミガキは全くみられない。内面は圓線状のヘラミガキを施し、内底面には21~23には連結輪状、24には平行の暗文を施しているようである。

25は、瓦器小皿。全面をナデで仕上げ、暗文はみられない。

26は、瓦質羽釜。短く内傾する口縁部は、外面に段がみられ、端部は平坦におさめる。体部外面は横方向のヘラケズリ、内面は横方向のナデ、口縁部内面はハケメを施す。

27~38は、鉄製品。27は、曲刃鎌であろう。

28~37は、釘。いずれも頸部を欠いている。28の下半には縦方向の、29の全面には横方向の木目が残っている。

38は、鎧の爪部。やや細い爪部である。木目は残っていない。

中世の遺物を除くと、出土遺物は6世紀後葉~7世紀中葉の時期と考えられ、3-29号墳は6世紀後葉に造られ、その後、7世紀中葉までの間に2~3回の追葬がなされたものと考えることができる。

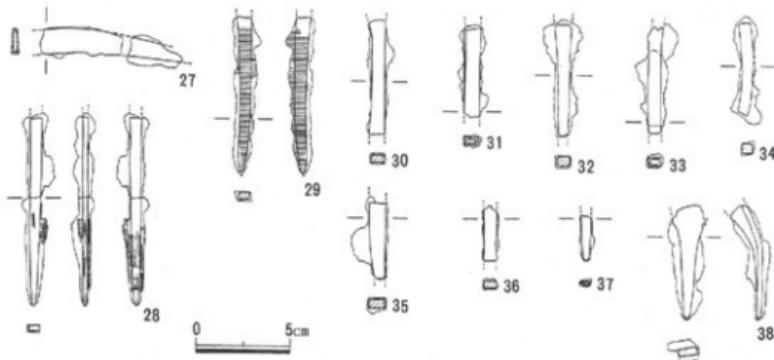


図-96 3-29号墳出土遺物④

一方、中世の遺物は、13世紀末葉を前後する時期と考えられ、すべて同時期のものと理解してよいと思われる。中世の遺物が出土した淡褐色砂質土は、ほぼ床面近くを覆っており、後述する3-30号墳と共に、この時期に横穴の埋土を除去し、再利用しているようである。玄室袖部の土器群内に、最終埋葬に伴うと考えられる土器器杯（15）が含まれていることから、この土器群は、再利用の時期に片付けられたものと思われる。しかし、どのような目的で再利用されたのか不明である。

玄室、および墓道からは自然石も多数出土している。墓道出土の自然石は、狭門のやや外側に集中しており、閉塞石ではないかと考えられる。玄室の自然石は、棺台に伴うものか、閉塞石が内部に持ち込まれたものか確認できなかった。

3-29号墳は、調査後、完全に埋没して保存している。

第3支群30号墳（図-90・97~99、図版95~97）

3-29号墳の墓道調査中に、3-29号墳の東に接して更に深い位置に別の横穴が存在することが確認された。そこで、この横穴を3-30号墳とし、両横穴の関係、および保存状況を確認するために、設定したトレンチ内の墓道は完掘し、それより内部は現状を確認するに留め、実測を行なったのみで掘り下げは行なっていない。3-30号墳の墓道床面は、3-29号墳の墓道床面より80cm低く、開口方向はS-12°-Wである。奥壁から天井にかけてと、狭道から墓道にかけての左側壁を中心に、剥落がみられる。横穴内部には厚い流入土がみられるため、数値はいずれも概数である。

玄室は横長の長方形平面を呈し、長さ311cm、幅は奥壁で346cm、玄門部で326cmとなる。側壁と天井の境の切り込み段は、右側壁にのみ認められ、幅11cmを測る。この切り込み段は、奥壁および前壁では、浅い溝状の線となって、側壁と天井が区別される。天井は、非常に扁平なドーム状となり、高さは現状で125cm、おそらく170cm前後になると思われる。

左側壁に沿って、造り付け石棺がみられる。外法の長さ235cm、幅104cm、高さは90~100cmと推定される。幅は両小口で少し狭くなり、90cm前後となる。内法は、長さ180cm、幅60cm、深さ35cmを測る。北側の小口部は大きく破損しているが、他は完存している。

この石棺で注目すべき点は、凝灰岩製の蓋を伴っていたことである。蓋は2石からなり、非常に扁平な家形状の形態を呈する。蓋上面は広い平坦面が造られ、側面は垂直となる。上面から側面にかけては傾斜面となっており、上面と傾斜面の境は比較的明瞭で、寄棟状の形態を示す。下面是、周囲に15~20cm幅の平坦面が3周に造られ、中央は約5cm抉られて断面は凹状となる。石棺南半にのっていた蓋は、長さ123cm、幅80cm、上面の幅が58~63cm、厚さ14cmを測る。もう一石は、石棺の北西部に落ち込み、立った状態である。下半は流入土に埋没している。ほぼ同形かと考えられるが、ボーリング棒で確認した玄室床面から現在みられる上部までの長さが80cmであることから、若干短いかもしれない。出土状況から考えると、石棺北半にのってい

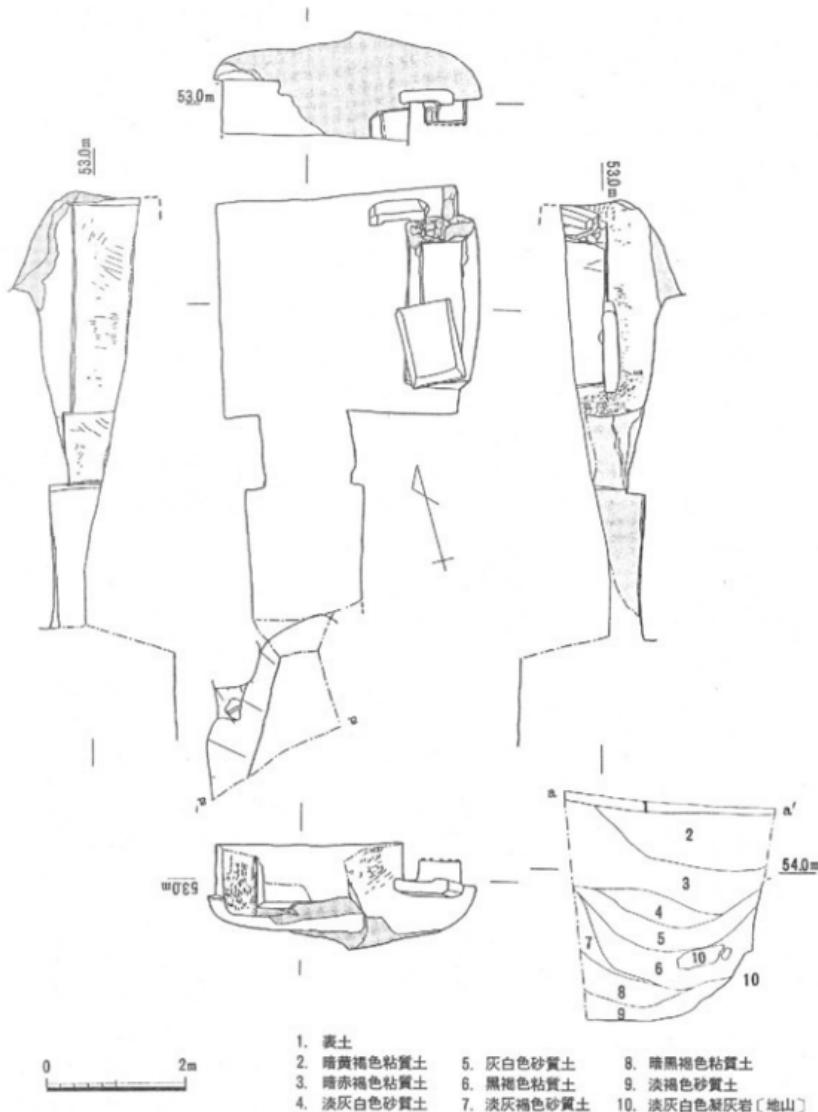


图-97 3-30号填

た蓋を盗掘時に落とし込んだものと推定され、その際に北の小口部分も破壊されたのであろう。このように考えると、落とし込んだ際には蓋が破損していることも考えられる。南側の蓋と同じ長さであれば、石棺を完全に覆うことができるので、同形同大と考えたほうがいいかもしれない。蓋の石材は、後述するように、奥田尚氏の鑑定によると、二上山の牡丹洞の凝灰岩であり、注目される。これまでに造り付け石棺に伴う蓋は、ほとんど確認されておらず、唯一、4-27号墳の造り付け石棺上面に76cm×63cm×26cmの扁平な自然石がのっていた例をあげができるのみである。

右前壁においては、右側壁の切り込み段が隅部で終わり、約25cm高い位置に浅い溝状の線を施すことによって、壁面と天井とを区別している。左前壁には、このような線はみられない。玄門周囲には、これ以外に特別な施設は存在しなかったと考えられる。

羨道は、著しく玄室の右側に片寄って取り付く。左側壁が崩れているため、正確な数値は不明であるが、現状では、長さ104cm、幅124cmを測る。天井は平天井となり、玄室天井との比高差は小さい。

羨門の左右には、幅20~30cmの平坦面が造り出され、上部には幅28cmの平坦面が造り出されている。角は面取りが施され、羨門を囲むようにコの字形にめぐら線刻が施されている。

羨道は、幅170cmを測り、長さは420cm以上で調査範囲外へと続いている。羨門上部から平坦な天井が続いており、長さ214cmを測る。

完掘した部分の墓道床面から須恵器杯身（1~3）、高杯の脚部（4）が出土しており、自然石も数個出土している。遺物が出土しているのは、第6層黒褐色粘質土以下の層であり、図化

した遺物以外に須恵器壺、土師器高杯、円筒埴輪などの小片が出土している。

1~3は、須恵器杯身。1・2は、短い立ち上がりを有する。底部外面は、1は回転ヘラケズリ、2は回転ヘラ切り未調整。3は、立ち上がりのみられない小形の杯身。底部外面ナデ調整。やや歪んでいる。

4は、須恵器の高杯脚部。長脚二段透しの脚部下半であり、2条の凹線下に二方向の長方形透し窓が開く。脚裾部は大きく開いて、端部で上方につまみ上げたような形態となる。比較的短い脚部であり、おそらく無蓋の杯部を伴うものであろう。回転ナデ調整で仕上げる。

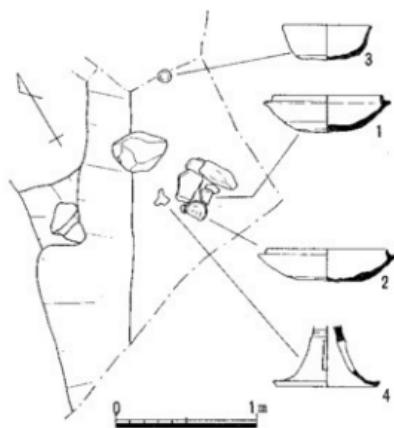


図-98 3-30号墳遺物出土状況

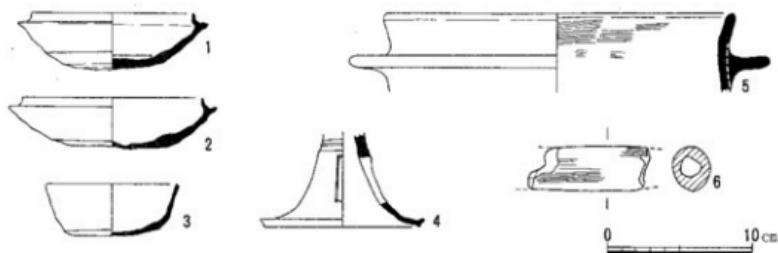


図-99 3-30号墳出土遺物

5は、土師器の羽釜。鍔は水平にのび、口縁は短く直立する。口縁端部は丸くおさめる。外面ヨコナデ、内面はヨコハケからナデ調整。

6は、形象埴輪の一部かと考えられる不明品。円筒状のものに粘土板を巻きつけて成形しており、断面は長径3.1cm、短径2.5cmの楕円形断面を呈する。外面は、ハケ調整。同時に出土している円筒埴輪は、すべて有黒斑、凸帯の高いものであり、古墳時代前期末頃のものと思われる。

これらの遺物は、6世紀末葉から7世紀中葉にかけての時期と考えられ、3-30号墳は6世紀末葉に造られ、1~2回の追葬がなされているのではないかと考えられる。

3-29号墳と3-30号墳は、小支群をなしていると考えられる。出土遺物から考えると、3-29号墳のほうが先行すると推定される。3-30号墳が左片袖状の平面形を呈することも、3-29号墳を避けるためであったのかもしれない。一段深く掘り込まれているのも、3-29号墳を避けるためと考えられるが、3-30号墳の墓道が、3-29号墳の墓道を断ち切って造られていることに、若干の問題も残されている。

また、造り付け石棺に伴う蓋が二上山産の凝灰岩であったことは、注目すべきものであり、波及する問題も多いと思われる。これについては、後に若干の考察を試みることにするが、北側の蓋は、石棺から盗掘の際に落とし込まれたものと考えられ、蓋が埋没していることから、盗掘の時期は、床面がほぼ露出していた時期になされたものと考えられる。あるいは、3-29号墳から出土した中世の土器に伴ってなされたものかもしれない。なお、石棺内面には、ベンガラと思われる赤色顔料の塗布が認められた。

3-29・30号墳は、調査前には深く埋没していたが、上方の道が敷設される以前には、一部が開口していたようである。道を敷設する際に削られた土砂によって、深く埋没したものと考えられる。3-30号墳の玄室は、道路の東側、道路面から3m以上の深さに位置することから、道路を整備しても影響ないものと判断し、墓道部分を土囊で閉鎖した後、墓道部分を完全に埋め戻して保存を図っている。

第3支群30号墳の石棺材について

棺蓋は2石からなり、同質の流紋岩質凝灰角礫岩で、棺身は凝灰岩からなる。棺身は造り付けであることから、横穴を割り抜いている凝灰岩の岩相と同じである。棺蓋と棺身の石材の岩相について述べる。

棺蓋の流紋岩質凝灰角礫岩：色は灰白色で、軽石や松脂岩、流紋岩の礫が含まれる。軽石は白色、礫形が角～亜角、礫径が最大5cmに及び、量が多い。松脂岩は黒色、礫形が角～亜角、礫径が最大2cmに及び、量が中である。流紋岩は青灰色、礫形が角、礫径が最大2cm、量がごくごく僅かである。基質は灰白色、緻密で柔らかい。

この岩相は、軽石や松脂岩を多く含み、僅かに青灰色の流紋岩を礫として含むことから、二上山西方に分布する下部ドンズルボー層の溶結していない岩相の一部に酷似する。場所としては、太子町牡丹洞の付近が推定される。

棺身の凝灰岩：色は白色で、軽石、片麻状黒雲母花崗岩、石英の礫がごく僅かに含まれる。砂粒は石英、長石、黒雲母、角閃石である。軽石は白色、礫形が亜円、礫径が0.5～1cm、量がごくごく僅かである。片麻状黒雲母花崗岩は色が灰色、礫形が円、礫径が1～6cm、量がごくごく僅かである。腐り礫で、頭著な縞状をなす。石英は無色透明、礫形が角、礫径が最大2cmに及び、量がごくごく僅かである。砂粒の石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.5～1.5cm、量が中である。複六角錐をなす石英が含まれる。長石は無色透明、粒形が角、粒径が0.5～2mm、量がごく僅かである。黒雲母は黒色板状、六角形で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。角閃石は黒色、粒形が角、粒径が0.5～1mm、量がごくごく僅かである。砕けているものが多い。

棺身と同じ横穴を掘っている凝灰岩は、玉手山凝灰岩層の一部に相当し、約1400万年前頃に噴出した寺山火山岩の軽石と同じ化学組成を示すことから、寺山火山岩を噴出した火山から噴き出した火山灰であるとされている。

以上のように、棺身は横穴の造っている石材が使われ、棺蓋は二上山西方牡丹洞付近の石材が使われている。濃尾平野の石棺の例などをみれば、棺蓋を横穴付近の凝灰岩で造ろうとすればできるはずである。横穴墓に家形石棺がある例として、岐阜県可児市羽崎にある羽崎中洞横穴墓棺があげられる。この石棺は大型で縋掛突起がある棺蓋と造り付けの棺身とからなる。棺蓋も棺身も同質の凝灰岩からなる。羽崎付近は濃尾地方の家形石棺の石材採石地であり、棺蓋を横穴付近の石材で造ったために石材の岩相が同じになったのかも知れない。両者の場合、棺蓋は外で造ったものを持ち込んだと考えられる。

（奥田 尚）

参考文献

- 二上山地学研究会「二上層群の原川累層・定ヶ城累層の層序とサヌキトイドの活動時期」
『地球科学』40巻2号 地学団体研究会 1986

奥田 尚・服部哲也「濃尾地方の石棺」『古代学研究』126号 1991

第3支群31号墳（図-23・100、図版98）

瞑想広場整地中に、羨門部が開口したことによって発見された横穴である。そのため、羨門部の全容を検出し、羨道を少し掘り下げて玄室内の状況を確認したが、全く剥落、損壊が認められない良好な状況で遺存している横穴であることがわかった。そのため、現況の写真撮影と平面図を作製したのみで埋没保存し、広場の平面形を変更することによって、広場外に保存することとした。

3-31号墳は、非常に小規模なものであり、玄室主軸はS-32°-Eとなり、羨道主軸はやや右へ振ってS-25°-Eとなる。

玄室は、縦長の長方形平面を呈し、長さ286cm、幅194cmを測る。側壁と天井の境には、四壁に切り込み段がみられる。段の幅は、左側壁と奥壁では12cm、右側壁では15cm、前壁では6cmとなり、かなり広いものである。天井は奥壁での立ち上がりが強く、アーチ状に近いドーム状を呈する。

玄門上部には、前壁より8cm高く、幅22cmの棚状施設がみられる。前壁の切り込み段は、滑らかに、この棚状施設に取り付いている。

羨道は、玄室のはば中央に位置し、長さ・幅共に100cm前後の方形平面を呈する。天井は、平天井となる。

羨門は、左が34cm、右が22cm、上部が24cmの幅の整美な平坦面が造り出されており、上部の角は面取りがなされ、上部平坦面には赤色顔料塗布の痕跡がみられる。羨門上部から墓道にかけて、長さ50cmの平坦面が造られて天井となっている。この天井部前面も、平坦に加工されている。

墓道は、羨門部での幅が146cmを測る。墓道も掘り下げていないため詳細は不明であるが、墓道主軸に直交するように、長さ116cm、幅52cmの巨石がみられた。その出土位置は、羨門天井部前面の直下にあたり、墓道主軸に直交することから、羨門上部に架構されていたものが転落したのではないかと考えられる。

羨門部を検出する際に、土師器の小片が出土しているが、これ以外には、遺物は全く確認できていない。そのため、3-31号墳の時期は不明である。小規模な横穴であることから考えると、比較的新しい時期のものかと思えるが、玄室壁面の切り込み段の幅が広いことや玄門の棚状施設などから考えると、古い要素もみられ、判断に苦しむものである。

3-31号墳の西側には、1986年度の家屋解体に伴って発見された3-28号墳が存在し、両横穴は、ほぼ同一方向に開口している。この事実から、両横穴によって小支群が形成されるものと考えられるが、3-28号墳も未調査であり、時期は不明である。

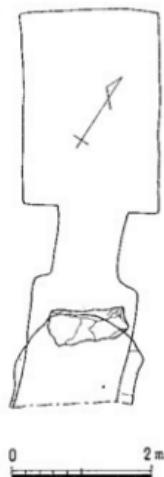


図-100 3-31号墳

第3支群32号墳（図-101、図版99・100）

出会いの広場予定地に設置するバーゴラの基礎掘削中に、玄室の天井が陥没して発見された横穴である。現地形から、出会いの広場付近は谷状地形を呈するものと判断し、レーダー探査、および試掘調査を実施していなかった部分で横穴が発見されたものであり、判断が甘かったことを後悔している。陥没した玄室天井部から玄室内に入って横穴内部を観察したところ、羨門部は完全に埋没しており、現況のまでの調査は困難であると判断された。そのため、現況の写真撮影、平面実測を実施した後、玄室天井開口部から土砂を入れて玄室を完全に埋没させ、バーゴラの基礎を若干移動させて地下に埋没保存することにした。現地表面から玄室天井までは約120cm、玄室内には70~80cmの厚さの暗黄褐色のシルト~粘土が堆積している。非常に粘質土の高い土であり、羨門から雨水等と共に流入して堆積した土砂と考えられる。開口方向は、N-69°-Eである。

玄室は、玄門側でやや広がった縦長の長方形平面を呈する。玄室中央での長さは310cm、幅は272cmであるが、やや不整形な形態となっているため、長さは左側壁で296cm、右側壁で300cm、幅は奥壁で248cm、前壁で276cmを測る。現況では、玄室中央での天井までの高さが110cm、玄門部での天井までの高さは28cmである。天井は平天井に近い、扁平なドーム状を呈する。壁面と天井との境界に切り込み段はみられないが、その境は比較的明瞭である。

玄門部は、左前壁部が大きく崩落しているが、何ら特別な加工は認められない。

羨道は、玄室の右側に片寄って取り付く。玄門部での幅は100cm、長さは140cm前後であろう。羨門から墓道にかけての状況は、埋没のため不明である。

3-32号墳は、発掘調査を実施していないために遺物が全く出土しておらず、時期は不明である。玄室の構造等から判断すると、比較的新しい横穴ではないかと考えられる。

第4支群39号墳（図-89・102~106、図版101~103・110）

過去に一部が開口しており、出入りも可能であった横穴である。レーダー探査の結果、信号(G)が確認され、探査結果は地表下1.1mに空洞部を有する横穴が埋没していると推定されるものであった。しかし、現況から考えると4-39号墳の墓道が存在すると予想される位置に当たっており、探査結果に疑問をもちながら、18トレンチを設定した。その結果、やはり4-39号墳の墓道が存在することが確認され、レーダー探査では、墓道内に存在した集石を横穴天井と誤認したようである。調査では、道路下に埋没してしまう墓道部分を完掘したが、工事によって影響のない羨道から玄室にかけては未調査である。ただし、直列する2棺の造り付け石棺を伴う横穴であることから、実測は実施したものである。

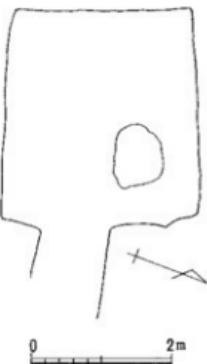


図-101 3-32号墳

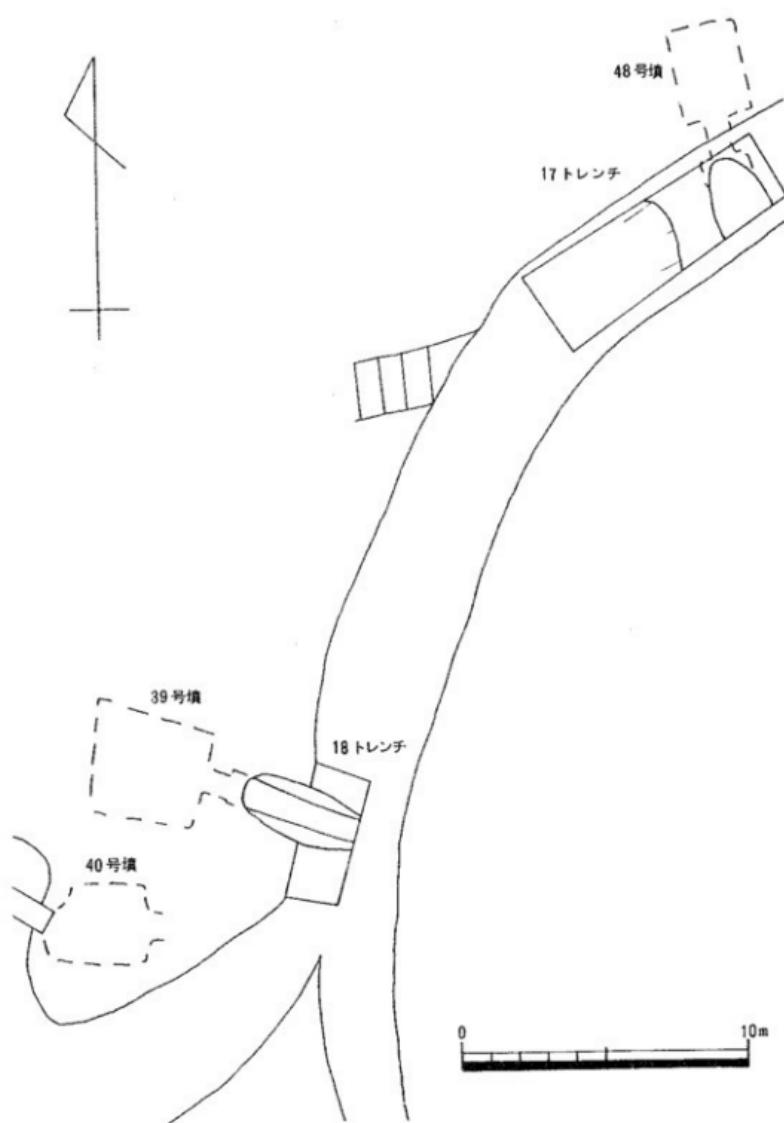


図-102 第4支群39・40・48号墳

4-39号墳は、第3支群と第4支群を限る比較的規模の大きな谷に面する東斜面に位置する。開口方向はN-88°-E、ほぼ東向きに開口する。

玄室平面は、左側壁の長い台形状を呈する。玄室中央での長さは368cm、幅は造り付け石棺を含むと405cm、除くと320cmとなる。造り付け石棺を除いた各壁面の長さは、左側壁が397cm、右側壁が約320cm、奥壁が312cm、前壁が約280cmとなる。前壁が大きく崩落しているため、右側壁と前壁の数値は概数である。側壁は内傾して立ち上がり、扁平なドーム状の天井に至るが、その境は不明瞭である。現状で最も高い部分は145cmを測る。墓道床面の傾斜が玄室内でも続いていると仮定すると、玄室は30~100cm埋没していることになり、推定の玄室高は200cmとなる。

玄室左側壁には、直列する2基の造り付け石棺がみられる。2基の造り付け石棺の間には、厚さ20~50cm、高さ70cmの仕切り施設がみられ、両石棺を区画している。奥側の造り付け石棺は、外法で長さ250cm、幅84cm、高さは推定で80~110cm、内法で長さ162cm、幅52cm、深さ45cmを測る。前壁側の造り付け石棺は、外法で長さ195cm、幅91cm、高さは推定で100~130cm、内法で長さ156cm、幅56cm、深さ40cmを測る。棺上面、および棺底面は奥棺のはうが前棺より約15cm高くなっている。これは、床面の傾斜に合わせたものであろう。前棺の右側壁中央下部には、直径10cmの円孔が穿たれている。排水のための穴かと考えられるが、床面より4cm上に位置し、石棺完成後に外から穿たれることから、後世に穿たれた可能性も考えられる。両石棺共に造り付け石棺の中では高いものである。

左右の前壁が広範囲に剥落しているため、玄門の状況は不明であるが、壁面の切り込み段がみられないことから考えると、特別な加工はなされていなかったと考えられる。

墓道は、造り付け石棺を含めて考えると玄室の右側に寄っていることになり、これを除いて考えると玄室の左側に寄っていることになる。長さは92cmと短く、幅は玄門部で約110cm、渓門部で約100cmである。側壁と天井の境は明瞭であるが、天井は完全に崩落しており、状況が不明である。

渓門の両側には、幅5cm程度の狭い平坦面が造り出されているが、渓門上部にはこの平坦面は存在しなかったと推定される。墓道側壁には、渓道の側壁と天井の境界線とはほぼ同じ高さの位置に、左側壁では長さ70cm、右側壁では長さ50cmの線が刻まれており、渓道天井と同じ高さで長さ70cm前後の天井部が続いていたようである。

渓門部での墓道の幅は123cmを測り、長さは480cm以上で調査範囲外へ続いている。墓道床面は8°前後の傾斜を有している。この傾斜が玄室内でも続いていると考えると、玄室奥近くでボーリング棒で確認した埋土の厚さ30cmに滑らかに取り付くことになる。しかし、完成された横穴で、床面が8°もの傾斜を有する例は他にみられず、玄門、あるいは渓門で段をなしている可能性も考えられる。いずれにしても、床面傾斜の強い横穴の1例として注目されるものと考えられる。

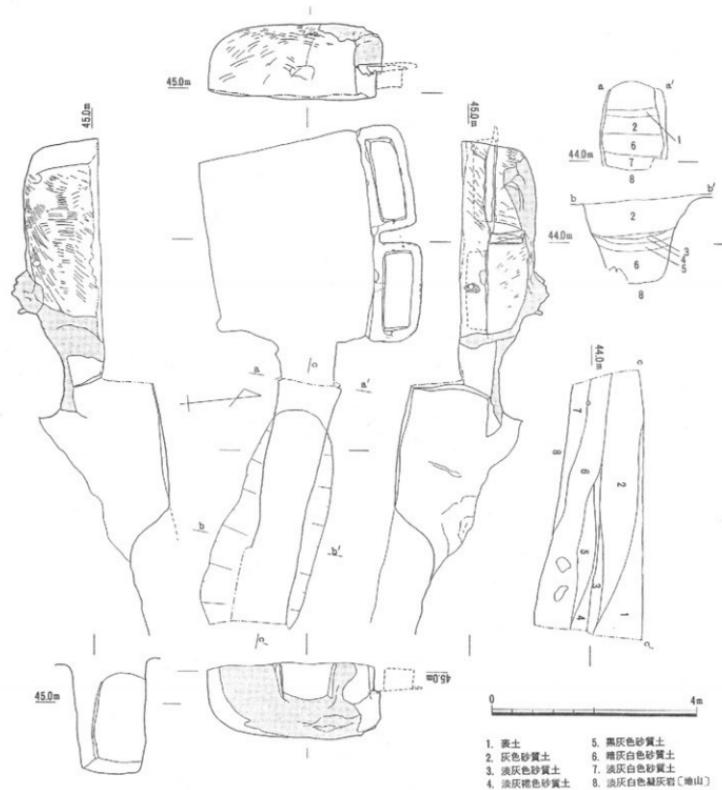


图-103 4-39号墳

淡門から4m前後の位置の墓道内に、花崗岩を主とした自然石の集石がみられた。自然石は、5cm前後のものから80cm前後のものまでみられ、墓道右側壁へ寄せたような状況で出土している。集石最下部の石は床面に接していることから、墓道床面が露出している状態で、これらの石が集石されたと考えられる。また、淡門左壁付近にも小砾が十数個集石しており、墓道にみられた集石も、淡門付近に存在した閉塞石を搔き出したものではないかと思われる。

出土遺物は、第7層淡灰白色砂質土上面から須恵器高杯(3)、壺(9)、土師器椀(10)、長頸壺(11)などが出土しており、第5層黒灰色砂質土から須恵器杯蓋(1)、壺(4・6~8)などが出でている。第2層灰色砂質土からは、土師質羽釜(12~16)、瓦器椀(17)、瓦質火鉢(18)など、中世の遺物が出土している。これらの中で、12~17は灰色砂質土下層、墓道南西部に重なるような状態で出土しており、18はやや上層から出土している。

1~9は須恵器。1は、杯蓋。外面の稜は凹線状となっており、口縁端部は内傾する段をなす。2は、杯身。立ち上がりは、やや内傾する。底部外面は回転ヘラケズリを施すが、中心のみ回転ヘラケズリが及ばずに雑なナデで仕上げる。ヘラ記号がみられる。

3は、長脚二段透しの脚部を有する無蓋高杯。脚部下半を欠失する。杯部外面にはヘラ描きの波状文がめぐり、口縁部は外反する。脚は細く、長方形の三方透しを有する。

4は、脚付壺の脚部であろう。裾広がりの脚部は凹線を介して下方へ屈曲し、端部は肥厚気味に面をなす。長方形の三方透しを有する。

5は、壺の口縁部。口縁は大きく外反し、端部は粘土帯を貼り付けることによって厚くする。外面には、櫛齒状工具による刺突文がみられる。

6~9は、壺。6は、やや肩の張った体部から口縁が大きく外反する広口壺。外面底部は回転ヘラケズリ、他はカキメ調整。7・8は、短頸壺。7は、肩の張った扁平な体部から、短く直立

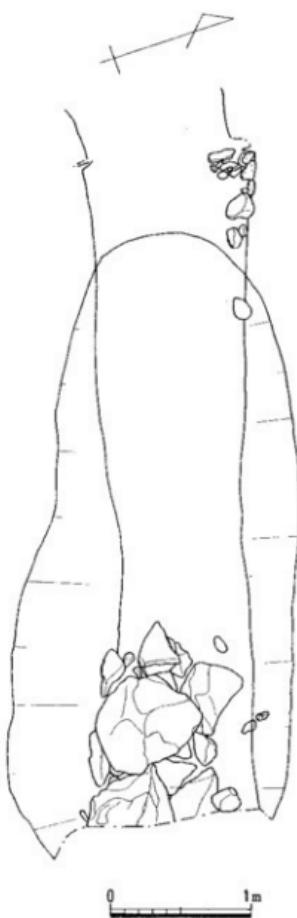


図-104 4-39号墳自然石検出状況

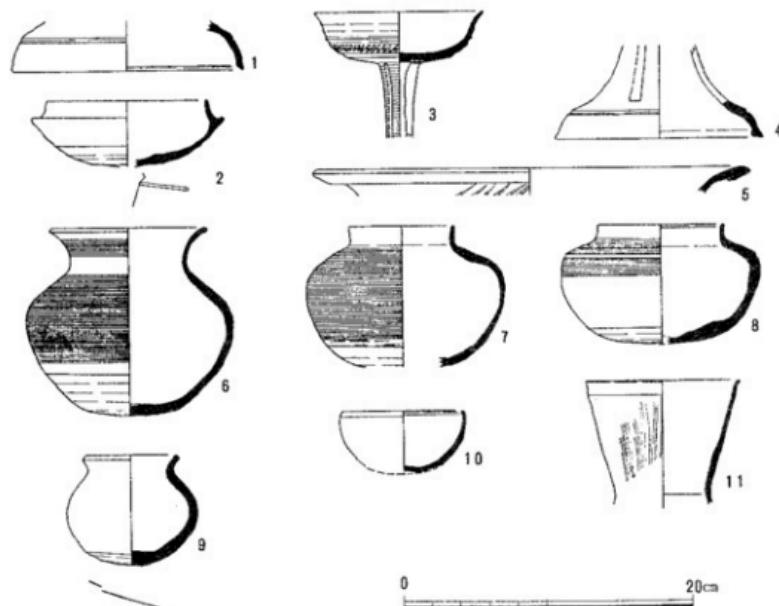


図-105 4-39号墳出土遺物①

する口縁部が立ち上がる。底部外面回転ヘラケズリ、体部外面はカキメを施す。8は、7をより一層肩を張り、扁平とした体部から、極端に短い口縁が直立する。口縁端部内面には、浅い段がみられる。外面肩部には浅い凹線がみられ、その上下をカキメ調整。それ以下は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ調整である。9は、小形の壺。器壁の厚い球形の体部から、短い口縁部が外反する。底部外面にはヘラ記号がみられる。

10・11は、土師器。10は、小形の碗。半球形の体部を有し、口縁部は内傾し、端部で肥厚する。11は、長頸壺の口縁部。外面には縦方向のヘラミガキを施している。

12~16は、土師質の羽釜。鉢は水平にのび、口縁は内傾し、端部で肥厚気味に立ち上がる。口縁から鉢にかけてはヨコナデ、体部内外面はナデで仕上げる。色調は淡黄褐色～暗橙色。胎土はやや粗く、長石等の砂粒を多く含んでいる。

17は、瓦器椀。高さ1~2mmの非常に低い貼り付け高台を有し、口径13.2cm、器高3.1cmと浅い形態である。内面には圓錐状のヘラミガキがみられ、外面は指頭で調整する。

18は、瓦質の火鉢。焼成は非常に堅緻であり、須恵質に近い焼成である。体部から口縁部にかけては直立し、口縁端部は平坦面を呈する。口縁直下に2条の断面三角形状の凸帯を貼り付ける。外面には縦方向のヘラミガキがみられる。平底となる底部片も一緒に出土している。

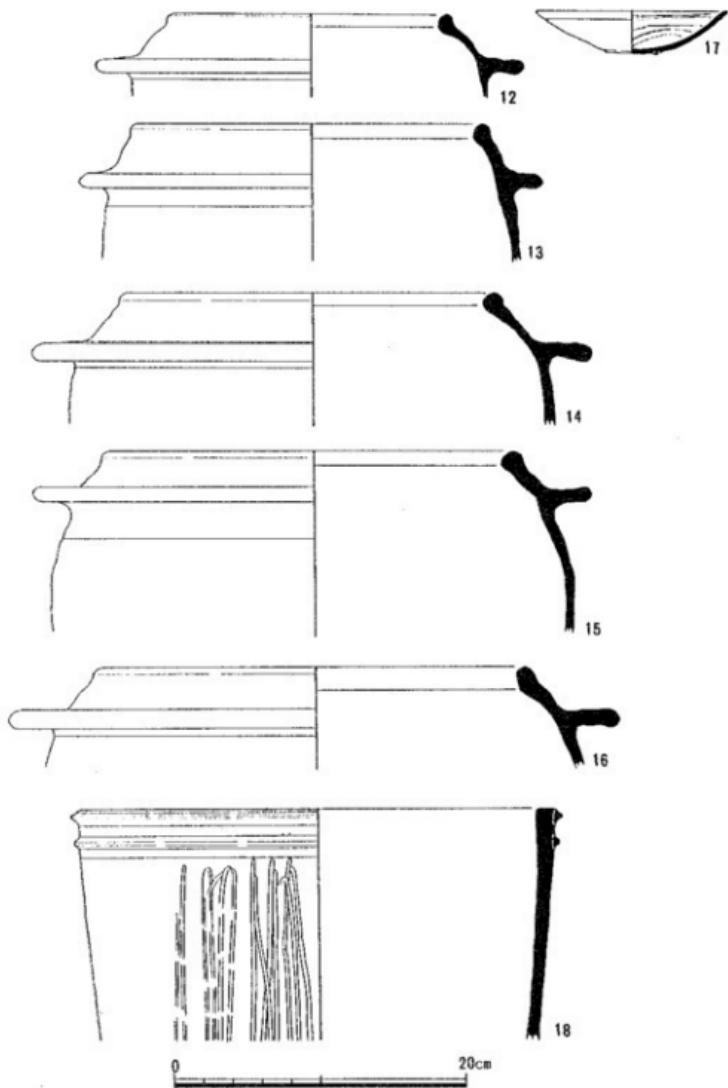


図-106 4-39号墳出土遺物②

出土した須恵器・土師器は、6世紀中葉～後葉と考えられ、その頃に4-39号墳が造られたものと考えられるが、どの程度の追葬がなされたのかは、これだけの遺物では不明である。また、上層から出土した土師質羽釜・瓦器碗は、13世紀末葉～14世紀初頭頃と考えられ、この時期に横穴が再利用されているようである。土師質羽釜は重なるような状態で出土しており、口縁から鉢にかけての破片から10個体近くの羽釜が存在したと考えられるにもかかわらず、体部の破片が少ないとから、体部を欠いた羽釜を使用した祭祀のようなものが想定される。瓦質の火鉢（18）は、15世紀代のものと考えられ、層位的にもやや上層から出土している。しかし、これに伴う他の遺物はみられず、用途が不明である。

4-39号墳は、出土遺物から比較的古い時期の横穴と考えられる。その横穴で、直列する2基の造り付け石棺がみられ、一方では壁面の切り込み段や玄門・渓門の施設がみられないことは注目に値する。なお、奥壁中央付近に「棺座から高杯釘刀子 須恵第II期」と読める落書きがみられる。考古学の知識を有するものが盗掘をし、出土遺物を書き留めたものと考えられる。須恵第II期の表現から考えると、比較的最近になされたものであろう。棺座は造り付け石棺のことと考えられ、棺内から遺物が出土したことが事実であるとすると、釘の出土が注目される。これまでの調査では、造り付け石棺内から釘が出土したことなく、造り付け石棺内には木棺を使用せずに直接死者を安置したものと考えていた。つまり、文字どおりの石棺であり、そのため棺内からは釘=木棺が出土しないと考えていたが、造り付け石棺内に木棺を安置する例が存在したのかもしれない。しかし、この落書きが事実を記したものかどうか、また事実であったとしても後世の片付け等に伴って棺内から出土した可能性も考えられるため、これについては保留しておきたい。

第4支群40号墳（図-18・89・102、図版104・105）

奥壁右寄りの天井部が崩落、開口しており、それに伴って奥壁も大きく破損している。4-39号墳南側、やや上位に位置し、開口方向はS-78°-Eであるが、渓門部は完全に埋没している。

左側壁での玄室の長さは235cm、前壁での幅は264cmを測るが、右側壁は左側壁よりやや長いようである。側壁と天井の境には、切り込み段が四壁にめぐる。段の幅は8cm前後と狭い。天井は扁平なドーム状を呈する。

玄門周辺の前壁・天井も崩落が激しく、詳細は不明である。

羨道は、玄室のやや右側に寄って取り付き、玄門部での幅は90cm前後であろう。

渓門・墓道については、埋没のため不明である。玄室も数十cmの埋土がみられる。

玄室は自然条件による崩落と人為的な破壊によって、著しく損壊している。また、落書きもみられる。出土遺物がないため、4-40号墳の時期は不明である。損壊が激しいため、内部状況の確認に留め、奥壁開口部を土嚢で閉鎖した。

第4支群48号墳（図-89・102・107・108、図版106～108）

レーダー探査によって信号の確認された位置に、17トレンチを設定することによって発見された横穴である。第3支群と第4支群を画する谷に向かって開口する横穴であり、開口方向はS-12°-Eである。4-30号墳と同様に墓道のみ調査を実施し、羨道から玄室にかけては未調査である。

玄室は、長さ336cm、幅258cmの縱長の長方形平面を呈する。側壁と天井の境には、幅6～20cmの切り込み段が四壁にめぐり、天井はドーム状となる。前壁の切り込み段は、玄門の両側で終わっており、玄門上部の構造はみられない。

羨道は、玄室のやや右寄りに取り付き、長さ128cm、幅は玄門部で96cm、羨門部で92cmを測る。側壁と天井の境は明瞭であるが、天井は崩落している。

墓道は、羨門部で幅145cmを測る。羨門の左右は平坦に造り出されるが、上部には加工は認められない。墓道の長さは240cm以上を測り、調査範囲外へのびている。墓道は非常に深く掘り込まれており、側壁の最高部では、高さ260cm以上となる。

羨門前面にあたる墓道中層から1個の巨石が出土している。長さ120cm、幅90cm、厚さ40cmを測る自然石であり、他の例や出土位置から考えると、羨門上部前面に架構されていたものと考えられる。この巨石の下には40～50cmの石材もみられ、これら小形の石が墓道肩部に積まれ、巨石を支えていたのである。

墓道埋土の中層から、6世紀末葉頃の須恵器杯身をはじめ、須恵器甕、土師器甕、有黒斑の円筒・形象埴輪などが出土しているが、細片ばかりであり、量も少ないために、4-48号墳の時期を決定する資料とはなり得ないものである。

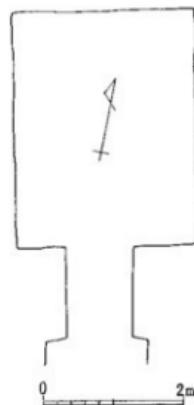


図-107 4-48号墳

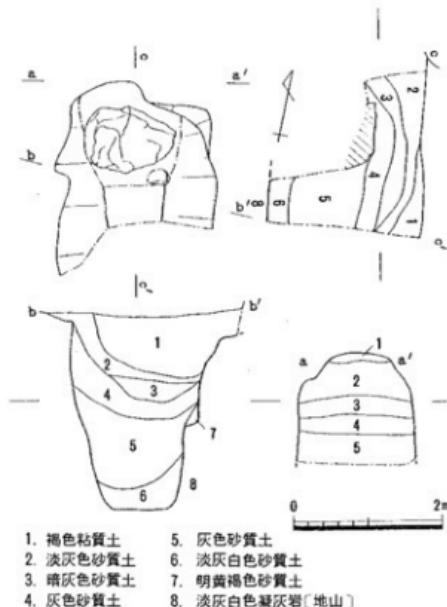


図-108 4-48号墳墓道

第6章 高井田横穴群の検討

1. はじめに

本報告では、横穴のことを“横穴”と表記し、個々の横穴に対しては第○支群○号墳と表現した。最近では、池上悟氏の提唱によって“横穴墓”、そして○号墓と表現されることが多いが⁽¹⁾、本報告では從来から使用してきた語句を使用している。それは、“横穴墓”という名称に若干のこだわりがあるためである。確かに墳丘を有さない横穴に対して“横穴古墳”、あるいは“横穴墳”という名称は相応しくないかもしれない。しかし、“横穴墓”という表現に、土墳墓などと同様であり、横穴式石室墳などの古墳よりかなり下層の埋葬法とした語意を感じるのは筆者だけであろうか。横穴式石室と同等に扱えるような名称はないものであろうか。このような考え方から、筆者は“横穴”という名称を使用し続けているのである。ただし、○号墳と表現したのは、過去の大坂府教育委員会による分布調査、および筆者の報告による表現法を踏襲したものであり、他意はない。筆者としては、○号横穴という表現にすべきか悩んだところである。これは、高井田横穴群のように近隣の横穴式石室墳と同様な命運をたどった横穴群を調査・研究対象としていることに起因するものであり、このような迷いの結果が今回の表記法となったことを理解いただきたい。今後、適切な表現に改めていきたいと考えている。

高井田横穴群では、1985年以来部分的な調査も含めて45基の横穴の調査を実施し、これ以外に13基の横穴を実測してきた。その他、計測のみを実施したものも加えると、77基の横穴で玄室の規模・構造が確認できている。これで確認総数162基の約半数に達することになり、横穴群の全体像を把握することは可能であろう。高井田横穴群については、これまでに花田勝広氏の詳細な報告・考察がなされており、本報告でも参考にした点が多い。しかし、花田氏の考察については疑問点も多々ある。以下、今回調査を実施した横穴を中心に、さまざまな角度から高井田横穴群を検討してみたいと思う。

2. 横穴の構造

a. 玄室壁面の切り込み段

高井田横穴群の横穴に対して分類を試みる場合、最も指標となるのが玄室の壁面と天井の境にみられる切り込み段（以下、玄室壁面段）の有無であろう。これは、同じ柏原市内の安福寺横穴群・玉手山東横穴群についても同様である。花田氏も、玄室壁面段を有するものを家形模倣（Aタイプ）、有さないものをドーム天井（Bタイプ）と分類しているが⁽²⁾、前者の天井もドーム天井を呈しているので、この呼称は適当ではないと言える。

高井田横穴群では、玄室壁面段を有するものは49基、有さないものは28基確認されている。前者は玄室の四壁に切り込み段がみられるものを典型とするが、一部の壁面にしかみられない

支群	平面形態		I類		II類		III類		合計	
	壁面段あり			14	1	5	0	1	10	20
第1支群	壁面段なし			5		4	1		10	
										20
第2支群	壁面段あり		6		7		10	3	16	
	壁面段なし		1		3		2		6	22
第3支群	壁面段あり		7		13	6		3	16	
	壁面段なし		6			0		0	6	22
第4支群	壁面段あり		6		8	0		1	7	
	壁面段なし		2			2		2	6	13
合計			28		42	14		7	49	
			14			9		5	28	77

表-1 玄室平面形態支群別一覧表

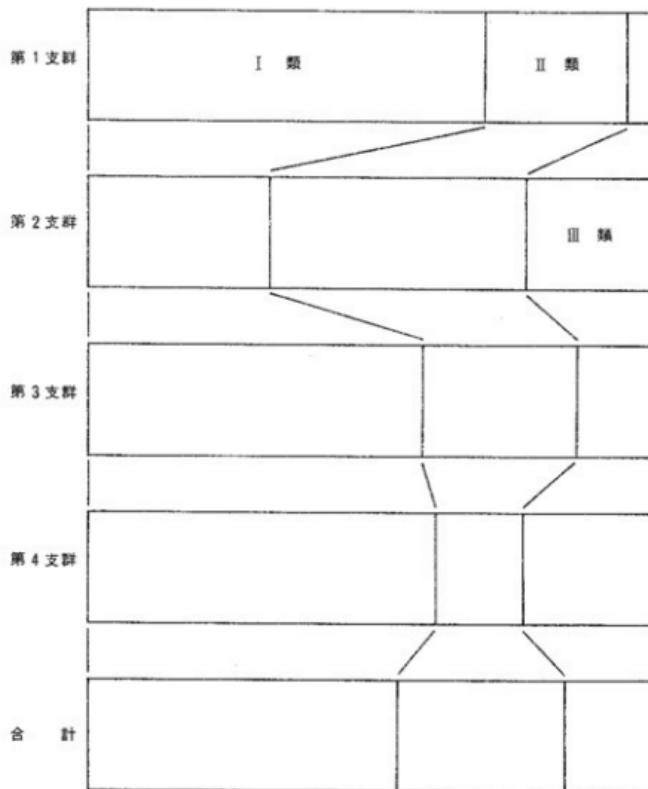


図-109 玄室平面形態支群別比率

ものも含んでいる。また、後者においては他地方の横穴でドーム形とされるような床面からドーム形の傾斜を示すものではなく、壁面が床面より垂直に立ち上がり、天井部のみドーム形を呈するものが通例である。

それでは、この玄室壁面段は何を示したものであろうか。一般には、横穴は家屋を模倣して造られたものであり、家の軒先を表現したものであるとされている。なるほど天井に棟木かと思える加工がみられる横穴もみられ、家屋を模倣したことは大いにあり得るであろう。しかし、高井田に横穴が造られ始めた6世紀中葉～後葉は、堅穴住居から獨立柱建物への移行期にあたりおり、横穴の基本的な形態変化が認められない点に家屋を模倣したものと断定することに疑問も感じる。また、家屋の模倣を意図していたならば、寄棟や切妻タイプの天井を造るはずであり、玄室壁面段のみをえて家形模倣とするのはどうであろうか。ドーム天井は寄棟の崩れたものと考えることもでき、本来は玄室壁面段も軒を意図していたのかもしれない。しかし、このように考えるならば、退化した形態を取て家形と強調するのは適当ではないと考えられる。おそらく、玄室壁面段を造ること自体に何らかの意義を見出していたものであろう。

b. 玄室平面形態と規模

玄室平面形態は、四隅が直角をなす正方形、もしくは縱長の長方形を基本とする。しかし、不整形な平面を呈するもの、隅丸平面を呈するものも多い。花田氏は玄室平面形態を横長長方形、正方形、縱長長方形と分類し、この順に変遷すると結論づけている。この変遷については後述するが、花田氏は平面形態の分類基準を示しておらず、混乱もみられる。そこで、玄室幅指數（玄室幅+玄室長×100）⁽⁴⁾が90未満の縱長長方形を呈する横穴をⅠ類、玄室幅指數が90以上110未満の正方形を呈する横穴をⅡ類、玄室幅指數110以上の横長長方形を呈する横穴をⅢ類として、支群別に、また玄室壁面段の有無別に各類の横穴の数を示したものが表-1である。また、各類の支群別比率を示したものが図-109である。第1支群20基、第2支群22基、第3支群22基、第4支群13基を対象としたものであり、大略の傾向は把握できると思う。

その結果によると、全体ではⅠ類が半数以上を占め、Ⅱ類が30%、残りがⅢ類となる。また、第1支群はⅠ類が多く、Ⅲ類が少ないことがわかる。第2支群はⅠ類が少なく、Ⅱ類が多い。第3支群と第4支群はよく似た傾向を示すが、第4支群でややⅢ類が多くなることがわかる。

一方、玄室壁面段の有無と玄室平面形態の関係をみると、全体的には壁面段のみられる横穴にⅠ類が多く、壁面段のみられない横穴ではⅡ・Ⅲ類が多くなる傾向がみられる。この傾向は、第1支群において最も顕著に表されており、第3支群ではむしろ逆の傾向がみられる。

次に、平面形態について更に詳細に検討するために、各横穴の玄室長と玄室幅の関係を支群別にグラフにしたものが図-110であり、各支群の平均値を示したのが表-2である。いずれも玄室壁面段の有無によって区別した。

これによると、先述した第2支群に方形平面が多く、他の支群では縱長長方形平面が多いこ

平面形態		玄室長・cm		玄室幅・cm		玄室面積・m ²		玄室幅指数	
第1支群	壁面段あり	347	333	285	291	9.9	9.7	82.1	87.4
	壁面段なし	318		296	291	9.4	9.7	93.1	
第2支群	壁面段あり	309	313	297	306	9.2	9.6	96.1	97.8
	壁面段なし	324		331		10.7		102.2	
第3支群	壁面段あり	315	313	279	273	8.8	8.5	88.6	87.2
	壁面段なし	310		257		8.0		82.9	
第4支群	壁面段あり	320	302	268	267	8.6	8.1	83.8	88.4
	壁面段なし	280		266		7.4		95.0	
合 計		壁面段あり	320	316	285	9.1	9.0	89.1	90.5
壁面段なし		309		288		8.9		93.2	

表-2 玄室規模平均値支群別一覧表

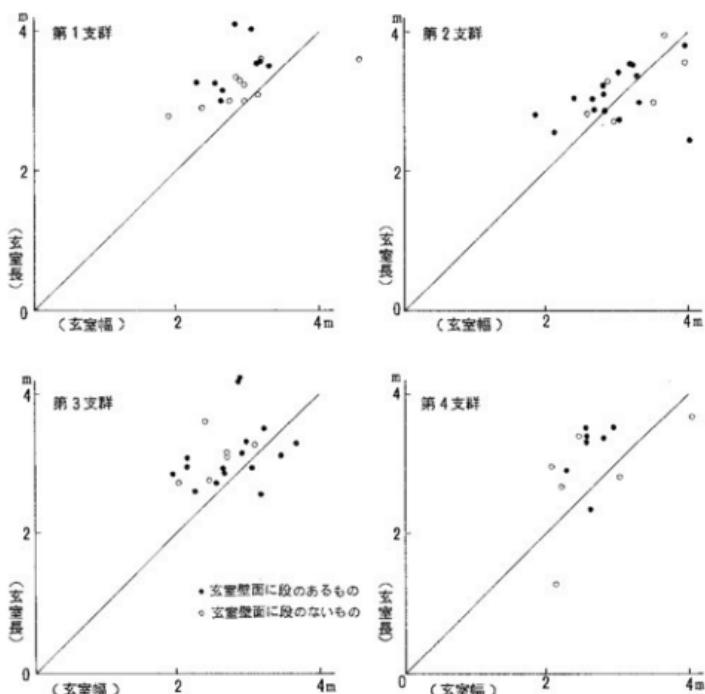


図-110 玄室規模支群別グラフ

とがより一層明瞭となる。特に第1支群で縦長長方形指向が強いことがわかる。また、玄室長と玄室幅、それに基づく玄室面積を比較してみると、第1・2支群の玄室が比較的規模が大きく、第3・4支群の玄室が小さいことがわかる。

玄室壁面段の有無についてみると、やはり段を有するものは縦長長方形平面が多く、段の無いものに方形平面が多くなることが明白となる。しかし、第3支群においては、先述のように逆の結果となる。玄室の規模でみると、玄室壁面段を有する横穴のほうが規模がやや大きいことが指摘できる。ただし、第2支群のみは壁面段を有する横穴のほうが小さくなる。(表-2)

以上77基の横穴すべての平均値を出してみると以下のようなになる。玄室長316cm、玄室幅286cm、玄室面積9.0m²、玄室幅指数90.5、すなわち玄室長：玄室幅が10:9のやや縦長の方形平面を呈するというが高井田横穴群の横穴の平均像である。

各支群別の玄室の特徴をまとめると、第1支群は縦長長方形平面(Ⅰ類)が多く、規模は大きい。玄室壁面段を有するものは縦長長方形平面指向が強くなり、規模も更に大きくなる。第2支群は正方形平面(Ⅱ類)が多く、規模も大きい。玄室壁面段の無いものがより方形平面の傾向を示し、規模は非常に大きくなる。第3支群は横穴群全体の平均値より規模が小さくなり、玄室壁面段の無いもののはうがより縦長長方形平面を指向し、他支群とは逆の傾向がみられる。第4支群は第3支群とよく似た傾向を示すが、規模がより一層小さくなり、玄室壁面段の無いものは方形平面を指向している。

このように、各支群ごとに玄室平面形態およびその規模に差がみられることが確認できた。これが各支群の特徴を示すものであるのか、あるいは各支群の形成時期の差を示すものであるのかは、以下の検討で明らかにしていきたい。

次に、玄室平面形態の一つとして羨道の位置について検討してみたい。高井田横穴群では、大半の横穴が玄室中央に羨道が取り付く両袖式の平面形を呈する。ところが、羨道が玄室の一方に片寄って取り付く片袖式に近い平面形を呈するものもみられる。花田氏は、片袖に近い平面形を呈する横穴を片袖式(Cタイプ)と分類し、先述の家形模倣(Aタイプ)、ドーム天井(Bタイプ)と共に3類に分類している。しかし、この分類は不適切である。片袖式とされたCタイプにも玄室壁面段を有するものと有さないものの両者が認められ、片袖式をタイプとして設定するならば、両袖式との比較においてのみタイプ設定が可能となるものであろう。また、羨道が玄室の一方に片寄って取り付いているだけで片袖式と表現するのも問題があるよう思う。

羨道が玄室の一方に片寄って取り付く横穴を列挙すると、玄室の極端に左寄りに取り付いてほぼ右片袖式となる横穴は2-57、4-33号墳、かなり左寄りに取り付く横穴は1-9・23、2-5・26・27、3-29、4-7号墳、やや左寄りに取り付く横穴は1-1・7・19号墳となる。同様に玄室の極端に右寄りに取り付いてほぼ左片袖式となる横穴は2-11・17号墳、かなり右寄り

に取り付く横穴は2-4・13・14、3-28・30・32、4-39号墳、やや右寄りに取り付く横穴は2-3・33a・33b号墳である。

これらの中で、造り付け石棺が存在するために石棺の位置の影響を受けて羨道が片寄ったのではないかと考えられる横穴に1-23、2-4・5、4-7・39号墳がある。また、3-30号墳は先行する3-29号墳を避けるために羨道が片寄ったものと考えられる。しかし、これ以外の18基については、羨道を一方に寄せる必然性は認め難く、横穴掘削時の手違いによるものか、もしくは羨道を一方に寄せることに何らかの意義を見出していたものと考えられる。後者のように考えられる例として、小支群内で同形態をとる横穴があげられる。例えば、2-14・17号墳は2-12号墳と共に小支群をなすと考えた横穴であるが、先行する2-12号墳の羨道が玄室中央に位置するのに対して、後続する2-17・14号墳では羨道が右寄りに取り付いている。隣接する小支群内にも、2-11号墳、2-13号墳のように右寄りに取り付く横穴がみられる。また、2-26・27号墳は並列する横穴で、共に左寄りに羨道が取り付く形態となり、その近くに並列する2-33a・33b号墳では右寄りに羨道が取り付く形態となっている。このように小支群内において、同様な平面形態を呈する横穴が存在すること、すなわち小支群の個性として評価することができる。しかし、これに当てはまらない例も多くあることに注意を払っておく必要があるだろう。

c. 造り付け石棺

高井田横穴群の埋葬は、棺釘等の出土から大半が木棺によってなされたものと考えられ、1横穴には3~4体の埋葬が想定される。また、木棺以外の埋葬施設として造り付け石棺が多用されていることが特徴としてあげられる。横穴に造り付けの埋葬施設を伴う例は、全国各地にみられる。しかし、その多くは棺台、棺床、棺座などと呼ばれる高さの低いもの、あるいは周囲を区画しただけのものであり、高井田横穴群でみられるような高さの高いもの、いわゆる石棺としての機能を果たし得るものは少ない。もちろん高井田横穴群にも2-2号墳左棺や4-42号墳のように石棺と呼ぶには低すぎるようと思われるものもあるが、大半は高いものであり、おそらく当時畿内で多くみられた家形石棺を意識したものではないかと考えられる。

造り付け石棺が奥壁に存する例は、1-10・22、2-2・3、3-10・15・19、4-42号墳の8基、左側壁に存する例は、1-21・23、2-2・17、3-30、4-7・39・42号墳であり、1-21号墳と4-39号墳にはそれぞれ2棺の造り付け石棺がみられるので8基10棺となる。右側壁に存する例は、2-4・5、4-27・42号墳の4基である。この中で2-2号墳は奥壁と左側壁、4-42号墳は3壁と中央にみられるので、合計すると17基23棺の造り付け石棺がみされることになる。

このように、奥壁と左側壁に造り付け石棺を造る例が多く、右側壁にはほとんど造られないことがわかる。右側壁に造られている2-4・5号墳は小支群を形成するものであり、小支群内

の特徴として把えることができる。4-42号墳は4棺造り付けのものであり、例外として考えると、左側のほうが右側より重要な位置として認識されていたのではないかと考えられる。

また、横穴完成後に改めて造られたと考えられる造り付け石棺がみられる。1-22、2-4、3-15、4-7・33号墳がそれである。これらは、完成された壁面に掘り込んで造られたものであり、平面形態が不整形になったり、その周囲のみ工具痕が顕著に残ることなどによって判別される。しかし、これらの造り付け石棺が追葬に伴うのか、横穴完成後に初葬に先立って改めて造られたものかを判断することはできない。造り付け石棺を造るためには、かなりの作業スペースと掘削に伴う土の搬出が必要となる。追葬時に造られたならば、先葬に伴う副葬品、棺材、人骨等の片付けが必要となってくる。このような痕跡、もしくは初葬面上層に造り付け石棺掘削に伴う埋葬面が確認されない限り、これを証明することはできない。例えば、安福寺横穴群南群18号墳を調査した桑野一幸氏は、平面形態・工具痕等から奥壁に存する造り付け石棺を追葬時のものとし、玄室内の木棺2基が先に埋葬されたと考えている。⁽³⁾しかし、木棺2基を安置したままで造り付け石棺を掘削することは不可能であり、木棺を片付けた痕跡もみられないことから、この造り付け石棺を追葬とみなすことはできない。このような例があるので、横穴完成後に造られた造り付け石棺の中にも、初葬に先立って造られているものが多いのではないだろうかと思われる。

造り付け石棺以外の埋葬に伴う施設として、棺台がある。棺台は2-2号墳右側、3-28号墳左側、4-27号墳奥にみられ、3-29号墳奥には四周を溝で区画した棺台状の施設がみられる。

安福寺横穴群では造り付け石棺4基、棺台1基のはかに、陶棺がみられる。玉手山東横穴群では造り付け石棺2基のはかに、箱式石棺・陶棺がみられる。造り付け石棺がみられる率は、高井田横穴群で最も高く、玄室形態が判明しているもの86基中の17基、約20%を占める。一方、安福寺横穴群・玉手山東横穴群では約10%となり、高井田横穴群の特異性が注目される。また、安福寺横穴群や玉手山東横穴群でみられる陶棺や箱式石棺がみられない点も特徴として注目される。

次に、造り付け石棺の蓋について考えてみたい。3-30号墳から二上山産の凝灰岩で造られた石棺蓋が発見された。棺蓋は2石から成り、1石の長さが123cm、幅80cm、厚さ14cm、上面の平坦面の幅が58~63cmを測る著しく扁平な寄棟状を呈する家形石棺蓋である。繩掛突起はみられず、もう一石もおそらく同規模・同形態のものであろう。3-30号墳の時期は6世紀末葉頃と考えられ、同時期の一般的な家形石棺と比較すると、著しく扁平であるといえる。このように扁平な蓋を呈する家形石棺は、茨木市南塚古墳・向日市物集女車塚古墳等で本例に先行する例が見出せる。⁽³⁾扁平な蓋を伴う家形石棺の系譜が、整正な家形石棺の系譜とは別に存在したものと考えられ、本例もその系譜上にあるものと考えたい。このようなタイプの家形石棺として、河内でもすえの森古墳、山畑8号墳、桜井1号墳などにみられる。⁽³⁾概して、組合式石棺には扁平な

蓋石が使用され、劍抜式石棺には整正な蓋が使用されているようである。

3-30号墳の棺蓋は造り付け石棺の法量に合わせて造られたものであろうか、それとも棺蓋に合わせて造り付け石棺を造ったものであろうか。なぜ棺蓋のみ二上山産で、棺身は造り付けなのか。他の横穴からは二上山産の凝灰岩は全く出土しておらず、どのようにして棺蓋を入手したのであるか。3-30号墳の被葬者は、それを可能にするような人物だったのであるか。次々と疑問がわいてくる。しかし、二上山産の石材が石棺蓋のみである点、家形石棺の系譜として主流となる整正なものではなく、扁平なものである点に、3-30号墳の被葬者、ひいては高井田横穴群の被葬者集団の限界を見てとれるように思う。

3-30号墳以外では、4-27号墳の造り付け石棺に棺蓋と考えられる扁平な自然石が1石みられたのみで、他の造り付け石棺には棺蓋は認められない。調査を実施した横穴でも棺蓋と考えられるものが出土していないため、大半の横穴では木製の板材を棺蓋としたのではないかと考えられる。高井田の凝灰岩でも棺蓋を造ることは不可能ではないと思われるが、軟質なため、適さないであろう。

造り付け石棺を有する横穴は、6世紀中葉から7世紀初頭までの年代幅がみられ、限られた時期にみられるものではないようである。また、玄室壁面段を有する横穴に多いという事実が指摘でき、造り付け石棺を有する横穴は、その他の部分にも細部加工を加えることが多いと考えられる。

d. 排水溝

玄室床面に排水溝が掘られた横穴がみられる。3-9・12・24号墳がそれであり、3-9・12号墳の排水溝は1本のみであるが、3-24号墳の排水溝は玄室周囲と中央の排水溝が玄門部で1本となり、羨道中央から墓道へと続くものである。安福寺横穴群では排水溝はほとんどみられないが、玉手山東横穴群では後者のように整った排水溝が多くみられる。高井田横穴群では第3支群にのみみられるので、支群内の特徴として把握することができるかもしれない。

e. 玄門構造

玄門部に施した加工として最も注目されるのが、玄門上部の舌状に突出した樋状構造である。これは、横穴式石室にみられる樋石を意識したものかと考えられ、横長の石を玄門に架構したとみえるように加工されている。高井田横穴群全体では21基で確認されており、2-10号墳以外は、すべて玄室壁面段を有する横穴である。玄室壁面段を有する横穴の40%に樋状構造がみされることになるが、玄門上部は後世に破壊されることが多いため、実際には玄室壁面段を有する横穴の約半数に樋状構造を伴っていると考えられる。傾向としては、第2支群南西部、第3支群中央部に集中している状況がみられ、第1支群・第4支群には少ない。時期的な偏りもみられないようである。

これ以外の玄門に施された加工としては、2-2号墳の柱状加工、2-3号墳の一段掘り下げ

た長方形状の加工がみられるのみであり、小支群内の特色として考えられるものである。

f. 美門構造

美門は、玄門よりも複雑、かつ丁寧な加工が施されていることが多い。これは、横穴の外観を意識したものと考えられる。

美門構造の一つとして注目されるのは、美門上部前面、厳密に表現すると墓道天井部前面に天井石として自然石が架構されている例が多いことである。調査結果から天井石が架構されていたと推定されるものを含むと、11基の横穴に天井石が架構されていたことになる。これらの横穴では、いずれも美門上部前面を1m以上の高さまで平滑に仕上げており、この平滑面が裾広がりの形状を呈するものが多い。大半の横穴では、この平滑面上端付近に天井石を架構していたようであるが、2-4・6号墳では、この平滑面の中央よりやや下に架構していたようである。天井石の両端は墓道側壁肩部によって支えられるが、支石として小形の自然石を数個使用している例も多くみられる。また、2-4号墳では、木柱によって天井石を支えていたのではないかと考えられる。この11基中、9基の玄室壁面に切り込み段がみられ、やはり玄室構造との相関関係が推定される。傾向としては、第2支群南東部に集中し、第3・4支群では1例ずつしか認められない。時期は限定されるものではないようである。

天井石の石材は大半が花崗岩であり、一部に安山岩が使用されている。2-14号墳の石材が高井田山古墳の石材転用の可能性があることは本文中に指摘したが、花崗岩は周辺の山で採石できるとはいうものの、高井田の丘陵ではみられないものである。したがって、少なくとも数百mの距離を運搬してきたことになる。それほどまでにして、なぜ天井石を架構したのだろうか。横穴式石室を意識していたのではないかと考えられることも含めて、外観を華やかにすることに、かなりこだわっていたのではないかと考えられる。これまでの調査では、安福寺横穴群や玉手山東横穴群では確認されておらず、高井田横穴群だけの特色と考えられる。畿内では天理市龍王山古墳群で美門を石積みによって築いた横穴が知られており、⁽³⁾中国地方山間部には天井石まで架構したものがみられるが、直接的な関係は認め難い。⁽⁴⁾

通常の横穴では、美門周囲を平滑に仕上げているものが多く、美門上部のみ1段高く突出する横穴もみられる。また、未加工のものも多い。全体の傾向としては、第1・2支群では美門周囲を平滑に仕上げるものが多く、第3支群では美門上部が段をなすものが多く、第4支群では未加工のものが多い。また、美門周囲を加工するものの中で、更に美門周囲を段状に1段掘り窪めたものに2-3・6、3-2号墳があり、更に大きく掘り窪めたものに3-6号墳がある。墓道天井部が段をなす2-13号墳もこの1例に加えられるであろう。やはり、美門を丁寧に加工する横穴には玄室壁面段を有する横穴が大半を占める。

美門床面に段がみられる横穴もある。2-4・6・59、3-9・10・12・24、4-28・33号墳がそれであり、3-10・12号墳では、この段が2段になっている。また、2-11・14、3-21号墳

では玄門近くにこの段がみられ、2-17号墳においては羨道部のみ玄室・墓道より1段高く造り出されている。これらの段は、羨道と墓道を区画するために造られたものか、排水を考慮して造られたものと考えられるが、2-17号墳のように羨道部が高くなると、玄室内の排水是不可能となる。2-17号墳は框構造を意識したものであろうか。

また、羨門の床面両端、墓道隅部に当たる位置に1段高く造り出された施設を有する横穴がみられる。3-10・29、4-27号墳がそれであるが、何のための施設であるのかは不明である。

以上のように、玄門や羨門に細かい加工を施した横穴が多くみられるが、そのような加工を施す横穴の大半が玄室壁面段を有するものであり、横穴を丁寧に造ることの一環としてなされたものであると考えられる。特に羨門の加工は、外観を強く意識した結果であると考えられ、注目される。

g. 閉塞

自然石を積み上げることによって羨道部を閉塞したと推定される横穴に、2-11・57、3-12・29、4-31・33・39号墳がある。石材は大半が花崗岩であり、一部に安山岩がみられる。閉塞位置は、羨門部に近い羨道であったと推定される。ところが、このような通常の閉塞石がみられる横穴は、羨道から墓道にかけての調査を実施した横穴31基のわずか23%を占めるにすぎない。もちろん後世の盗掘や再利用によって閉塞石が持ち出されている横穴も存在するであろうが、それでも全体に占める比率はごく僅かである。それでは、他の横穴はどのように閉塞されていたのであろうか。そのヒントを与えてくれるのが、2-2・4・10・12、4-42号墳であり、これらの横穴の羨門部床面には墓道を横断する形で溝状の遺構が掘られている。おそらく、この溝に板状品を立て、それを閉塞施設としていたものと考えられる。そして石製の板状品が全く出土していないことから、この板状品は木製のものだと推定される。この溝に板状木製品を立てて羨門部を閉塞したものであろう。羨門部にこのような溝状遺構がみられない横穴でも、おそらく板状木製品を閉塞に使用していたのではないだろうか。閉塞石を有する横穴の分布状況には注目すべき点はみられないが、羨門に溝状遺構を有する横穴は、第2支群東部に集中する傾向がみられる。ただし、これは調査を実施した横穴の偏りによるものかもしれない。また、時期における偏りもみられないようである。

以上のように、高井田横穴群の横穴においては、さまざまな構造・施設がみられる。そして、これらの構造は、近隣の横穴においてよく似た構造がみられる傾向はあるものの、編年の根拠となるような構造は見出せないことが判明した。つまり、各横穴、あるいは支群の個性として把握すべきものであると考えられる。それでは、高井田横穴群の横穴編年は、どのようになすべきなのであろうか。次に編年について考えてみたいと思う。

3. 横穴の編年

a. 出土須恵器からみた横穴の年代と玄室形態

これまでの発掘調査によって、年代をほぼ特定できる須恵器が出土した横穴は20基である。高井田横穴群の総数162基から考えると、1割強にすぎない数字であり、これをもって高井田横穴群全体について考察を加えることは危険であるかもしない。しかし、今後大幅に調査数が増加することは考えられないため、これら20基について検討を加えてみたい。

検討に入る前に、花田氏が一連の論考で明らかにされた高井田横穴群の編年を紹介しておきたい。花田氏の結論は、横穴はAタイプ（家形模倣）、Bタイプ（ドーム天井）、Cタイプ（片袖式）の3類に分類でき、A・Bタイプは玄室平面が横長長方形、方形、縦長長方形の順に6世紀前葉（TK10型式）、6世紀中葉（MT85型式）、6世紀後葉（TK43型式）と変化し、Cタイプのみ6世紀前葉から方形・縦長長方形平面の玄室が存在したというものである。⁽ⁱⁱⁱ⁾しかし、編年の標識とされる横穴には遺物を出土していないものも多く、問題が多いように思われる。また、高井田横穴群の編年をする際に参考としている玉手山東横穴群についても問題点が多い。^(iv)

本報告では、TK10型式が6世紀中葉、TK43型式が6世紀後葉、TK209型式が6世紀末葉として年代を決定した。そのため、花田氏と齟齬をきたす点も多く、また型式設定においても例えば4-42号墳（1985年度調査のC号墳）出土須恵器の一品（高杯）を筆者はTK10型式と考えたが、花田氏はTK43型式とするなどの差が認められる。筆者の認定した出土遺物の年代と横穴との対応関係は表-3のようになる。これは、横穴出土須恵器の中で最古と位置付けられるものの年代をその横穴の掘削時期と考えたものであり、それぞれの横穴の玄室平面形態、玄室壁面段の有無によって分類したものである。

その結果、6世紀中葉の横穴にはI類（玄室平面縦長長方形）、II類（方形）、III類（横長長方形）がそれぞれ4基、2基、1基となり、I類が多い傾向がうかがえる。しかし、6世紀後葉、末葉においては玄室平面形態と年代との対応関係は見出し難い。また、玄室壁面段の有無との

年代	I類		II類		III類	
	壁面段あり	壁面段なし	壁面段あり	壁面段なし	壁面段あり	壁面段なし
6世紀中葉	3-2号 4-42号	2-59号 4-33号	2-12号	2-11号		4-31号
	2-13号 4-1号	3-26号 4-28号	2-4号	2-57号 4-27号	2-17号 3-29号	2-5号 4-39号
6世紀末葉			2-6号		3-30号	

表-3 横穴の年代と玄室形態

対応関係も見出せない。このように、花田氏の指摘するような横長長方形から正方形、縦長長方形へと玄室平面形態が変化するという想定は、とてもではないが首肯し難いものであり、むしろ逆の傾向がみられる。各時期を通じて、さまざまな玄室平面形態がみられるというのが事実のようである。また、玄室壁面段の有無に関しては、花田氏の指摘するように高井田横穴群の初期から両者が存在したことは確実であり、従来考えられていたような玄室壁面段を有するものから玄室壁面段の無いものへという図式は成り立たないようである。しかし、玄室壁面に段を有するものに限ってみると、玄室の3壁、もしくは4壁に段がめぐらされるものから、一部の壁面にのみ段をめぐらすものへ、また段幅の広いものから狭いものへという変化はみられるようである。更に、各支群の形成時期にはほとんど差がみられないようであり、先述したような支群ごとの差異は、支群の個性として把えられるようである。

以上のように、高井田横穴群全体に適合できるような編年基準を作成することは不可能と考えられる。そこで、次に小支群について年代と横穴形態の変化を追求してみたいと思う。

b. 小支群の検討

横穴は、2～3基から成る小支群にグルーピングすることが可能である。そこで、ある程度年代決定が可能な小支群に対して、その掘削順序と年代を明らかにし、横穴の形態変化について考えてみたい。

ここでは、2-2～5号墳、2-10・11号墳、2-12・14・17号墳、3-29・30号墳の4小支群について検討する。それぞれの横穴の掘削順序、玄室の規模、玄室幅指数、羨道幅指数⁽¹⁰⁾、年代を一覧にしたものが表-4である。

この表の検討から、まず2-2～5号墳によって構成される小支群においては、玄室長が次第に短く、玄室高が低くなり、玄室面積が小さくなる傾向がみられる。これに伴って、玄室平面

横穴・序番	玄室長・cm	玄室幅・cm	玄室高・cm	玄室面積 m ²	玄室幅指数	羨道幅指数	推定年代
2-4号	353	324	185	11.4	91.8	28.7	6世紀後葉
2-5号	303	353	180	10.7	116.5	35.1	6世紀後葉
2-3号	274	305	167	8.4	111.3	31.1	6世紀末葉
2-2号	245	402	154	9.8	164.1	43.8	7世紀初頭
2-11号	396	368	180	14.6	92.9	28.5	6世紀中葉
2-10号	282	260	147	7.3	92.2	48.1	
2-12号	310	284	188	8.8	91.6	33.8	6世紀中葉
2-17号	299	334(234)	163	10.0(7.0)	111.7(78.3)	26.3(37.6)	6世紀後葉
2-14号	256	213	140	5.5	83.2	43.7	
3-29号	256	318	180	8.1	124.2	26.4	6世紀後葉
3-30号	311	346(266)	170	10.8(8.3)	111.3(85.5)	35.8(46.6)	6世紀末葉

()内は造り付け石棺を除いた数値

表-4 小支群別横穴の玄室規模・形態と年代

形態は方形から横長長方形へ変化し、玄室幅に比して羨道幅が広くなる傾向がうかがえる。

次に2-10・11号墳によって構成される小支群においては、玄室規模の全体的な縮小と玄室幅に比して羨道幅が広くなる傾向が指摘できる。

2-12・14・17号墳によって構成される小支群においては、規則的な変化は見出しづらい。しかし、3基中ただ1基造り付け石棺を有する2-17号墳について、造り付け石棺を除いた規模・形態を検討すると、玄室規模の全体的な縮小と玄室平面形態の縦長方形化、玄室幅に比して羨道幅が広くなる傾向が指摘できる。

3-29・30号墳によって構成される小支群においては、玄室平面規模の拡大と玄室高の縮小、玄室平面形態が横長方形から方形へ、玄室幅に比して羨道幅が広くなるという傾向が指摘できる。

以上の4小支群に共通してみられる傾向は、玄室高が低くなる点と玄室幅に比して羨道幅が広くなるという2点である。前者は天井の扁平化と言い換えることができるかもしれない。また、玄室規模が縮小する傾向もほぼ認められ、玄室高が低くなる点と共に、玄室内空間の縮小、ひいては掘削土量の減少が指摘できるようである。羨道幅の拡張傾向については、玄室内掘削土の搬出を容易にするためかと想像され、これも掘削に伴う労働力の軽減に関係があるのかもしれない。

しかし、このように明瞭な玄室高の低下、羨道幅の拡張傾向も、他の小支群との比較においてはあまり意味をもたないようである。例えば、6世紀後葉の2-17号墳の玄室高が163cmであるが、6世紀末葉の3-30号墳の玄室高が170cmとなる。羨道幅指数においても同様なことが指摘できる。すなわち、小支群内においての分析によってのみ編年が可能であり、このような傾向が大支群についても認められるのか、更には横穴群全体についても認められるのかという手順で編年作業はなされるべきであろう。しかし、現在の資料では高井田横穴群全体の編年はおろか、支群別の編年も困難であると言わざるを得ない。花田氏が抽出された小支群、およびその年代は、本報告で試みた小支群のグルーピング、年代観と大きく異なるものとなっており、グルーピング、および編年の難しさを痛感させられる。例えば、小支群のグルーピングを試みる場合には、平面的な位置関係のみでなく、立面上の上下関係についても考慮する必要がある。また、未確認の横穴が相当数存在すると予想される状況下でのグルーピングに際しては、危険が伴うことも考慮する必要があるだろう。

横穴の編年についてまとめると、時期が新しくなるほど玄室規模、特に玄室高が縮小し、玄室幅に比して羨道幅が拡大する傾向がみられるということである。また、第2支群においては新しい横穴を古い横穴より高い位置に造る傾向がみられるが、これは地形に影響された結果であるかもしれない、第3支群には必ずしも当てはまらないようである。しかし、編年を試みるに際しては、このような視点も必要であろう。

4. 横穴の系譜

a. 豊前地域からの影響

花田氏は、西日本各地の横穴の年代と変遷について詳細に検討し、高井田横穴群の横穴は、6世紀前葉（TK10型式）に豊前地域から海路によって直接伝播したものであり、伝播時から玄室壁面段を有するもの（Aタイプ）と有さないもの（Bタイプ）の両タイプが存在したと結論づけた。⁽⁴⁾ 高井田横穴群に先行する時期の横穴は九州にしかみられず、九州の横穴の中では豊前北部地域の横穴の一部に形態が酷似する横穴があることを追求した労作であり、筆者も花田氏の考えを概ね支持するものである。ただし、豊前地域からの一元的、直接的伝播として片付け得るものであろうか。やや疑問点も残るので、これらについて整理してみたい。

b. 棺配置

まず、埋葬という行為において、重要な要素の1つと考えられる棺配置について検討してみたいと思う。調査を実施した横穴は、すべて後世の盗掘等による搅乱を受けており、高井田横穴群において棺配置を推定できるものは3例しかみられない。しかも、この中の2例は造り付け石棺の位置によって棺配置が復元できるものである。そこで、安福寺横穴群、玉手山東横穴群で複数の棺をもち、かつ棺配置の推定できるものを加えた8基について、棺配置を復元してみたい。

高井田横穴群では、2-2号墳で奥壁・左側壁に造り付け石棺がみられ、右側壁に棺台がみられることから3棺の配置が復元できる。更に玄室中央部に主軸に直交する埋葬も想定されるが、棺釘が出土していないことから3棺としておく。

1986年度に調査を実施した4-1号墳（112号墳）では、耳環・棺釘の出土位置から木棺3基による埋葬が復元される。⁽⁵⁾ 初葬は奥壁沿いの北東頭位の埋葬であり、次に左右両側壁に沿って北西頭位の2棺が埋葬されているが、この2棺の前後関係は不明である。その後、更に奥に1棺が埋葬されている可能性も考えられる。

1985年度に調査を実施した4-42号墳（C号墳）では、床面に4棺の造り付け石棺がみられた。⁽⁶⁾ 中央の1棺は通路としての可能性も指摘されている。更にこの上層にも自然石の棺台を敷いた木棺1基が埋葬されている。

安福寺横穴群では、南群1号墳と18号墳で棺配置が復元できる。南群1号墳は、1950年に調査が実施され、奥壁、左右両側壁に沿って3棺の亀甲形陶棺が安置されていたことが報告されている。⁽⁷⁾

南群18号墳は、奥壁に造り付け石棺がみられる。この造り付け石棺が初葬棺と考えられることは前述のとおりである。この石棺以外に、桑野氏は玄室主軸に直交する木棺2基を想定しているが、銀環や棺釘の出土位置から考えると、玄室主軸に平行する南頭位の木棺2基と復元するほうが妥当であろう。これについては、花田氏も筆者と同様な復元を行なっている。⁽⁸⁾

1968年に大阪府教育委員会によって調査が実施された玉手山東横穴群では、3基の横穴で棺配置が復元されている。⁽⁹⁾ A-1号墳は、奥壁に造り付け石棺を有するものであり、棺台石や棺釘の出土状況から、その前面に玄室主軸に平行する木棺2基が復元されている。その後に、更にもう1回の追葬が推定される。

A-3号墳では、奥壁と左側壁に沿って2基の造り付け石棺がみられ、棺釘の出土状況から玄室の残ったスペースに玄室主軸に平行する1基の木棺も想定されている。

B-5号墳では、玄室左半部に玄室主軸に平行する箱式石棺がみられ、右側のスペースから棺釘が出土しているので、右半部には玄室主軸に平行する木棺が安置されていたようである。

以上8基の横穴の棺配置について述べたが、玉手山東A-3号墳でやや変則となるものの、8基中7基の横穴で「コ」の字形の棺配置をとっていることが判明した。当然、奥に位置する棺が初葬棺であり、横穴の主たる被葬者であったと考えられる。もっとも、側壁に造り付け石棺を有する横穴も多く、主たる被葬者を必ずしも玄室奥に埋葬したとは考えられない。しかし、8基中7基の横穴で確認できた「コ」の字形の棺配置を偶然とすることはできないであろう。

c. 肥後地域との関係

柏原市域では、平尾山古墳群を中心に多数の横穴式石室墳の調査を実施してきたが、棺配置まで復元できる例は少ない。また、棺配置を復元できる例の大半が7世紀代の石室であり、6世紀代となると数例にすぎない。しかし、7世紀代の横穴室石室も含めて、棺配置が復元できるものはすべて玄室主軸に平行する棺配置をとっており、直交する形態、まして「コ」の字形棺配置はみられない。「コ」の字形棺配置は、柏原市域の横穴の特徴として覚えることができる。それでは、「コ」の字形棺配置をどのように評価すればいいのだろうか。

「コ」の字形の棺配置で連想されるのが、肥後地域である。肥後地域の横穴は、玄室が方形平面・ドーム天井となり、玄室床面が「コ」の字形に区画されて埋葬されるものが多く、肥後型として筑前・豊前型と対比されている。⁽¹⁰⁾ 肥後型の横穴は高井田横穴群の特徴と通じるものがあり、特に4-42号墳にみられた造り付け石棺は、肥後型の埋葬方法そのものである。しかし、羨道や墓道を含めた平面形態、あるいは玄室断面形態を考慮すると、高井田横穴群のほうが整正なものであり、直接的な関係を想定することは困難なように思われる。むしろ、前述のように豊前地域の横穴のほうが高井田横穴群の横穴形態に近いといえる。

ここで眼を転じて、横穴式石室について考慮してみたいと思う。横穴は、横穴式石室の影響のもとに出現したものと考えられ、その後も横穴式石室の影響を受けつつ展開していくことが各地の横穴にみられる。しかし、高井田横穴群については、周辺の横穴式石室とは一線を画するものであり、類似点はあまりみられない。近隣の横穴式石室と比較しても、平面形態において和歌山市岩橋千塚古墳群などにみられる横穴式石室と類似点が見出せるものの、直接的な関係は考え難いものである。やはり横穴式石室との比較においても、肥後型の横穴式石室が最

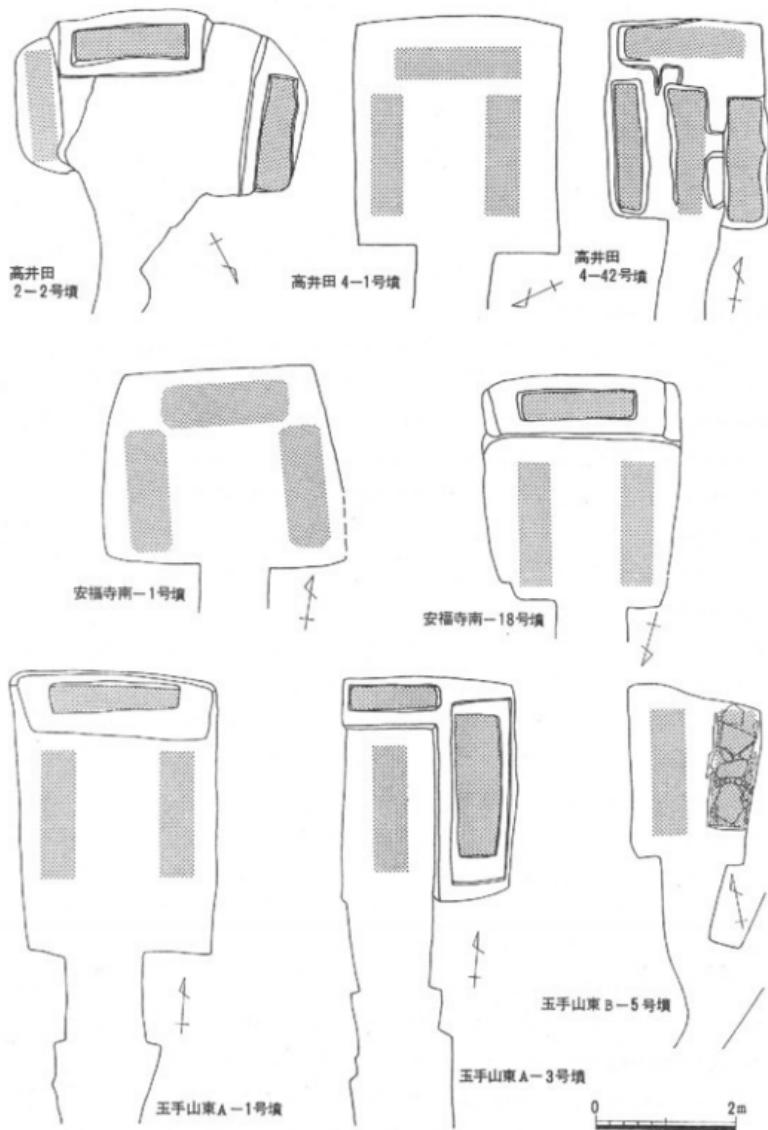


図-111 棺配置

も類似したものとなる。肥後型横穴式石室は、前述の肥後型の横穴と同様な特徴を有し、玄門両袖部が内側へ突出し、立柱状をなすものが多い。高井田横穴群の横穴において、羨道とした部分はこの玄門に対応し、墓道とした部分の一部は羨道に対応するのではないだろうか。一般に肥後型の横穴式石室では、この突出した玄門部を板石で閉塞している。これは、羨道部を板状木製品で閉塞したのではないかと考えた高井田横穴群の閉塞方法に一致するものである。また、玄門構造の大きな特徴としてあげた玄門上部の棚構造は、九州の横穴でもほとんどみることができないものであり、これも板石を多用する肥後型横穴式石室との関係を推定させるものである。このように、玄室が方形平面を呈し、ドーム天井となる高井田横穴群の横穴は、肥後型横穴式石室との類似点が多く見出せるのである。

しかし、以上の考察のみで高井田横穴群の横穴は肥後から伝播したものであると断定したくはない。それは繰り返し述べているように、横穴という埋葬形態から考えると、豊前地域との関係が濃厚と考えられるためである。以上の検討から、高井田横穴群の横穴は、豊前との交流がみられる肥後の一地域、あるいは肥後の影響を強く受けた豊前の一地域から伝播したものではないかと考えたい。もしくは横穴という埋葬形態を採用しつつ肥後型横穴式石室を理想として造られた横穴と考えができるかもしれない。いずれにしても、現在の状況からは、その故地を断定し難いものである。

5. 出土遺物の構成

横穴出土遺物の大半を占めるのが土器である。土器以外には、武器、馬具、農工具、装身具、釘・鍔、埴輪、平安～江戸時代の遺物がある。それらを種類別に、高井田横穴群39基⁽³³⁾、安福寺横穴群7基⁽³⁴⁾、玉手山東横穴群16基⁽³⁵⁾について一覧表にしたものが表-5～7である。

まず、土器についてみると、須恵器のほうが土師器よりもかなり個体数が多いことに気付く。各横穴群別に須恵器・土師器の比率をグラフに示したものが図-112である。このグラフより、高井田横穴群においては他の横穴群より須恵器の占める比率が高く、80%近くになることがわかる。平尾山古墳群の6世紀代の横穴式石室では、須恵器の占める比率が60～70%となるようであり、安福寺横穴群・玉手山東横穴群の比率にはほぼ一致する。ちなみに、7世紀代の古墳では、この比率が逆転し、土師器が過半数を占めるようである。

次に、須恵器の器種構成をみると、蓋杯・高杯・壺でその大半を占めることがわかる。高井田横穴群では、この比率が1:1:1となり、安福寺横穴群・玉手山東横穴群では1:1:2となる。高井田横穴群では壺の比率が少ない分、その他の器種が多くなっている。すなわち、器種がバラエティーに富んでおり、子持器台・器台・台付縁などの特殊な器種の多い点が特徴としてあげられる。高井田横穴群の被葬者集団が、須恵器入手において安福寺横穴群・玉手山東横穴群の被葬者集団より優位な位置を占めていたことを推定せるものである。

土師器については、個体数が少ないと認め、横穴群間の差が大きいために器種構成について

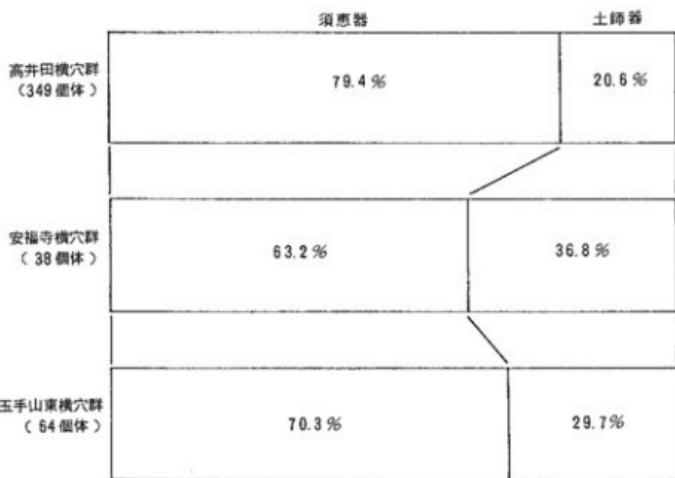


図-112 横穴群別須恵器・土師器比率

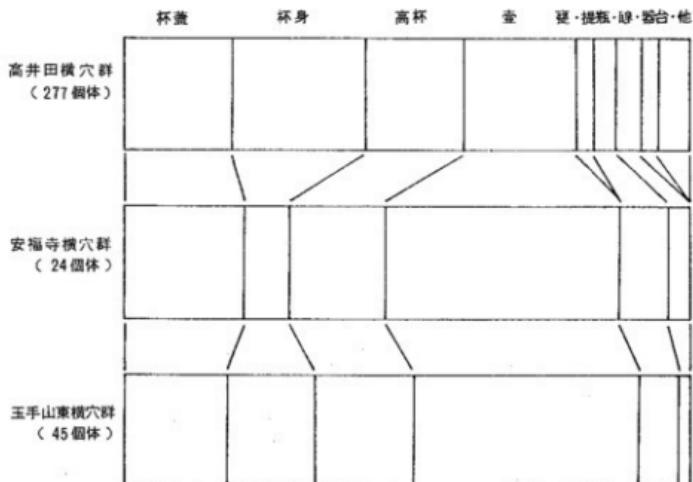


図-113 横穴群別須恵器器種構成

の検討は困難である。

武器は、刀・剣・矛・鉄鎌がみられるが、非常に少なく、高井田横穴群7基、安福寺横穴群2基、玉手山東横穴群1基で出土しているのみである。しかも、刀剣類は5本にすぎず⁴、鉄鎌も1横穴から数本の出土しかみない。盗掘を考慮しても、武器を副葬していた横穴は全体の20%程度だったのでないだろうか。武器の質・量ともに3横穴群通じて非常に貧弱である。

馬具はより一層少くなり、高井田横穴群の3基で出土しているのみで、安福寺横穴群・玉手山東横穴群では全く出土していない。しかも、辻金具・杏葉・壺鏡⁽³⁾が1点ずつ出土しているだけで、かなりの盗掘を見込んでも高井田横穴群全体で馬具を副葬していた横穴は10%程度であろう。なお、馬具を出土した3基の横穴からは、いずれも武器が出土している。馬具・武器を副葬した横穴、武器のみを副葬した横穴が各10%ずつを占めるとすると、その間、そして馬具・武器をもたない横穴の間に階層差を想定できるかもしれない。

農工具類としては、鉄斧・鍥・鋤・刀子・砥石・滑石製紡錘車が出土しており、その大半が刀子である。

装身具類は、耳環・玉類が出土しており、玉手山東横穴群の半数近い横穴から耳環が出土している点が注目される。しかし、平尾山古墳群の6世紀代の横穴式石室墳から多数出土しているかんざしは、横穴からは全く出土していない。

その他の遺物として、大半の横穴から出土する遺物に釘・鎧がみられる。当然のことながら木棺の緊結具として使用されたものと考えられ、大部分の埋葬が組合式の木棺によってなされたと考えられる。ところが、高井田2-59号墳のように、多数の土器が出土しているにもかかわらず、全く釘・鎧が出土していない横穴もみられるので、緊結具を伴わない木棺、あるいは木棺に納めないような埋葬方法もあったようである。

次に、高井田横穴群から埴輪が多数出土している点が注目される。円筒埴輪は、外面1次調整タテハケのみの小形品が大部分を占める。これに若干の朝顔形埴輪・形象埴輪がみられる。各横穴から出土する埴輪の量は少なく、墓道の埋土上層から出土する例が多い。床面から出土することがないため、転落してきた埴輪片が墓道埋没時に混入したものと考えられる。ところが、調査ではこれらの埴輪が横穴に伴うものであるのかどうかという確認ができなかった。この事実を横穴の位置する尾根上に埴輪を樹立した古墳が存在し、その埴輪が混入したと考えることもできる。また、横穴の周辺に少量の埴輪を樹立していたことも考えられる。埴輪は、第2支群の東・中央部、第3支群の東部、第4支群の北東部・西部と広範囲から出土しており、前者のように考えた場合、最低5基の古墳が存在したことになり、現況からは考え難いものである。後者のように、少量の埴輪を墓道脇部などに樹立していたと考えるほうが妥当であろう。安福寺横穴群でも同じように埴輪の出土が認められ、同様な状況が推定されるが、玉手山東横穴群では、これまでのところ埴輪は確認されていない。

横穴 番号	須恵器								土師器				武器	馬具	農工具	装身具	その他の 記載
	杯蓋	杯身	高杯	壺	甕	提瓶	罐	器台	その他	杯	高杯	壺	甕				
2-2号																	円筒埴輪
2-3号	1	1		1													
2-4号				1	1												
2-5号	1	1	1			1						1					円筒埴輪
2-6号	1	1	1	1													円筒埴輪
2-10号			1	1	1							1					形象埴輪
2-11号	16	17	9	8	2	3	3	3	壺蓋、平瓶2		2	1	1	鉢3	鉄鏃2	辻金具	釘、鏡
2-12号	3	5	3	2					壺蓋				3			鍔、刀子2	釘、円筒、韌帶形埴輪、瓦質羽釜
2-13号		5	2					1							2		釘、鏡
2-14号				1									1				君形埴輪
2-17号	1	3				1	1				1						円筒埴輪
2-57号	1		3	2										鉄鏃3		斧、刀子2、鐵石	土玉約140
2-58号	1					1				1	4	1	2	鉢3、椀			円筒、盾形埴輪
2-59号	1	2	3	3	1	2	1	1	皿2		1		1				円筒埴輪
3-2号	7	2			1		1	子持器台		1	3			ミニ壺・壺	刀、鉄鏃7	吉葉	釘、鏡
3-11号	6	4	2								1			鉢			円筒埴輪
3-12号		4	1				1			1		1					釘、鏡、円筒埴輪
3-13号	4	2								1		1					
3-25号	4		3		3	横瓶	1			2		椀	鉄鏃	壺鑊	刀子		釘、土師器杯、瓦器柄
3-27号		1											鉄鏃2		鍔、刀子		
3-29号	1	2	6		1	壺蓋2		3		1	3						釘、鏡、馬形埴輪、瓦器柄・小皿、瓦質羽釜
3-30号	3	1	1							1				羽釜			円筒、形象埴輪
4-1号			2		1	1			1	1		1				圓鏡、銅鏡、ガラス玉	釘、鏡
4-21号					1												
4-22号			1														
4-27号		3	3						1								釘、鏡
4-28号	6	2	1	1	1	平瓶		3	!					刀子	金環	釘	
4-29号	2			2						2	1				滑石製防錆車		
4-30号			2										鉄鏃			金環2	釘
4-31号	2	1		1	1											釘、円筒埴輪	
4-33号	2	2	5		2				1							東環、琥珀墨玉	釘
4-39号	1	1	1	5	1						1		椀				土師質羽釜、瓦器柄、瓦質火鉢
4-42号	3		3	3		子持器台	1					劍、矛、鉄鏃數点		刀子	鐵劍環、劍柄3、土玉	釘	
4-43号			1														
4-44号	2	1							1								蓋・家形埴輪
4-45号	2	3	1								1						釘、鏡、家形埴輪
4-46号																	円筒埴輪
4-47号					1	高杯蓋						1					円筒埴輪
4-48号		1			1												

表-5 高井田横穴群出土遺物一覧表

遺物 横穴	須 恵 諸 器							土 間 筒 器							武 器	馬 具	農 工 具	装 身 具	そ の 他		
	杯蓋	杯身	高杯	壺	甕	提瓶	罐	器台	その 他	杯	高杯	壺	甕	提瓶	罐	器台	その 他				
南-1号	1		1	1		1				1										陶棺3、円筒埴輪	
南-4号				1						2										円筒埴輪	
南-17号	2		1	1		1						1							刀	鍔	琥珀墨玉8
南-18号		1		1						2	1	1	2						刀子	鏡環2	釘、鏡、近世軒丸瓦
B-1号			1	1																	釘、鏡、陶器類
B-3号	1	1	1	4			1														
B-5号	1			1								1		1							陶棺1

表-6 安福寺横穴群出土遺物一覧表

遺物 横穴	須 恵 諸 器							土 間 筒 器							武 器	馬 具	農 工 具	装 身 具	そ の 他	
	杯蓋	杯身	高杯	壺	甕	提瓶	罐	器台	その 他	杯	高杯	壺	甕	提瓶	罐	器台	その 他			
A-1	1				1													刀子	金環、銀環3	釘
A-2	1		1	1														銀環		
A-3	1		1	1		1														釘
A-4	1	1	1			1						1								釘
A-5	1				1															
B-4	1	2	4							1	4		鉢					鍔	金環2、銀環8、銅鈴	釘、黒色土器杯・甕、土削器杯・皿、承和昌宝
B-5		1			1						1							銅環2		
B-6		1	3								1		鉢		刀					釘
B-7	1	2											鉢					銀環		
B-10	1	1								1	1	1						金環		釘
B-11		1	1	5																釘
B-12																				釘
B-13																				釘
B-15				1							1									
B-18	2			1							1	1						金環		
B-19	1																			

表-7 玉手山東横穴群出土遺物一覧表

横穴に直接伴う遺物ではないが、中世の土器等が出土する横穴がみられる。高井田横穴群では5基の横穴から瓦器などの中世の遺物が出土している。また、安福寺横穴群南-18号墳からは中世の常滑産の壺、南-17号墳からは近世軒丸瓦が出土しており、玉手山東横穴群B-4号墳からは承和昌宝、黒色土器などの平安時代の遺物が出土している。横穴式石室が中世に再利用されている例は多く、これらの横穴も再利用されたものと思われるが、その利用目的等は全く不明である。

以上、柏原市域の3横穴群を比較しつつ出土遺物について検討を加えてみた。その結果、3横穴群の中では高井田横穴群における出土遺物が質・量ともに他の2群より優位にあるのではないかと考えられる状況がうかがえた。盗掘が激しく、限られた調査からのみの検討であり、将来に異なる結果が導き出されるかもしれない。また、平尾山古墳群とも比較を試みたかったのであるが、6世紀代の横穴式石室墳の良好な資料が少ないため、これは見送らざるを得なかつた。今後の課題としておきたいと思う。

6. 線刻画

高井田横穴群には多数の線刻画がみられ、それによって全国的に著名となったものである。現在27基の横穴で線刻画が確認されており、特に3-5号墳の船に乗る人物は広く知られている。線刻画については和光学大学古墳壁画研究会による詳細な調査・研究がなされており、付け加えるべきことはない²⁰。この研究成果を参考に作製したのが表-8である。

ここでは、線刻画の描かれている位置によって、画題や描き方に差がみられるのではないかという点について検討してみたい。一般に淡道部には単一の線刻画を明瞭に描く例が多いようである。例えば2-3号墳の騎馬人物、2-12号墳の船、3-5号墳の人物、3-13号墳の駄などである。これに対して、玄室の壁面や天井に描かれる場合は一見無秩序と思われる配置をとるものや全面に描かれるものが多い。2-3号墳の鳥、2-5号墳の家、3-12号墳の武器をもつ人物等がこれにあたる。前者は単独で何かを意味するものであり、後者は全体として一つの物語的な構成をとるものではないだろうか。このように描く位置、あるいはその構成によって、意味するところが異なるのであろう。

ところで、この線刻画はすべて横穴掘削時に描かれたものと考えていいのだろうか。後世に描かれたものはないのだろうかという疑問が生じてくる。同様な指摘もよく受けるので、この点について検討してみたい。

これまでに発掘調査を実施した横穴の中、調査前には埋没していた横穴が19基を数える。この中で、新たに線刻画が確認されたのは2-14号墳のみである。2-14号墳の羨門上部に描かれていた蓮華は、3-7号墳の蓮華とよく似たものであり、横穴掘削時に描かれたものかと考えられる。しかし、2-14号墳の羨門部も以前は露出していたことが調査状況から判断され、完全に埋没していたといえるものではない。この2-14号墳の線刻画を認めたとしても、19基中1基、

横穴 番号	線 刻 画									線 刻 位 置											
	人物	植物	馬	鳥	魚	船	家	太陽	縦彌	横彌	象形字	女陰	他	奥壁	側壁	前壁	玄門	天井	渠道	涙門	竪溝
1-5	○	葉	○					○		格子	○			○	○						
1-12					○					円				○	○						
1-21	○	葉			○													○	○	○	
1-22	○																			○	
2-3	騎馬 人物		○	○							格子、長 直財							○	○	○	
2-5	○																	大字文	○	○	○
2-10	○		○					○			平行線			轢	○	○				○	
2-11											×							○			
2-12	○			○		○		○		○	格子			忌垣	○	○	○		○	○	
2-14		蓮華									鉛齒等									○	
2-23	騎馬 人物		○								馬、×			轢				○	○	○	
2-27	○	樹木		○		○	○	○	○	○	平行、 直財			鳥居	○	○	○		○		
2-28	騎馬 人物		○								×			轢	○	○					
2-33a											格子								○		
2-33b											×							○	○	○	
3-2	○	唐草																○	○	○	
3-5	船上 人物						○											○	○	○	
3-7	○	蓮華																○	○	○	
3-8	○										馬心円							○	○	○	
3-12	○	葉木									格子、方財 變形			弓文、轢 馬居	○	○			○	○	
3-13														馬居	○	○			○		
3-18											円、直財			鹿	○	○			○		
4-4								○			方形							○	○	○	
4-7	○										方形							○	○	○	
4-28											×							○	○	○	
4-34											格子	○						○	○	○	
4-40											○							○			

表-8 高井田横穴群線刻画一覧表

比率にすると5.3%の横穴で線刻画が確認されたにすぎないのである。

一方、和光大学によって線刻画が確認された横穴は26基にのぼる。これは、それ以前から開口していたと考えられる横穴65基の40%を占め、調査によって発見された線刻画と大きく異なるものである。第2支群の北東部・南西部や第3支群の北東部の横穴に線刻画が多くみられ、横穴群内において線刻画の集中する部分がみられるようであるが、その事実を差し引いても両者の数値の差は大きいものがある。これは、以前から開口していた横穴には少なからず後世に描かれたものがあることを示していると考えられる。ただし、後世の時期が問題であり、必ずしも最近の落書きではなく、横穴掘削後數十年、あるいは数百年後に何らかの意図のもとに描かれている可能性も十分考えられると思う。いずれにしても、線刻画については慎重に扱う必要があると考えられる。

7. 被葬者集団をめぐって

高井田横穴群の被葬者については、ミニチュア炊飯具の出土、線刻画の内容等から渡来系氏族とする説が強い。⁽⁵⁸⁾ 花田氏も詳細な検討の結果、「物部氏と擬制的同族関係を紐帯とした有力家父長層の下位集団」⁽⁵⁹⁾であり、「渡来系氏族」とあると結論づけている。

しかし、その根拠の一つとされるミニチュア炊飯具の出土は、これほど多数の横穴を調査したにもかかわらず、大正年間に出土したとされるものと2-58号墳出土の可能性のあるもののみであり、この不正確な2点によって渡来系氏族と断定することは難しい。また、線刻画についても前述のように問題点が多く、とても渡来系氏族と断定できるものではないであろう。また、花田氏は、横穴は豊前から直接伝播したものであるとしながら、被葬者は渡来系氏族であると結論づけている。渡来系氏族が、埋葬方法のみ豊前の方法を採用したと考えているようであるが、果たしてそのようなことがあり得るだろうか。

横穴式石室を造り得なかった集団として位置づけられる高井田横穴群の被葬者集団は、副葬品から武人の要素を見出し難いものである。6世紀という時代、しかも河内という地域で横穴を埋葬形態とした集団は、中央政権のもとに組織化された何らかの生産活動に携わる集団であったのではないだろうか。そのような観点から考えれば、花田氏の指摘するように物部氏と擬制的同族関係を有した集団であった可能性も考えられる。7世紀代には、ほとんど横穴が造られていない事実も物部氏との関係を推定させるものであるかもしれない。しかし、被葬者集団の出自については、渡来系氏族の可能性を残しつつも、横穴形態等の検討から考えたように、やはり九州との関係を重視したいと思う。被葬者集団のすべてでなくとも、その一部に九州から移住してきた集団を含んでいたのではないだろうか。それがどのようない集団であったのかは全くわからないが、例えば阿蘇溶結凝灰岩の石に集団などが考えられないだろうか。その石工集団が二上山の凝灰岩石工集団の一部を構成し、横穴という埋葬方法を畿内に持ち込んだとすれば、整美な横穴が造られたことが無理なく理解できる。古市古墳群内の長持山古墳、唐櫃山古墳、

峯・塚古墳には阿蘇溶結凝灰岩製の石棺がみられるが、それ以後、阿蘇溶結凝灰岩製の石棺はみられなくなり、二上山産の凝灰岩による石棺が急増する。また、これらの阿蘇溶結凝灰岩製の石棺は、その後、畿内の石棺の主流となる家形石棺の祖型として位置づけられるものである。この6世紀前半における石棺石材の変化に伴う現象の一つとして、柏原市域の横穴群が形成された可能性は考えられないだろうか。この集団を統轄する氏族として、渡来系氏族を考えることもできるであろう。一つの仮説として呈示しておきたいと思う。

8. おわりに

高井田横穴群の検討によって、これまで考えられてきた横穴編年が必ずしも適用できないことがわかり、小支群ごとに形態や構造・変遷がかなり異なっていることが判明した。今後、小支群ごとの特徴を抽出し、その後に横穴群全体について検討していく必要がある。また、被葬者集団については渡来系氏族とする考えが定説となりつつあるが、その根拠は薄く、他の可能性についても考えるべきである。その一つとして、石工集団を想定してみた。今後、他の可能性も含めて多角的に検討していきたいと考えている。

市道建設・区画整理事業に伴う緊急発掘調査として1985年度から実施してきた高井田横穴群の発掘調査も、史跡公園の完成という形で一応の決着を迎えた。その間には、保存問題等さまざまな問題に直面してきた。美しく整備された史跡公園も、数基の横穴を始め、多くの遺構の破壊を伴っていることを忘れてはならないと考えている。本報告では、史跡整備事業に伴う発掘調査について報告すると共に、これまでの調査成果をまとめることに重点をおいた。史跡整備事業については『史跡高井田横穴公園整備事業報告』で詳述しているので、それを参考にしていただきたい。今後は、史跡公園の管理・活用という面に重点をおいていきたいと考えている。史跡高井田横穴公園が、一人でも多くの方に利用していただければ幸いである。

註

- (1) 池上悟『横穴墓』1980
- (2) 花田勝広「横穴墓の造墓技術——河内の横穴墓を中心に——」『ヒストリア』第120号1988
花田勝広「畿内横穴墓の特質」『古文化談叢』第22集 1990
花田勝広「河内の横穴墓——高井田横穴群の基礎的調査——」『考古学論集』第3集 1990
花田勝広「近畿横穴墓の諸問題」『おおいた考古』第4集 1991
- (3) 花田勝広「河内の横穴墓」前掲
- (4) 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考——河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として——」『古代学研究』42・43合併号 1966
- (5) 桑野一幸「安福寺横穴群85-1次調査」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報・1986年度』
柏原市教育委員会 1987
- (6) 秋山治三「組合せ式家形石棺」『物集女車塚』向日市教育委員会 1988

- (7) 原田修「桜井1号墳発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—1985年度—』
東大阪市教育委員会 1986
- (8) 奈良県立橿原考古学研究所『龍王山古墳群（東黒岩地区等）発掘調査現地説明会資料』
1985
- (9) 妹尾周三「山陽地方の横穴墓—広島県・岡山県を中心として—」『おおいた考古』
第4集 1991
大谷晃二「山陽地域の横穴墓の諸問題」『古代吉備』第14集 1992
- (10) 花田勝広「畿内横穴墓の特質」前掲
花田勝広「河内の横穴墓」前掲
花田勝広「近畿横穴墓の諸問題」前掲
- (11) 安村俊史「安福寺横穴群の検討」『安福寺横穴群整備事業報告』柏原市教育委員会1993
- (12) 安村俊史・仲井光代『高井田横穴群I』柏原市教育委員会 1986
- (13) 渡道幅指數＝渡道幅÷玄室幅×100
白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」前掲
- (14) 花田勝広「畿内横穴墓の特質」前掲
(15) 安村俊史・近藤康司『高井田横穴群II』柏原市教育委員会 1987
- (16) 安村俊史・仲井光代『高井田横穴群I』前掲
- (17) 川端真治「大阪府南河内郡玉手山村安福寺境内横穴調査報告」『考古学雑誌』第38巻
3号 1952
- (18) 桑野一幸「安福寺横穴群85-1次調査」前掲
- (19) 花田勝広「河内の横穴墓」前掲
(20) 大阪府教育委員会『柏原市玉手山東横穴群発掘調査概報』 1969
- (21) 小田富士雄「九州の横穴墓序説」『九州考古学研究』古墳時代篇 1979
- (22) 柳沢一男「肥後型横穴式石室考」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』1980
森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜—畿内型と九州型」『古代学研究』
111 1986
森下浩行「九州型横穴式石室考—畿内型出現前・横穴式石室の様相—」『古代学研究』
115 1987
- (23) 高橋健自「河内国高井田なる藤田家墓地構内の横穴」『考古学雑誌』第9巻9号 1920
大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』 1974
安村俊史・仲井光代『高井田横穴群I』前掲
安村俊史・近藤康司『高井田横穴群II』前掲
安村俊史『高井田横穴群III』柏原市教育委員会 1991

- (24) 川端真治「大阪府南河内郡玉手村安福寺境内横穴調査報告」前掲
水野正好・福西正幸・久貝健『玉手山安福寺横穴群調査概要』大阪府教育委員会 1973
- 桑野一幸「横穴群の調査」『玉手山遺跡・1983、1984年度』柏原市教育委員会 1987
- 桑野一幸「安福寺横穴群85-1次調査」前掲
安村俊史『安福寺横穴群整備事業報告』前掲
- (25) 大阪府教育委員会『柏原市玉手山東横穴群発掘調査概報』前掲
- (26) 3-26号墳（A号墳）出土鉄製品の中で不明鉄製品とした2点は、壺蓋の破片と考えられる。
安村俊史・仲井光代『高井田横穴群I』前掲
- (27) 和光学大学古墳壁画研究会『高井田横穴群線刻画』1978
- (28) 水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』5・近畿 1970
和光学大学古墳壁画研究会『高井田横穴群線刻画』1978
- 山田良三「河内横穴墓の線刻画」『末永先生米寿記念献呈論文集』1985
- (29) 花田勝広「畿内横穴墓の特質」前掲

表-9 高井田横穴群一覧表

横穴番号	旧番号	玄室長	玄室幅	玄室高	武道長	深道幅	深道高	東道幅	開口方向	壁面段 奥左右前	造付石指	橋構造	備考
1-1		330	250	160	160	115	80	170	S 80°-E				
2		290	237						E				未完成
3		300	263	155					S 70°-E	○○○○			
4													未確認
5		334	236	190	140	110	124	130	S 45°-E				
6		235	229	145	118	113	85	122	S 35°-E	○○○○			
7		360	457	178	113	124	136	166	S 50° E				
8		463	307	204	124	146	181	166	S 45°-E	○○○○			玄門に天井石
9		330	288	155	70	93	101	128	S 85°-E	○○○○			"
10		357	318	160	105	138	105	160	N 75°-E	○○○○	奥		
11		278	190	130	42	88	112	130	S 65°-E				
12		360	320	173	96	119	80		S 85°-E				
13		300	276						S 70°-E				
14		315	266	170	135	118	140	152	S 80°-E	○○○○			
15													未計測
16													タ
17													タ
18		300	297	169	140	113	170	157	S 10°-E				
19		310	315	170	147	85	132	110	S 20°-W				
20													全焼
21		325	255	130	107				S 65°-W	○○○○	左(2)		
22		410	284	147	85	77	124	122	S 35°-W	○○○○	奥		
23		350	330	175	87	99	134	120	S 75°-W	○○○○	左	○	
24		355	313	175	67	113	116	149	S 40°-W	○○○○			
25		330	285	130	120	105	77	116	N 60°-W				
2-1	6												未計測
2	5	245	402	154	160	176	131	66	N 35°-E	○	豪・左(6)		玄門に柱状表現
3	4	274	365	167	66	95	136	141	N 25°-E	○○○	奥		玄門・豪門に加工
4	3	353	334	165	115	93	130	127	N 40°-E	△ ○	右	○	天井に苔認・豪、豪門に天井石?
5	2	363	353	180	180	124	140	135	N 35°-E	△○ ○	右		
6	1	350	396	150	156	120	135	212	S 75°-E	△○ ○			豪門紅、豪門に天井石?、未完成
7	12												未計測

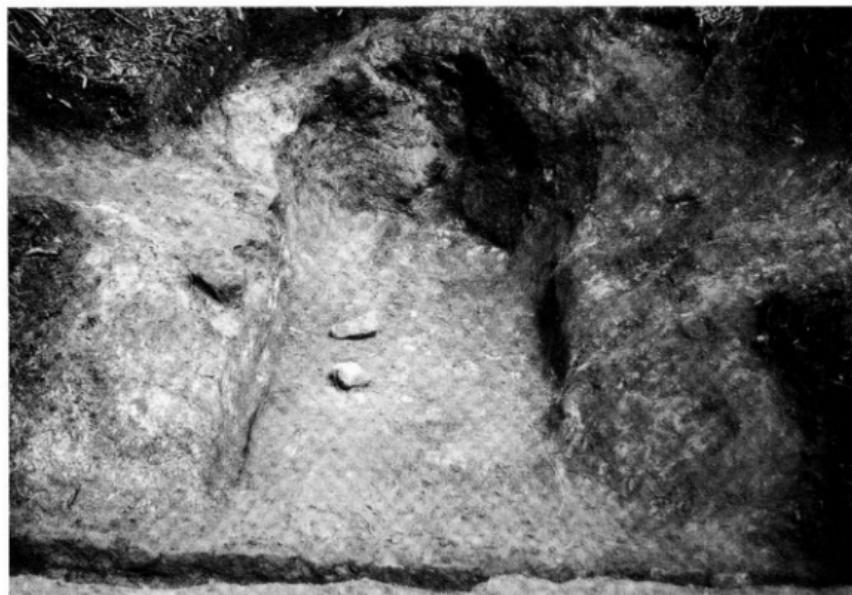
横穴番号	旧番号	玄室長	玄室幅	玄室高	奥通長	奥通幅	奥通高	基通幅	開口方向	壁面及 奥左右前	造付石格	棚構造	備 考
2 - 8	45												未計測
9	44												〃
10	7	282	250	147	130	125	118	135	925°-W			○	
11	8	396	368	180	108	105	145	92	S31°-W				美門記天井石
12	10	310	284	188	95	96	146	135	S25°-W	○○○			
13	15	323	282	158	144	122	153	120	S37°-W	○			美道天井に段、未完成
14	9	256	213	140	116	93	105	128	S53°-W	○○○○		○	美門記天井石、半壇
15	11	287	285	144	149	90	78	100	S70°-E	○○○○		○	天井に嵌木板、美門記天井石
16	14												未計測
17	13	299	334	163	133	88	107	116	S41°-W	○ ○ ?	左	○	美門記天井石
18	92												未計測
19	16												〃
20	91												〃
21	93												〃
22	19												〃
23	20	288	270	155	128	98	128	151	S40°-E	○○○○		○	
24	17	347	305	165	204	113	112	160	S74°-E	○○○○		○	
25	18	337	330	140	116	103	95	169	S75°-E	○○○○		○	
26	21	281	186	156	122	88	112	128	S8°-E	○○○○		○	
27	22	356	416	171	176	91	114	162	S49°-E				美門記天井石
28	23	304	242	177	138	86	124	122	S71°-E	○○○○		○	
29	24												未計測
30	43												〃
31	25												〃
32	26												〃
33a	27	301	299	156	122	102	113	166	S24°-W	○○○○		○	
33b		353	322	172	154	129	134	200	S25°-E	○○○○		○	
34	28												未計測
35	41												〃
36	32												〃
37	94												〃
38	95												〃
39	31												〃
40	42												〃

横穴番号	旧番号	玄室長	玄室幅	玄室高	奥道長	奥道幅	奥道高	前道幅	開口方向	壁面段		造付石前	相構造	備考
										奥左右前	奥左右後			
2-41	30													未計測
42	33													△
43	34													△
44	35													△
45	36	300	255	166	110	95	90	155						
46	37													未計測
47	38	300	290		120	102	93	155						
48	39													未計測
49	40													△
50	46							170						
51	47													横穴ではない
52	48													△
53	49													△
54	50													△
55	51													△
56	1号墳													高井田山古墳
57	E	273	298	160	93	90	116	157	S21°-E					調査段全塗
58							77	145	S67°-E					
59		335	289	165	138	98	120	135	S54°-E					
3-1	96													未計測
2	52	255	215	158	120	97	96		N10°-E	○○○○		○		側門に加工
3	53													未計測
4	54	307	216							○○○○				天井に複木表現、半壇
5	55	276	246	152	113	115		211	S50°-E					
6	56	351	323	182	154	122		175	S30°-E	○○○○				側門に加工
7	57	271	256	159	129	97		173	〃	○○○○		○		
8	58	295	266		130	100		167	S22°-E	○○○○				半壇
9	64	272	203	140	100	75	120	77	S81°-E					排水溝
10	65	424	290	185	77	90	120	140	N83°-E	○○○	奥			
11	66								92	S86°-E				未完成
12	67	418	288	180	160	108	129	135	S70°-E	○○○		△		排水溝
13	68	210	212	147	42	146	128	170	S89°-E					未完成
14	69	350	211						S87°-E					
15	70	330	366	180	112	110		155	S87°-E	○○○○	奥			

横穴番号	旧番号	玄室長	玄室幅	玄室高	前道長	前道幅	前道高	墓道幅	閉口方向	壁面段 奥左右肩	造付石棺	棚構造	備考	
													未計測	タ
3 - 16	59													
	17	60												
	18	61	315	292	156	176	93	102	144	S 60°-W	○○○○			
	19	62	295	306	183	146	100	122	161	S 60°-W	○○○○	奥	○	
	20	63	325	316	152	132	110	77	155	W				
	21	71	260	236	125	102	132	114	186	S	○○○○		○	
	22	72	313	272	160	150	90	101	152	S 71°-W				
	23	73	135	150	108	180	82	142	110	S 56°-W				未完成
	24	74	333	298	162	127	103	122	206	S 80°-W	○○○			排水溝
	25	97												未確認
	26	A	326	310	190	144	110	134	118	S 40°-W				調査後全塙
	27	B	320	280		130	90		120	N 61°-E				タ
	28		295	267	151	116	82	114	124	S 65°-E	○○○○	(左)		壁面段は逆
	29	断堀見	256	318	180	123	84	141	159	S 1°-E	○○○○	(奥)	○	半壇
	30	*	311	346	170	104	124		170	S 12°-W	○	左		造付石棺に蓋
	31	*	286	194		100	100		146	S 35°-E	○○○○		○	剣門に大井石?
	32	*	310	272		140	100			S 60°-W				
4 - 1	112	337	284	170	164	112	133	175	N 65°-W	○○○○		○		
	2	111												未計測
	3	110												タ
	4	90	292	306			156							半壇
	5	89	352	388	176		93	90		S 73°-W	○○○○			左側壁に入口
	6	87												全壇
	7	86	352	255	166	67	116	101	148	S 58°-W	○○○○	左		
	8	109							70					
	9	108							65					
	10	107							120					
	11	106							40					
	12	105							75					
	13	85												未計測
	14	84	330	280	120		103							未計測
	15	83												
	16	104												タ
	17	113							90					

號穴番号	旧番号	玄室長	玄室幅	玄室高	黄通長	黄通幅	黄道高	基通幅	開口方向	壁面傾 度左右前	造付石棺	相構造	備 考	
													未計測	未計測
4 - 18	114							90						
19	115							90						
20	116							120						
21	117							50						
22	118							50						
23	119							60						
24	120							200						
25	121							80						
26	122												未計測	
27	82	340	250		102	120	147	180	S35°-W		右(奥)		調査後全塗	
28	81	258	212	216	148	92	188	154	S20°-W				調査後半塗	
29	108		274						S63° W					
30	123		230		120	100			S57° E					
31	102	124	214		156	104	74	116	S32° W					
32	101		260					170						
33	80	297	208	230	154	86	120	70	S36°-E				調査後全塗	
34	79	275	196	145	130	110	110							
35	100												未計測	
36	78	320	270			100								
37	77	340	260						0000					
38	98												未計測	
39	75	368	465		92	110		123	N68°-E		左2			
40	76	255	254			90			S78°-E	0000			半塗	
41	99		110						S6°-W				調査後全塗	
42	C	290	230		156	58	150	58	S9°-E	000	東・左・中		調査後全塗	
43	D							94						
44			233		73	130		184	S19°-W				半塗	
45			203		144	95		137	S28°-W	○○			夕	
46								170	N41°-W				夕	
47								170	S80°-W					
48	新発見	336	258		128	96		145	S12°-E	0000			新門に天井石?	
49	〃		220						S47°-W				半塗	
50	〃												未計測、半塗	

図 版



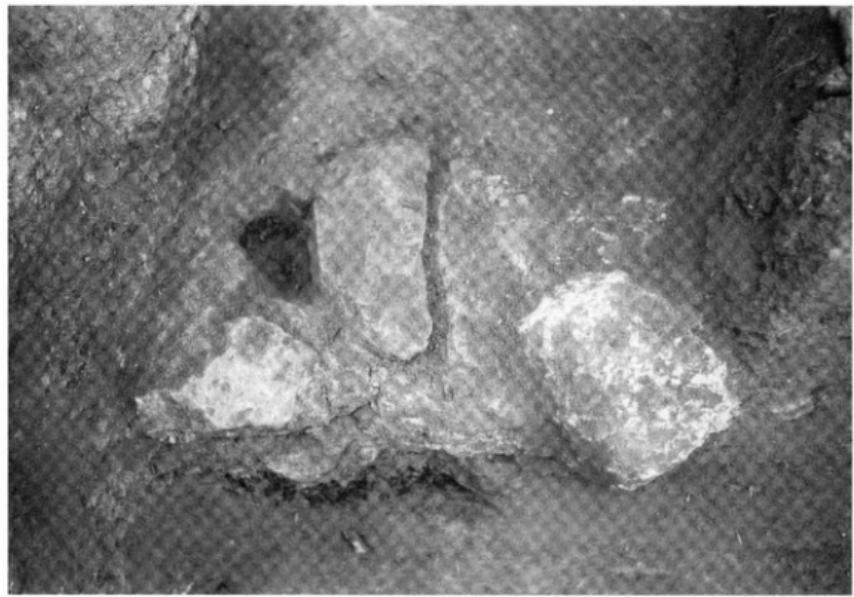
横穴状遺構-1



横穴状遺構-3



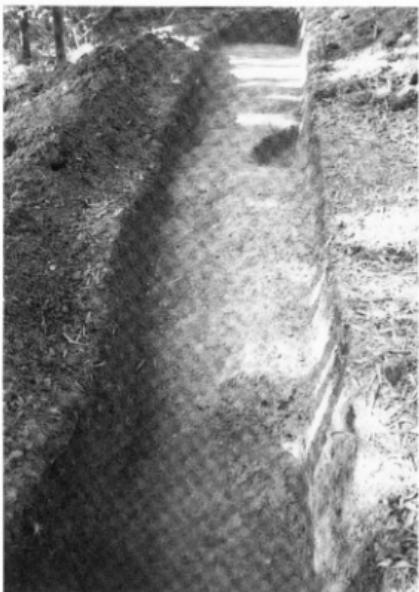
橫穴狀遺構-2



上層土坑



8 トレンチ



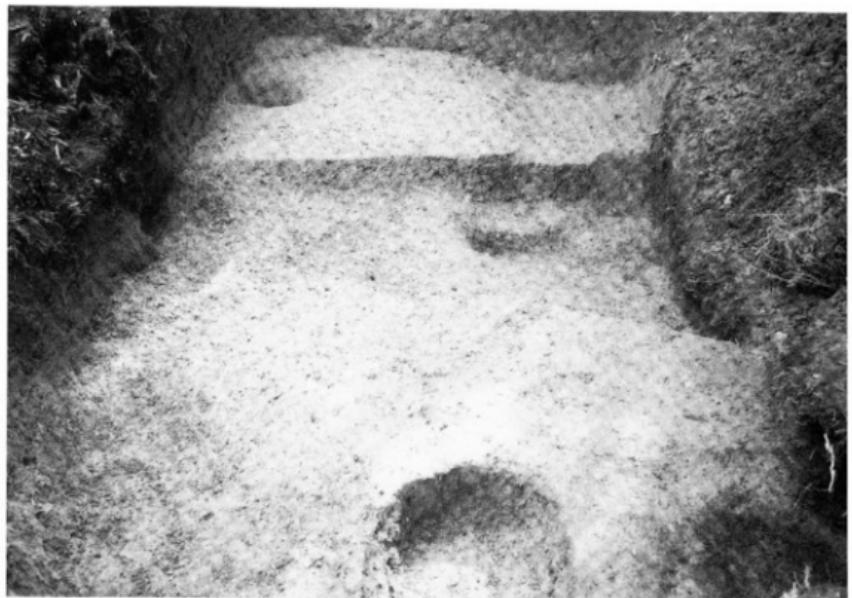
9 トレンチ



10 トレンチ



13 トレンチ



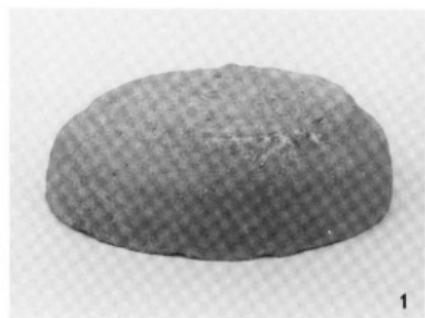
東半



西半



火葬墓



1



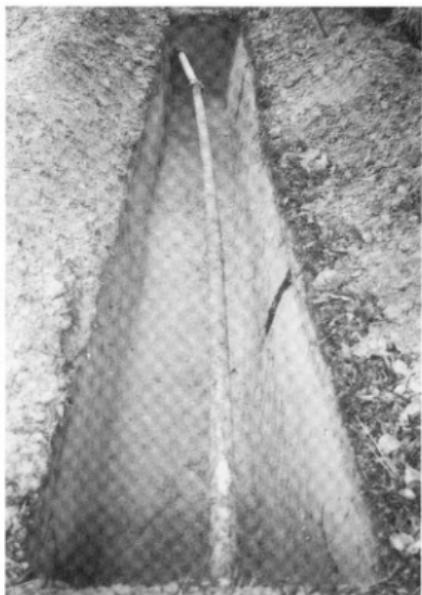
2

出土遺物

15
と
17
・
19
ト
レ
ン
チ



15 トレンチ



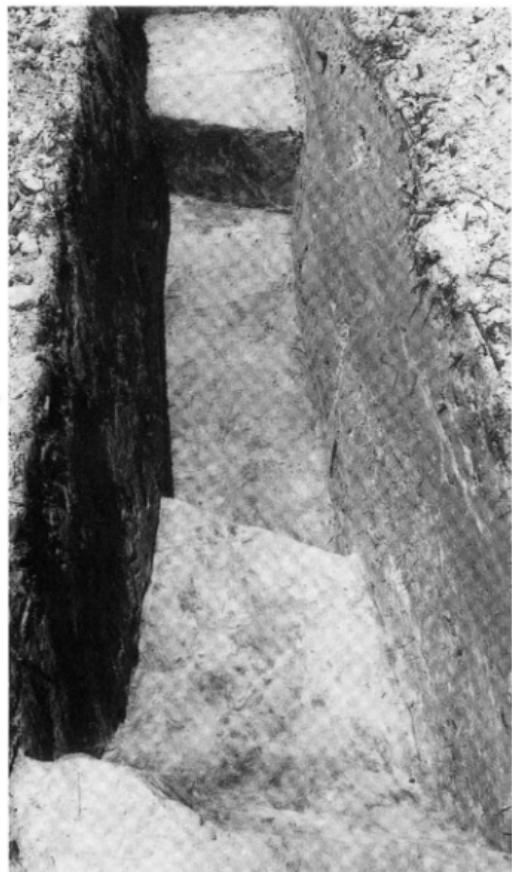
16 トレンチ



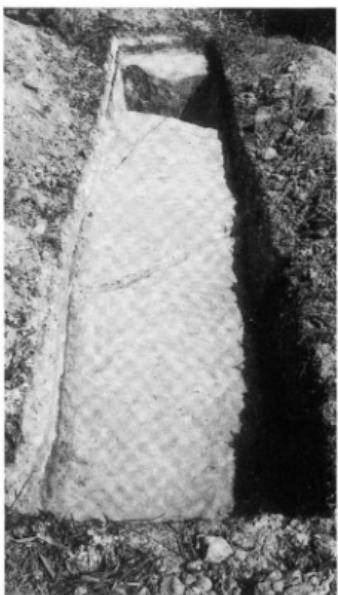
17 トレンチ



19 トレンチ



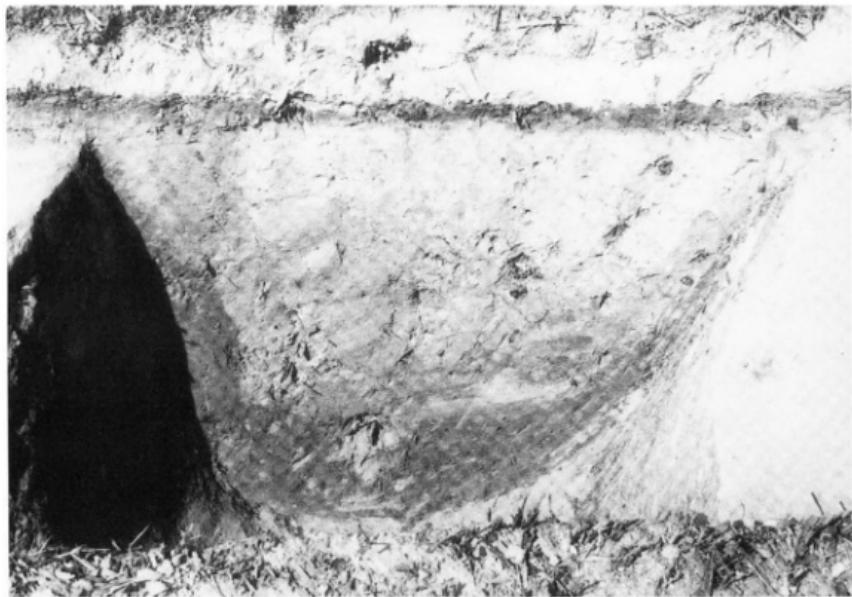
20 トレンチ



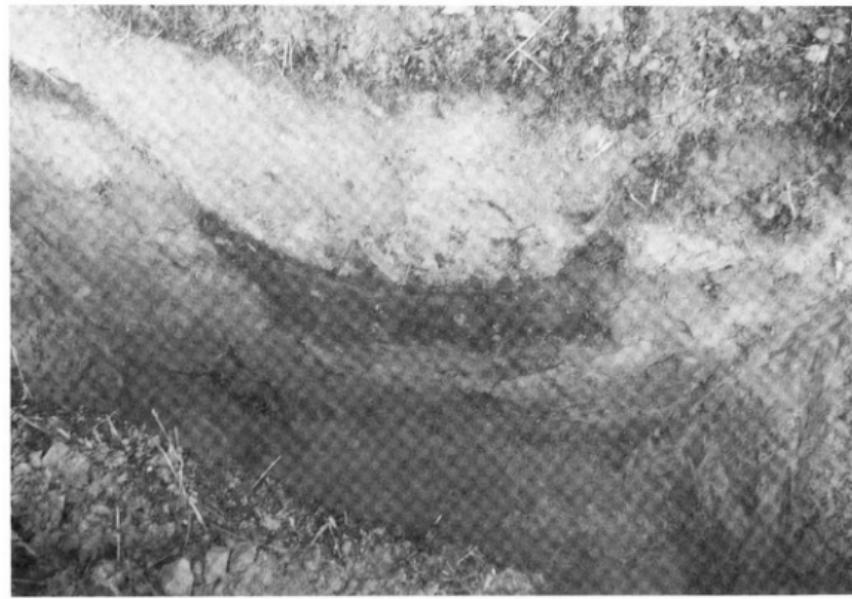
21 トレンチ



22 トレンチ

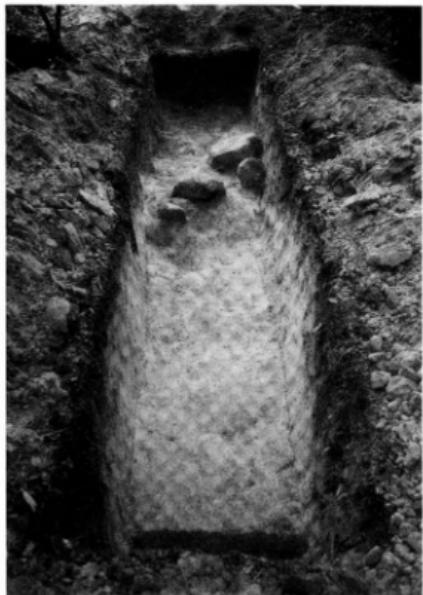


4-37号填墓道(21トレンチ)



4-35号填墓道(22トレンチ)

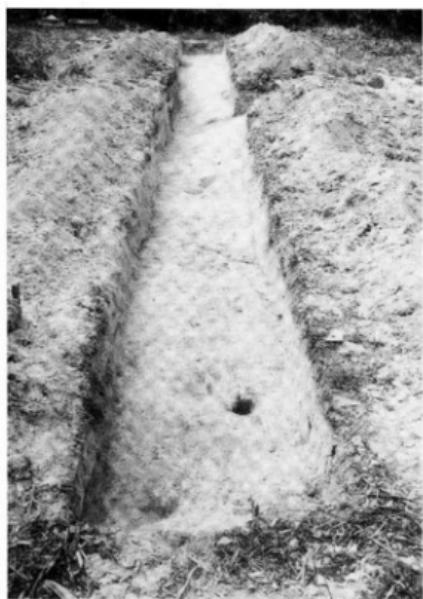
23
/ 26
トレンチ



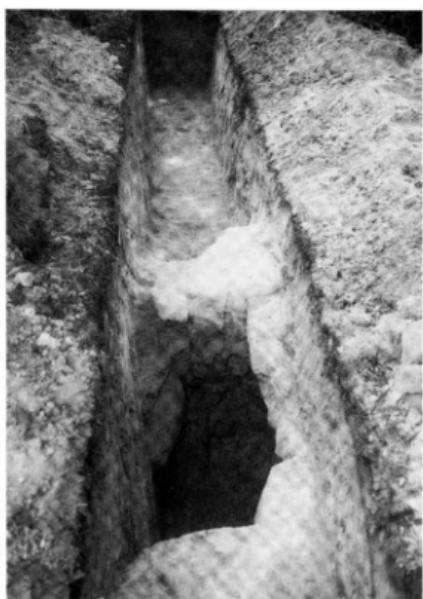
23 トレンチ



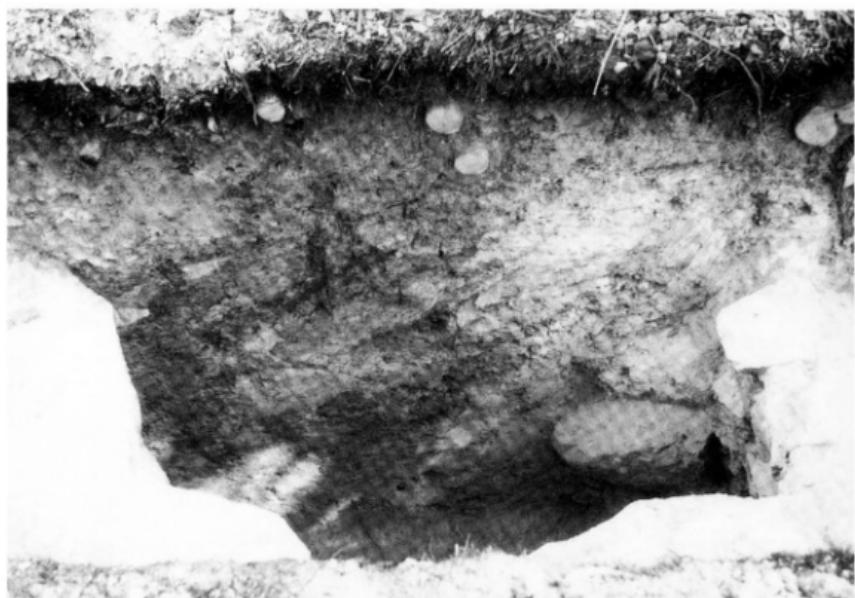
24 トレンチ



25 トレンチ



26 トレンチ



4-48号墳(26トレンチ)



27トレンチ



28トレンチ



29 トレンチ



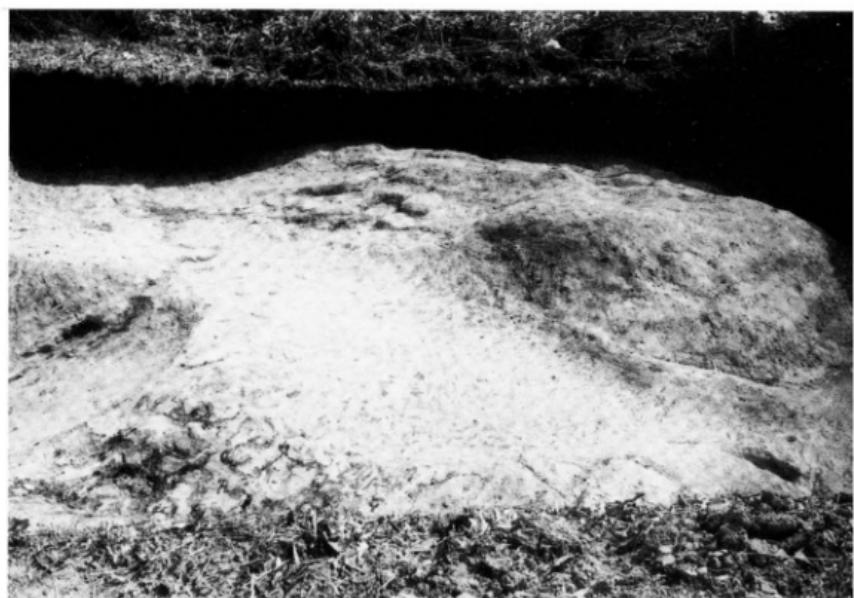
30 トレンチ



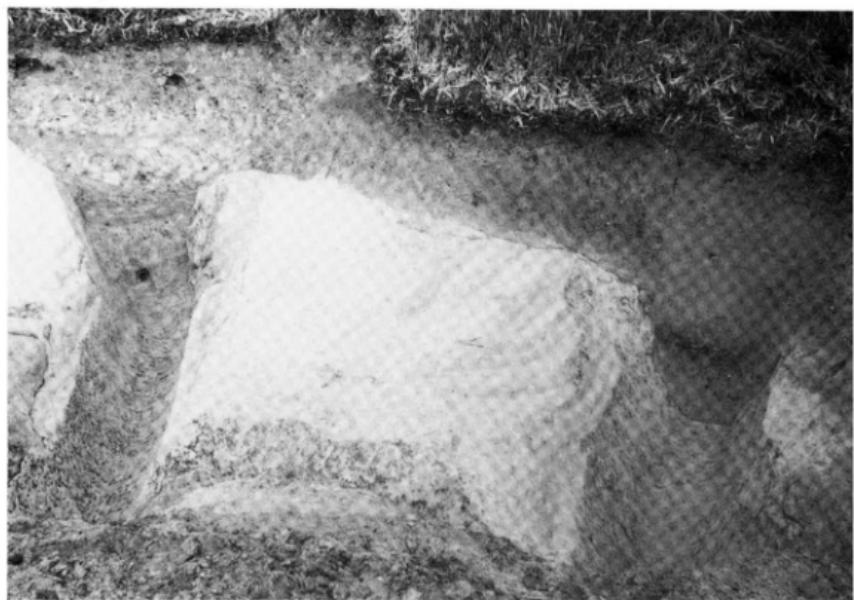
31 トレンチ



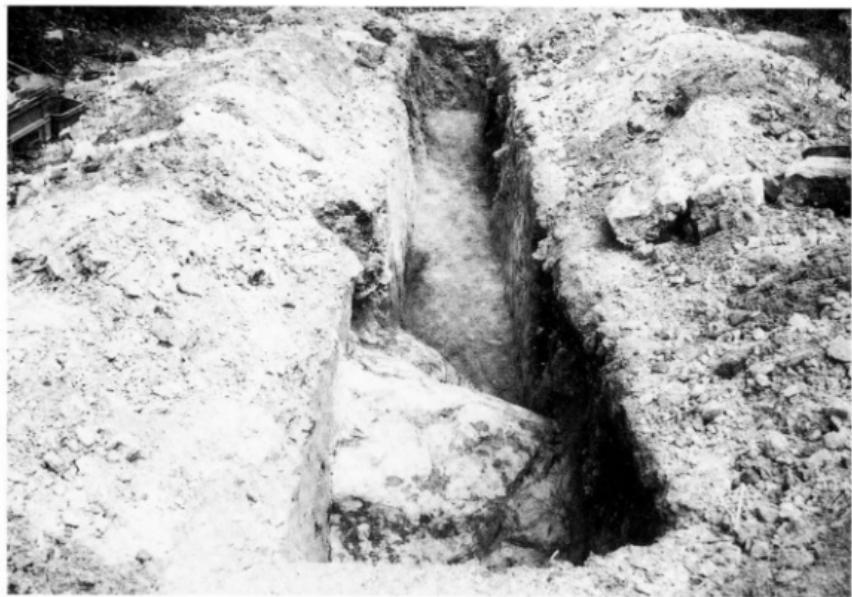
31 トレンチ



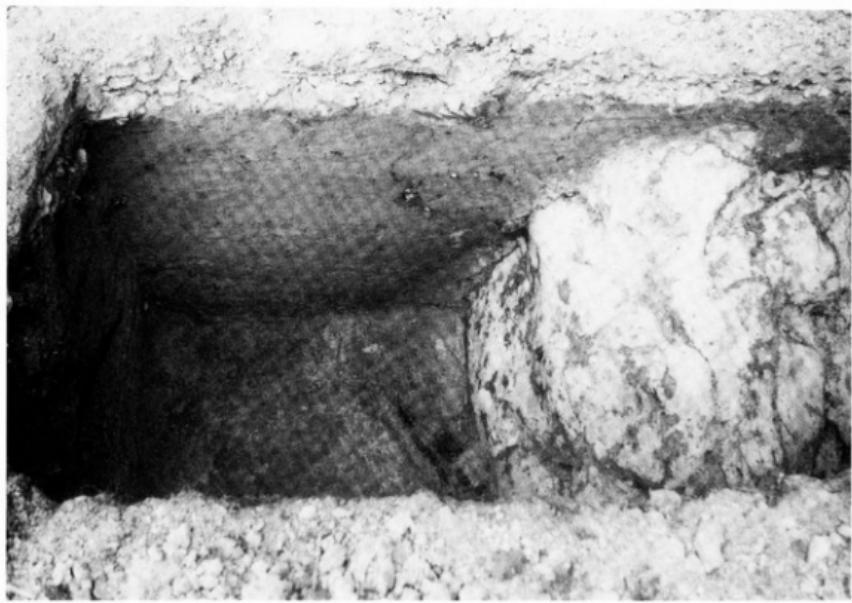
西半



墓道状遺構 - 1・2



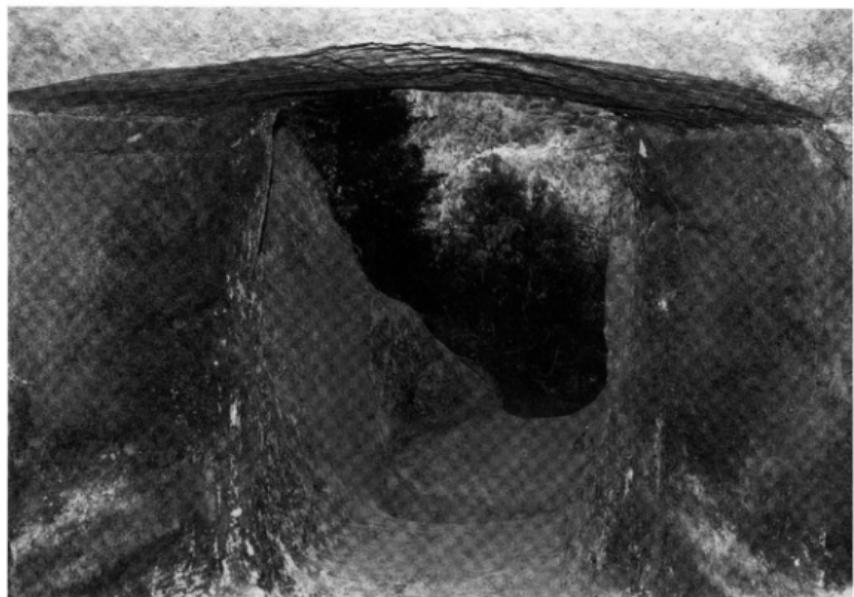
全 景



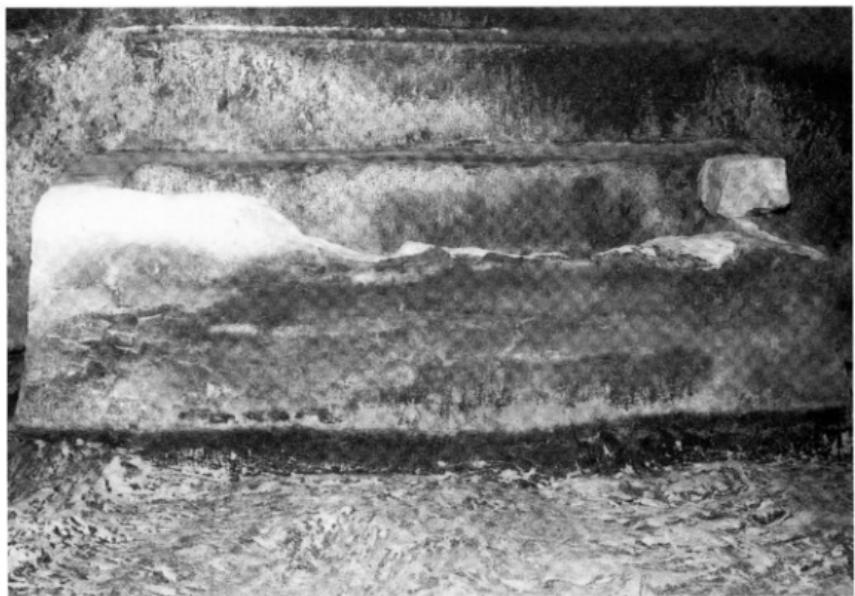
蒸道状遺構



全 景



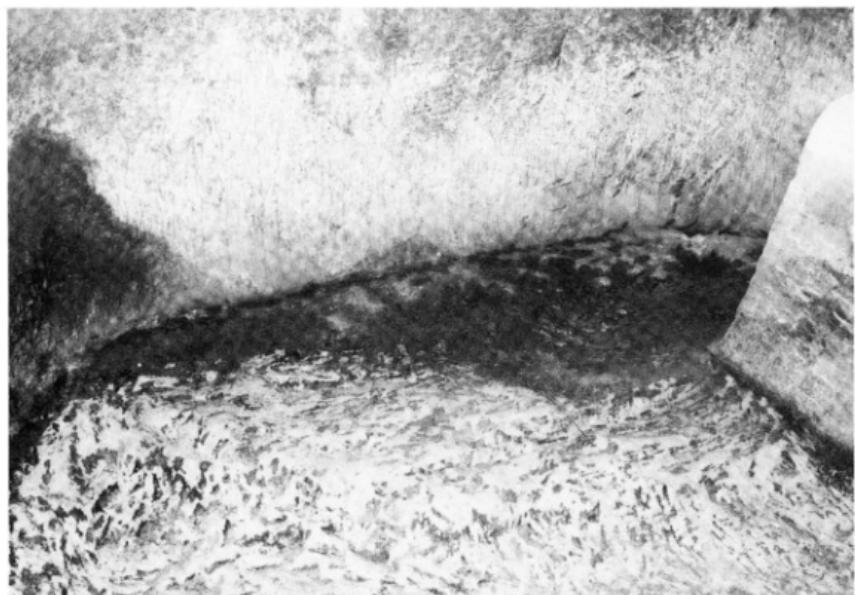
玄 門



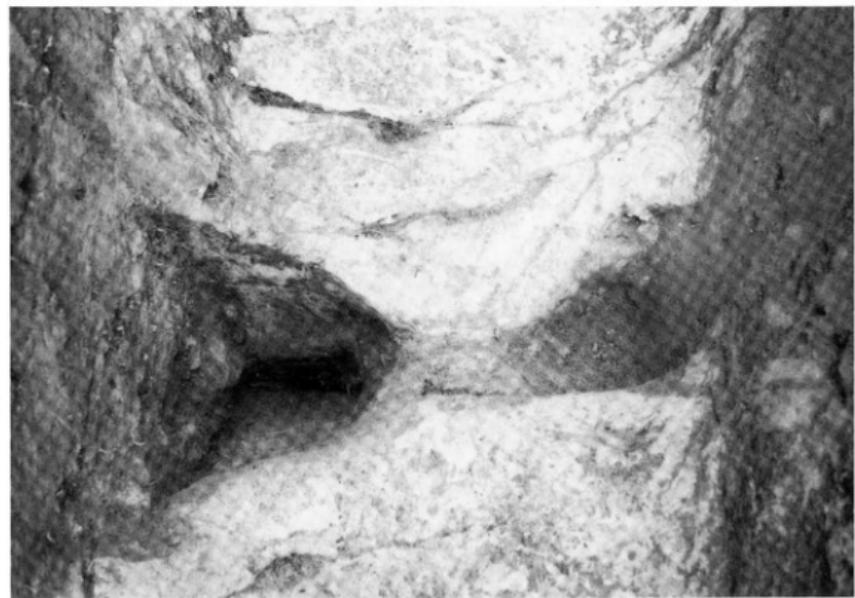
玄室奥壁造付石棺



玄室左側壁造付石棺



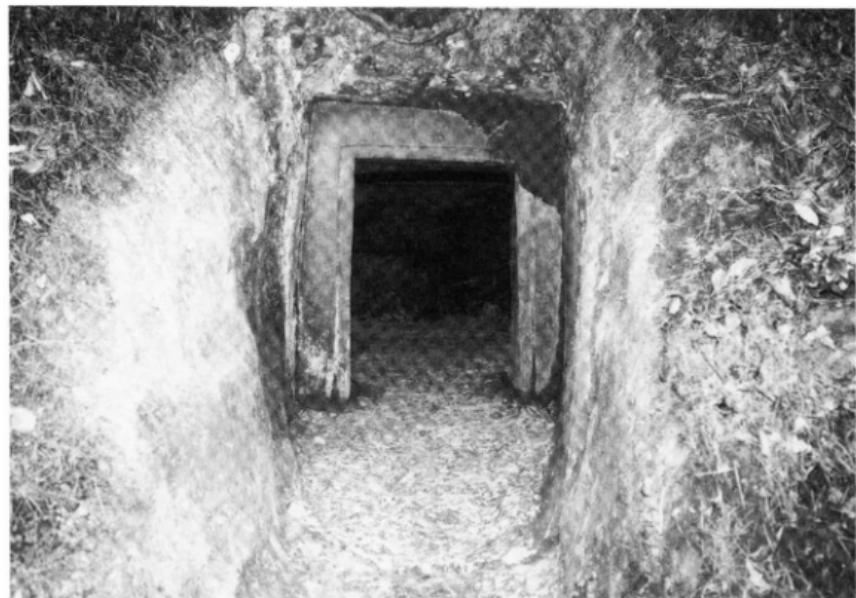
玄室右側壁棺台



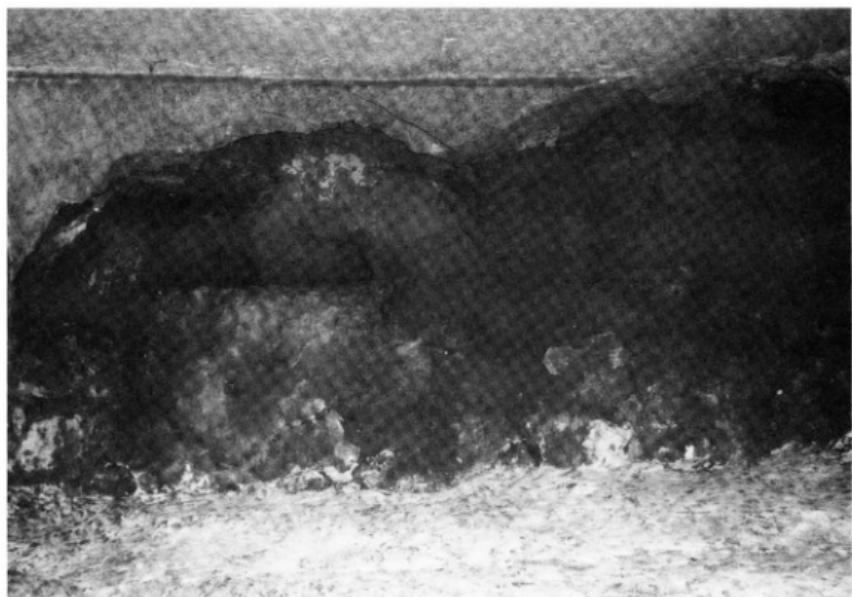
墓道ピット



2-3~5号填



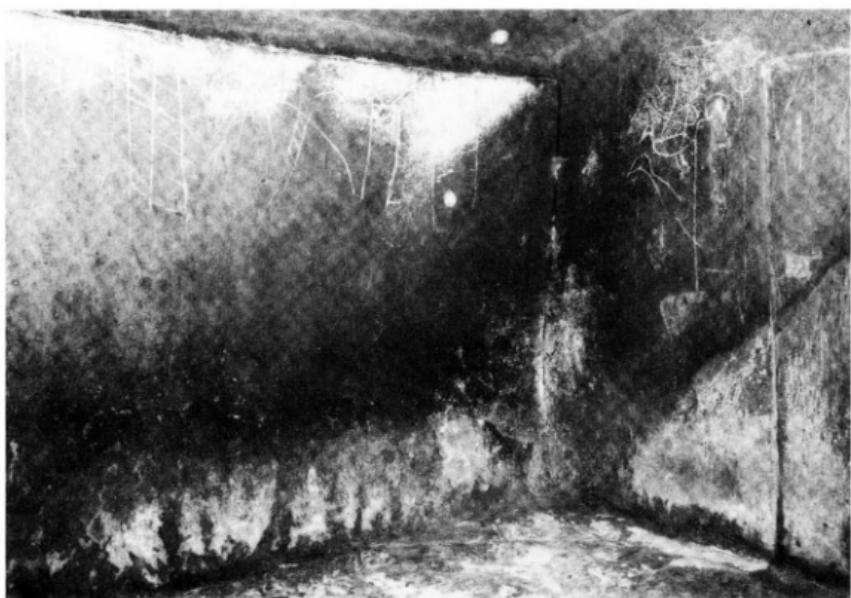
2-3号填全景



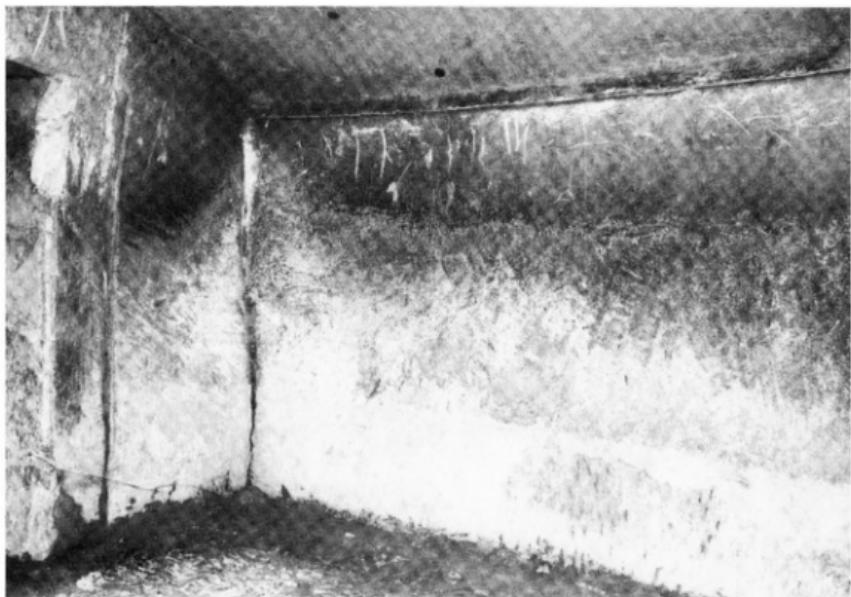
玄室奥壁



玄門



玄室左側壁・前壁



玄室右側壁・前壁



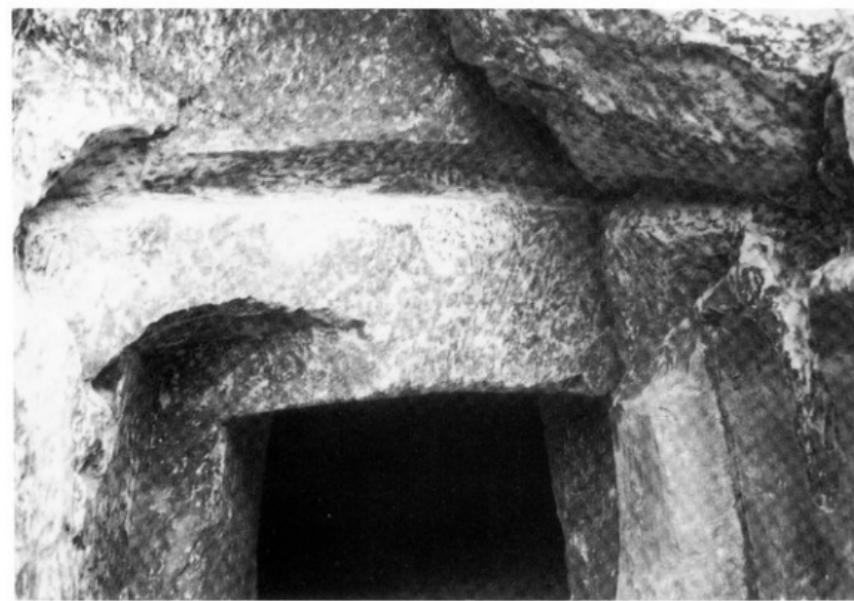
漢道左側壁線刻畫



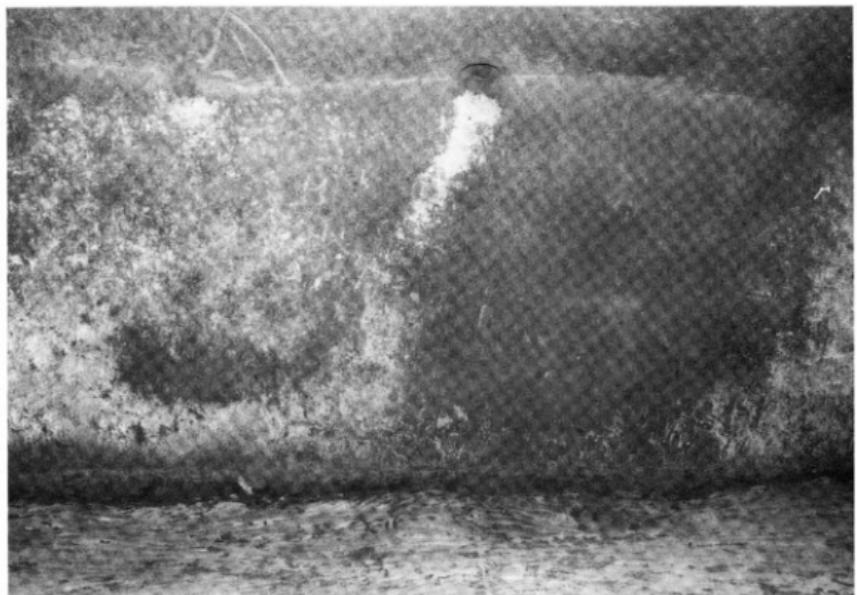
漢道右側壁線刻畫



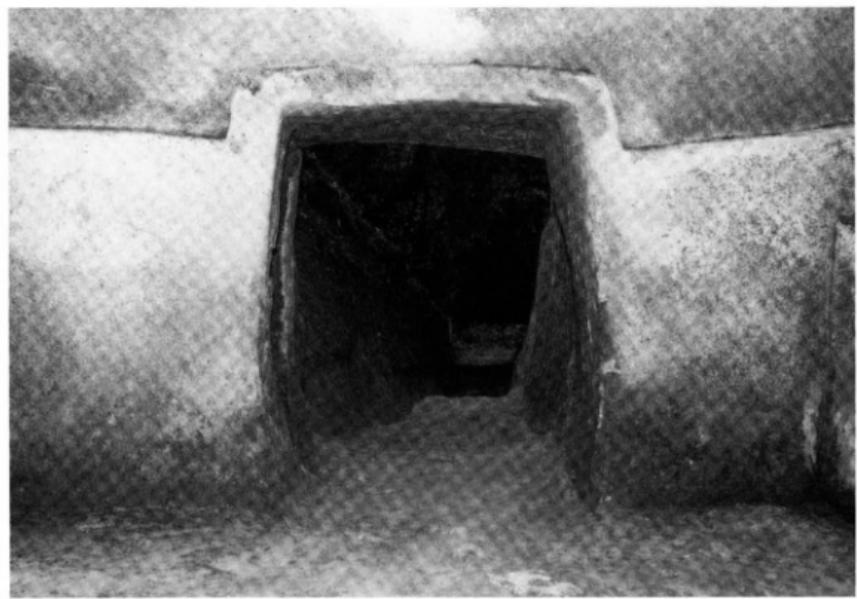
羨門



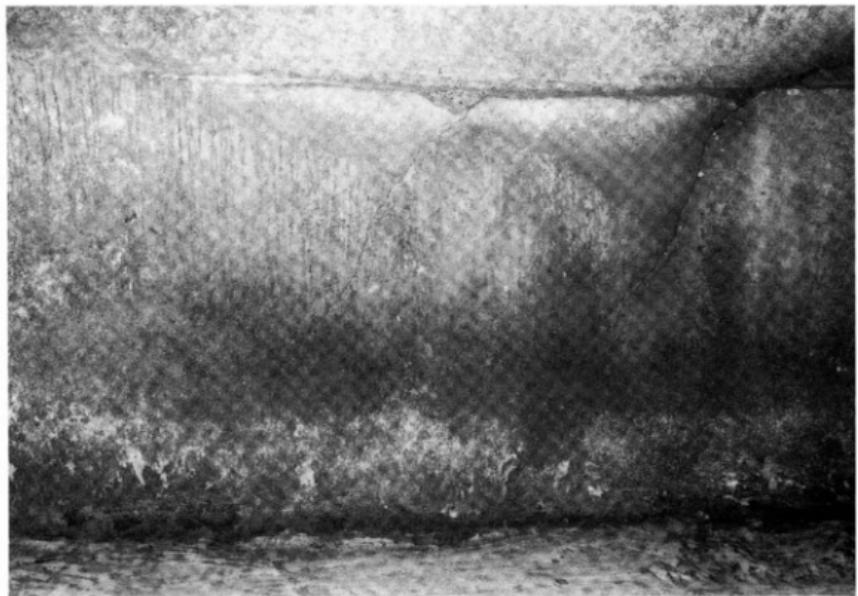
羨門上部



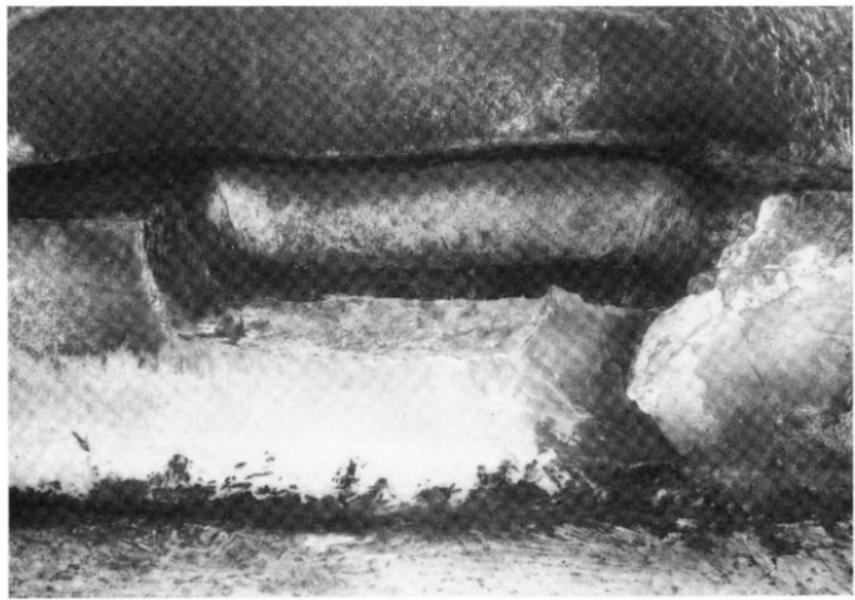
玄室奥壁



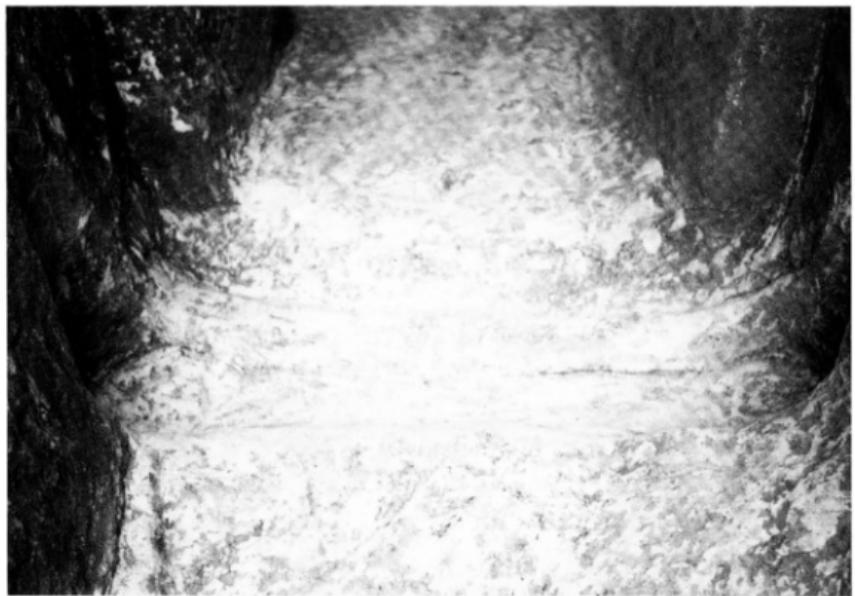
玄門



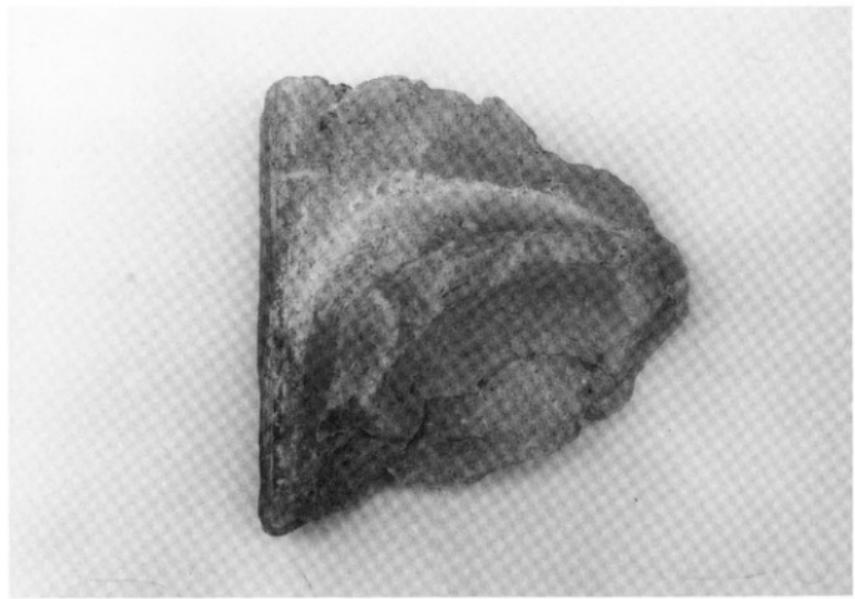
玄室左側壁



玄室右側壁造付石棺



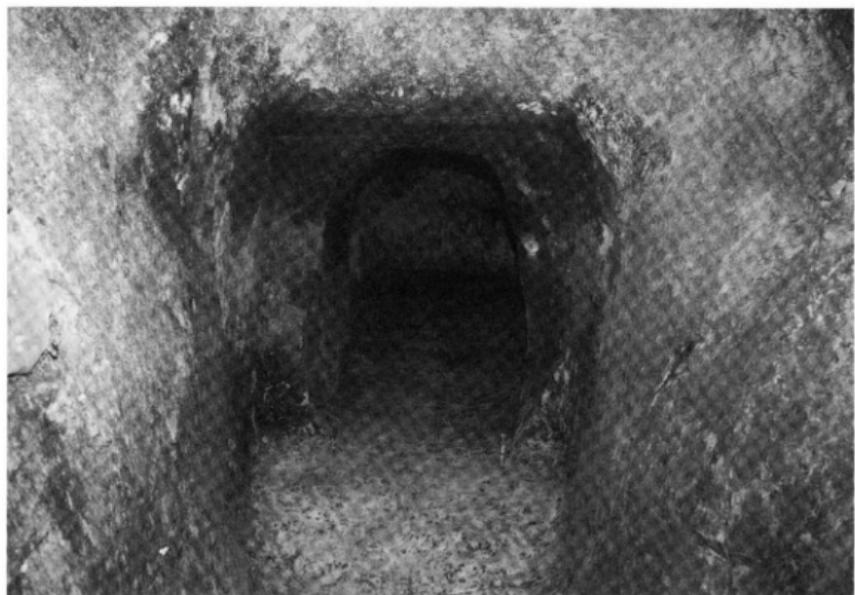
羨門部床面



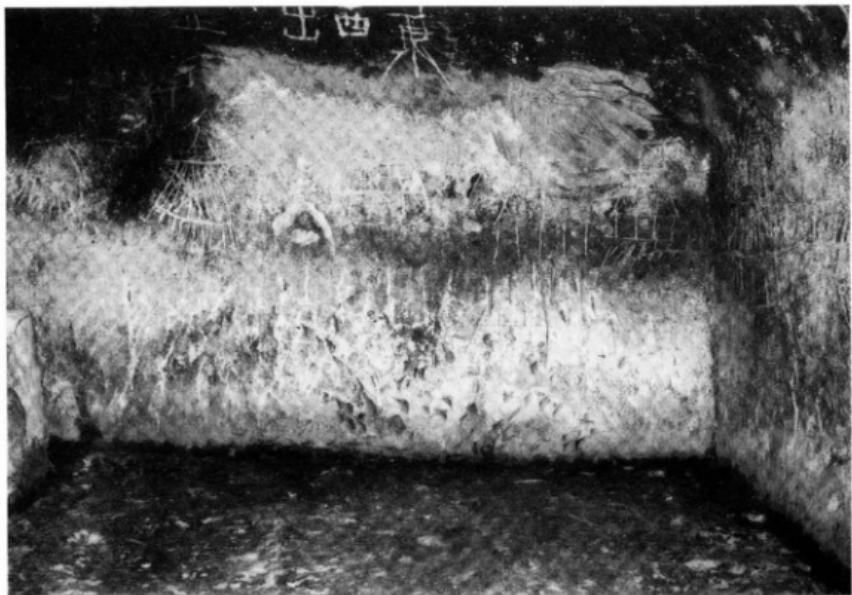
須恵質甌



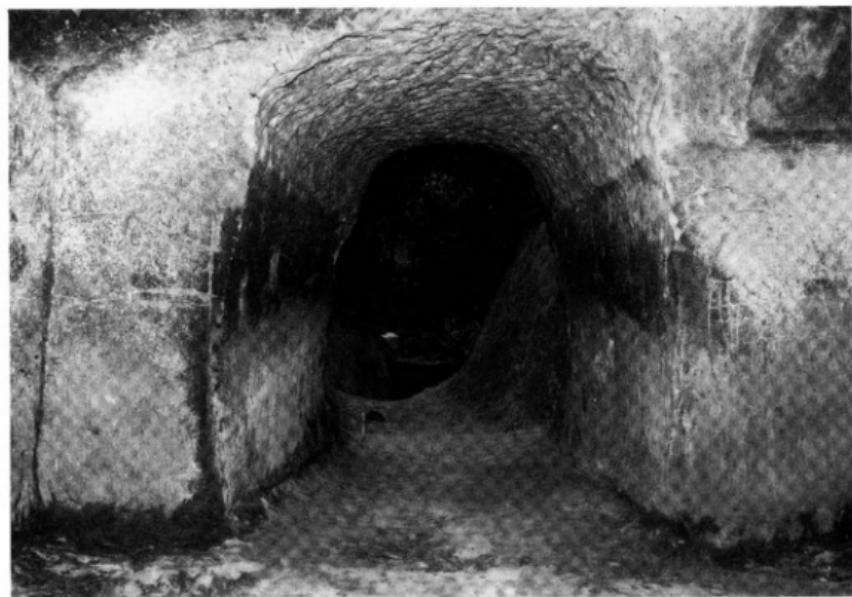
全 景



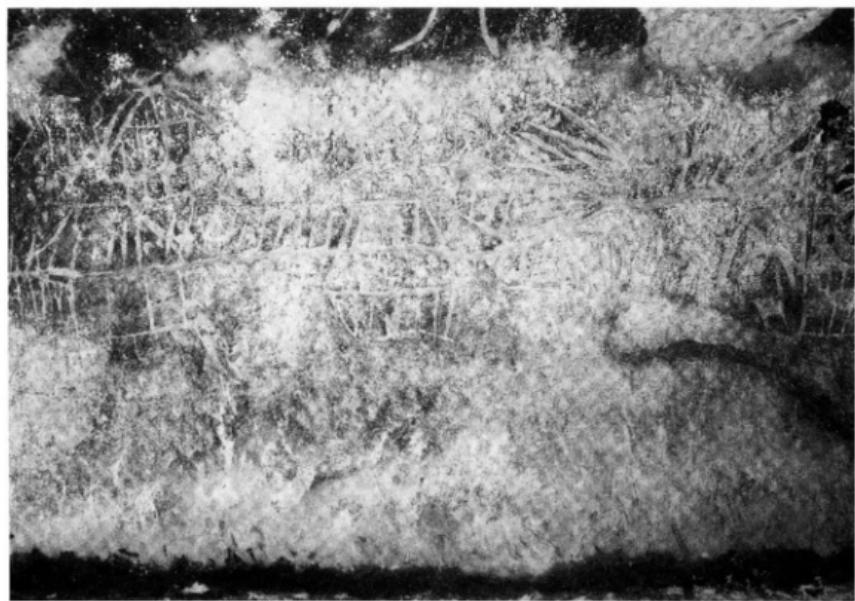
義 門



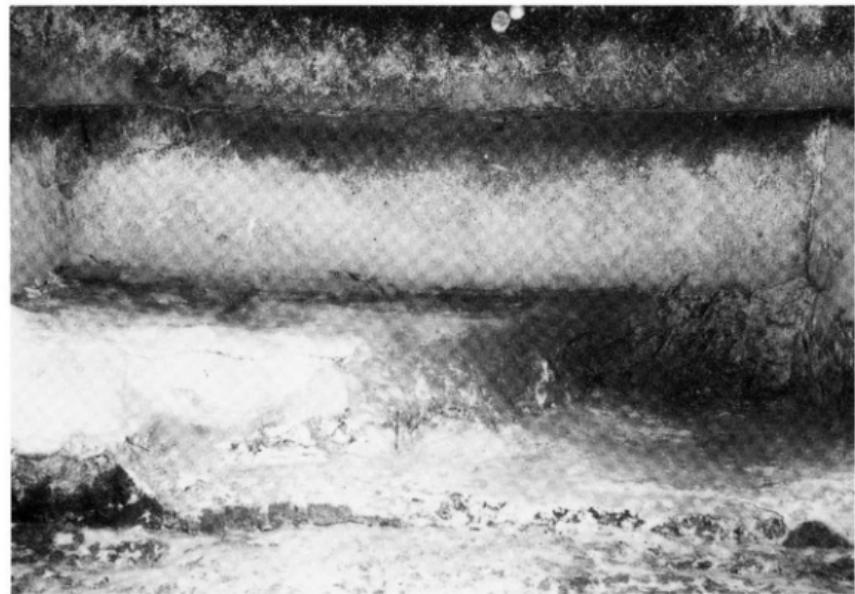
玄室奥壁



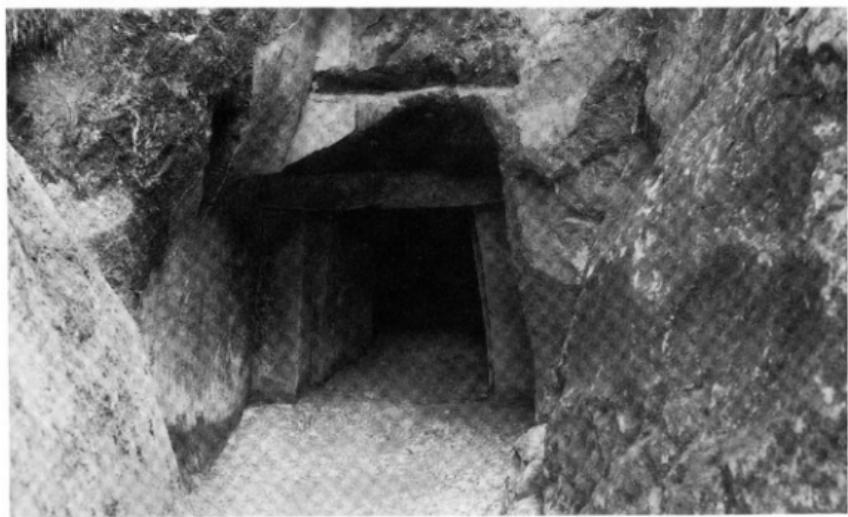
玄門



玄室左側壁

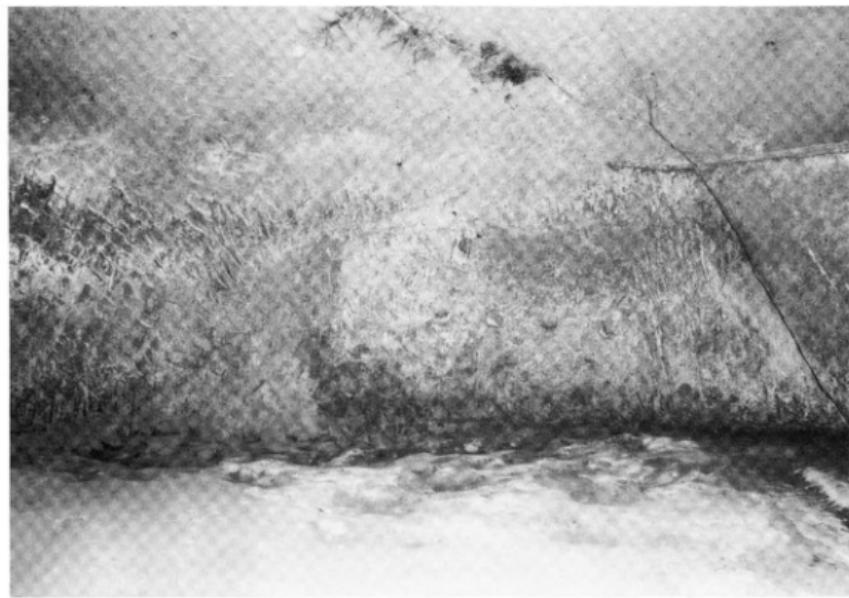


玄室右側壁造付石棺

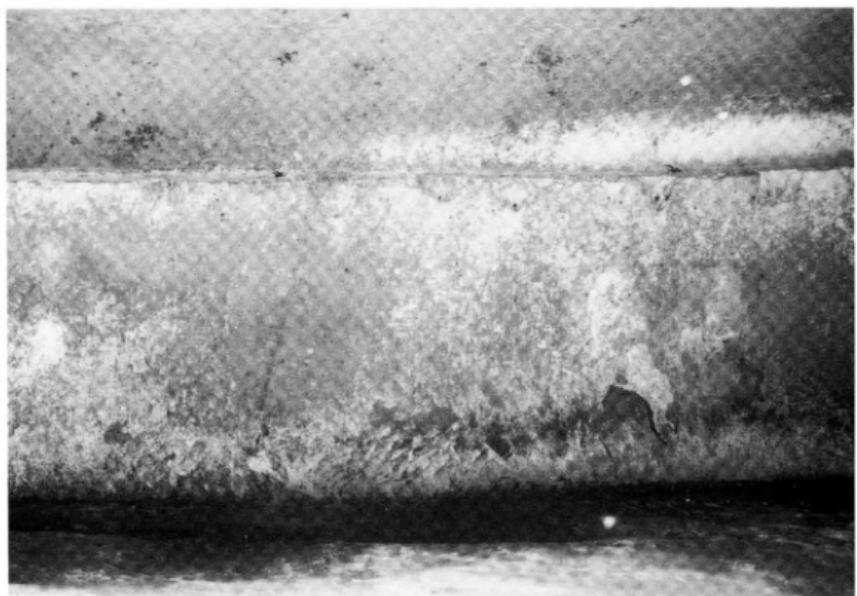




羨門



玄室奥壁



玄室左側壁



玄室右側壁



前壁



玄室奧壁工具痕



2-11・12・14号墳



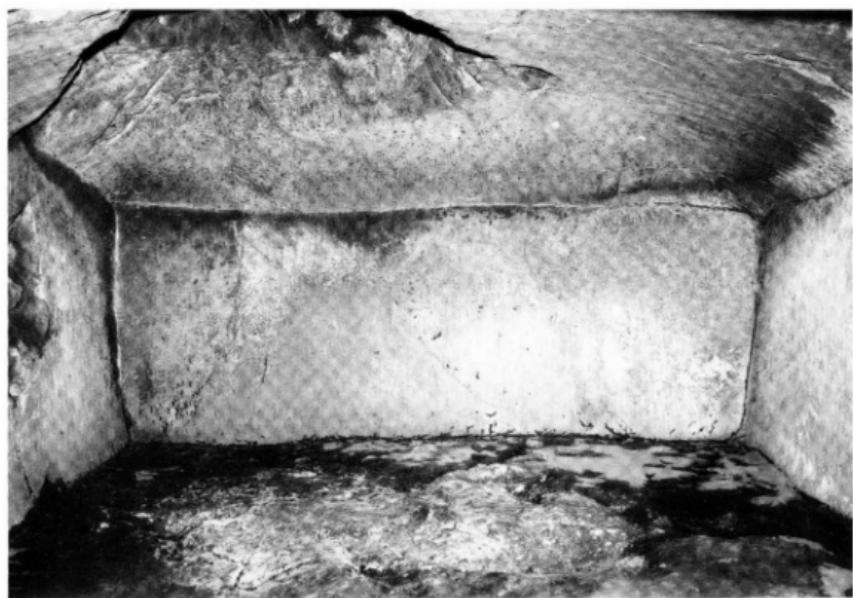
2-10~12・14・17号墳



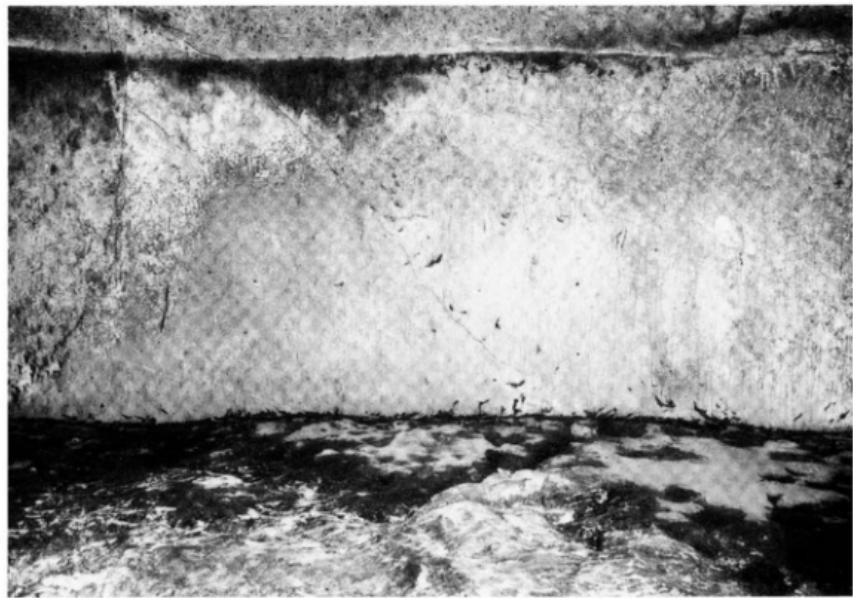
全 景



前 壁



玄室



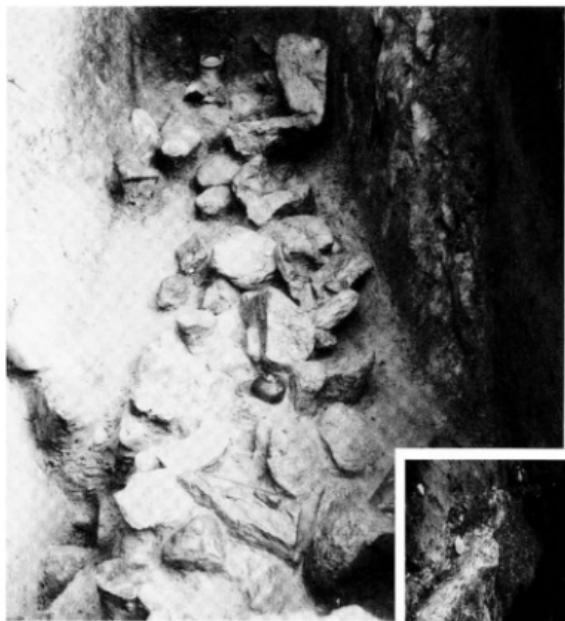
玄室奥壁



玄室・羨道左側壁



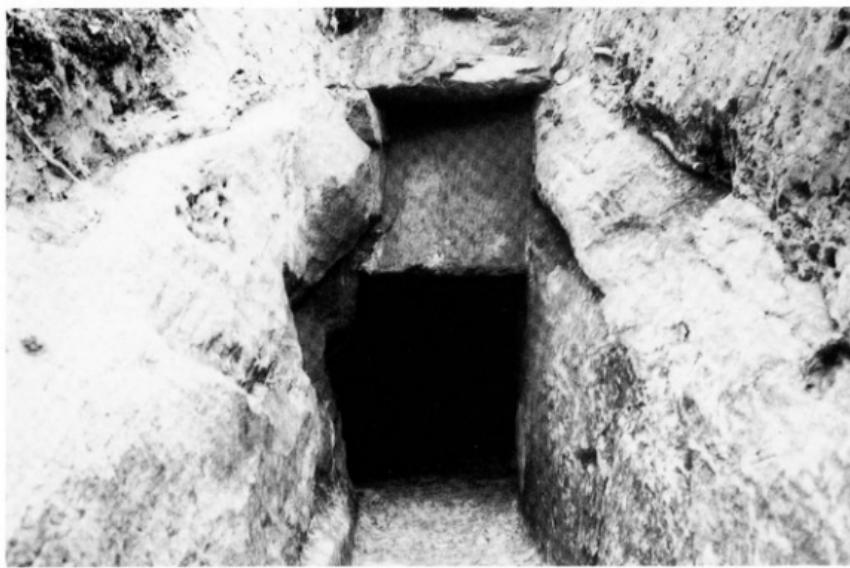
玄室右側壁

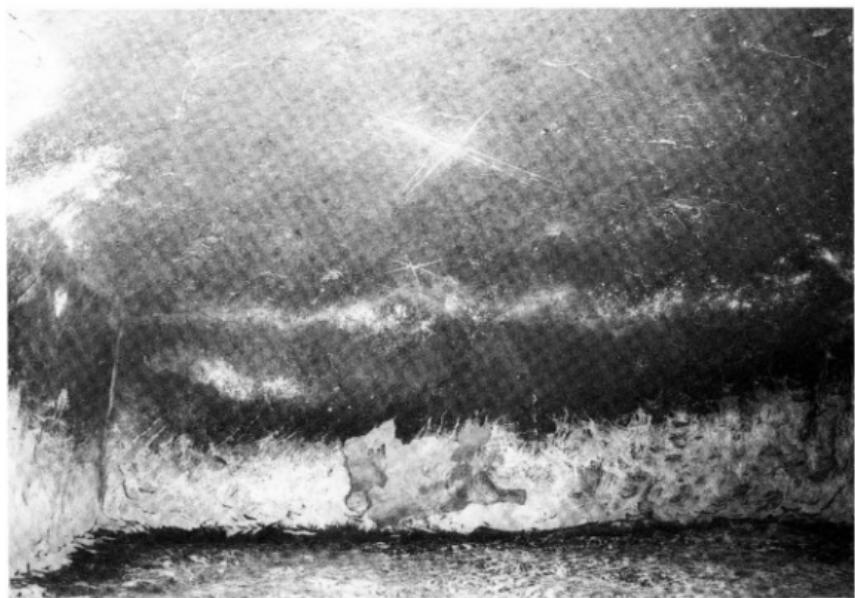


墓道上層遺物出土狀況

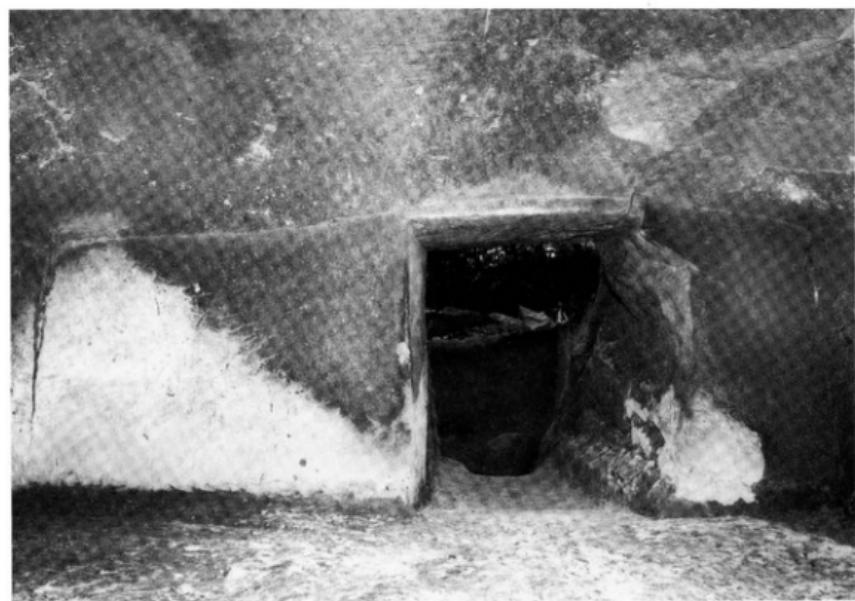


墓道下層遺物出土狀況

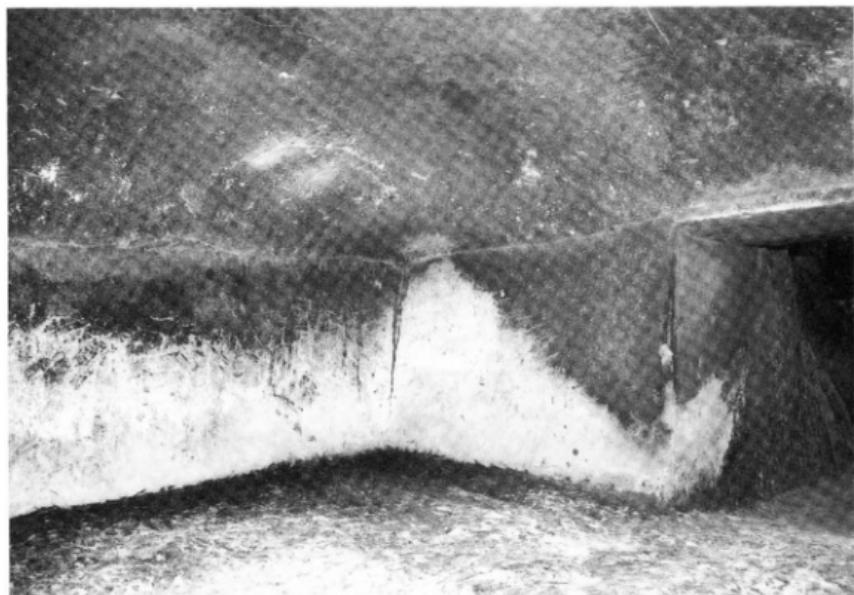




玄室奥壁



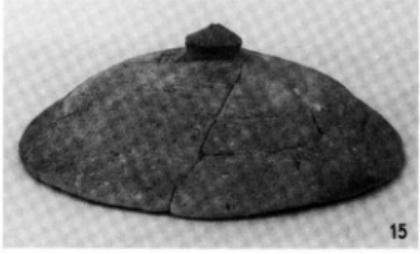
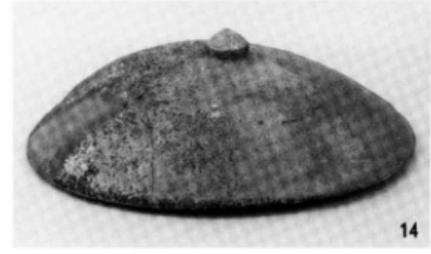
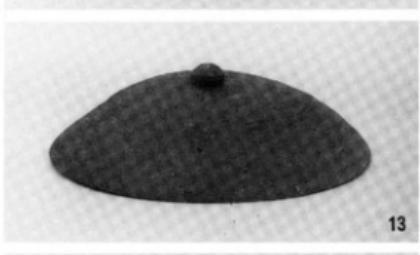
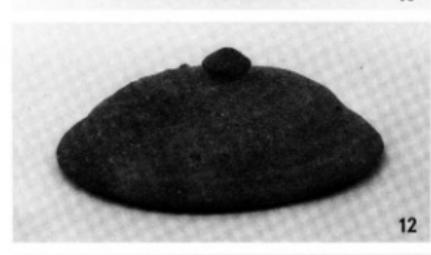
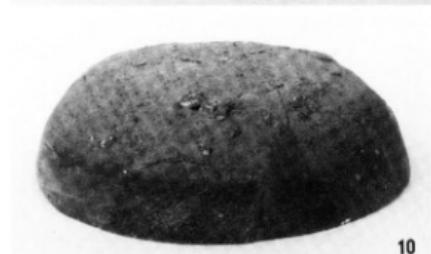
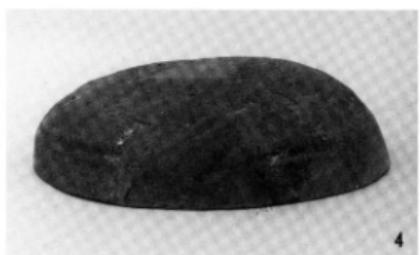
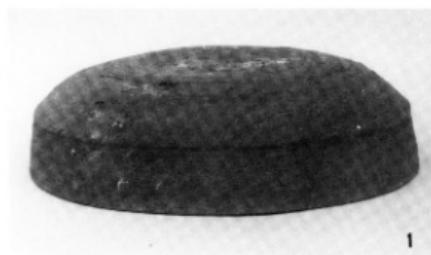
玄室前壁

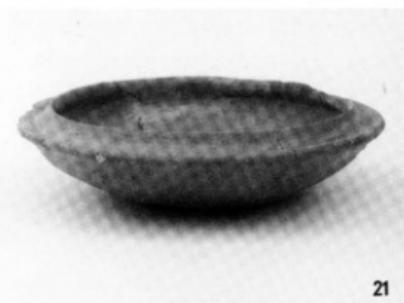


玄室左側壁・前壁



玄室右側壁・前壁





出土遺物



48



50



53



57



58



59



60



61

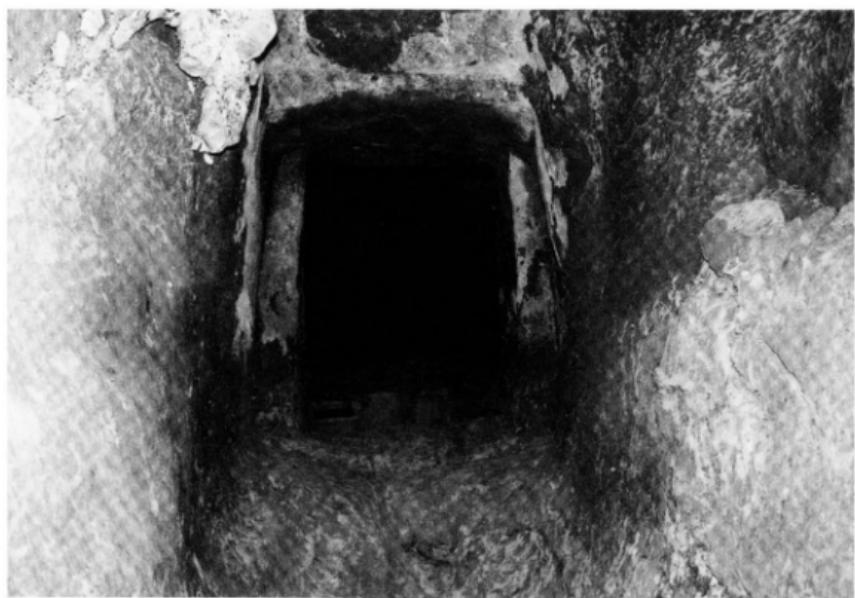


62

出土遺物



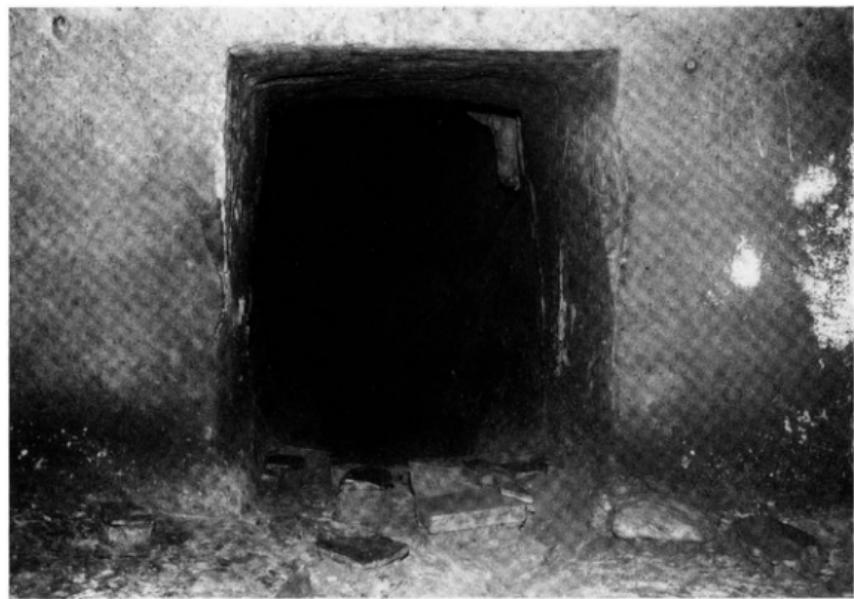
全 景



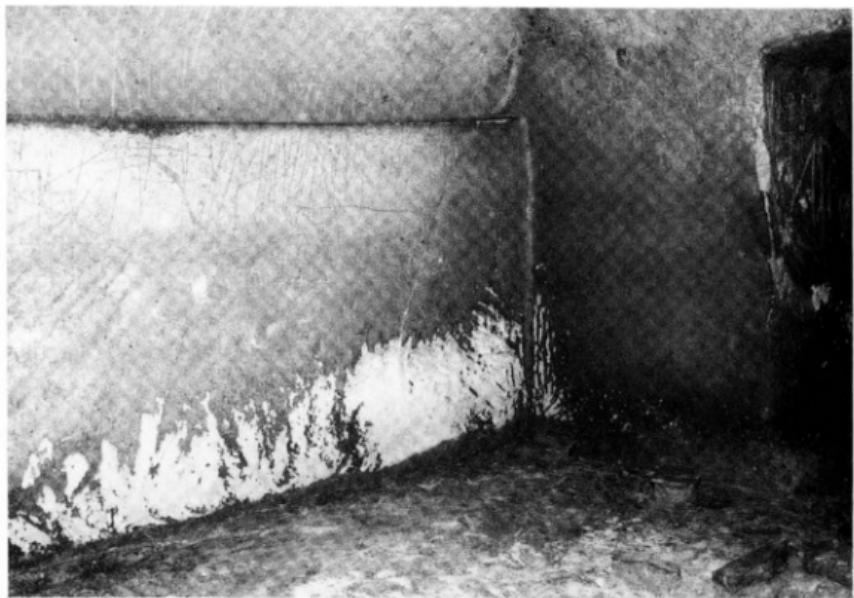
義 門



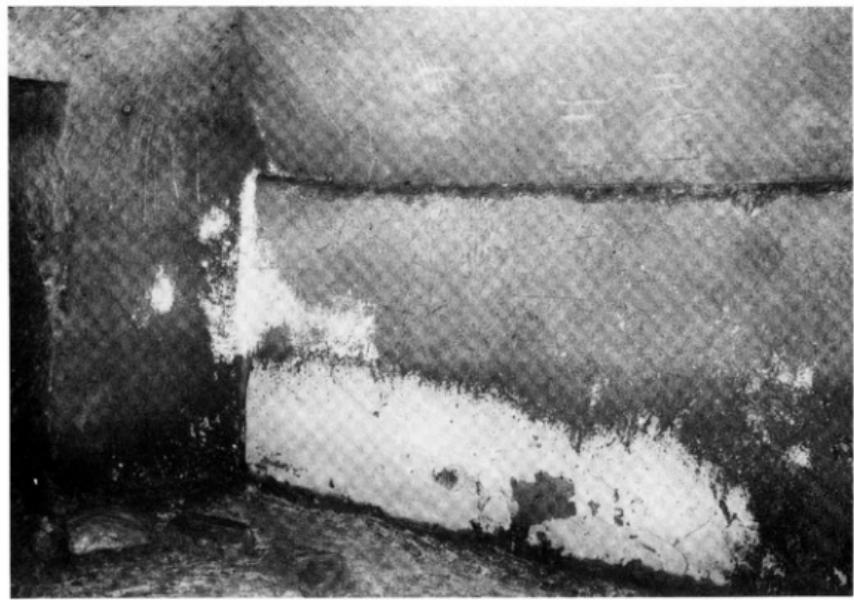
玄室奥壁



玄門



玄室左側壁・前壁



玄室右側壁・前壁



羨道左側壁線刻畫



5



12



15

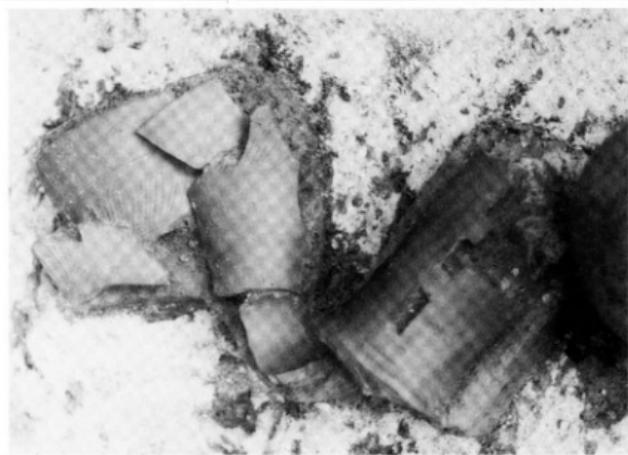


16

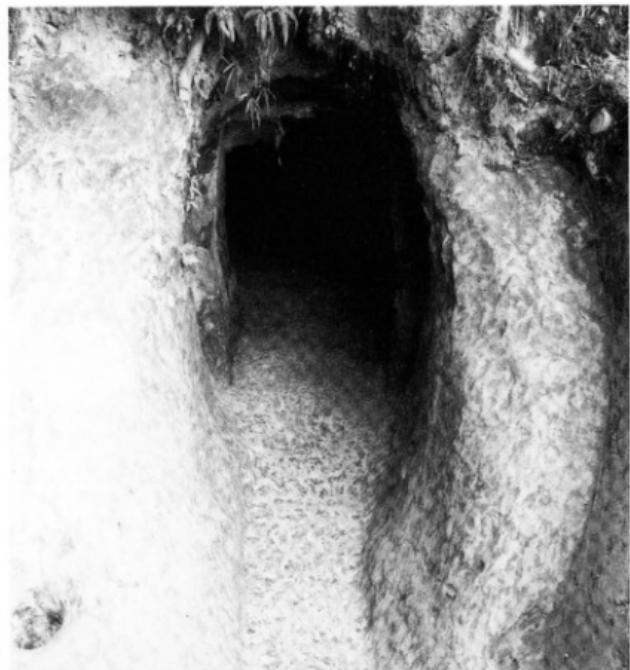


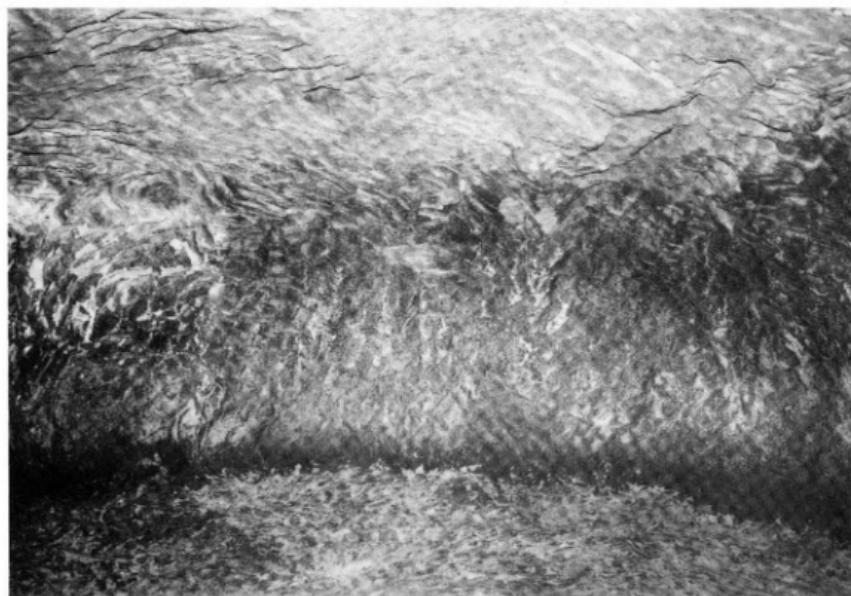
17

出土遺物

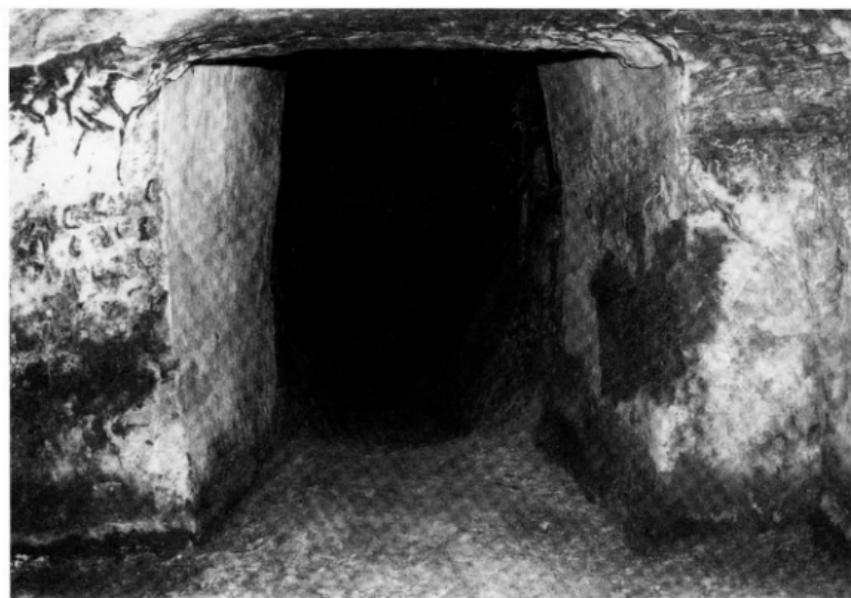


墓道遺物出土狀況





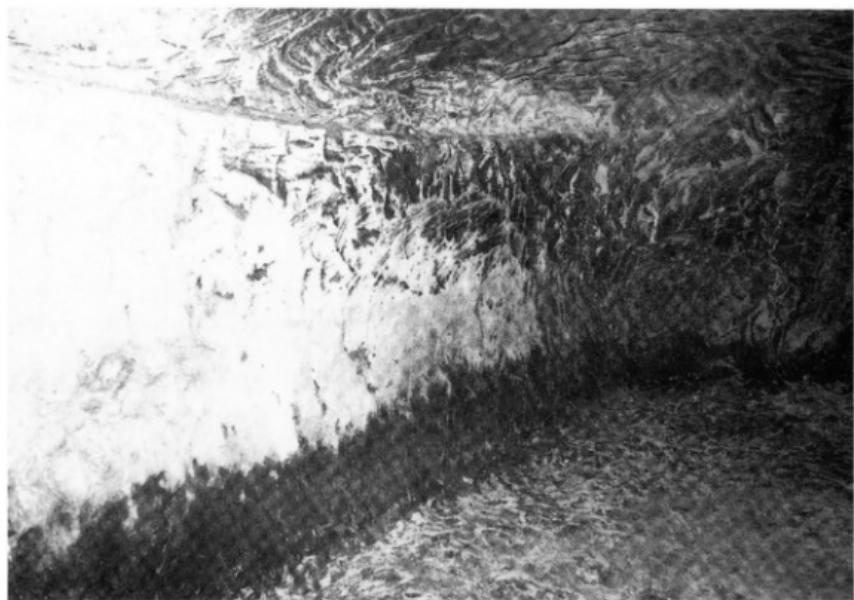
玄室奥壁



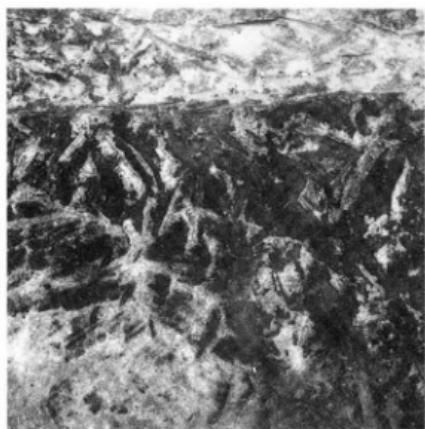
玄門



玄室左側壁



玄室右側壁



玄室右側壁工具痕



3



4



5



7



9

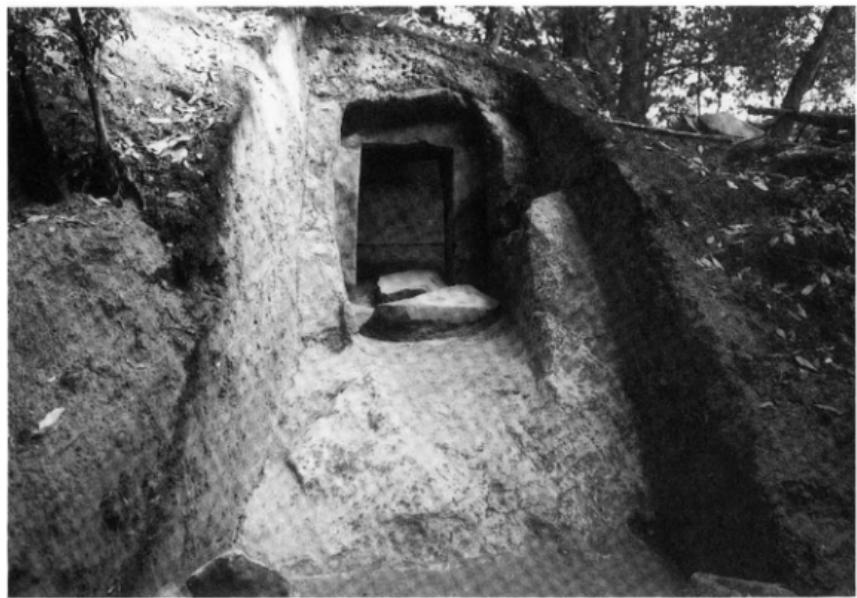


10

出土遺物



自然石出土狀況



全 景



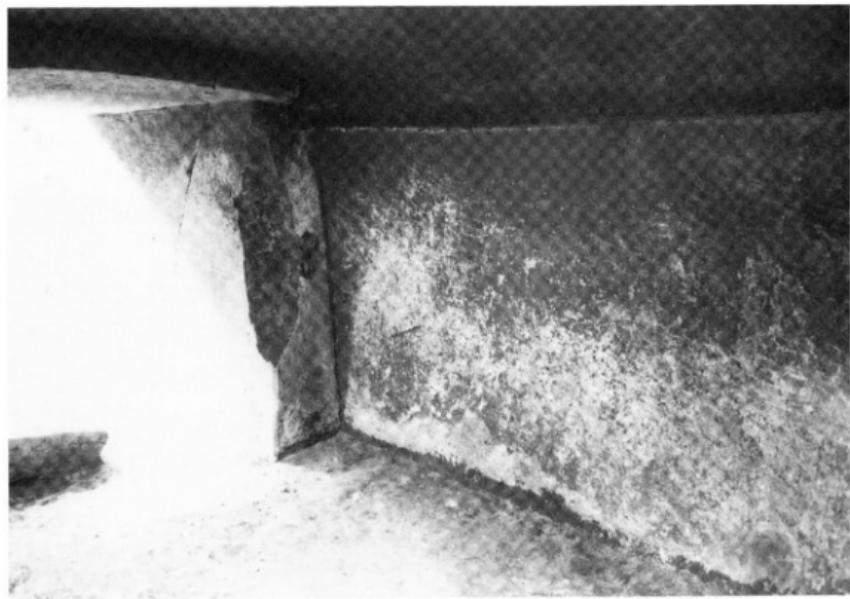
玄室奥壁



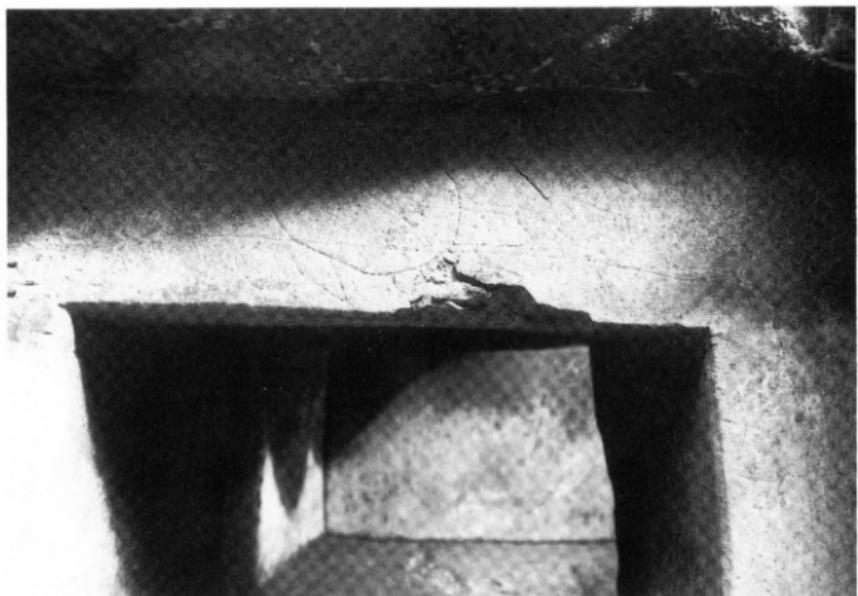
玄門



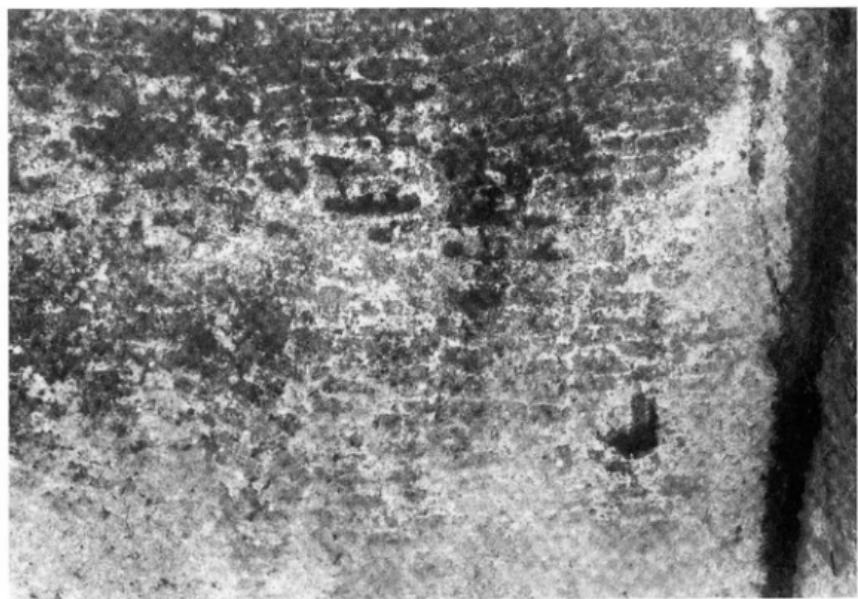
玄室左側壁・前壁



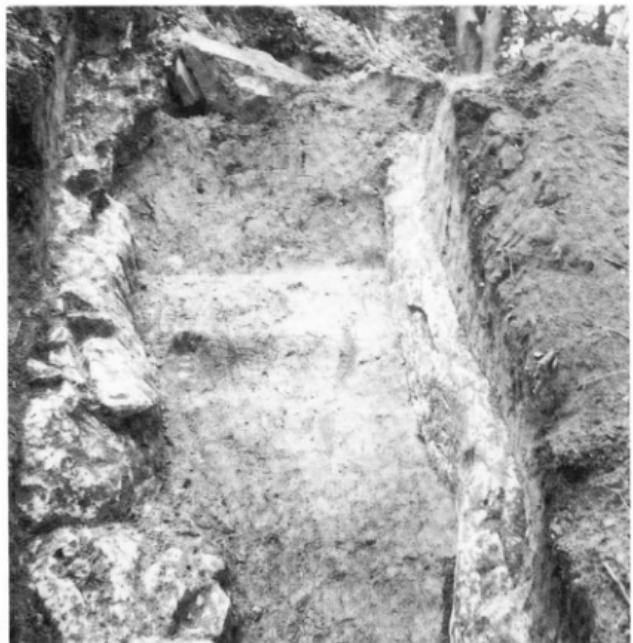
玄室右側壁・前壁



漢門線刻画



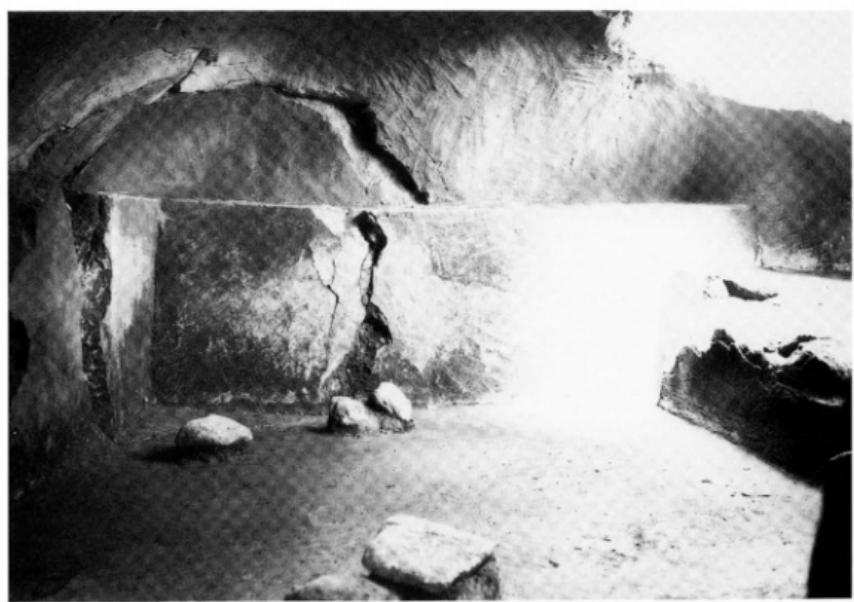
玄室右侧壁工具痕



檢出狀況



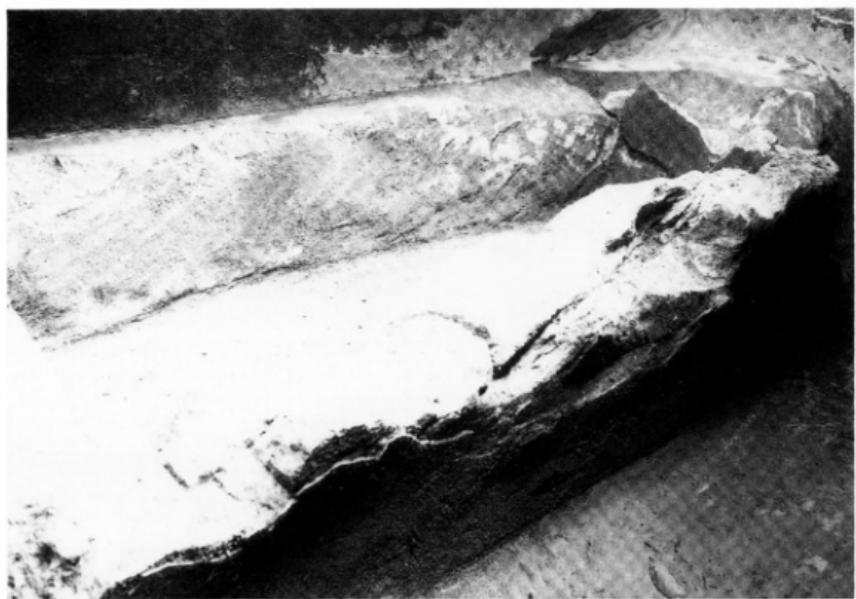
全 景



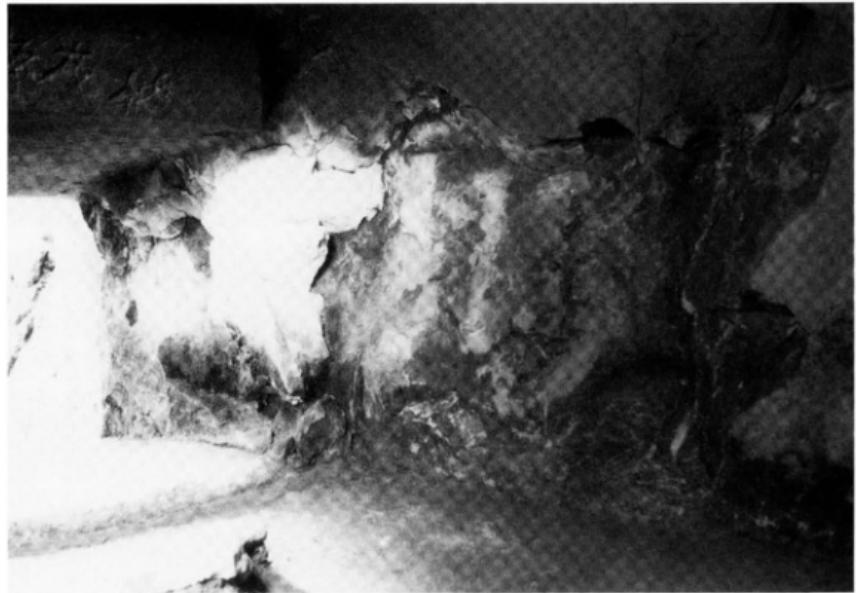
玄室奥壁



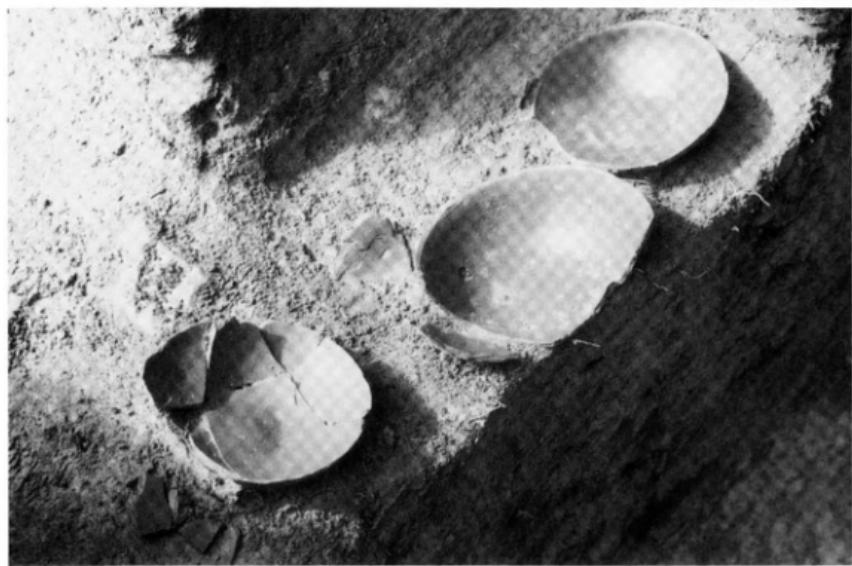
玄門



玄室左側壁造付石棺



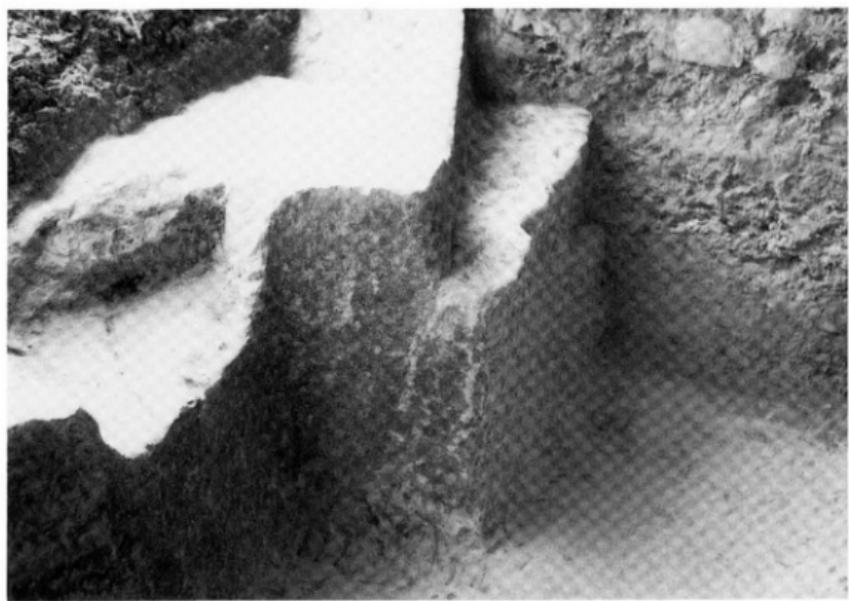
玄室右側壁



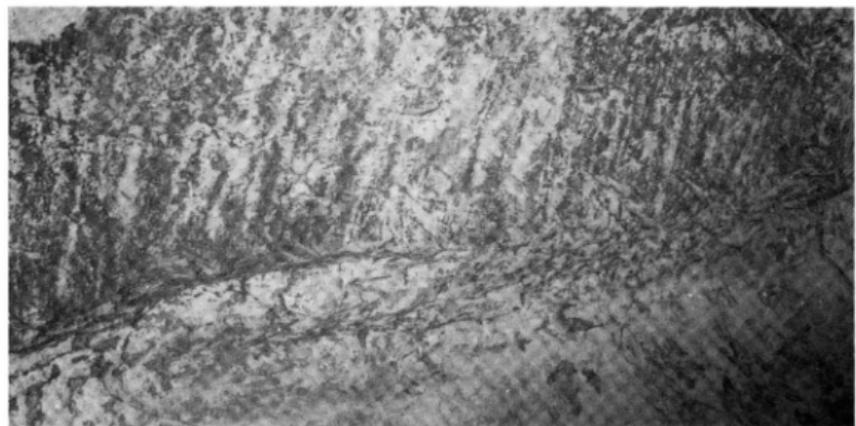
墓道上层遗物出土状况



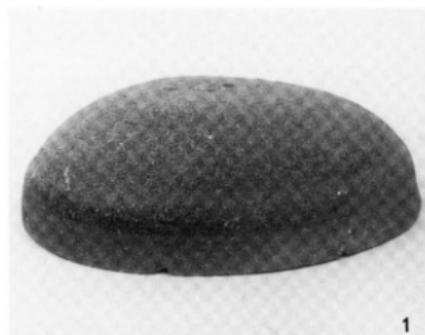
羨門



羨道右側壁



墓道左侧壁工具痕



1



2



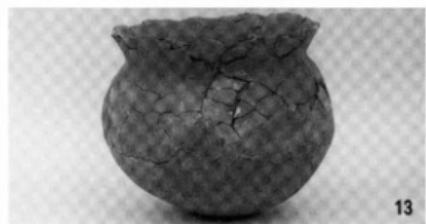
3



4



5



13

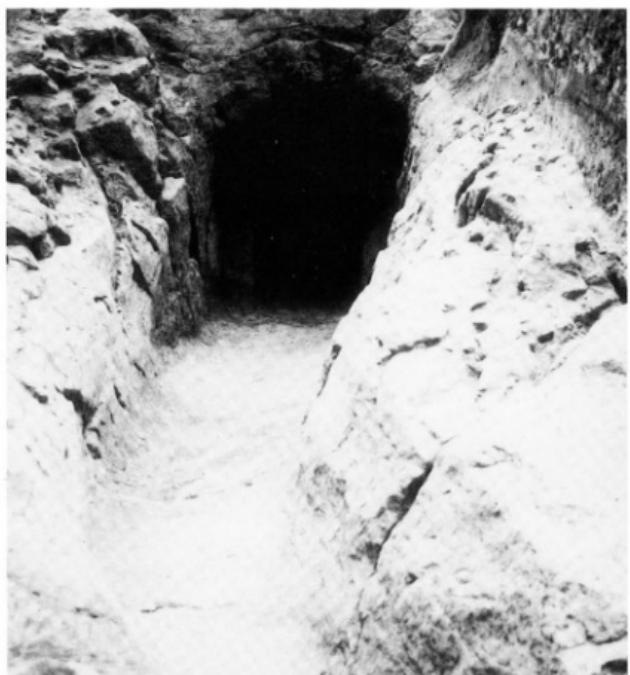
出土遗物



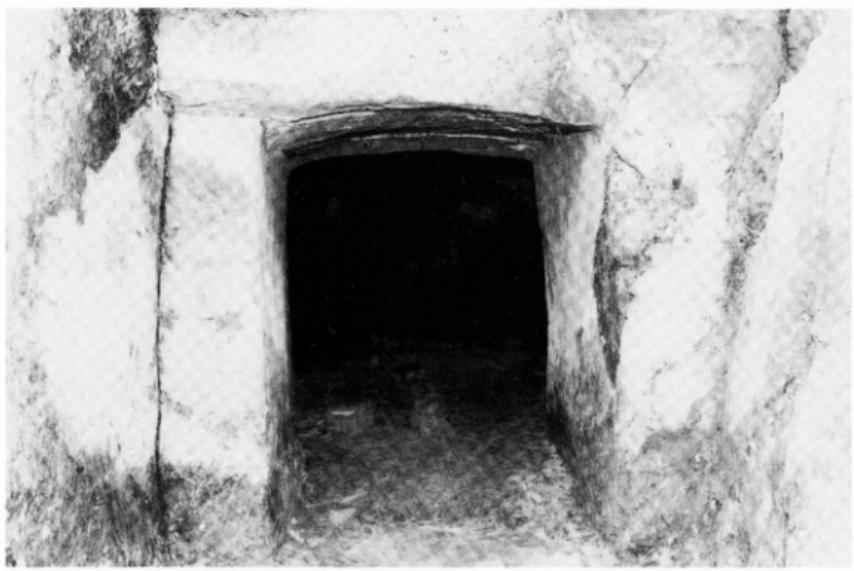
墓道床面遺物出土狀況



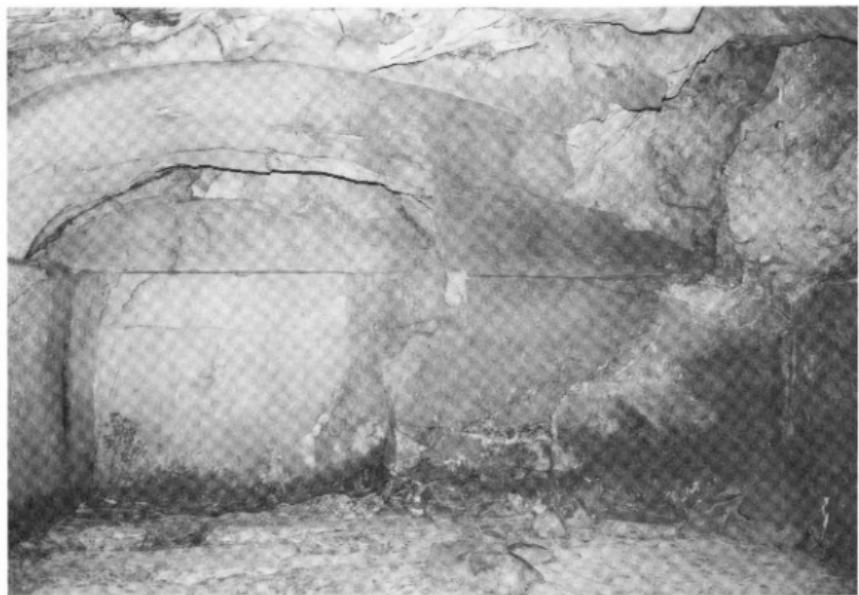
墓道床面遺物出土狀況



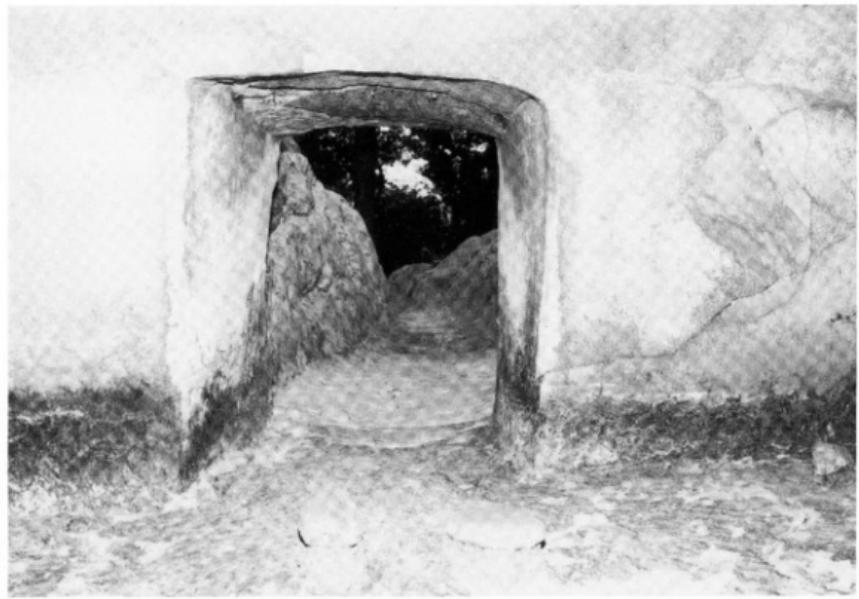
全 景



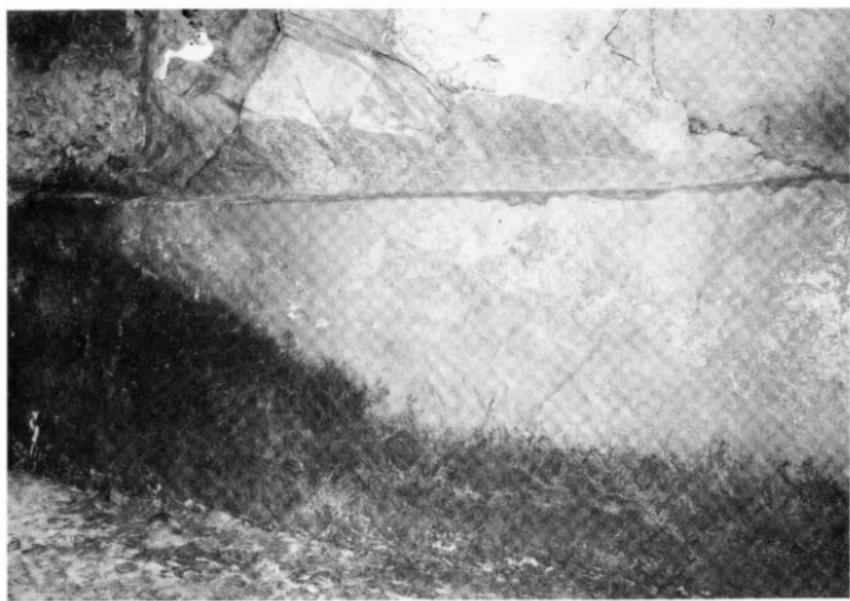
羨 門



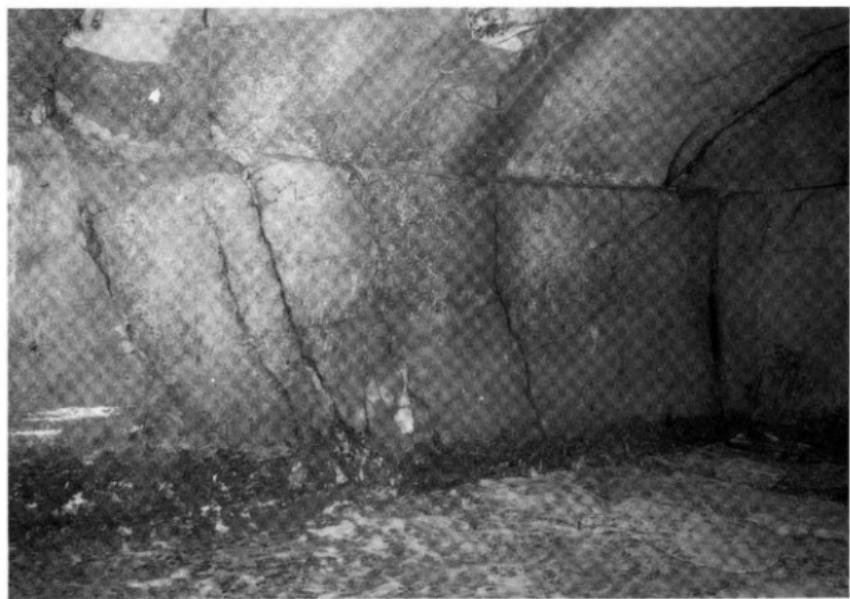
玄室奥壁



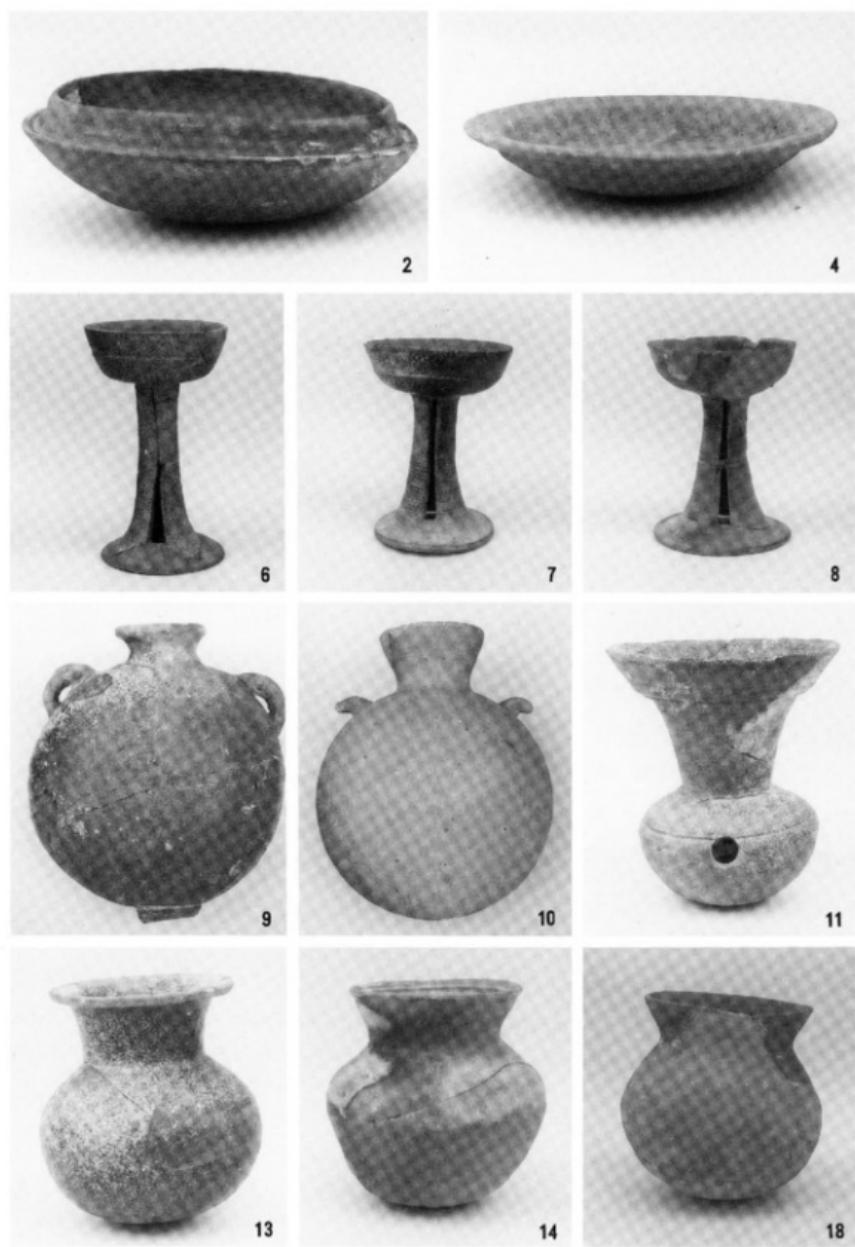
玄門



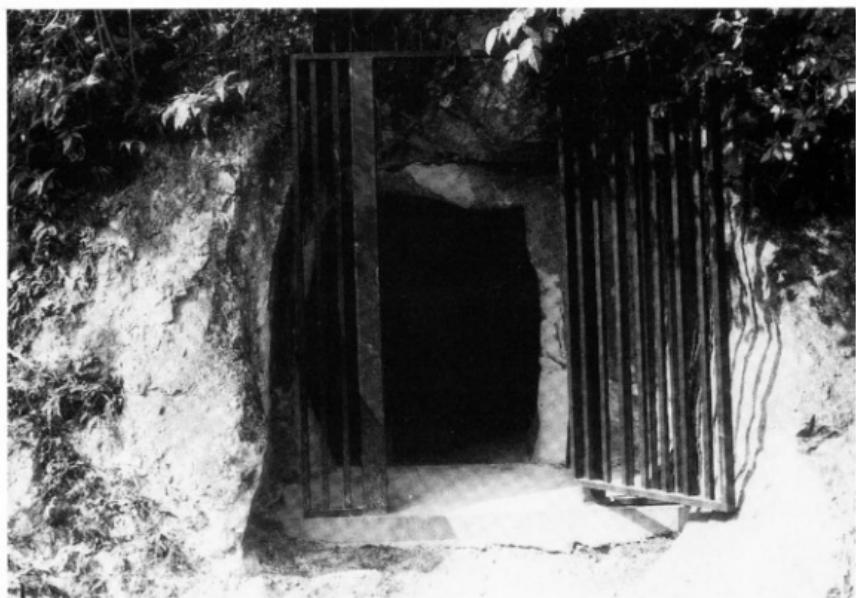
玄室左側壁



玄室右側壁



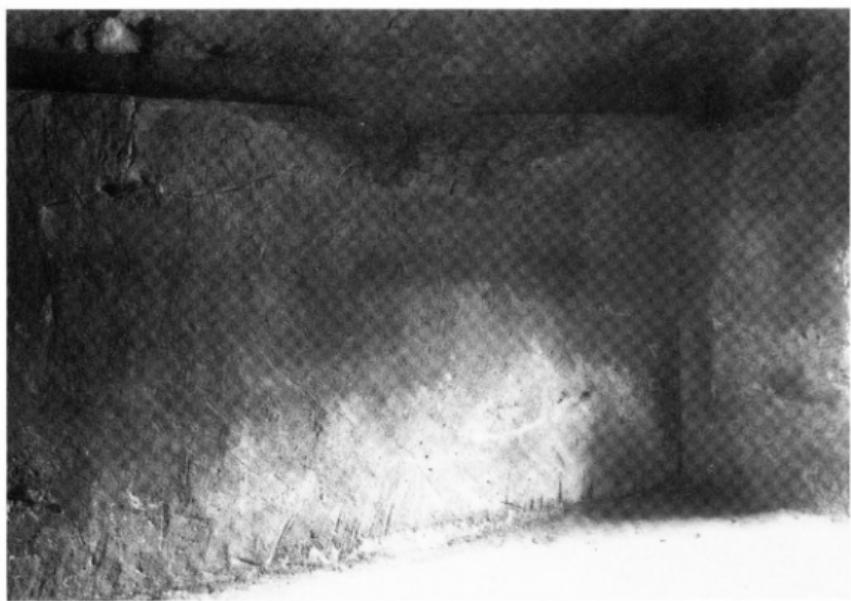
出土遺物



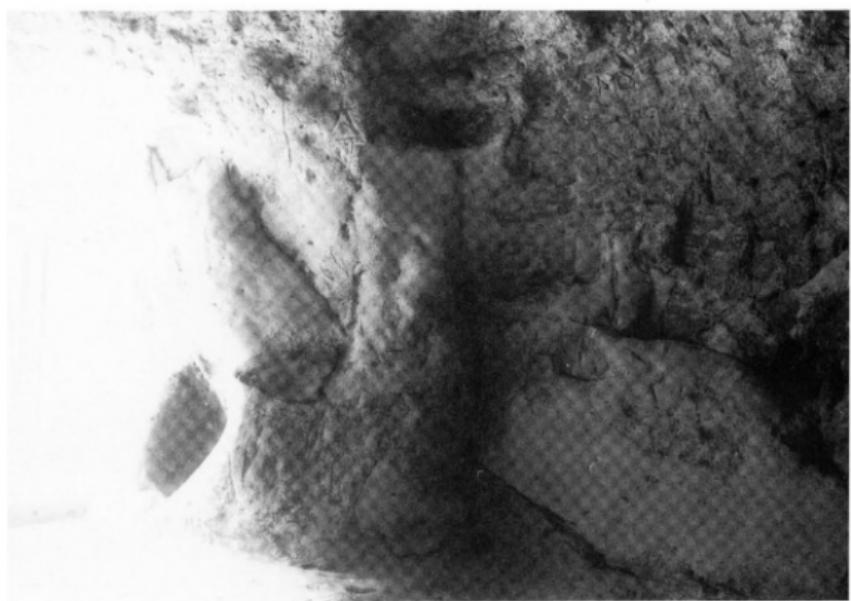
全 景



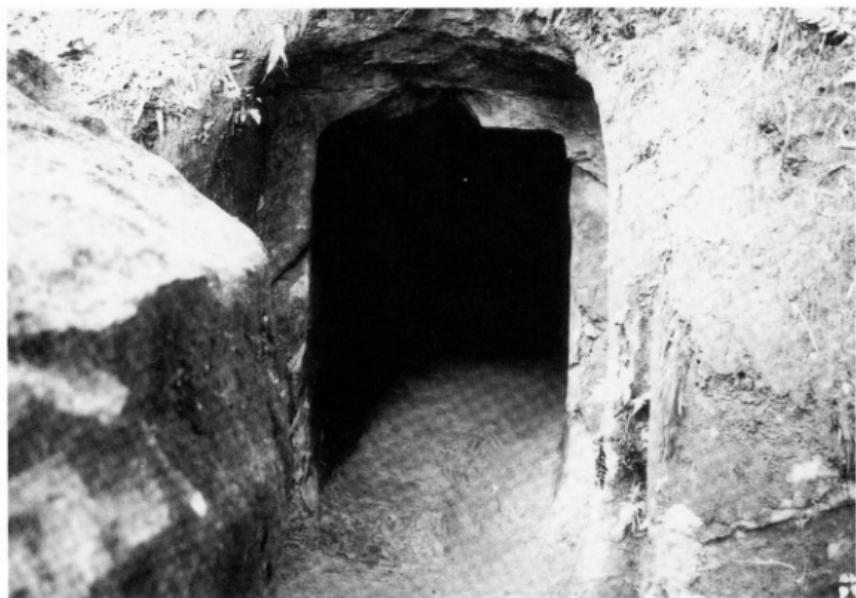
玄室奥壁



玄室左側壁



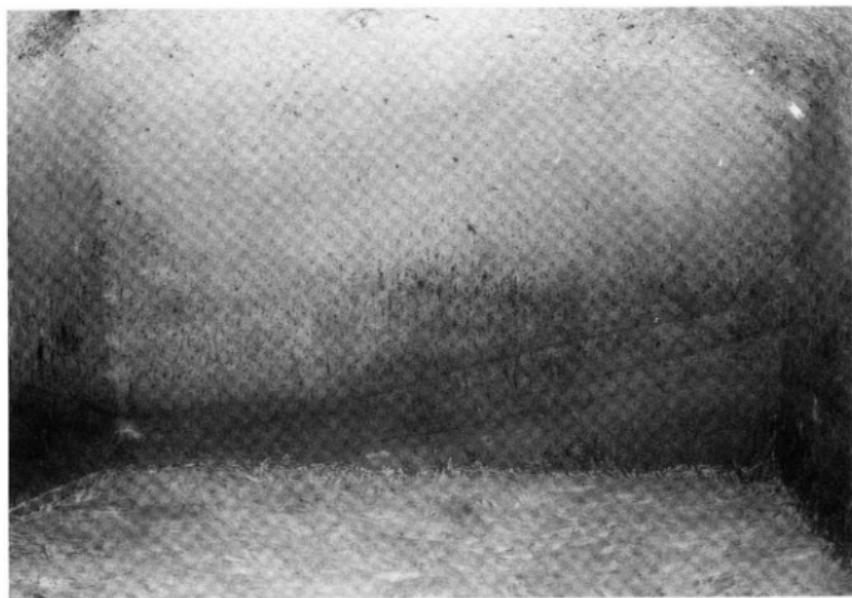
玄室右側壁



漢門



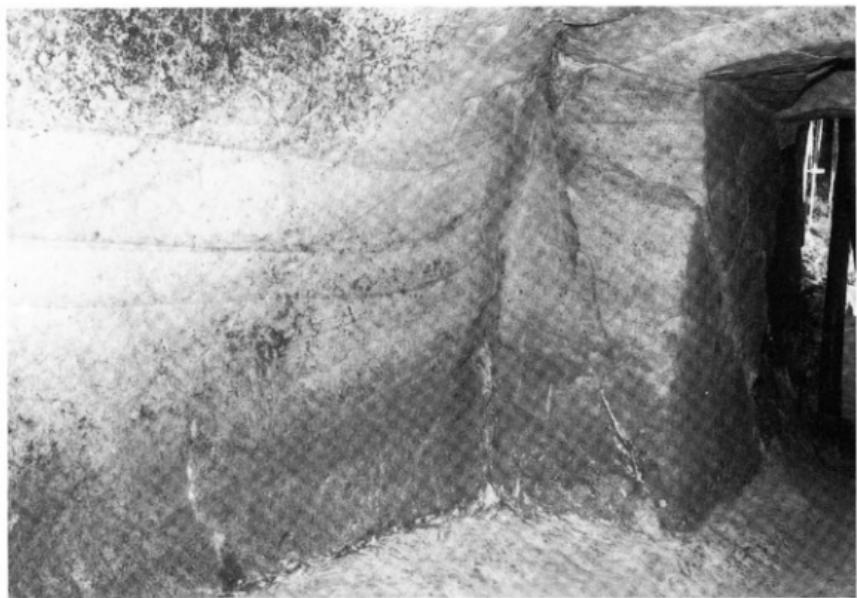
漢門床面



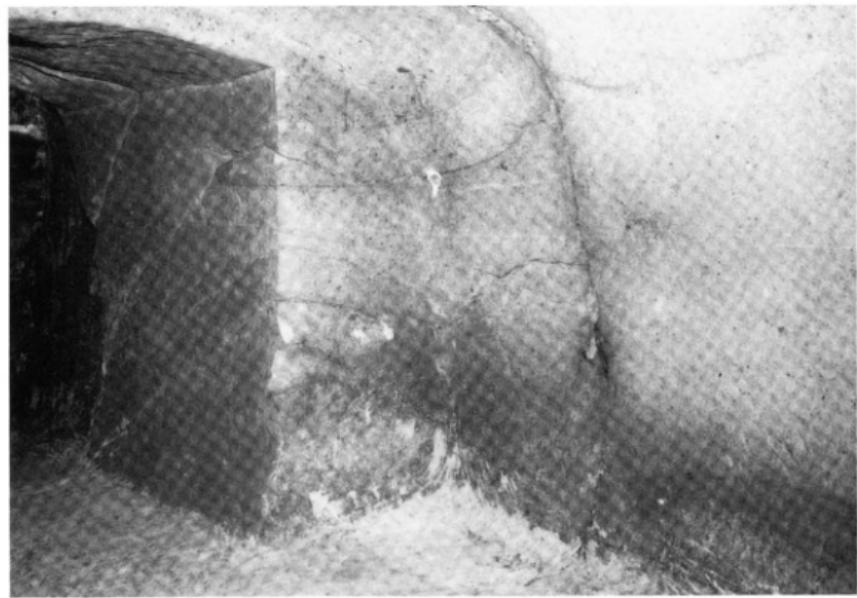
玄室奥壁



玄室前壁



玄室左側壁・前壁



玄室右側壁・前壁